

服部遺跡発掘調査報告書Ⅲ

— 滋賀県守山市服部町所在 —

〈本文編〉

1986

滋賀県教育委員会

守山市教育委員会

財団法人 滋賀県文化財保護協会

服部遺跡発掘調査報告書Ⅲ 正誤表

ページ	位置	誤	正
挿図目次	第58図	の中期～後期	の中期後半～後期
図版目次	図146	橋跡	邊跡
	図239、図240	突刺図	突刺図
p 9	4月3日	石鏃	石鏃
p 21, 22	キャプション	4-1	チ-1
p 23	上9	難行	難航
p 32	上17	土器片が	土器片の
p 75	上10	図示した	図示した。
p 78	上11	類別	鑑別
p 85	下11	受口状の口縁	受口状口縁
p 117	上7	無頸壺	無頸壺
p 127	下7	粘土板充填	粘土板充填
p 128	下17	"	"
p 131	上19	"	"
p 156	下4	"	"
p 172	表第2段	空白	高坏型土器
	表第3段	空白	"
	表第4段	空白	器台型土器、鉢型土器
p 192	上7	槌打状	敲打状
p 193	上4	工事を経た	工事を経て
p 196	上12	古段階により	古段階より
	上13	水差が1点	水差1点
	上26	口頸部	口頸部
	下8	我々は	各々は
	下2	列点文を施文(列点文(
p 197	上16	にはすばまり	にすばまり
	下6	口頸部	口頸部
	下4	端部	端部
p 198	下2	高坏E	高坏A
p 199	上7	半環状地手	半環状把手
	上11	高坏Eタイプ	高坏Aタイプ
p 200	上4	上方	上層
p 205	下3	Gタイプでは	Gタイプは
p 206	上7	全面に記す	全面に覆す
	上17	流入の能性	流入の可能性

服部遺跡発掘調査報告書Ⅲ

— 滋賀県守山市服部町所在 —

〈本文編〉

1986

滋賀県教育委員会
守山市教育委員会
財団法人 滋賀県文化財保護協会

序

野洲川改修事業に伴う、服部遺跡の発掘調査は、昭和49年11月から昭和54年3月まで約5ヶ年を要して実施し、大きな成果を上げたところであります。調査対象面積が12万平方メートルと広大であるばかりでなく、野洲川の長年にわたる沖積作用により、各時代の遺構が、地表下3メートルまで、何層にも重複していることもあり、空前絶後の大規模な調査となりました。ここに改めて調査を御支援いただいた関係者各位に、御礼を申し上げますとともに、本書が、文化財の保存と普及、啓蒙に活用されんことを希望するものであります。

昭和62年3月

滋賀県教育委員会

教育長 飯田志農夫

例 言

1. 本書は、滋賀県守山市服部町地先に所在する服部遺跡について、昭和49年から昭和54年まで、Ⅳ次にわたって実施した発掘調査の正報告書である。報告書は全6冊の予定で本書はその第3冊である。
2. 本調査は、建設省近畿地方建設局琵琶湖工事事務所の所管する、野洲川改修放水路工事に伴うもので、同事務所の依頼にもとづき滋賀県教育委員会・守山市教育委員会が、財団法人滋賀県文化財保護協会を調査機関として実施したものである。
3. 本書で使用した方位は磁針方位に基づき、高さについては東京湾の平均海面を基準としている。
4. 本事業の事務局は次のとおりである。

滋賀県教育委員会

文化財保護課長	服部 正	課長補佐	田口宇一郎
埋蔵文化財係長	林 博通	管理係主任主事	山本徳樹

財団法人 滋賀県文化財保護協会

理事長	南 光雄	事務局長	中島良一
埋蔵文化財課長	近藤 滋	調査二係長	大橋信弥
総務課長	山下 弘	総務課主任主事	松本暢弘
		総務課主事	西田博之

5. 本書の編集・執筆には、主として大橋と守山市教育委員会社会教育課主任山崎秀二があたり、彦根城博物館学芸員谷口徹氏、財団法人大阪文化財センター赤木克規氏、栗東町文化体育振興事業団技師平井寿一氏のほか、大橋美和子氏、井浦由美氏の助言と協力を得た。なお執筆分担は文末に明記した。
6. 出土遺物や写真・図面については守山市立埋蔵文化財センターで保管している。

服部遺跡発掘調査報告書Ⅲ

—滋賀県守山市服部町所在—

目 次

序	
例 言	
I. はじめに	1
II. 服部遺跡周辺の地形	2
III. 調査の経過—日誌抄—	9
IV. 検出した遺構	14
1. 中期後半の遺構	14
A. 環溝A (SD151) の調査	14
B. 環溝B (SD152A・B) の調査	14
C. 集落跡の調査	23
2. 中期末から後期初頭の遺構	78
A. 環溝C (SD201) の調査	78
B. 集落跡の調査	85
V. 出土した遺物	119
1. 中期後半の土器	119
A. 形態の分類	119
B. 各遺構出土の土器	124
2. 中期末から後期初頭の土器	170
A. 形態の分類	170
B. 各遺構出土の土器	174
3. 石製品	190
A. 中期後半の石器	190
B. 中期末から後期初頭の石器	191
4. 出土土器の検討	193
A. 中期後半の土器	193
B. 中期末から後期初頭の土器	204
VI. まとめ	212
A. 集落の構成	212
B. 出土土器の問題	219

挿 図 目 次

第1図 位置図	1
第2図 地形分類図及び位置図	3
第3図 野洲川下流微地形図	4
第4図 野洲川下流地形図	5
第5図 野洲川下流ボーリング柱状図	7
第6図 野洲川下流縦断面図	7
第7図 地区設定図	9
第8図 弥生中期後半～後期初頭遺構全体図	11
第9図 弥生時代中期後半（下流域）遺構全体図	15
第10図 弥生時代中期後半（下流東部）遺構全体図	17
第11図 チ-I、S D 151・竪穴住居跡平面実測図	19
第12図 チ-I、S D 151・竪穴住居跡遺物出土状況実測図	21
第13図 C E 1区平面実測図	25
第14図 S H 001～S H 003 S H 012平面実測図	27
第15図 S H 015～S H 018平面実測図	29
第16図 S H 040・S H 042・S H 043・S H 049平面実測図	33
第17図 S H 044・S H 045平面実測図	35
第18図 S H 040～S H 043・S H 045・S H 046平面実測図	37
第19図 S H 047・S H 048平面実測図	41
第20図 チ-I、リ-I 竪穴住居跡群遺物出土状況実測図	43
第21図 S H 061平面実測図	45
第22図 S H 063平面実測図	47
第23図 S H 081平面実測図	51
第24図 S H 082・S H 083平面実測図	53
第25図 S H 084平面実測図	55
第26図 C E 区土坑群平面・断面図	57
第27図 D E 1区、D E 2区、第2遺構面平面実測図	63
第28図 D E 1区、D E 2区、第1構面平面実測図	65
第29図 チ-I区、竪穴住居跡群平面実測図	69

第30図	弥生中期半～後期初頭（上流域）遺構全体図	79
第31図	ワ-Ⅲ・SD 201 平面実測図	81
第32図	カ-Ⅲ・SD 201 平面実測図	83
第33図	ロ-Ⅲ・SD 201 竪穴住居跡群平面実測図	87
第34図	SH 103 平面・断面実測図	89
第35図	SH 106 平面・断面実測図	91
第36図	SH 109 平面・断面実測図	93
第37図	SH 110 平面・断面実測図	95
第38図	SH 112 平面・断面実測図	98
第39図	SH 113・SH 114・SH 128 平面・断面実測図	99
第40図	SH 115 平面・断面実測図	102
第41図	SH 118 平面・断面実測図	103
第42図	SH 120 平面・断面実測図	105
第43図	SH 122 平面・断面実測図	108
第44図	SH 123 平面・断面実測図	109
第45図	SH 124 平面・断面実測図	111
第46図	SH 125 平面・断面実測図	115
第47図	服部遺跡中期後半の土器	201
第48図	服部遺跡中期末～後期初頭の土器	207
第49図	中期後半の集落と墓域	217
第50図	中期末～後期初頭遺構全体図	221
第51図	中期末～後期初頭集落の変遷	223
第52図	下之郷遺跡環濠1 出土土器（1）・（2）	231
第53図	下之郷遺跡環濠3・吉身西遺跡周溝墓出土土器（1）	232
第54図	下之郷遺跡環濠3・吉身西遺跡周溝墓出土土器（2）・（3）	233
第55図	横枕遺跡出土土器（1）・（2）	234
第56図	二ノ畦遺跡出土土器（1）・（2）	236
第57図	伊勢遺跡出土土器（1）・（2）	238
第58図	守山市域出土の中期～後期初頭の弥生土器	239
第59図	寺中遺跡出土土器（1）・（2）	248
第60図	堤ヶ谷遺跡出土土器・烏丸崎遺跡出土土器	250

図 版 目 次

- | | |
|----------------------------------|---|
| 図版1 遺構 テトラポット地区全景(上空より) | 図版24 遺構 1 SH040近景(東より) |
| 図版2 遺構 CE区SH00・SH01、土壌群(上空より) | 2 SH040近景(東より) |
| 図版3 遺構 CE2区全景(上空より) | 図版25 遺構 1 SH047近景(西より) |
| 図版4 遺構 CE3区全景(上空より) | 2 SH047・SH048近景(南より) |
| 図版5 遺構 DE1区上層全景(上空より) | 図版26 遺構 1 SH047・SH048近景(西より) |
| 図版6 遺構 DE2区上層全景(上空より) | 2 SK100近景(南より) |
| 図版7 遺構 DE2・DE3区全景(上空より) | 図版27 遺構 1 DE2区第2遺構面全景(南より) |
| 図版8 遺構 C地区・D地区全景、チ-1区全景(上空より) | 2 SK018・SX006近景(南より) |
| 図版9 遺構 チ-1区SD151・竪穴住居跡全景(上空より) | 図版28 遺構 1 SX003・SK020・SD046近景(西より) |
| 図版10 遺構 チ-1区SD151・竪穴住居跡全景(上空より) | 2 DE2区第2遺構面全景(南より) |
| 図版11 遺構 DW3区、SH002・SH003全景(上空より) | 図版29 遺構 1 SK076・SK077・SK078近景(北より) |
| 図版12 遺構 ホ-III区、SH006透景(上空より) | 2 DE2区第2遺構面透景(南より) |
| 図版13 遺構 1 SH003近景(東より) | 図版30 遺構 1 SK078・SE001近景(東より) |
| 2 SH003近景(南より) | 2 DE2区第2遺構面全景(北より) |
| 図版14 遺構 1 SH003近景(東より) | 図版31 遺構 1 SD015・SD016近景(南より) |
| 2 SH003近景(西より) | 2 DE2区第3遺構面全景(北より) |
| 図版15 遺構 1 SH023近景(南より) | 図版32 遺構 1 チ-1区全景(南より) |
| 2 SH105・SH016透景(南より) | 2 リ-1区SH078・SH080近景(東より) |
| 図版16 遺構 1 SH105近景(南より) | 図版33 遺構 1 SH061近景(北西より) |
| 2 SH105近景(南より) | 2 SH061近景(西より) |
| 図版17 遺構 1 SH017近景(東より) | 図版34 遺構 1 SH082・SH083近景(北より) |
| 2 SH017遺物出土状況(南より) | 2 SH083近景(北より) |
| 図版18 遺構 1 SH018近景(北東より) | 図版35 遺構 1 SH086近景(南より) |
| 2 SH028近景(南より) | 2 SH028土器出土状況(東より) |
| 図版19 遺構 1 SH104近景(東より) | 図版36 遺構 1 SK025土器出土状況(東より) |
| 2 SH031・SH036近景(西より) | 2 DE3区、SD071土器出土状況(東より) |
| 図版20 遺構 1 SH029近景(南より) | 図版37 遺構 B・C地区住居跡群全景(上空より) |
| 2 SH030・SH033近景(南西より) | 図版38 遺構 イ-1区住居跡群、SH101~SH103全景(上空より) |
| 図版21 遺構 1 SH045近景(南西より) | 図版39 遺構 イ-II区SH100全景(上空より) |
| 2 DE2区上層全景(北より) | 図版40 遺構 ロ-1区・ハ-1区SH111全景(上空より) |
| 図版22 遺構 1 SH046近景(東より) | 図版41 遺構 SH104・SH107~SH109・SH123・SD201透景(上空より) |
| 2 SH040・SH046近景(北東より) | 図版42 遺構 SH108・SH109・SH123~SH125透景(上空より) |
| 図版23 遺構 1 SH040・SH046近景(北より) | |
| 2 SH042・SH043近景(南より) | |

- 図版43 遺構 1 B地区全景(南より) 2 B地区全景(西より) 2 SH129柱穴礎板検出状況(西より)
- 図版44 遺構 1 イ-I区、SH10遠景(東上空より) 2 B地区全景(南上空より) 図版62 遺構 1 SD20遺物出土状況(東より) 2 SD20遺物出土状況(南より)
- 図版45 遺構 1 B地区全景(北上空より) 2 B地区全景(南上空より) 図版63 遺構 1 SD20遺物出土状況(南より) 2 SD20遺物出土状況(南より)
- 図版46 遺構 1 イ・ロ区遠景(東上空より) 2 SH11・SH102遠景(南より) 図版64 出土遺物 A01、A02、A04、A05、A10、A15、A17、A19、A16(SD151下層)
- 図版47 遺構 1 SH11・SH102近景(南より) 2 SH101近景(南東より) 図版65 出土遺物 A05、A09、A02、A04、A08、A07、A08、A09(SD151下層)
- 図版48 遺構 1 SH101近景(東より) 2 SH103近景(南より) 図版66 出土遺物 A09、A01、A04、A08(SD151下層)、A03、A04、A09、A08(SD151中層)、A07(SD151上層)
- 図版49 遺構 1 SH103近景(南より) 2 イ-II区全景、SH125近景(東より) 図版67 出土遺物 A01、A03、A07、A09(SD151中層)、A12、A12、A123、A128、A131、A132(SD151上層)
- 図版50 遺構 1 SH106・SH105近景(南より) 2 SD20・SH106・SH109近景(南より) 図版68 出土遺物 A14、A14、A14、A15、A16、A18、A178(SD151上層)
- 図版51 遺構 1 SH106近景(東より) 2 SD20、イ-III区全景(南より) 図版69 出土遺物 A18、A17、A19~A193(SD151上層)、B01~B03、B02、B03(SD152A下層)
- 図版52 遺構 1 SD20・SH107~SH108近景(南より) 2 SD20・SH107~SH108近景(南より) 図版70 出土遺物 B01、B04、B09、B02~B05(SD152A下層)
- 図版53 遺構 1 SH109近景(北より) 2 ロ-I区全景、SH110遠景(南より) 図版71 出土遺物 B06、B03、B05、B06、B08、B04、B04、B06、B09(SD152A下層)
- 図版54 遺構 1 SH110近景(東より) 2 SH110近景(西より) 図版72 出土遺物 B04、B02、B03、B03、B04、B06、B05、B04、B02(SD152下層)
- 図版55 遺構 1 SH111近景(南より) 2 SH112近景(北より) 図版73 出土遺物 B07、B08、B06、B01、B06、B07、B03(SD152A下層)
- 図版56 遺構 1 SH112近景(北より) 2 SH113~SH115・SH128近景(南より) 図版74 出土遺物 B08、B09、B02(SD152A下層)、B04、B05、B06、B07、B09、B10、B10(SD152A上層)
- 図版57 遺構 1 SH116・SH117近景(北西より) 2 SH116近景(東より) 図版75 出土遺物 B108、B105、B107、B109、B113、B117、B121、B122、B124、B125(SD152A上層)
- 図版58 遺構 1 SH116近景(東より) 2 ロ-III区全景(南より) 図版76 出土遺物 B110、B13~B135、B140、B142、B145、B147(SD152A上層)
- 図版59 遺構 1 SH123近景(西より) 2 SH124近景(西より) 図版77 出土遺物 B141、B143、B144、B146、B146~B151、B158(SD152A上層)
- 図版60 遺構 1 SH125近景(東より) 2 SH129・SH129近景(北より) 図版78 出土遺物 B156、B157、B161、B162、B175、B177、B178、B179、B186(SD152A上層)
- 図版61 遺構 1 SH129柱穴礎板検出状況(西より)

- 圖版79 出土遺物 B180、B182~B190(SD152A 上層) D417(SH079)
- 圖版80 出土遺物 B191、B192、B208、B211、B214、B219、
B228、B230、B232、B234(SD152A 上層) 圖版95 出土遺物 D418、D419(SH079)、D428(SH081)、
D461(SK015)、D487、D482(SK024)、
D485、D487、D533、D555(SK025)
- 圖版81 出土遺物 B215、B220、B240、B241、B247、B248
(SD152A 上層)、B253、B256~B258
(SD152A 層位不明) 圖版96 出土遺物 D505(SK025)、D508、D509、D511、D513、
D514、D516(SK027)、D520(SK028)
- 圖版82 出土遺物 B237、B248(SD152A 上層)、B300、B361、
B371(SD152A 層位不明)、C001~C003、
C006(SD152B) 圖版97 出土遺物 D521(SK030)、D531(SK033)、D637、
D638(SK044)、D541、D546(SK046)、
D546(SK048)、D551(SK053)
- 圖版83 出土遺物 C010、C013、C015、C017、C022~C025
(SD152B) 圖版98 出土遺物 D556、D557(SK054)、D559(SK053)、
D562(SK075)、D564(SK083)、D566
(SK080)、D571、D572(SK100)
- 圖版84 出土遺物 C018、C026、C027、C029、C030~
C032、C037、C039(SD152B) 圖版99 出土遺物 D573(SK100)、D576(SK102)、D577
(SK103)、D578(SK104)、D589、D593
(SD002)、D594(SD003)、D601(SD007)
- 圖版85 出土遺物 C035、C041、C049、C060、
C055~C058(SD152B) 圖版100 出土遺物 D608、D611、D613(SD011)、D615(SD017)、
D621、D624(SD018)、D625(SD019)、
D634(SD028)
- 圖版86 出土遺物 D010、D015、D016、D018、D019(SH009)、
D035、D040(SH015) 圖版101 出土遺物 D629(SD019)、D632(SD027)、D633
(SD028)、D641、D642(SD030)、D665
(SD032)、D670(SD033)、D675、D679(SD037)
- 圖版87 出土遺物 D042(SH016)、D043、D045、D047
(SH017)、D050、D054(SH018)、D055
(SH022)、D056、D067(SH024) 圖版102 出土遺物 D640(SD030)、D680(SD037)、D691(SD039)、
D685、D687、D700(SX001)、D701(SX007)、
D706(SX008)、D711(SX009)
- 圖版88 出土遺物 D069(SH024)、D076(SH025)、D080、
D082(SH028)、D096(SH030)、
D132(SH037)、D144(SH038) 圖版103 出土遺物 D709(SX039)、D715(SX011)、D719
(SX014)、D728、D732(SX015)、D738、
D739(SX018)
- 圖版89 出土遺物 D147~D149、D153~D156、D158(SH040)
- 圖版90 出土遺物 D160、D171、D172、D183、D188、D189
(SH040)、D193(SH041)、D210、D213、
D214(SH045) 圖版104 出土遺物 D740(SX018)、D763~D777、
D780(チ-I 区包含層)
- 圖版91 出土遺物 D220、D222(SH046)、D227(SH048)、
D230、D233、D235(SH049)、D272(SH058)、
D226(SH061)、D278(SH062) 圖版105 出土遺物 E006、E008、E009、E012、E018、E019、
E032(SD011下層)
- 圖版92 出土遺物 D277、D279(SH062)、D281、D285(SH063)、
D302、D307、D311(SH065)、D335、D336
(SH067) 圖版106 出土遺物 E024、E025、E029、E033、E035、E038、
E050(SD011下層)
- 圖版93 出土遺物 D337、D341、D342、D344、D345(SH068)、
D348、D351、D354、D355(SH070) 圖版107 出土遺物 E037、E039、E041~E044、E051、E059、
E066(SD011下層)
- 圖版94 出土遺物 D357、D359、D361(SH071)、D369
(SH072)、D384(SH074)、D405(SH075)、
圖版108 出土遺物 E058、E071~E075、E077、E087(SD011下層)
- 圖版109 出土遺物 E057、E061、E081、E082、E092、

	E09、E102(SD301下層)	(SK205)、F094(SK206)、F095(SK207)、 F106(SK208)
図版110 出土遺物	E100、E101、E103、E105、E110、E114、 E124、E128(SD301下層)	図版117 出土遺物 F096(SK207)、F097(SK208)、F103 (SK208)、F108(SK210)、F113(SX205)、 F118(イ-I包含層)
図版111 出土遺物	E108、E109、E112、E116、E118、E119、 E135、E144(SD301下層)	図版118 出土遺物 F110(SK211)、F112(SK217)、F117 (SX205)、F130(イ-III包含層)、F134、 F136(ロ-III包含層)
図版112 出土遺物	E130、E136、E137、E138、E143 (SD301下層)、E148(SD301中層)	図版119 出土遺物 1 S001(カ地区包含層)、S002(SH046) S003(SD150)、S014(DE I下層ビット内) S015(SD151) 2 S004(SH120)、S005、S013(SH125)、 S006(SH068)、S007(SH059)、S008 (SK113)、S009(SH040)、S010(SH118)、 S011(SK112)、S012(SH140)、S101 (ト-I遺構面)、S110(イ-III包含層)、 S112(ロ-II・III遺構面)
図版113 出土遺物	E149~E155(SD301中層)	図版120 出土遺物 1 S009(D地区包含層)、S210(SH058)、 S211(ロ-III遺構面)、S212(SD151)、 S215(SH120)、S225(SH040)、S230 (SK063)、S231(チ-I包含層)、S235 (SH066)、S236(チ-I遺構面) 2 S001(SH039)、S004(SH058)、S005 (SD301)、S021(SK085)
図版114 出土遺物	E157、E159(SD301中層)、E164~E166、 E168、E169、E173(SD301上層)、 E182(SD301層位不明)	図版121 出土遺物 S23(SD152)、S232(SH121)、S405 (SH103)、S410(SH081)、S418(SH118)、 S425(SH065)、S426(SH074)
図版115 出土遺物	E181、E183~E186、E188、E190 (SD301層位不明)	図版122 CE 2区(上) CE 3区(下) 平面実測図
図版116 出土遺物	E175、E189、E192~E195、E197、E198、 E202(SD301層位不明)	図版123 DE 1区第3遺構面平面実測図
図版117 出土遺物	E204、E207、E209、E212~E216、E218 (SD301層位不明)	図版124 DE 2区第3遺構面平面実測図
図版118 出土遺物	E217、E219、E221、E223、E224、E227 (SD301層位不明)	図版125 DE 3区(上) DW 4区(下) 平面実測図
図版119 出土遺物	E228~E230、E236、E238、E240、E242、 E243(SD301層位不明)	図版126 SH006、SH007、SH028、SH030断面実測図
図版120 出土遺物	F001(SH102)、F003~F009(SH103)、 F010(SH105)、F012(SH106)	図版127 SH005、SH019、SH030断面実測図
図版121 出土遺物	F011(SH105)、F013(SH106)、F015、 F016、F018、F019、F024~027(SH107)	図版128 SH022、SH023、SH028、SH031断面実測図
図版122 出土遺物	F028、F030(SH105)、F032(SH113)、 F034(SH116)、F036、F037、F038、 F042(SH118)	図版129 チ-I区竪穴住居跡断面実測図(1)
図版123 出土遺物	F041、F043~F046(SH118)、F046(SH119)、 F047~F049、F051、F052(SH120)	図版140 チ-I区竪穴住居跡断面実測図(2)
図版124 出土遺物	F054、F055(SH122)、F059~F062(SH123)、 F063、F064(SH124)、F065、F066(SH125)	図版141 DE区土坑断面実測図
図版125 出土遺物	F067、F068(SH128)、F069(SH129)、 F071(SH133)、F072(SH134)、F074 ~F076(SH135)	
図版126 出土遺物	F078(SH136)、F079(SH137)、F081、 F083(SH138)、F084(SH140)、F085	

図版142	DE区土坑断面実測図	(SD152A 下層)
図版143	DE区土坑断面実測図	図版172 土器実測図 B301、B303~B305 (SD152A 下層)
図版144	DE区・チ-I区土坑断面実測図	B303、B306 (SD152A 上層)
図版145	DE区・チ-I区土坑断面実測図	図版173 土器実測図 B304、B305、B307~B312 (SD152A 上層)
図版146	CE区・DE区落ち込み・構跡断面実測図	図版174 土器実測図 B113~B116 (SD152A 上層)
図版147	DE1区・DE2区トレンチ・SD151断面実測図	図版175 土器実測図 B127~B140、B147、B150 (SD152A 上層)
図版148	SD152断面実測図	図版176 土器実測図 B144~B146、B148、B149、B151~B158 (SD152A 上層)
図版149	弥生中期末~後期初頭(上流域)遺構全体図	図版177 土器実測図 B159~B190 (SD152A 上層)
図版150	イ-I区竪穴住居跡群平面実測図	図版178 土器実測図 B191~B209 (SD152A 上層)
図版151	イ-II区竪穴住居跡群平面実測図	図版179 土器実測図 B210~B232 (SD152A 上層)
図版152	イ-III区竪穴住居跡群・SD201平面実測図	図版180 土器実測図 B233~B250 (SD152A 上層)
図版153	ロ-II区竪穴住居跡群平面実測図	図版181 土器実測図 B251~B271 (SD152A 層位不明)
図版154	SD201断面実測図(1)	図版182 土器実測図 C001~C005、C011~C014 (SD152B)
図版155	SD201断面実測図(2)	図版183 土器実測図 C018、C015~C030 (SD152B)
図版156	SH107、SH112断面実測図	図版184 土器実測図 C031~C041、C043 (SD152B)
図版157	イ・ロ区遺構断面図	図版185 土器実測図 C042、C044~C058 (SD152B)
図版158	イ・ロ地区トレンチ断面実測図	図版186 土器実測図 D001~D003 (SH001)、D004 (SH002)
図版159	土器実測図 A001~A016 (SD151下層)	D005~D009 (SH004)、D010~D019 (SH005)、D020、D021 (SH007)
図版160	土器実測図 A017~A043 (SD151下層)	図版187 土器実測図 D022 (SH009)、D023~D033 (SH012)
図版161	土器実測図 A044~A065、A073、A074 (SD151下層)	D034~D037 (SH013)、D038~D040 (SH015)、D041~D042 (SH016)、D043~D047 (SH017)、D048~D050、D054 (SH018)
図版162	土器実測図 A070~A072 (SD151下層)	図版188 土器実測図 D051~D053、D055 (SH018)、D056~D062 (SH020)、D063~D064 (SH021)
	A075~A081 (SD151中層)	D065 (SH022)、D066~D075 (SH024)
	A092~A102、A104 (SD151上層)	D079 (SH028)
図版163	土器実測図 A103、A105~A130 (SD151上層)	図版189 土器実測図 D076~D077 (SH025) D078、D080~D087 (SH028)、D088~D090 (SH029)
図版164	土器実測図 A131~A157 (SD151上層)	D091~D103、D105 (SH030)、D110 (SH033)、D107 (SH032)
図版165	土器実測図 A158~A173、A175 (SD151上層)	図版190 土器実測図 D104 (SH030) D106 (SH031)、D108、D109、D111~D121 (SH033)、D122~D128 (SH034)、D130、D131 (SH035)、
図版166	土器実測図 A174、A176~A184、A186~A194 (SD151上層)	
図版167	土器実測図 B001~B007、B009~B013 (SD152A下層)	
図版168	土器実測図 B008、B014~B024、B026 (SD152A下層)	
図版169	土器実測図 B025、B027~B043 (SD152A下層)	
図版170	土器実測図 B044~B060、B062、B063、B065 (SD152A下層)	
図版171	土器実測図 B061、B064、B066~B080、B082	

- D132 (SH037)
- 图版191 土器実測図 D129 (SH035)、D133~D143 (SH037)、
D144 (SH038)、D145~D154、D157
(SH040)
- 图版192 土器実測図 D155、D156、D158~D166、D169~
D185、D188、D189 (SH040)
- 图版193 土器実測図 D186、D187、D190、D191 (SH040)、
D192 (SH041)、D193~D196 (SH042)、
D197、D198 (SH043)、D199~D208
(SH044)
- 图版194 土器実測図 D209~D218 (SH045)、D219~D222
(SH046)、D223~D225 (SH047)、
D226、D227 (SH048)、D228~D235、
D237~D238 (SH049)、D234 (SH052)
- 图版195 土器実測図 D236、D240~D244 (SH048)、D245~
D249 (SH050)、D250~D256 (SH052)、
D257~D261 (SH057)、D262~D265、
D268~D272 (SH058)
- 图版196 土器実測図 D267、D273~D275 (SH059)、D276
(SH061)、D277~D279 (SH062)、
D280~D290 (SH063)、D291~D293
(SH064)、D294~D297 (SH065)
- 图版197 土器実測図 D298~D326 (SH065)
- 图版198 土器実測図 D327~D331 (SH065)、D332~D334
(SH066)、D335~D336 (SH067)、
D337~D345 (SH068)、D346~
D347 (SH069)、D348~D351 (SH070)
- 图版199 土器実測図 D352~D355 (SH070)、D356~D356
(SH071)、D367~D369 (SH072)、
D370~D372 (SH073)
- 图版200 土器実測図 D373~D387 (SH073)、D388~D398、
D400、D401 (SH074)
- 图版201 土器実測図 D399、D402~D404 (SH074)、D405、
D406 (SH075)、D407 (SH077)、D408
(SH055)、D409~D419、(SH078)、
D421~D424 (SH079)
- 图版202 土器実測図 D420、D425 (SH079)、D426、D427
- 图版203 土器実測図 D451 (SK011)、D462~D469 (SK015)、
D460~D464、D466~D470 (SK016)
- 图版204 土器実測図 D465、D471~D484 (SK015)、D486~
D492 (SK020)
- 图版205 土器実測図 D493~D497、D499~D505 (SK025)
- 图版206 土器実測図 D506、D507 (SK026)、D508~D518
(SK027)
- 图版207 土器実測図 D519、D520 (SK028)、D521 (SK030)、
D522~D527 (SK031)、D528~D530
(SK033)、D531 (SK035)、D532、D533
(SK040)、D534~D536、D540 (SK040)
- 图版208 土器実測図 D537~D539 (SK044)、D541~D545
(SK046)、D546 (SK048)、D547~D549
(SK050)、D550、D551 (SK053)、D552
~D555 (SK054)
- 图版209 土器実測図 D556、D557 (SK054)、D558 (SK066)、
D559 (SK069)、D560 (SK070)、D561
(SK073)、D562、D563 (SK076)、D564
(SK083)、D565 (SK084)、D566、D567
(SK090)、D568 (SK091)、D569 (SK095)、
D570 (SK096)、D575 (SK101)
- 图版210 土器実測図 D571~D574 (SK100)、D576 (SK102)、
D577 (SK103)、D578 (SK104)、D579~
D581 (SK105)、D582、D583 (SK109)、
D584、D585 (SK110)
- 图版211 土器実測図 D586、D587 (SD001)、D588~D593
(SD002)、D594~D597 (SD003)、D598、
D599 (SD004)、D600 (SD005)、D601
(SD007)、D602、D603 (SD008)
- 图版212 土器実測図 D604 (SD008)、D605、D606 (SD009)、
D607 (SD010)、D608~D613 (SD011)、
D614 (SD014)、D615~D617 (SD017)、
D618~D621 (SD018)
- 图版213 土器実測図 D622~D625 (SD018)、D626~D629
(SD019)、D630 (SD025)、D631、D632
(SD027)、D633~D635 (SD028)、D641、
D642 (SD030)

- 図版214 土器実測図 D636~D638(SD028)、D640(SD030)、D643~D660(SD031)
- 図版215 土器実測図 D661~D663(SD031)、D664~D666(SD032)、D667~D671(SD033)、D672(SD034)、D673、D674(SD036)、D675~D677、D679(SD037)
- 図版216 土器実測図 D678、D680~D686(SD037)、D687(SD038)、D688~D691(SD039)、D692~D697、D700(SX001)
- 図版217 土器実測図 D698、D699(SX001)、D701~D706(SX007)、D706(SX008)、D708~D714(SX009)、D715~D717(SX011)、D718(SX013)、D719~D722(SX014)
- 図版218 土器実測図 D723~D726(SX014)、D727~D732(SX015)、D733~D736(SX017)、D737~D745(SX018)
- 図版219 土器実測図 D746(P106)、D747(P208)、D748(P008)、D749~D757(チ-I区包含層)
- 図版220 土器実測図 D758~D768、D790、D791(チ-I区包含層)
- 図版221 土器実測図 D785、D792~D806(チ-I区包含層)
- 図版222 土器実測図 E001~E009(SD201下層)、E010~E013、E016、E018、E019(SD201中層)
- 図版223 土器実測図 E014、E015、E017、E020~E025、E026、E042(SD201中層)
- 図版224 土器実測図 E028~E041、E043~E056、E058~E060、E063~E068(SD201中層)
- 図版225 土器実測図 E067、E061、E062、E069~E088、E102、E106、E111(SD201中層)
- 図版226 土器実測図 E099~E101、E103~E105、E107~E110、E113~E117、E119、E123~E129、E131~E135(SD201中層)
- 図版227 土器実測図 E112、E118、E120~E122、E130、E136~E147、E148(SD201中層)
- 図版228 土器実測図 E149~E151(SD201中層)、E162~E167、E168(SD201上層)
- 図版229 土器実測図 E169~E178(SD201上層)、E180~E189(SD201出土層位不明)
- 図版230 土器実測図 E190~E209、E212(SD201出土層位不明)
- 図版231 土器実測図 E210、E211、E213~E225、E227、E228、E230~E235(SD201出土層位不明)
- 図版232 土器実測図 E236、E229、E236~E243(SD201出土層位不明)
- 図版233 土器実測図 F001(SH102)、F002~F020(SH103)、F010、F011(SH106)、F012~F014(SH106)、F015~F017(SH107)、F018~F030(SH108)、F031、F032(SH103)、F033(SH106)、F034(SH106)、F035(SH107)
- 図版234 土器実測図 F036~F046(SH108)、F046(SH108)、F047~F053(SH120)、F054、F055(SH122)、F056~F062(SH123)
- 図版235 土器実測図 F063、F064(SH124)、F065、F066(SH125)、F067、F068(SH128)、F069(SH129)、F070(SH131)、F071(SH133)、F072(SH134)、F073(SH135)、F074~F078(SH136)、F079(SH137)、F080(SH138)、F081~F083(SH139)、F084(SH140)、F085~F090(SK203)、F091(SK205)
- 図版236 土器実測図 F092~F093(SK205)、F094(SK205)、F095、F096(SK207)、F097~F102(SK208)、F104~F106(SK209)
- 図版237 土器実測図 F103、F107(SK209)、F108(SK210)、F108、F110(SK211)、F111(SK216)、F112(SK217)、F117(SX205)、F116(SK207)、F113~F115、F118~F121(イ・ロ区包含層)
- 図版238 土器実測図 F122~F137(イ・ロ区包含層)
- 図版239 石製品実測図 S101(SH108)、S001(SH103)、S008、S009(SH040)、S004(SH058)、S011(SH042)、S400(SH061)、S412、S022(SH109)、S914、S915(SH110)、

S215(SH120)、S232(SH123)、S004
(SH124)、S005、S013、S211(SH125)、
S012(SH140)、S012(SD034)、S055
(ホ-IV SD 1)、S238(DE 2 遺構面)、
S011(DE 1・2 遺構面) S101(ロ-III
遺構面)、S110、S220(ロ-III包含層)、
S019(CW 2 黒色粘土)、S110(ニ-II
排土)、S105、S305(チ-II 排土)、
S001(カ-II 包含層)、S055(ト-I
SD 5)

図版240 石器実例図 S015、S212(SD151)、S1102(SH028)、
S225(SH040)、S002(SH046)、S432
(SH060)、S210(SH050)、S007(SH059)
S425(SH065)、S207、S225(SH066)、
S423、S424(SH067)、S006(SH068)、
S427(SH073)、S230(SK063)、S011
(SK112)、S008(SK113)、S1103
(SX201)、S014(DE 1 下層)、S231
(チ-I・II 包含層)、S226(チ-I・
II 遺構面)、S219(DE 2 表土層)

I. はじめに

服部遺跡では、弥生中期前半から後半にわたって、総数360基以上にはる方形周溝基が、調査地域のほぼ全域で検出されたが、それに伴う集落の大半は、調査域の外に存在するとみられ、ほとんど検出をみなかった。ただわずかに、下流域の東端において、環溝とみられる幅3m、深さ1.2mのV字溝に圍繞された集落跡の一部が検出された。この集落跡は、その一部分のみで、しかも、中期後半という限定された時期のものであるが、竪穴住居跡80棟余、土坑120基、溝跡40条にのぼり、服部遺跡の集落の実態を考える上では、不十分であるが、今後の調査・研究をすすめる上では、大きな手がかりとなるであろう。

中期の方形周溝基群や、中期後半の集落は中期末の大きな洪水によって、ほぼ埋没したとみられるが、後期初頭になると、それらの洪水堆積土を地山として、再び集落の形成が始まる。この集落は中期後半のものとなり、上流域に中心をもつもので、円形プランの竪穴住居跡が、40棟余発見された。そして、その西側に、ほぼ同時期に掘削されたとみられるV字溝が、南から北に延長350m余検出をみている(S D 201)。これらの集落跡は、短期間のうちに洪水により廃絶したとみられ、後期後半には径150m余、幅5m、深さ3mの卵形の環濠が掘られ(S D 202)、その内外に集落跡が形成されている。したがって、この後期初頭の集落は、中期から後期への過渡期に存在した遺構として、服部遺跡の集落変遷をみる上で、重要な位置を占めるものであろう。

本書には、これら中期後半と、後期初頭に比定される集落と、それに関連するとみられる溝の遺構・遺物についての報告を取載することができた。いまだ不十分なものであるが、弥生中期から後期への展開を究明する上で、若干の寄与をなすものと考えられる。(大橋信弥)



第1図 位置図

II. 服部遺跡周辺の地形

1. はじめに

野洲川下流平野の地形について、その形成時期や形成過程は、これまでにいくつかの試案が示され、前回の報告（『服部遺跡発掘調査報告書Ⅳ』）にも、その概略をまとめた。²¹そこで、今回は、服部遺跡とその周辺に限定した地形についてまとめてみることにする。

2. 服部遺跡周辺の地形概要（第2図参照）

野洲川下流平野の旧北流と旧南流の分岐点の湖岸側に位置する服部遺跡付近は、等高線図（第3図）を見ると、ほぼ88m前後（改修前の地形図）となっている。この付近の地形面は、野洲川下流全体の地形分類では、扇状地性低地の最も下流部にあたり、湖岸側の三角州面との漸移地帯に近くなっている。

扇状地性低地の特色は、平野の一般的な地形分類では、自然堤防帯または氾らん原とよばれ、自然堤防の高まりとそれを取りまく後背湿地から成りたっている。しかし、野洲川下流平野の場合、扇状地の運搬面と考えられ、扇頂地という名称が使用されている文献もある。³また、実際に後背湿地にあたる地形面が3/1,000～4/1,000程度の勾配をもってることから、自然堤防帯または氾らん原という名称にかえ、扇状地性低地という呼称を用いた。

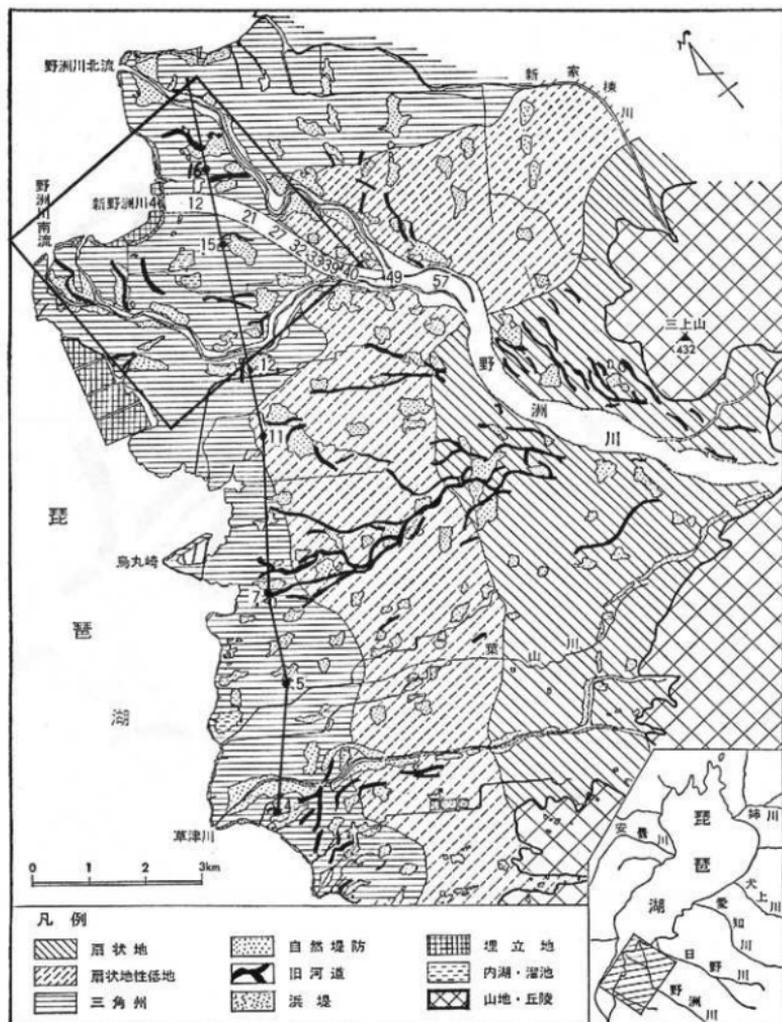
ところで、服部付近は、南北両流の高い堤防に囲まれ、かなり低湿なイメージをうけるが、実際はその中に自然堤防の微高地を利用した集落と、湖岸に向かって上記の勾配をもった扇状地性低地面、および2/1,000以下の勾配の三角州面が広がっている。

以下には、この低地の微地形の特徴および地下構造の推定を行い、最後に服部遺跡の立地環境を地形学的分析によって探ってみることにする。

3. 微地形図からみた服部遺跡

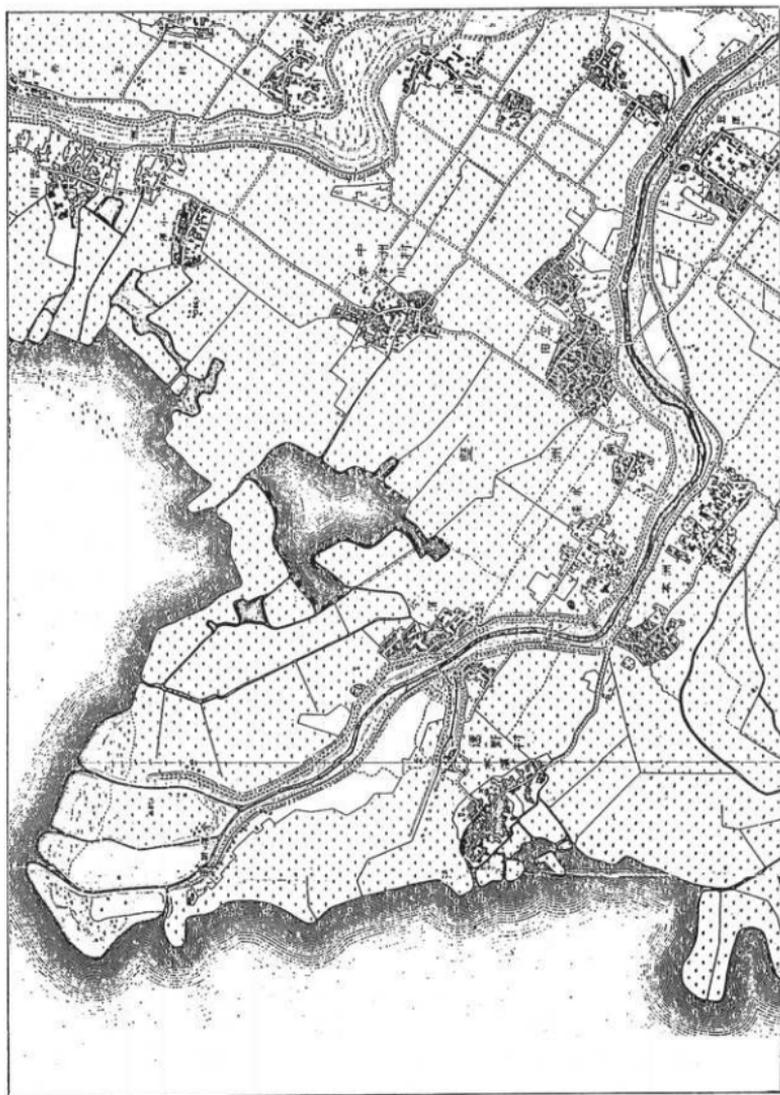
第3図は、改修前の大縮尺地形図（1/2,500）から1m間隔の等高線を抜き出したもので、さらに、昭和36年に撮影された空中写真（国土地理院、1/10,000）から、可能な限り旧河道状凹地を追跡して図示したものである。一方第4図は、明治26年瀬川の当地域の地形図（大日本帝国陸地測量部作製、1/20,000）である。これには、当時の集落の大きさと土地利用の状況が把握でき、野洲川の河道の状況や当時の湖岸線（南郷洗堰完成前で現在より約60cm水位が高い）なども読み取ることができ、大いに参考となるので、合わせて掲載した。

両図を中心に、服部付近の微地形の特徴を調べると、服部の集落は、88mの等高線に出るようになり、周辺の水田面より1m程度高い微高地に立地しており、逆に集落の北側には、幅20～30m、長さ約200mの旧河道が指摘できる。この旧河道の下流側への延長は、図上では途中で切れているが、幸津川の集落の東側から北西側に向かって、幅50m以上を有して延びている旧河道に続きそうである。これは、等高線図でも、服部から幸津川に流れる水路沿いの凹地として表現されている。一方、服部から南の川辺に向かっては、野洲川に近づくに従って高度を増し服部付近の88mから、川辺集落の立地する90mへと、南に高い地形面が形成されている。これは、南流野洲川の北岸における一般的傾向であり、いわゆる「天井川沿いの微高地」にあたる地形となっている。



第2図 地形分類図及び位置図

(□内は図2, 新野洲川の番号図4, は図5に対応)



第 4 圖 明治26年瀬島地形圖

服部の西方、湖岸側には、糸里型土地割を乱すような旧河道状凹地列が何本も見られ、立田町立花の東側および北側に集中している。特に北側のそれは、前記幸津川の北東側の旧河道への連続も考えられる。さらに、立花の北側から幸津川の南側を通過する繁島池干拓地方面へ延びるものも有力な旧河道の一つである。その他、北流の幸津川の北東方、および南流の立田町・田の西方に、野洲川から派生する形で流路跡が追跡できる。

ところで、南北両流に挟まれたこの地域の微高地の代表例は幸津川の集落である。ここでは、86m以下の周辺の低窪地中に、87m以上の微高地が2カ所あり、また集落を取りまく旧河道の配列状況からも、自然堤防を利用した集落立地の典型である。

なお、この地域の各集落の起源を調べると服部をはじめとして、古代、中世起源が多く、また、中世の湖岸線が現河口から2kmあまり内陸側の古川、幸津川、小浜を結んだ線という報告もあり⁵⁾、野洲川の南北両流が現在の形に固定された時期の限定をふくめ歴史時代の地形と集落の立地について興味深い問題が引継がれている。

4. 地下構造の推定

当地域の地下構造を知るため、既存の文献、ボーリング資料を提示すると以下の様である。

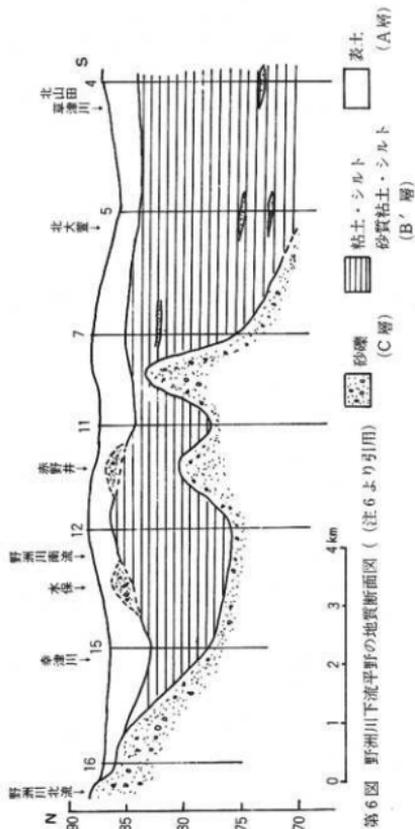
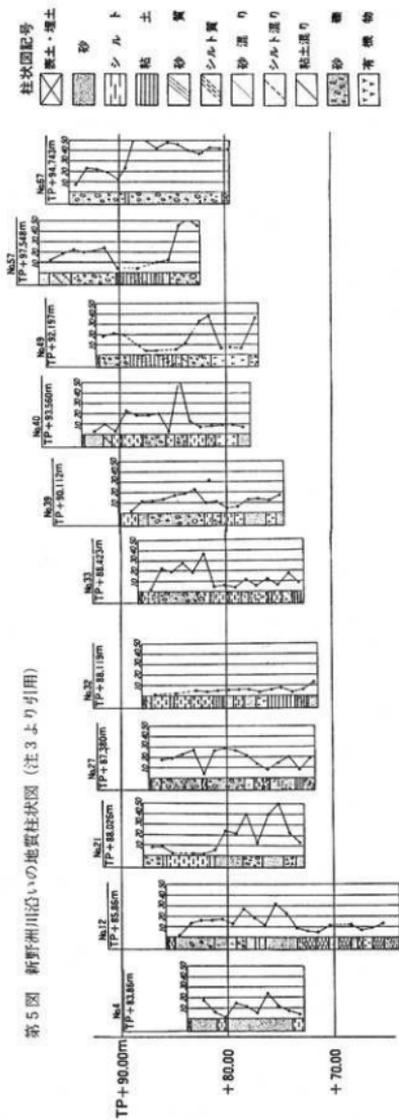
まず、野洲川改修時のボーリング柱状図を⁵⁾下流から上流に並べたものが第5図である。服部付近はNo.32、No.33に当たり、No.32は砂・シルトが著しく多い軟弱な様相を示すが、やや上流側のNo.33では、表層の数mを砂礫層が占め、この付近にも扇状地性の堆積が及んだことを暗示している。したがって平野形成時には、この扇状地性の堆積環境と、砂・シルトを主体とした自然堤防あるいは三角州性の堆積が交互にくり返された状況を読み取ることができる。なお、No.32とNo.33を詳しく見ると、下部は、ほぼ同様であるが、T.P.81mより上部で、前述のような、シルト質主体(No.32)と砂礫層(No.33)の差異が見られる。遺跡中においても、弥生時代の水田址が古墳時代の旧河道に切られている状況や、他の旧流路跡も多く検出されていることから、No.33の砂礫層は、当時の野洲川の洪水の様子を示す興味深い資料である。一方、No.32の上部のシルト主体層は、遺物包含層にあたると思われる、85~86mより上部が弥生時代以降の堆積物に相当する。

次に、湖岸に沿って南北の断面図(第6図)を示した⁶⁾これによると、南北両流の間は、現河川堆積物(A層)で、幸津川ではほぼ82~83mの深さとして示されている。その下のB'層は、粘土・シルトを主体としたN値5~15の地層で、野洲川下流平野の西半部(地形分類図では扇状地性低地の部分)の地下に厚層10~20mで堆積している。さらにその下にはC層(砂および礫から成るN値20~50の地層)が存在し、一般に低位段丘相当層(洪積世末期の堆積物)に相当すると考えられている。

ところで、この図で注目すべきことは、野洲川南流沿岸の水保および南の赤野井付近の地下数mの所に幅約1km、厚さ4~6mの砂層がレンズ状に挟まれていることである。これについては、水保のものは、南流による堆積物であり、赤野井では、旧河川による堆積物とされ、野洲川の旧流路の一つが、この付近を流れていたことを示すものと解釈できる。これらは、地形分類図でも明瞭な旧河道の走っている部分とはほぼ一致するのは興味深い。

一方、C層の上面の起伏を見ると、前記の赤野井および、その南の森河原付近で、大きく盛り上がっていることに気がつく。これはC層堆積当時、この地域で東西にのびる堆積の中心があったとすると、前述の自然堤防列(守山市街地から島丸階方面へのびるものが典型)の原形が、すでに形づくられていたと考えてもよさそうである。ただし、堆積物そのものの観察や絶対年代等の分析を行っていないので、遡断はできない。また、このC層は、野洲川北流の現河川堆積物をも含めて図示しているため、これを上記のC層と同一視すると、北流は、かなり古くから存在していたとも解釈でき、他のボーリング資料からの検討をも含めて、地下構造から推定できる過去の野洲川による堆積物の状況を詳細に

第5図 新野洲川沿いの地質柱状図 (注3より引用)



検討していきたい。

なお前回の報告書や、他の文献等での指摘によると、堆積物の年代の把握には、広城火山灰層である始良T_n（ATと略称、約22,000年前）、アカホヤ火山灰（約6,000年前）の検出が、この地域周辺でも進められている。ごく最近の発掘でも、守山市赤野井湾内の湖底（81m前後）でアカホヤ火山灰とその直下に縄文時代の遺構が発見されており、当時の陸地の広がり（湖面の縮小）や、気候環境の推定（花粉化石も分析中）の作業が進められ、洪積世末～沖積世初めの自然環境の復元が各分野から検討されつつある。

5. 遺跡の立地と微地形

野洲川下流域には前回の報告書に述べられているように、弥生時代前期において、服部遺跡をはじめとして、6-7の遺跡が拠点となり、その後も継続して発達し、当地域の弥生時代社会に与えた影響は大きかった。そして、それぞれの立地点は、当初標高85-86の地点を中心に、微高地を選んで立地した。中期には、各拠点集落のまわりに一定の距離をおいて、その数倍の数の集落が成立し、さらに後期には、内陸側に展開する傾向があると考えられている。

ここで、弥生時代を中心とした地形の復元を試みる手段として、これまでの発掘調査等で明らかになった弥生時代の遺構面あるいは遺物包含層が現地表面よりどれくらいの深さの所に埋没しているかを調べてみたい。

まず、服部遺跡の場合、弥生前期水田面が85.5m、弥生中期末の住居址が86.5m付近にある。したがって現耕土上面からは約3m下に水田面が、また、約2m下に弥生中期末から後期の生活面が埋没している。

標高がほぼ等しい野洲川北流右岸の中主町西河原付近では、弥生時代中・後期の遺構面は地表下2m付近に埋没している。一方、南流左岸の赤野井遺跡では、地表下1m付近とやや浅くなり、地域によってかなりの凹凸がある。現地表面のみの地形分類では、当時の微起伏を表現することは困難であるが、近年、これらの埋没した微地形の検出に関する調査研究が進展しつつある。琵琶湖沿岸でも、これまでの発掘調査の資料や発掘中のトレンチの観察を通じ、より正確な埋没微地形の復元と、その後の地形変遷の様子を調べ、平野の形成史と人類の居住環境の変遷を明らかにしたいものである。

（辰巳 勝）

（参考文献および註）

- 1) 辰巳 勝：野洲川下流平野の形成、「地表空間の組織」立命館大学地理学教室・同地理学会同窓会編 所収、1981、p.438-448
- 2) 辰巳 勝：野洲川下流平野の地形環境、服部遺跡発掘調査報告書Ⅳ、1988
- 3) 龍瀬良明：「自然堤防」古今書院、1975、p.196-210
- 4) 織田武雄他：琵琶湖南部の総合調査、地理学評論37-6、1964
- 5) 前掲3)
- 6) 尾原信彦他：滋賀県琵琶湖岸野洲川デルタに関する産業地質学的研究（その1）、地質調査所月報18-12、1967
- 7) 町田 洋・新井房夫：広域に分布する火山灰—始良T_n火山灰の発見とその意義、科学46、1976
- 8) 1986年末～1987年1月にかけて赤野井湾内の湖底で発見され、現在詳細を分析中である。
- 9) 山崎秀二：弥生時代後期の野洲川下流域、服部遺跡調査報告書Ⅳ、1988

Ⅲ. 調査の経過

1. Ⅲ次調査

昭和51年

7月2日 Ⅲ次調査開始

10月22日 下流東部の、方形周溝墓の上面で、弥生中期後半の遺構群（竪穴住居跡・土坑）を発見

10月26日 竪穴住居跡は3棟（SH001～SH003）で、いずれも残りは悪く、わずかに炭化物や、焼土の分布によって、輪郭がつかめた。柱穴も明確でなく、中央に土坑をもつタイプであった。

10月28日 竪穴住居跡の北側で、大・小の土坑を検出、炭化物や焼土を充填するものもあり、土壌墓というより、住居跡等の残骸である可能性が高い。平面、断面実測。

10月30日 航空測量、完了後、個別遺構写真。

10月31日 第Ⅲ次調査終了（中断）。

2. Ⅳ次調査

昭和53年

3月10日 調査再開。まずテトラポット埋設地区の調査。

3月24日 Ⅲ次調査で、方形周溝墓の上面で竪穴住居跡を検出した地点に隣接するCE2・CE3区で、同じく方形周溝墓の上面で竪穴住居跡と土坑を検出した（SH005～SH018）。

3月25日 CE3区竪穴住居跡の掘り下げ完了。残りは悪いが、比較的遺物は多く、出土状況写真後実測。

3月27日 CE2・CE3区竪穴住居跡の実測完了、レベル記入、遺物の取り上げ、DE1・DE2区でも竪穴住居跡検出。

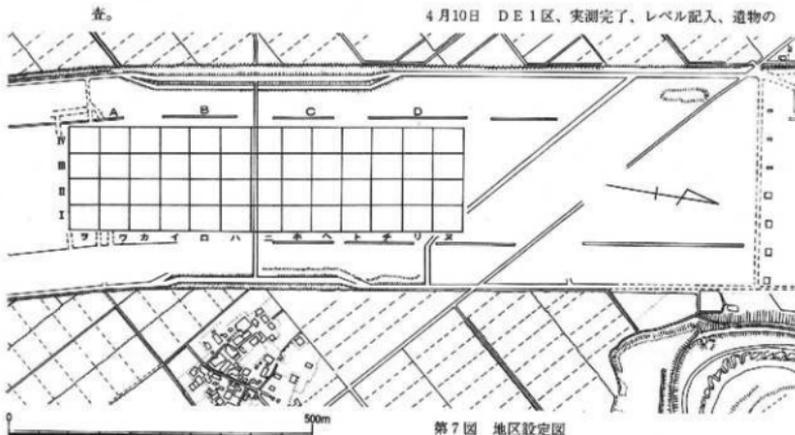
3月30日 CE2・CE3区の竪穴住居跡の断面図作成、DE1・DE2区第1遺構面の竪穴住居跡等の掘り下げ。

4月3日 DE1区、SH028～SH033断面実測、SH031掘り下げ、DE2区、SH040より、石楸、石芥など出土、さらに遺構検出。

4月5日 DE1区、新たに検出した数棟の住居跡の掘り下げ、DE2区、SH040より磨製石剣出土。

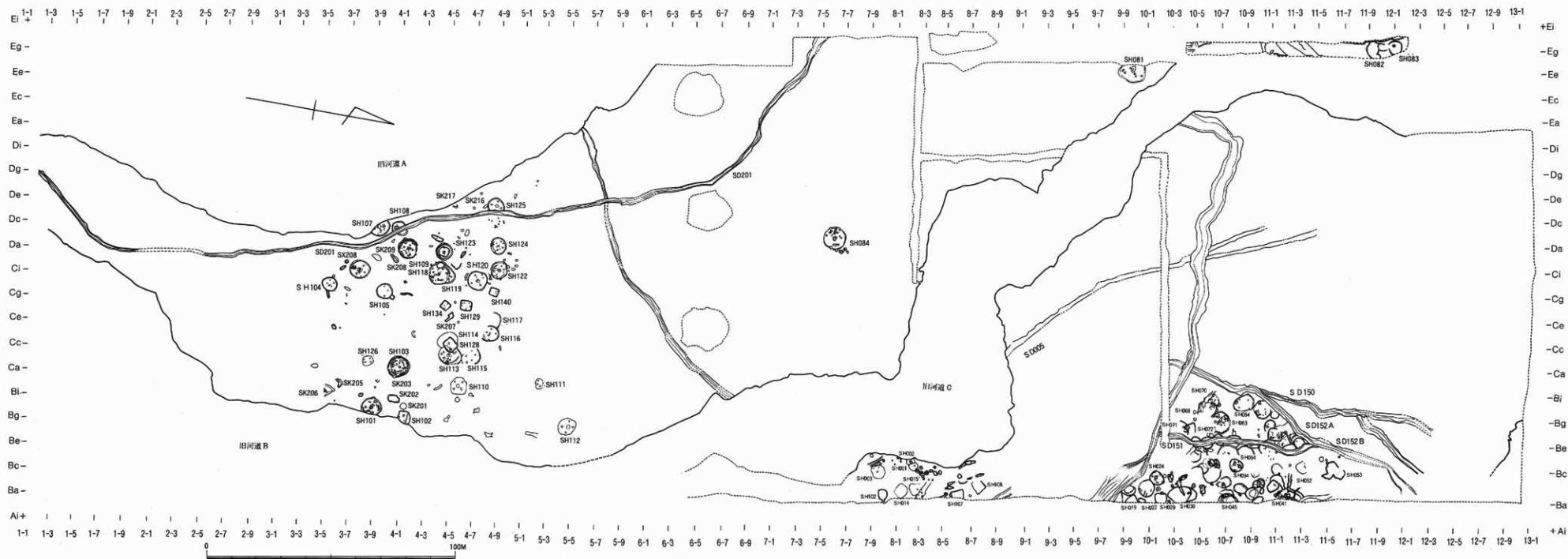
4月8日 DE1・2・3区の平面実測開始、DE2区の竪穴住居跡、土坑の掘り下げ続行。

4月10日 DE1区、実測完了、レベル記入、遺物の



第7図 地区設定図

- 取り上げ、DE2区、住居跡断面実測。
- 4月12日 DE1区、再掘り下げ、下層にも住居跡がある模様(第2遺構面)、DE2区、住居跡断面実測完了、写真の準備。
- 4月15日 DE1区、第2遺構面の検出完了、竪穴住居跡の掘り下げ、DE2区、全景写真、平面実測の準備。
- 4月17日 DE1区、遺構断面実測、掘り下げ続行、DE2区、再掘り下げ開始、遺構の検出。
- 4月19日 DE1区、第2遺構面の遺構掘り下げ完了、実測開始、DE2区、第2遺構面の遺構掘り下げ。
- 4月21日 DE1区、実測完了、再掘り下げ、DE2区、掘り下げ完了、実測、写真。
- 4月22日 DE1区、土坑若干検出、写真、実測完了、DE2区でも第3遺構面の掘り下げ。
- 4月25日 DE1・DE2区、第3遺構面の調査完了。
- 4月30日 チーⅡ・リーⅡの第2遺構面の調査開始。
- 5月2日 チーⅡ・リーⅡでも方形周溝墓検出、チーⅡでは、方形周溝墓を掘り込む溝を検出(SD153)。
- 5月8日 チーⅡ・リーⅡ、溝の掘り下げ続行、断面実測。
- 5月10日 チーⅡ・リーⅡ、溝の掘り下げ完了。
- 6月2日 チーⅡ・リーⅡの調査開始。
- 6月8日 チーⅠ・リーⅠ、第1遺構面の調査完了、第2遺構面の掘り下げ。
- 6月10日 チーⅠで中期後半の竪穴住居跡、土坑など多数検出、石器、土器が若干出土。
- 6月13日 チーⅠ、竪穴住居跡の掘り下げ続行、円形のもの、隅丸方形の2種があるのは、テトラポット地区と同じ。
- 6月14日 リーⅠの南端でも、竪穴住居跡を検出、チーⅠ竪穴住居跡掘り下げ続行。
- 6月17日 チーⅠ、住居跡の掘り下げ、断面実測、リーⅠ、住居跡断面実測作成。
- 6月24日 この間、雨で調査中断、排水後チーⅠ・リーⅠ住居跡の掘り下げ。リーⅠの3棟完了、実測開始。
- 6月28日 チーⅠ、住居跡、24棟に達する。全面に炭化物や焼土が広がり、輪郭を出すのが困難。
- 7月2日 イーⅡ・イーⅢ・ローⅡ・ローⅢの第1遺構面の調査開始。チーⅠ、住居跡の掘り下げ続行。
- 7月6日 チーⅠ、西端で、竪穴住居跡の下層より、V字溝を検出(SD151)、掘り下げ開始。ハーⅡ・ハーⅢの遺構検出も開始。
- 7月11日 チーⅠ、竪穴住居跡の調査ほぼ完了、SD151の掘り下げ続行、断面図作成。イーⅡ・イーⅢ・ローⅡ・ローⅢの第1遺構面の調査完了。
- 7月16日 チーⅠ、SD151の調査続行。イーⅡ・イーⅢ・ローⅡ・ローⅢ、第2遺構面の検出作業続行。ハーⅡ・ハーⅢの第1遺構面は調査完了。
- 7月23日 チーⅠ、第2遺構面、ほぼ完了。イーⅡ・イーⅢ・ローⅡ・ローⅢの第2遺構面の検出完了、多数の中期末とみられる竪穴住居跡・溝・土坑などを検出。
- 7月27日 D地区の航空測量、この間B地区の調査一時中断。
- 8月1日 チーⅠ第3遺構面の掘り下げ、イーⅡ・イーⅢ・ローⅡ・ローⅢの竪穴住居跡・溝跡の掘り下げ。
- 8月5日 イーⅢ、沼沢地の掘り下げ、ローⅡ・ローⅢの円形住居跡の掘り下げ続行、チーⅠで方形周溝墓を切って、南北流する中期後半の溝検出(SD152)。
- 8月10日 イーⅡ・イーⅢ、溝跡・土坑・隅丸方形住居跡の掘り下げ、平行して平面実測、写真撮影。ハーⅢ、弥生後期溝の掘り下げ。チーⅠ、SD152の掘り下げ。
- 8月14日 ローⅢ・ローⅡ円形住居跡の掘り下げ、中央に円形の深い土坑をもつ。ハーⅢ・ハーⅣ、溝跡の掘り下げと並行して、方形周溝墓の調査。チーⅠ、SD152、大量の土器出土。



第 8 図 弥生中期後半～後期初頭遺構全体図

- 8月18日 イーⅡ・イーⅢ・ローⅢの住居跡・土坑・溝跡等の調査続行。円形住居跡の中央土坑には、炭化物が充填されている。チーⅠ調査続行。
- 8月22日 イーⅢ・イーⅡ調査続行。ローⅢ、S D 201の掘り下げ。明確なV字溝で、出土土器は少なくない。チーⅠ、S D 152掘り下げ完了。
- 8月28日 ローⅢ・ハーⅢ、S D 201の掘り下げ続行。イーⅡ・イーⅢ・イーⅣ、続行。チーⅠ、写真、実測完了。
- 9月4日 イーⅠ・イーⅡの第2遺構面の掘り下げ、円形プランの住居跡検出。
- 9月7日 イーⅠ・イーⅡ・イーⅢ続行。ハーⅣ、沼沢地の掘り下げ。
- 9月11日 イーⅠ・イーⅡ、住居跡・土坑・溝跡等掘り下げ。イーⅢ・ハーⅣ、沼沢地の掘り下げ、落ち際に多数の土器、木器が検出された。
- 9月16日 イーⅠ・Ⅱ・Ⅲ・ローⅡ・Ⅲ、掘り下げ続行。ローⅣ・ハーⅣ、沼沢地の掘り下げ、断面図の作成、写真撮影などを行なう。
- 9月21日 イーⅠ・イーⅡ・ローⅢ、円形住居跡の実測、下層に方形周溝墓の存在が予想されるため、実測完了後、掘り下げの予定。
- 9月25日 イーⅠ・Ⅱ、ローⅡ・Ⅲ、平面実測続行。ハーⅣ、ローⅢ、沼沢地断面図の作成。
- 9月30日 B地区の調査が、一部の図面と掘り下げを残し一段落したため、C地区の遺構検出を開始する。
- 10月6日 ローⅠ・イーⅡの調査完了。第3遺構面の掘り下げ。下層より水田跡とみられる畦畔遺構を検出。
- 10月11日 ローⅠ・イーⅡ・ハーⅡで水田跡の検出をすすめる。赤生後期の遺構面より、約60cm下層で、青灰色粘土の洪水堆積物を除去した段階で、畦畔を検出した。
- 11月11日 B・C地区航空測量。ほぼ調査の完了した、
- B地区と、C地区について航測を実施。航測の完了後、水田跡の調査をハーⅢなどに広げる。
- 1月22日 B地区の畦部分(通路として残っていた未調査部分)の調査。A地区方形周溝墓の調査続行。
- 2月5日 ワーⅡ・Ⅲ、カーⅡ・Ⅲの方形周溝墓の調査。S D 201の掘り下げ、B地区の畦の調査続行。
- 2月10日 カーⅠ・カーⅡ旧河道の掘り下げ開始。D地区畦部分の調査。
- 2月15日 ワ・カの方形周溝墓、掘り下げ完了、写真撮影、平面実測、引きつづいて、第3遺構面の水田跡の検出、並行して旧河道の掘り下げ。
- 2月20日 D地区畦部分の調査続行。A地区水田跡の調査。ワ・カについては、大きく旧河道により東西をえぐられている。
- 2月27日 B・C地区の航空測量。航測の後、個別写真撮影。A地区水田跡の調査続行。A地区旧河道より、木製品多数出土。
- 3月12日 D地区の畦部分の調査。A地区水田跡および旧河道の調査続行。
- 3月17日 調査完了を目前にし、調査と並行して、最終の航空測量の準備に入る。水田跡の調査はほぼ完了。全範囲を確認するため、調査区を南へ拡張、旧河道A・Bの分枝点を検出、平面実測。
- 3月20日 A・B地区を中心に、最終の航空測量、これと並行して、出土遺物の搬出開始、航測後、個別の最終写真。
- 3月27日 水田跡のプラント・オパール調査(高崎大学・藤原宏志氏)。並行して発掘器材(バルコン・電気施設等)の撤去開始。
- 3月31日 調査完了。プレハブ撤収。埋めどし等終了。

(赤木克規・大橋信弥)

IV. 検出した遺構

弥生時代中期の遺構としては、調査域の全域で検出した、360基以上にのぼる方形周溝墓群が、その大半を占めるが、B地区を中心に検出された中期末から後期とみられる竪穴住居跡群とそれに関連する遺構や、C地区・D地区の東端で、その一部を検出した、弥生中期後半の環溝集落も、注目されることである。なお、D地区西側の一角にも、中期後半の竪穴住居跡が3棟検出されており、調査区の西方にも集落跡の存在が予想される。

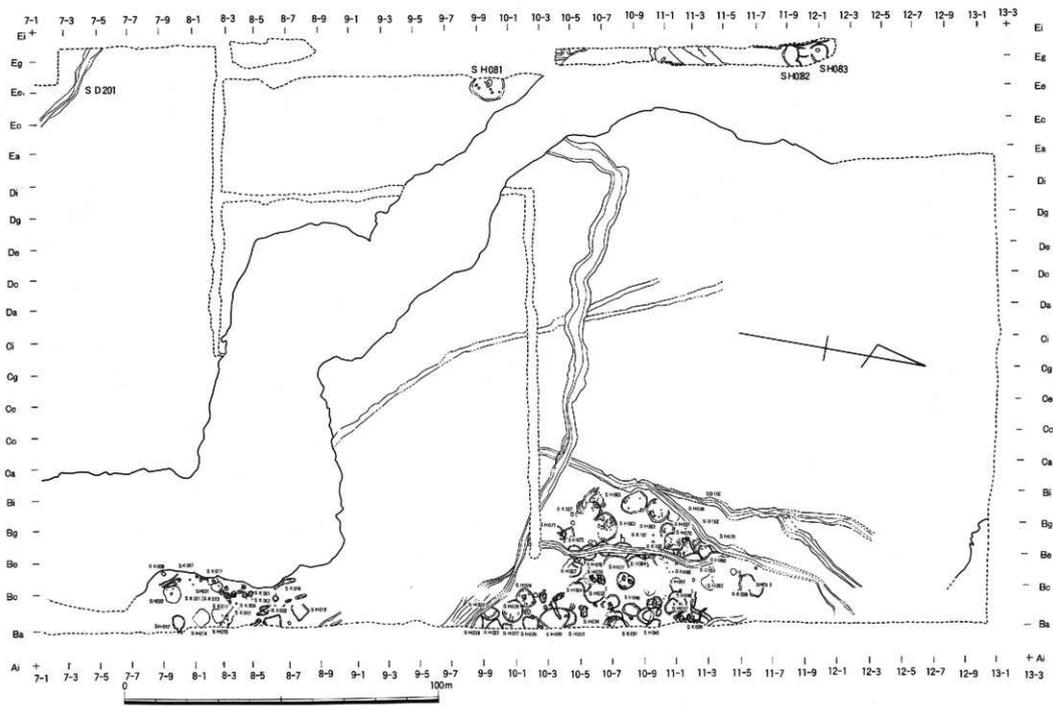
1. 中期後半の遺構

A. 環溝A (S D 151) の調査 (第11・12図)

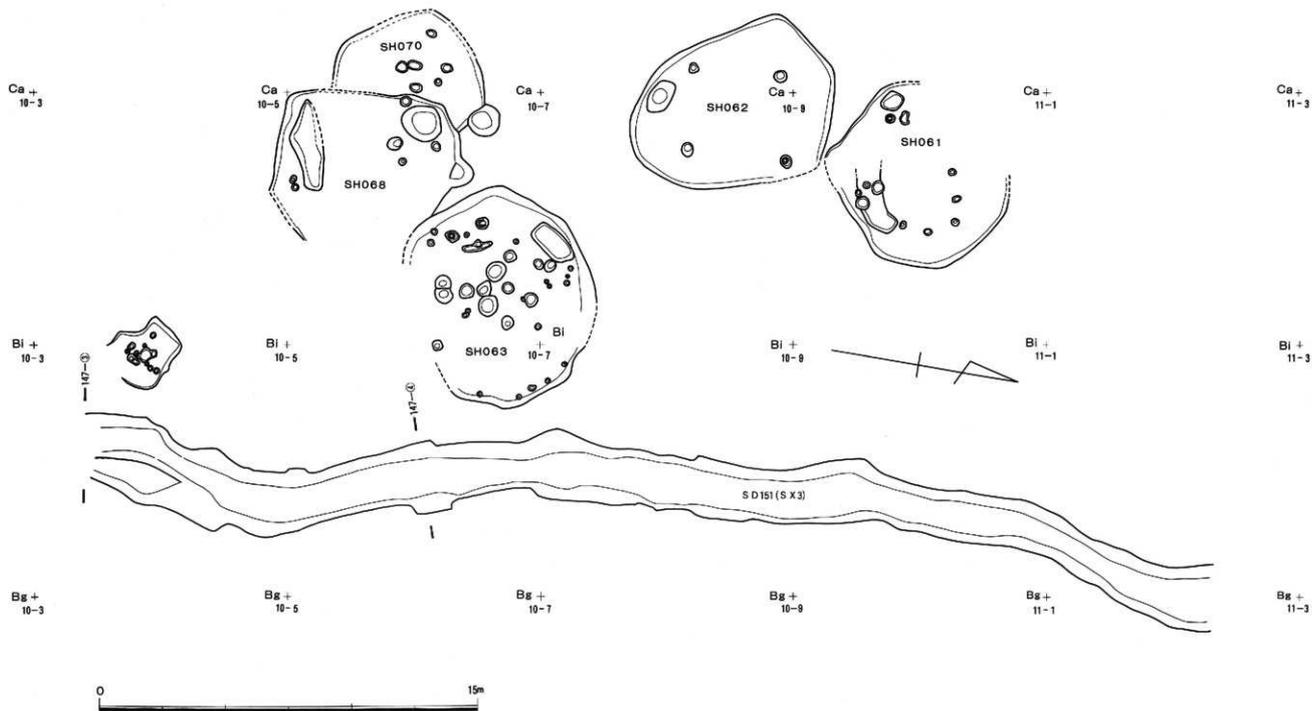
北辺・南辺は新しい遺構によって切られているため、純粋に検出されたのは、延長50m前後にすぎないが、推定で径200mをはかる環溝で、D地区の東端に、その五分の一ほどが検出された。その内側には、20棟前後の竪穴住居跡が検出されている。溝の形態は、幅2.8m-3.2m、深さ0.8mのU字溝で、層序は、10層に類別される。第1層は青灰褐色粘土が厚く、第2層は灰褐色砂質土、第3層が黄灰褐色砂質土、第4層は灰黄褐色砂質土、第5層が灰青褐色砂質土、第6層が灰黄緑色砂質土、第7層が灰黒褐色泥土、第8層が灰褐色砂質土、第9層が黒灰色粘土、第10層が黄灰黒色粘土で、第1層を上層、第2層-第6層を中層、第7層-第10層を下層として遺物をとり上げた。遺物は、第2層-第10層を中心に、コンテナ150箱の土器の出土が知られたほか、石製品として、石剣、石斧、砥石など7点の出土があった。

B. 環溝B (S D 152-A・B) の調査 (第10図)

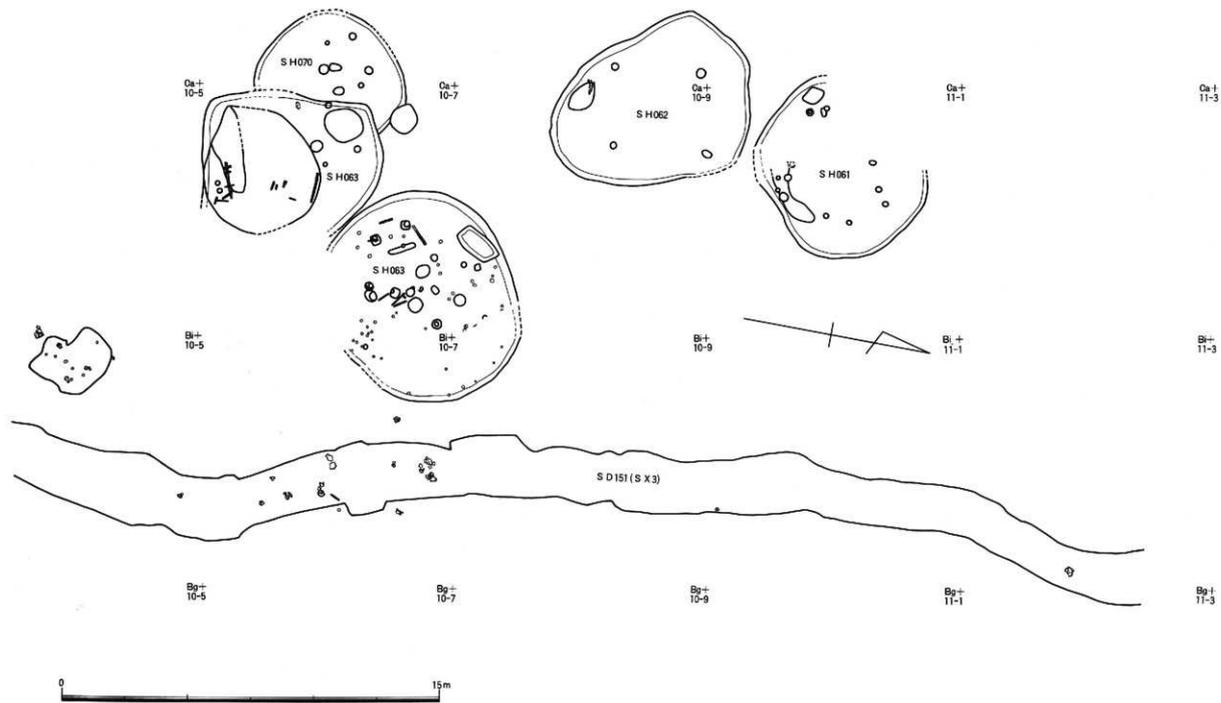
環溝Aを切って、その外側に掘削された環溝で、推定では、径400m以上という、広大なものになるが、南半を中心に、旧河道で削平され、検出できていないため、実態は明確ではない。北端の一部は環溝Aを切り込んでおり、ここでは遺物を、重複しない部分をA、重複している部分をBとして区別した。環溝Aとの間に24棟の竪穴住居跡を検出しているほか、C E区でも18棟の竪穴住居跡が検出されている。溝幅2.5m、深さ1.2mをはかるV字溝で、溝内の層序は、第1層が暗青灰褐色粘土、第2層が黒褐色粘土、第3層が青灰黒色粘土、第4層が暗青灰褐色粘土、第5層が暗青灰色粘土、第6層が淡黒褐色粘土、第7層が黒灰色粘土、第8層が暗灰褐色粘土、第9層が淡青灰黒色粘土、第10層が灰褐色粘土、第11層が青灰黒色粘土、第12層が暗灰褐色粘土で、遺物は大きく上・下の二層に分類して第1層-第7層を上層、第8層-第12層を下層としてとり上げた。なおS D 152の出土土器は、コンテナ20箱を数え、石製品は砥石など5点の出土をみた。



第9图 弥生中期後半(下流域)遺跡全図



第11図 チーI区S D151・竪穴住居跡平面実測図



第12圖 4—I S D 151 豎穴住居跡遺物出土狀況實測圖

C. 集落跡の調査

環溝AおよびBの内外で検出された集落跡に伴う遺構としては、CE区、DE区、D区(チ・リ区)およびDW区の4つの地点で検出された竪穴住居跡とそれに関連する、土坑・溝・ピットなどで、住居跡はやや疑問のあるものを含めると85棟近く検出され、土坑も118基、落ち込み18基、溝39条、ピット多数を数える。調査はCE・DE・DW区については、昭和52年3月に実施したテトラポット地区の調査で、D地区(チ・リ・ヌ区)については同年4月より実施した調査で、それぞれ検出したものであり、CE区の一部については、昭和51年7月より実施した、第Ⅲ次調査において検出したものである。ただここでは、調査年次は無視して、その概要を述べたい。

なお、これらの遺構の下層からは、弥生中期中葉前半の方形周溝墓が検出されており、中期中葉後半に推定される大洪水により、墓域が埋没した後、その上にかかる集落の形成されたことが判明する。また、これらのうち、CE・DE区では、包含層が比較的厚く、遺構の検出がきわめて難行した。このため、当初推定していた遺構面に疑問が生じ、順次掘削にわたって掘り下げることになり、部分的には、中期後半の遺構だけでも、3つの遺構面があるごとき結果を招いた。このことは、必ずしも当該期の遺構面が3面あったことを示すものではなく、同一遺構を3回に分けて掘り下げた可能性が高い。ただここでは、最終的に遺構面を確定し得なかったこともあり、混乱をさけるため上層から第1遺構面、第2遺構面、第3遺構面として、順次説明を加え、後にまとめの段階で、それらを整理することにした。また、同じような条件で調査を実施した、チ・I区についても、遺物包含層が厚く、特に上述のSD151の上面で検出した10棟余の竪穴住居跡については、検出段階より疑問の多いものであったが、下層より検出されたSD151との関連から、その包含層の可能性が強まった。ただ、一部竪穴住居跡になるものも含んでおり、明確に区別できないところから、これらについても、一応住居跡として説明を加え、後に考察を加えることにする。

(1) 竪穴住居跡

SH001 (第13図、第14図)

SH001～SH003についてはCEI区に所在し、昭和51年7月より実施した第Ⅲ次調査において検出したものである。SH001は、弥生時代中期の方形周溝墓の調査を進めていく過程で発見したもので、円形プランをもち、中央土坑をもつタイプをとるとみられるが、残りはきわめて悪く、深さ30cmをはかり、長辺3.4m、短辺3.0mの隅丸形状を呈する。中央よりやや北西よりに、径50～60cm、深さ70cmの土坑が検出されただけで、支柱穴の発見はなかった。出土遺物は少破片であったが、図示し得たのは、甕3点(D001～D003)のみであった。

SH002 (第13図、第14図)

同じく円形プランの竪穴住居跡とみられるが、東端をSH001によって切られ、西端を旧河道Cにより削平されており、わずかに床面に広がる炭化物によって、東西2.2m、南北3.3mの隅丸方形プランが確認できた。出土遺物は小破片で、図示しうるものはなかった。

SH003 (第13図、第14図)

比較的残りのよい竪穴住居跡で、円形プランをとり、径5.3m、深さ10cm前後で、中央土坑の周辺から北に向かって、炭化物・焼土が、広く分布していた。中央土坑は、東西64.0cm、南北70cmの小整円形を呈し、SWとNWで、径30～

40cmの主柱穴が検出できた。出土遺物で図示し得たのは、受口甕（D004）1点のみであった。

S H005～S H009

S H005～S H013は、C E 2区に所在するものであるが、このうち、S H005～S H009については、きわめて残りが悪く、わずかに炭化物の広がりや、断面・遺物の出土状況より、住居跡の存在が推測されるにすぎない。出土土器は、比較的豊富で（D005～D022）、器種も多様であった。

S H010（図版132）

すでに大半を削平されており、平面形は明らかでない。東西90cm、南北100cm、深さ5cmをはかる中央土坑と、径30cm前後の四主柱穴のうち、3個が確認される。おそらく円形プランの堅穴住居跡とみられる。中央土坑より、若干の土器片が出土したが、図示には到らなかった。

S H011

これも大半を削平され、一部の床面を残すにすぎず、炭化物の広がりなどから、住居跡の残骸と考えた。若干の土器片が出土したが、図示には到らなかった。

S H012（第10図、第14図）

円形プランを呈するが、残りは悪く、東西4.3m、南北3.6m、深さ28cmをはかるが、特に北辺は削平のため、いびつな形態を示す。西側に東西1m、南北0.9mの土坑状の張り出しをもつが、性格は不明である。主柱穴の検出はなく、床面より大量の土器片が出土しているが、図示し得たのは、壺4点、甕6点、高杯1点（D023～D033）の計11点で、D030のように、かなり新しく、中期最終末の様相を示すものも含む。

S H013（図版132）

これも北半が削平され、床面の一部が方形に残っているにすぎない。東西1.4m、南北2.0m、深さ13cmをはかる。床面より、甕・壺各2点（D034～D037）が出土している。

S H014（第10図、図版132）

S H014～S H018はC E 2区に所在し、S H014は、円形プランをとる堅穴住居跡で、南半が削平されている。東西5.8m、南北3.4m、深さ40cmと残りはきわめて悪く、埋土は第1層が暗黒灰色粘土、第2層が暗青灰色粘土で、出土遺物は砥石1点（S421）のみであった。

S H015（第15図）

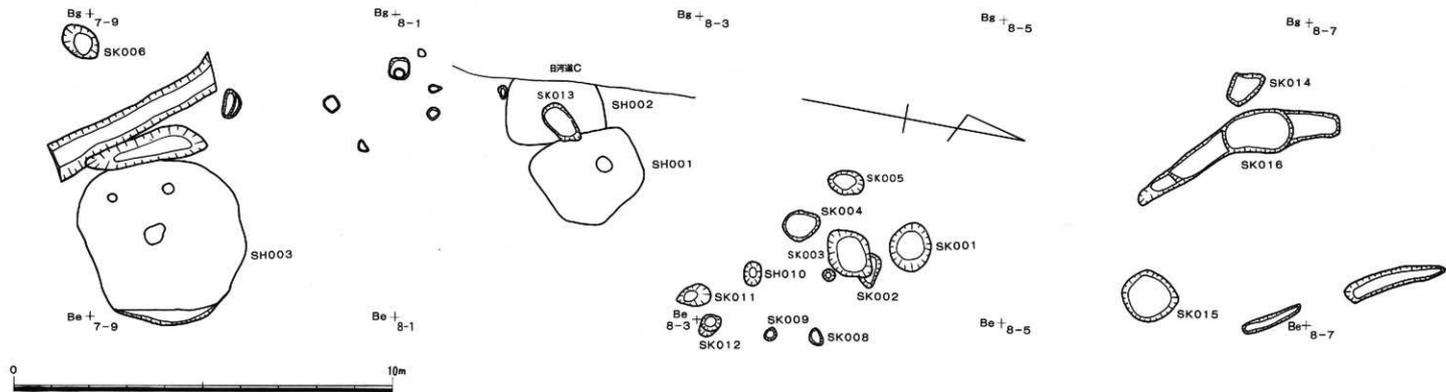
円形プランをとるとみられるが、残りが悪く、北端と南端を削平されている。このため、東西は4.6m、南北は3.8m、深さ10.5cmをはかる。かなりの土器片が出土したが、図示し得たのは、甕3点（D038～D040）であった。

S H016（第15図）

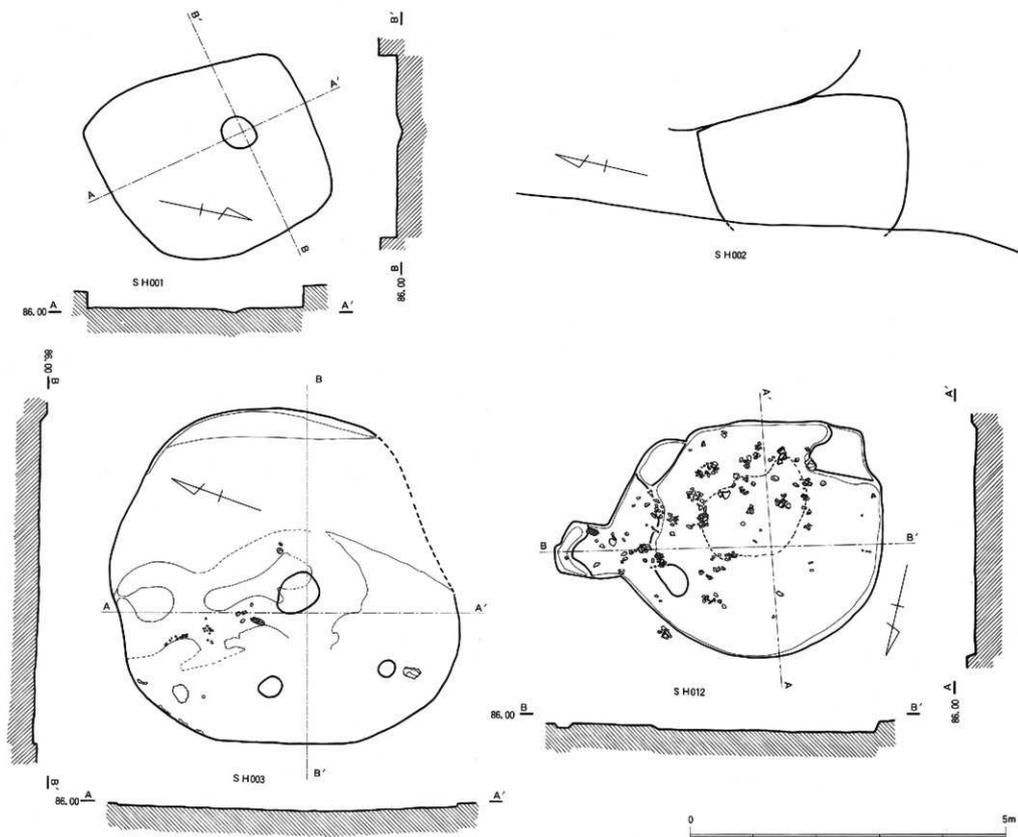
東北部を古墳時代前期の溝で削平されているが、円形プランをとるとみられる。推定径6m前後、深さ20.5cm前後とみられ、南側に幅26cm、深さ30cmの溝が、同じ弧を描いてめぐる。床面より若干の土器が出土したが、壺・高杯各1点（D041・D042）を図示した。なお、東辺に、長辺1.6m以上、短辺80cmの長楕円形の土坑（S K 024）があり、住居跡に関連する可能性が高いが、ここでは別に記述することにする。

S H017（第15図）

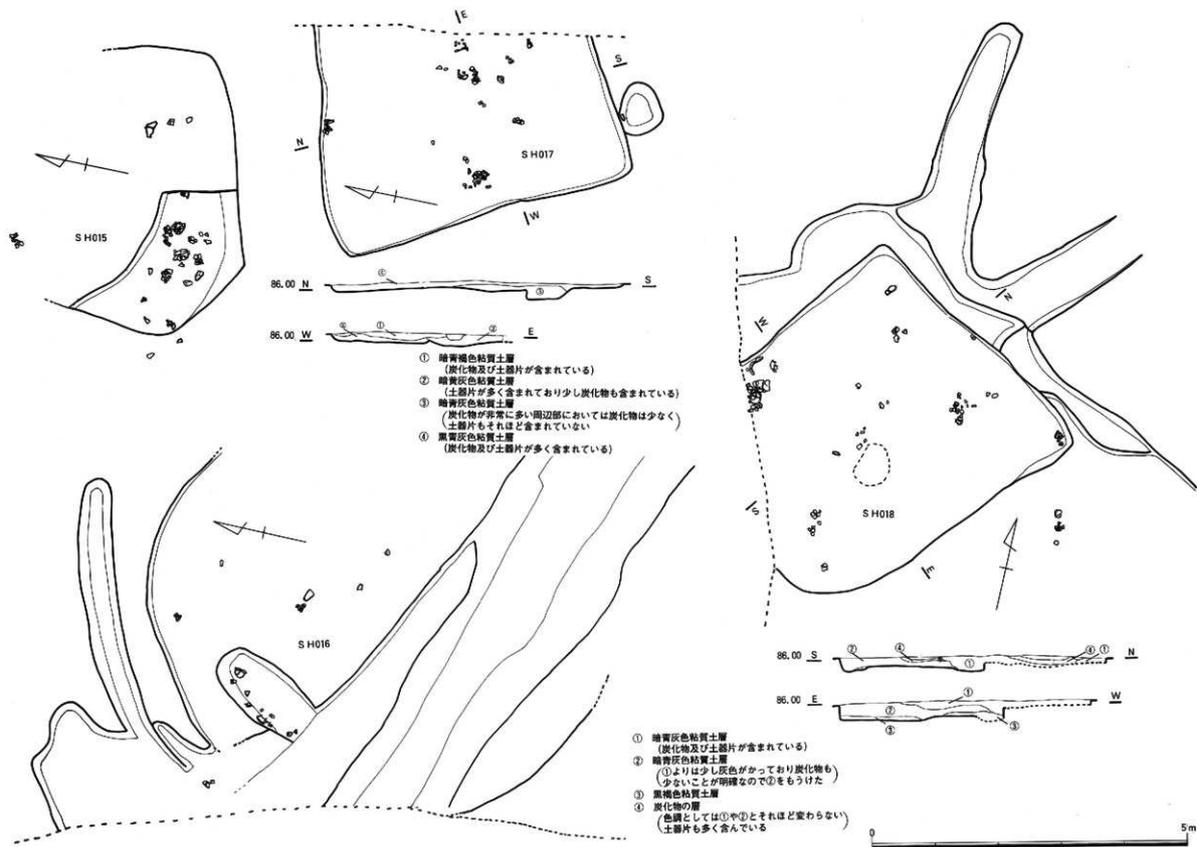
方形プランの堅穴住居跡である。東西2.9m以上、南北4.6m、深さ11.8cmをはかる。北辺に径0.8mの土坑（S K 023）が掘って所在する。本住居跡に関連する可能性が高い。埋土は第1層が暗青褐色粘土、第2層が暗黄青灰色粘土で、床面より若干の土器片の出土があるが、図示し得たのは、壺1点、甕2点、蓋1点（D043～D045・D047）であった。



第13图 CE I区 平面实测图



第14图 SH001·SH002·SH003·SH012平面实测图



第15図 SH015・SH016・SH017・SH018平面表測図

S H 018 (第15図)

方形プランの竪穴住居跡である。東西4.2m、南北4.9m、深さ32.4cmをはかる。埴土は第1層が暗青褐色粘土、第2層が暗青灰色粘土で、床面より、多くの土器片が出土したが、図示したのは、甕1点、壺6点、台付鉢1点(D048-D055)である。なお、支柱穴の検出はなく、中央に埴土が広がっていた。

S H 019 (第27図)

S H 019～S H 027はDEI第2遺構面で検出したもので、S H 019は南側の過半が削平され、わずかに全体の4分の1程度が残存しているだけである。したがって規模は明らかでなく、施設も不明である。推定径5.5m、深さ12cmをはかり、埴土は第1層が暗青灰色粘質土、第2層が黒青色粘質土であった。埴土より壺3点、高杯1点(D056-D059)が出土した。

S H 020 (第27図)

円形プランの竪穴住居跡である。南側が後世の溝で掘削されている。径5.5m、深さ10cm前後をはかるが、支柱穴等は不明で、埴土は第1層が暗青褐色粘土、第2層は炭化物を含んだ灰青色粘土であった。埴土より壺2点、甕1点(D060-D062)の出土が知られる。

S H 021 (第27図)

方形プランの竪穴住居跡である。ただし過半は調査域外で、支柱穴等の施設は不明である。一辺5m以上、深さ15cmの規模とみられるが、埴土より、壺・甕各1点(D063、D064)が出土している。

S H 022 (第27図)

円形プランの竪穴住居跡であるが、北東コーナーは、隅丸方形を呈し、ややいびつな不整形をなす。東西5.6m、南北5.3m、深さ12cmをはかり、中央に東西1.1m、南北1.2m、深さ11.8mの土坑が所在し、柱穴はS W・N Wの2ヶ所で見出されている。径45cm前後の凹形を呈し、埴土は第1層が暗青褐色粘土、第2・3層が灰青色粘土で、出土遺物は少なく壺1点(D065)のみであった。

S H 023 (第27図)

ややいびつな円形プランの竪穴住居跡である。東西5.1m、南北5.6m、深さ18cmをはかり、東側と西側はやや直線的で、方形プランともみえる。中央をS D 003により掘削され、南端をS D 004が切っている。南西に柱穴状のピットを検出しているが、他の施設は検出できなかった。埴土は暗青灰色砂質土で、出土遺物は小破片で、図示するには到らなかった。

S H 024 (第27図)

方形プランをとる竪穴住居跡とみられるが、検出し得たのは、北西コーナーのみで、全体の4分の1程度である。S H 025の南東コーナーを切っており、支柱穴等は不明である。深さは10cm前後残存し、埴土より出土遺物は多く、壺4点、鉢1点、甕2点、壺5点(D066-D075)などを図示できた。

S H 025 (第27図)

径4.3m、深さ8cm前後をはかる円形プランの竪穴住居跡である。南東部がS H 024、北西部がS H 026により削平され、全様はうかがえない。支柱穴等の施設は検出されず、埴土中より出土した土器片のうち、壺2点(D076-D077)を図示し得た。

S H 026 (第27図)

径4.7m前後、深さ17cm前後を推定される円形プランの竪穴住居跡と考える。ただし検出し得たのは、北西部分のみで、土坑状を呈する。出土遺物はいづれも小破片で、図示するには到らなかった。

S H027 (第27図)

復元径5m前後の円形プランをとる竪穴住居跡である。北東の3分の1程度のみ調査で、主柱穴等の施設も検出できなかった。本住居跡の出土土器は小破片で図示するには到らなかった。

S H028 (第28図)

S H028-S H038はD E 1第1遺構面を検出したもので、S H028は、径7m前後、深さ38cmの円形プランの竪穴住居跡である。下層で検出したS H023は、同一遺構の残存したものである可能性が高い。主柱穴等の検出はなく、埋土は第1層が暗青灰色砂質土、第2層は暗青灰色砂質粘土で、埋土中より、壺4点、高杯1点、壺5点(D078-D087)が出土した。そして、玉つくりにかかわるとみられる石器片2点(S1101・S1102)の出土があった。

S H029 (第28図)

一辺4.5m、深さ10cm前後をはかる、方形プランの竪穴住居跡である。西辺は東西0.8m、西北1.1mの長方形の土坑が接し、関連するものとみられる。埋土は第1層が暗青灰色砂質土、第2層が暗青灰色砂質土、第3層が暗灰色砂質土で、主柱穴等の検出はなく、中央付近より、若干の土器片が出土したが、図示し得たのは、壺・鉢・甕各1点(D088-D090)であった。

S H030 (第28図)

一辺5.4m前後、深さ10cmの方形プランをとる竪穴住居跡とみられる。北半がS H034と重複しており、明確に区別できなかった。主柱穴等の施設は未検出で、埋土は第1層が暗青灰色砂質土、第2層が暗灰色粘質土で、埋土中より多数の土器片を出土した。図示したのは、壺5点、高杯1点、甕7点(D091-D105)などであった。

S H031 (第28図)

一辺4.5m、深さ15cmの方形プランをとる竪穴住居跡である。南側に切り合って所在するS H032との前後関係は明確でなく、東端は調査域の外になる。中央南よりに径0.8mの土坑が所在するが、本住居跡にかかわるものとみられる。埋土は暗青灰色砂質粘土で、埋土中より多くの土器片が出土をみたが、図示し得たのは壺1点(D106)のみであった。

S H032 (第28図)

一辺2.5m以上、深さ17cmの方形プランをとるとみられる。S H031と切り合うほか、大半が調査域外で、全様は明らかではない。埋土は暗青灰色砂質粘土で、出土遺物は少なく、壺1点(D107)のみ、図示することができた。

S H033 (第28図)

径5.6m前後、深さ19cmの、やや楕円を呈する円形プランの竪穴住居跡である。南半をS H034に切られ、全様はうかがえず、主柱穴等も検出し得なかった。出土遺物は甕甗で、壺4点、高杯1点、壺9点(D108-D121)を図示することができた。

S H034 (第28図)

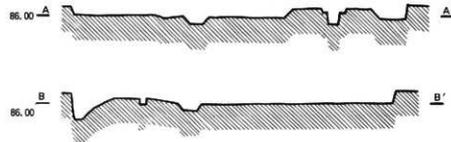
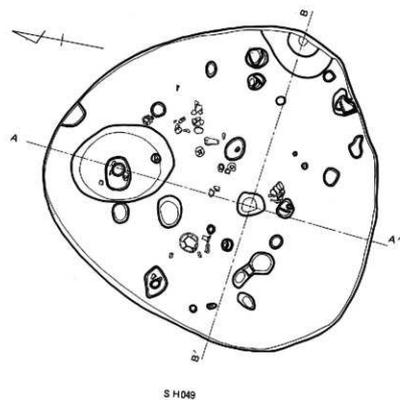
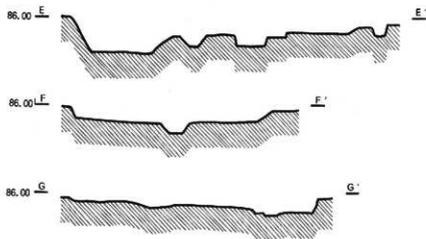
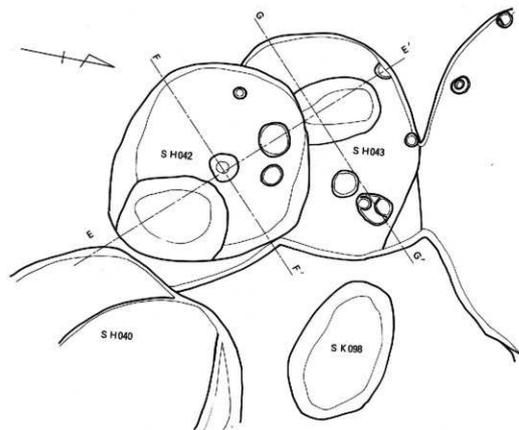
径6.5m、深さ15cmの円形プランをとる竪穴住居跡である。S H030に南半を切られ、S H033を切っている。北端に東西65cm、南北1.5mの長楕円形の土坑が所在するが、その他の施設は全く不明である。埋土中より壺3点、壺4点(D122-D128)が出土した。

S H036 (第28図)

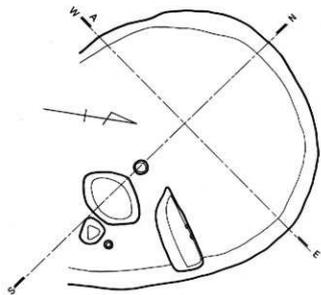
径7.2m、深さ6cmの円形プランをとる竪穴住居跡である。西半のプランは明瞭でなく、主柱穴等の検出はなかった。埋土は暗青灰色砂質土で、出土遺物はなかった。

S H035・S H037・S H038 (第28図)

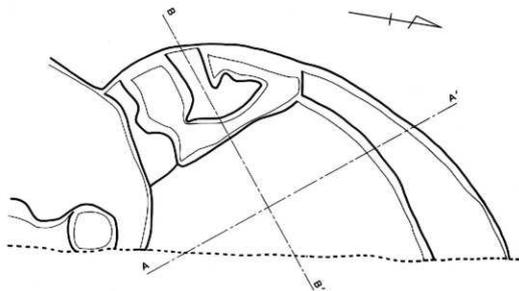
これらは、いずれも残りが悪く、炭化物の散布、焼土の広がりなどから、住居跡の存在を推定したもので、S H035



第16图 S H040 · S H042 · S H043 · S H049平面实测图



S H044



S H045



- ① 暗青灰色砂質粘土層
- ② 暗灰褐色粘質砂土
- ③ 暗青灰色粘質土
- ④ 暗灰青色粘質土
- ⑤ 暗灰青色粘質砂土
- ⑥ 暗灰褐色粘質砂土層
- ⑦ 暗灰青色粘質砂土層 (炭化物を多く含んでいる)
- ⑧ 暗青灰色粘質土 (炭の層)
- ⑨ 暗青灰色粘質土 { * }
- ⑩ 暗青褐色粘質土
- ⑪ 暗灰褐色粘質土



第17図 S H044・S H045平面・断面図

からは、壺3点(D129~D131)、SH037からは壺9点、壺3点(D132~D143)、SH038からは壺1点(D144)が出土した。

SH039 (第28図)

DE2第2遺構面で検出したもので、径4.7m前後、深さ13cmと推定される円形プランの堅穴住居跡とみられる。ただし、西側が調査域からはずれており、全様は不明である。出土土器で図示し得るものはなかったが、土坑内より玉つくりにかかわる石製品1点(S901)の出土が知られる。

SH040 (第16図・第18図)

SH040~SH053はDE2第1遺構面で検出したもので、SH040は、径5m、深さ34cmをはかる、円形プランの堅穴住居跡である。当初は、径3.2mで、後に拡張されたとみられる。北端に壁溝がみられ、中央部に径1.7mの土坑を検出したが、他の施設は不明。埋土は第1層が暗灰褐色粘質砂土、第2層が暗青灰色砂質粘土、第3層が黒灰色粘質砂土で、埋土中からは、大量の土器が出土し、円意付土器をはじめ、壺9点、台付無頸壺1点、高杯3点、甕29点(D145~D191)と石鏃(S009)、石斧(S225)、砥石(S409)各1点を図示した。

SH041 (第18図)

一辺3.2mの隅丸方形プランをとる。深さは10cm前後で、南西に径25cmの柱穴があるほか、施設の検出はなかった。出土遺物は少なく、わずかに壺1点(D192)のみ図示した。

SH042 (第16図・第18図)

径3.0m、深さ34cm前後をはかり円形プランをとる。東辺に東西1.3m、南北1.8mの円形土坑があり、中央より内に3ヶ所の柱穴があるが、いずれも径50cm前後のもので、主柱穴となるかは不明。埋土は第1層が暗青灰色粘質土、第2層が暗灰青色砂質粘土、第3層が暗青灰色粘質土で、埋土中より壺1点、壺3点(D193~D196)と玉つくりにかかわる剥片1点(S911)が出土した。

SH043 (第16図・第18図)

径3.7m、深さ30cm前後をはかる、円形プランの堅穴住居跡である。SH042により南辺を切られ、中央より西よりに、東西1.0m、南北1.2mの長楕円形の土坑があり、東よりに径40cmの柱穴が2ヶ所検出をみた。出土土器は少なく、壺1点、甕1点(D197、D198)のみであった。

SH044 (第17図)

径4.2m、深さ22cm前後の円形プランをとる。中央より西よりに、径0.9mの円形土坑が、東よりに東西1.3m、南北0.4mの土坑があり、その近辺に径30cm前後の柱穴が2個検出されたが、主柱穴とは考えられない。埋土は第1層が暗青灰色砂質粘土、第2層が暗灰青色砂質粘土で、出土遺物は比較的多く、壺2点、高杯2点、甕6点(D199~D208)を図示した。

SH045 (第17図・第18図)

径5.3m前後、深さ22cm前後とみられ、円形プランをとる。東半は調査域の外で、西壁に東西2.0m、南北2.1m、深さ18cmの落ち込みがあって、幅80cm、高さ15cmのベット状遺構がめぐる。出土遺物は多く、壺4点、高杯1点、台付無頸壺1点、甕4点(D209~D218)などと石剣1点(S002)を図示することができた。

SH046 (第18図)

径5.3mの円形プランをとる。北端をSH040により切られており、西辺に壁溝をもち、幅60cm、深さ25cm前後をはかる。北西に径50cm、南東に径30cmの柱穴が所在する。埋土は第1層が灰褐色粘質土、第2層が暗青灰色粘質土で、埋土中より、壺1点、台付鉢1点、甕2点(D219~D222)、石剣1点(S002)が出土した。

SH047 (第19図)

径5.3mの円形プランをとり、深さ14cm前後をはかる。隣接するSH048の南半を切っており、当初は一辺4.5mのいびつな方形プランと考えたが、その後の調査で上記のように理解した。中央付近に大小の土坑3基と柱穴8個を検出したが、その性格は明らかでない。東側に長さ2m、幅1.5mの張り出しがある。出土遺物は少なく、高杯1点と甕2点(D223~D225)のみが図示できた。

SH048 (第19図)

径5.2mほどの円形プランをとる。深さは30cmをはかり、埋土は第1層が灰褐色粘土、第2層が黒褐色粘土であった。SH047により南半を切られており、北端に東西1.58m、南北1.28mの円形の土坑があるほか、施設の検出はなかった。遺物は少なく、埋土中より甕1点、甕1点(D226・D227)が出土したにとどまる。

SH049 (第16図)

径5.2m余の円形プランをとり、深さ22cmをはかる。東端に土坑を検出したほか、径30cm前後、深さ29cmの四柱柱穴と、小ピットを検出した。床面より、多くの土器が出土し、甕5点、高杯2点、台付鉢1点、甕8点(D228~D244、D234を除く)を図示した。ほかに用途不明石製品3点(S920・S932・S943)の出土が知られる。

SH050 (第28図)

径5.3m前後、深さ6cmの円形プランをとるとみられる竈穴住居跡で、大半をSH048により切られているため、実態は不明であった。甕3点、甕2点(D245~D249)と瓦石1点(S432)などが埋土中より出土した。

SH051 (第28図)

径4.3m、深さ10cmの円形プランをとるとみられる。西側を後世の溝で削平されるなど残りは悪く、主柱穴等も検出されなかった。出土遺物も少なく、図示できるものはなかった。

SH052 (第28図)

径4.8m前後、深さ16cmで、円形プランをとる。中央北よりに、径50cmの土坑があるほか、その東西に径20~30cmの小ピットがみられるだけで、全様はうかがえない。埋土中より鉢1点、甕3点、甕4点(D034・D030~D056)が出土した。

SH053 (第28図)

径4.6mと推定される規模で、円形プランをとる。深さは12cmをはかり、SK099、SK100と切り合うが、切り合いは明確ではなかった。主柱穴等の施設の検出はなく、出土遺物で図示できるものはなかった。

SH055 (第29図)

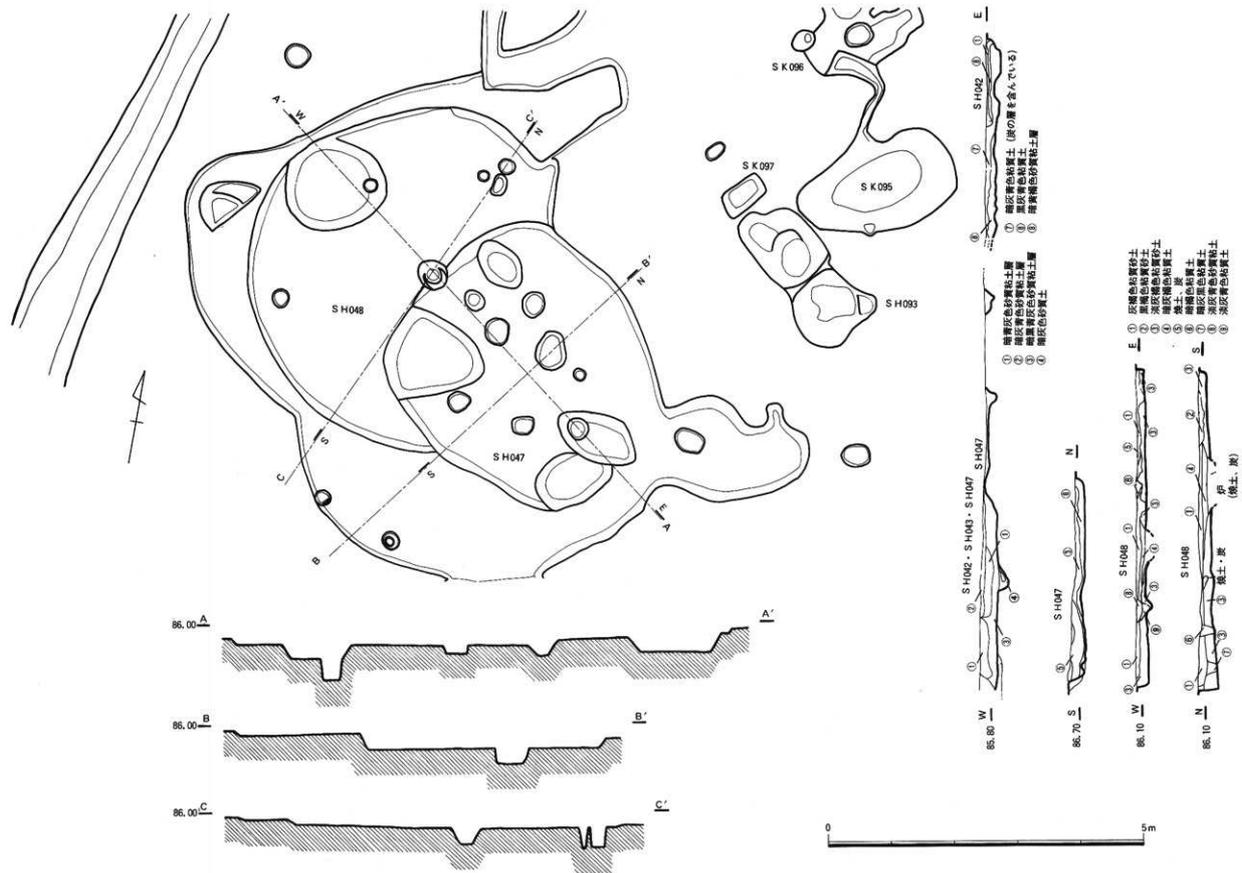
SH035~SH078は、チ-I区で検出した竈穴住居跡である。チ-I区では、中期の遺構面が2面あって、中期前半の方形周溝を埋設させた洪水堆積土を地山とするものと、その包含層を掘削して築造されたものである。ただ包含層上面で検出した住居跡は皆無で、大半が包含層除去後に検出したものである。SH055は残りが悪く、平面プランは検出されなかったが、炭化物や焼土の広がりにより、住居跡の存在が推定される。出土遺物は少なく、甕1点のみ(D408)図示することができた。

SH056 (第29図)

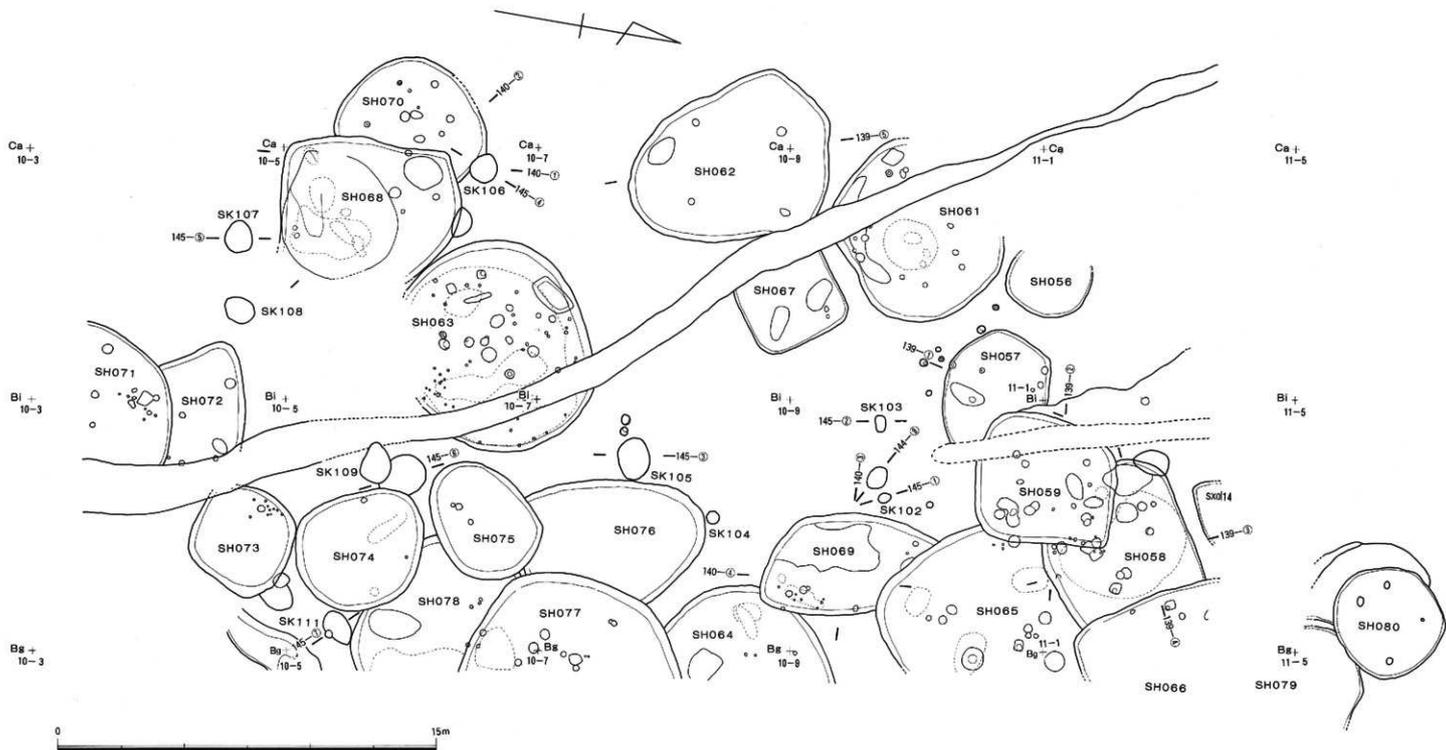
径3.4m、深さ20.5cmをはかり、円形プランをとる竈穴住居跡とみられるが、残りは悪く、土坑の可能性も残る。出土遺物で図示できるものはなかった。

SH057 (第29図)

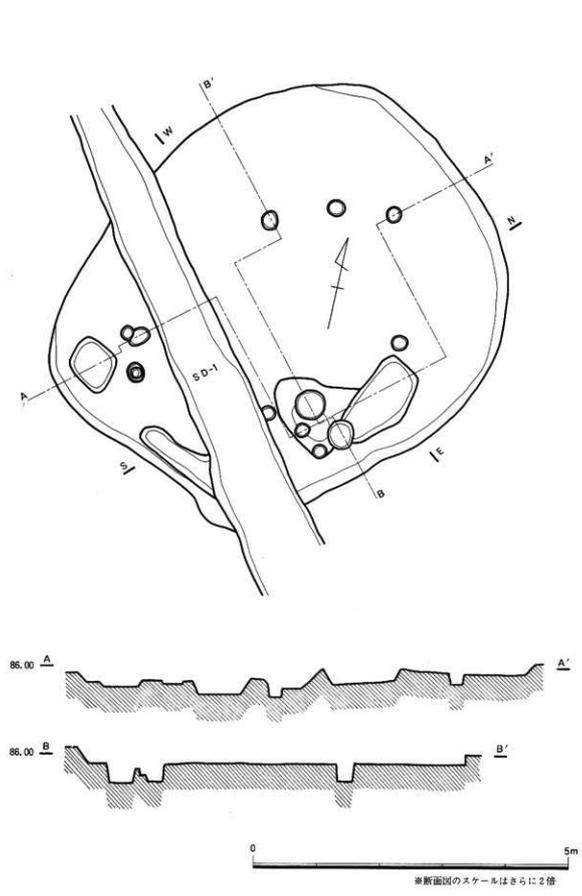
径4.6mの円形プランをとる。やや東西に長く、南西で一部をSH059機掘により切られている。南よりに東西0.7m、



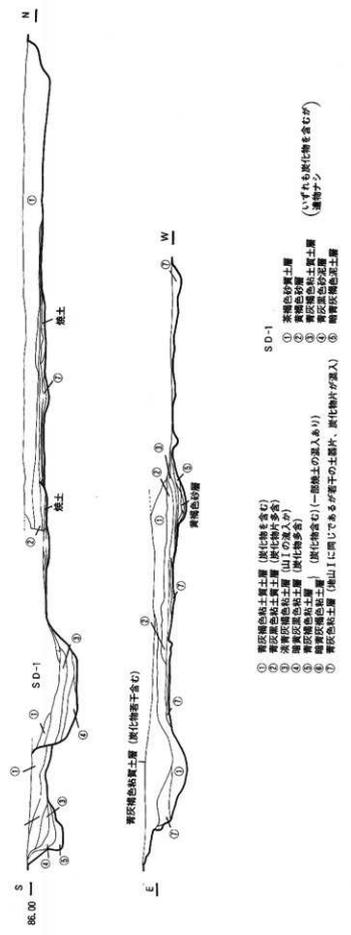
第19図 SH047・SH048平面実測図



第20図 チーI区・リーI区居住層跡群平面実測図

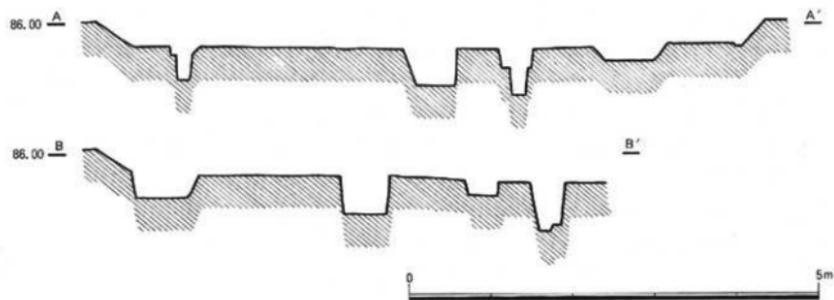


第21図 S H061平面実測図



- SD-1
- ① 黄褐色粘質土層 (腐化堆積土を含む)
 - ② 黄褐色粘質土層 (腐化堆積土を含む)
 - ③ 黄褐色粘質土層 (腐化堆積土を含む)
 - ④ 黄褐色粘質土層 (腐化堆積土を含む)
 - ⑤ 黄褐色粘質土層 (腐化堆積土を含む)
 - ⑥ 黄褐色粘質土層 (腐化堆積土を含む)
 - ⑦ 黄褐色粘質土層 (腐化堆積土を含む)
- (いずれも、腐化堆積土を含む)
(遺物なし)

- ① 黄褐色粘質土層 (腐化堆積土を含む)
 - ② 黄褐色粘質土層 (腐化堆積土を含む)
 - ③ 黄褐色粘質土層 (腐化堆積土を含む)
 - ④ 黄褐色粘質土層 (腐化堆積土を含む)
 - ⑤ 黄褐色粘質土層 (腐化堆積土を含む)
 - ⑥ 黄褐色粘質土層 (腐化堆積土を含む)
 - ⑦ 黄褐色粘質土層 (腐化堆積土を含む)
- (一部粘土の混入あり)
(腐化堆積土を含む)
(腐化堆積土を含む)
(腐化堆積土を含む)
(腐化堆積土を含む)



第22图 S H063平面实测图

南北1.5mの土坑があり、中央および北端に径20cmの円形ピットを検出した。住居の深さは20cm前後が残存し、埴土は第1層が青灰褐色粘土、第2層が青灰黒色粘土であった。出土遺物で図示できたのは、壺2点、甕3点(D257-D261)で、埴土中より出土した。

S H058 (第29図)

一辺5.8mの隅丸方形プランをとり、南西コーナーをS H059が切っており、東辺をS D151とS H066により切られている。北東コーナーに東西1.0m、西北1.4mの土坑をもち、中央より南東よりに主柱穴とみられる、径90cmの柱穴が検出され、ほかに径30cm前後の小ピットがいくつか検出された。深さは約18cm残存し、埴土は第1層が青灰褐色粘土、第2層が青灰黒色粘土、第3層が暗青灰黒色粘土であった。出土遺物は比較的多く、壺5点、甕4点、鉢1点(D262-D272)のほか、ノミ状石製品1点(S210)、玉つくりにかかわる石製鋳型1点(S904)の出土があった。

S H059 (第29図)

一辺5.0mの方形プランをとる。西側を擾乱により一部削がれるが、主柱穴になるとみられる、径30cm前後のピットが検出されている。S H058とS H057を切っており、後出することが明らかである。深さは20cm前後残存し、埴土は第1層が青灰褐色粘土、第2層が青灰黒色粘土であった。出土土器は少なく、壺2点、甕1点(D273-D275)のみであった。ほかに石剣1点(S007)の出土が知られる。

S H061 (第21図)

径7.5mをはかる円形プランの竪穴住居跡である。西よりの一部を後世の溝により掘削されているが、南側に幅90cm、深さ12cmの壁溝があり、南よりに南北1.4m、東西90cm、深さ30cmの長円形の土坑をはじめ、南北1.4m、東西80cm、深さ14cmの三角形の土坑などが所在する。また、中央に径2.0mの焼土・炭化物の広がりがあり、そのまわり径30cm前後の小ピットが検出された。主柱穴とみられる遺構の検出はなく、これらの小ピットが、それにかかわるものか。出土土器はきわめて少なく、ミニチュア壺1点(D276)のみを図示することができた。

S H062 (第29図)

東西6.5m、南北8.5mで、北西コーナーがいびつな長円プランをとる。南よりに東西1.5m、南北90cmの壁内土坑を検出しているほか、四ヶ所で主柱穴とみられる、径40cm～径60cmのピットを検出した。出土遺物は少なく、甕1点、無頸壺1点、甕1点(D277-D279)を図示することができた。ほかに磁石1点(S429)の出土があった。

S H063 (第22図)

径8.5m、深さ28.5cmをはかる、大型の円形プランをとる竪穴住居跡である。南端を消失しているほか、東側を後世の溝が横切っており、残りは悪いが、北西壁に東西90cm、南北1.9mの長円形の土坑が検出され、また中央部に径70cm前後のピットを数個検出しているが、主柱穴となるものは明確でない。そして全域に径10～15cm前後の小ピットが多数検出された。S H061とともに、この地区では確実性の高い竪穴住居跡である。出土遺物も比較的多く、壺4点、高杯2点、甕5点など(D280-D290)が図示できたほかに、用途不明石製品1点(S942)の出土が知られる。

S H064 (第29図)

径7.2m、深さ22.7cmの円形プランをとる竪穴住居跡である。東半が調査域の外にあって、全様はうかがえないが、中央西よりに東西60cm、南北55cmの土坑を検出したほか、径18cm前後の小ピットを、いくつか検出している。出土遺物は少なく、わずかに、壺・高杯・甕各1点(D291-D293)を図示できた。

S H065 (第29図)

一辺5.8m前後、深さ27.8cmの隅丸方形プランをとる竪穴住居跡である。北側をS H058、S H059、S H066で切られ、東側は調査域の外であるため、全様はうかがえない。東南に径20cm、東北40cmの主柱穴とみられるピットを検出し、そ

の周辺に焼土・炭化物が広がる。住居跡の深さは20～25cm残存し、埋土は第1層が青灰色粘質土、第2層が青灰褐色粘質土であった。出土遺物はきわめて多いが、これは下層に重複する、S D151の包含層を切って築造されているため、住居跡の遺物と誤認して取り上げたものを含むためであるが、分離不能のため、本住居跡に伴うものとして掲出した(D291～D331)。ほかに、砥石2点(S425・S428)の出土が知られる。

S H066 (第29図)

調査区の北東コーナーで検出したもので規模は明らかでないが、隅丸方形プランをとる竪穴住居跡とみられる。全体の4分の1弱のみの検出で、主柱穴等の施設は未検出であった。埋土中より壺2点、甕1点(D332～D334)と扁平片刃石斧2点(S207・S235)の出土が知られる。

S H067 (第29図)

一辺3.7mの隅丸方形プランをとる竪穴住居跡である。西端を後世の溝で切られており、全様はうかがえないが、北よりと、南よりに、東西1.5m、南北1.0m、東西1.3m、西北1.0mの長楕円形の土坑が検出された。出土土器で図示したのは、わずかに壺2点(D235・D236)のみであった。ほかに砥石3点(S422～S424)と切片1点(S924)の出土が知られる。

S H068 (第29図)

一辺7.3mをはかる隅丸方形プランをとる。ただし東側は奈良時代の井戸によって削平されている。中央付近に焼土・炭化物が広がるが、主柱穴の検出はなく、わずかに北西コーナーで、東西1.4m、南北1.7mの円形土坑が検出された。埋土は第1層が暗青灰褐色粘質土、第2層が青灰褐色粘質土、第3層が青灰黒色粘質土であった。出土土器は比較的多く、壺7点、高杯1点、甕1点(D337～D345)であった。ほかに、石剣1点(S006)の出土が知られる。

S H069 (第29図)

一辺4.6m前後の隅丸方形プランをとるとみられる。残りきわめて悪く、径20cm前後のピットをかなり検出したが主柱穴等の施設とみられるものはなかった。埋土は、第1層が炭化物を微量含んだ青灰褐色粘質土、第2層が青灰黒色粘質土で、多くの炭化物を含んでいた。出土遺物は少なく、壺2点(D346・D347)のみ図示できた。

S H070 (第29図)

調査地の北部で、南西コーナーの一部が検出されたもので、隅丸方形プランをとるとみられるほか、規模等明らかでない。埋土は炭化物を含んだ青灰褐色粘質土で、出土土器は比較的多く、壺4点、甕1点、高杯1点、台付鉢1点(D348～D355)を図示できた。

S H071 (第29図)

径6.3m前後、深さ13.1cmの円形プランをとる。北端に東西2.9m、南北3.0mの土坑があるほか、径20cm前後のピットを検出したが、主柱穴等は検出できなかった。出土土器は比較的多く、壺5点、台付鉢1点、甕5点(D256～D366)などを図示した。ほかに用途不明石製品2点(S936・S940)の出土が知られる。

S H072 (第29図)

一辺4.0mの隅丸方形プランをとるとみられる。北辺に径20cm前後のピット2個を検出したほか、主柱穴等の検出はなかった。出土土器は少なく、壺2点、甕1点(D367～D369)を図示した。

S H073 (第29図)

一辺3.5m、深さ12.2cmの隅丸方形プランの竪穴住居跡である。西辺中央に径20cmのピットがあり、そのまわりに、径10cm前後の小ピットが多数検出されたほか、明確な遺構の検出はなかった。出土土器は、東辺に集中してみられ、壺9点、高杯2点、甕7点(D370～D387)を図示した。ほかに砥石1点(S427)の出土があった。

S H074 (第29図)

径5.4m、深さ41.8cmの、ややいびつな円形プランをとる。西辺に径11cmの小ピットを検出しただけで、明確な施設の検出はなかった。出土土器は比較的多く、壺6点、高杯3点、甕8点等(D388-D404)を、図示することができた。ほかに砥石1点(S426)、剥片1点(S931)の出土があった。

S H075 (第29図)

径5.0mの、いびつな円形プランをとる。主柱穴等施設の検出はなく、出土遺物も少なかった。図示したのは壺・甕各1点のみ(D405・D406)であった。

S H076 (第29図)

長円形プランをとるが、南と東を、S H075とS H077に切られており、規模は明らかに出来なかった。深さは23.3cmをはかり、主柱穴等の検出はなく、出土遺物も全くなかった。

S H077 (第29図)

一辺6.8m、深さ18cmの方形プランをとるとみられる。中央付近に径40cmのピットがいくつかみられるが、主柱穴等の施設は検出できなかった。S H078・S H076を切って築造されており、東半は調査域の外に所在するため、全様はうかがえない。出土遺物は少なく、図示できたのは甕1点(D407)のみであった。

S H078 (第29図)

径3.1m前後の円形プランをとるとみられるが、S H074・S H075・S H076・S H077などにより、西側・北側を切られており、全様は明らかでない。南より東西1.2m、南北2.0mの楕円形土坑が所在するほか、主柱穴等の施設は認められなかった。出土遺物は壺4点、甕2点(D409-D414)を図示した。

S H079 (第29図)

リ-I区の南東端で検出された2棟の堅穴住居跡のうちの南よりのもので、径3.3m前後の円形プランをとるとみられる。大半が調査域の外にあり、北西の4分の1を検出しただけで、施設等の検出はなかった。S H080により、北西端を切られており、前後関係が判明する。出土遺物は比較的多く、壺4点、高杯1点、甕6点(D415-D425)を図示できた。

S H080 (第29図)

径4.5mの円形プランをとる。S H079の北西端を切っており、後出することが知られる。北西のものを除き、径30cm前後の主柱穴を検出している。出土遺物は少なく、鉢・甕各1点のみ図示できた(D426・D427)。

S H081 (第23図)

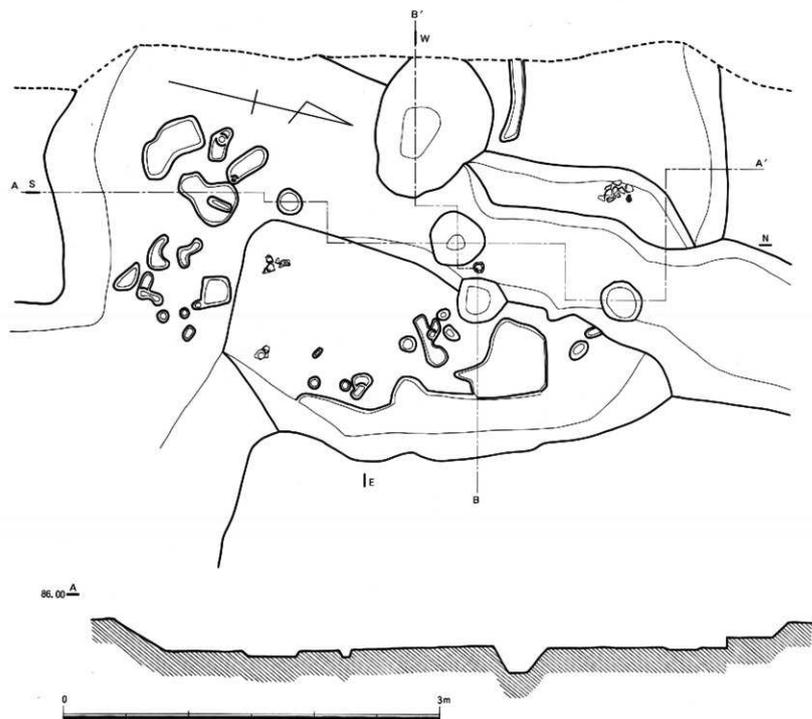
ト-IV地区の西北端で検出したもので、径5.5mの円形プランをとるとみられる。中央を南北に、後世の溝が切っており、東端に幅80cm、深さ36cmの畦溝状のものを検出したが、中央に、東西1.1m以上、南北90cmの円形土坑を検出したほか、大小様々なピットを検出し、一部主柱穴になる可能性もある。出土土器は、少破片が多く、図示できたのは壺2点(D428・D429)のみと砥石1点(S410)であった。

S H082 (第24図、図版135)

径5.9mのややいびつな円形プランをとる。DW区で検出した2棟の住居跡のうち、南よりのもので、深さ10cm前後と、残りが悪く、焼上・炭化物の広がりに、わずかに平面プランが確認されただけで、主柱穴等の施設は検出できなかった。出土遺物も、少破片のみで、図示できるものはなかった。

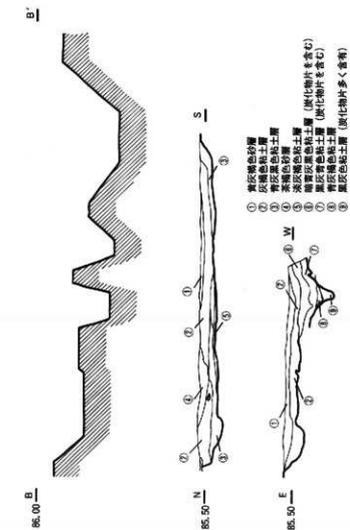
S H083 (第24図、図版135)

S H082の北に所在し、径5.8mのややいびつな円形プランをとる。深さは10cm前後で、中央より西よりに東西68cm、

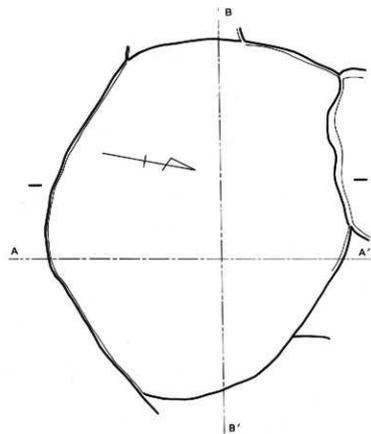


断面図のスケールはさらに2分の1

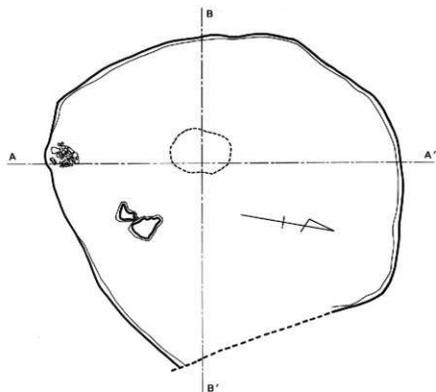
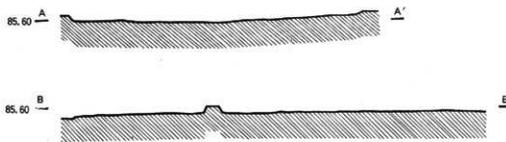
第23図 SH081平面・断面実測図



- ① 赤褐色粘土層
- ② 灰褐色粘土層
- ③ 赤褐色粘土層
- ④ 赤褐色粘土層
- ⑤ 赤褐色粘土層
- ⑥ 赤褐色粘土層
- ⑦ 赤褐色粘土層 (灰化物質を多く含む)
- ⑧ 赤褐色粘土層 (灰化物質を多く含む)
- ⑨ 赤褐色粘土層 (灰化物質を多く含む)



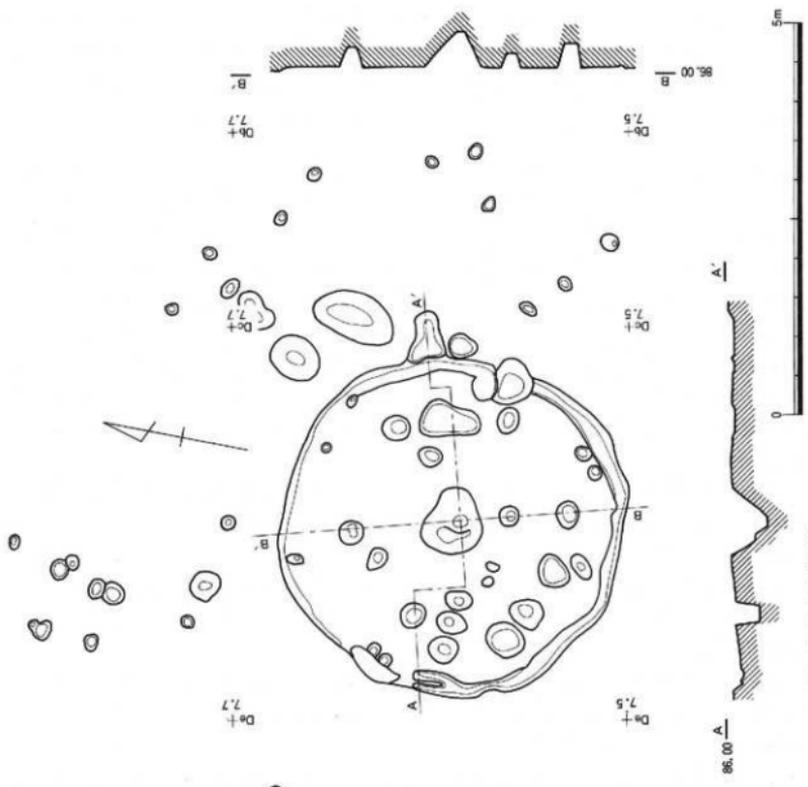
S H082



S H083



第24图 S H082 · S H083平面实测图



第25图 S H1084平面及剖面图

南北95cmの土坑を検出したほか、施設の検出はなかった。南端で土器が集中して出土している。

S H084 (第25図)

ハⅢの中央で検出した、径9.1mの円形プランをとる竈穴住居跡である。周辺に住居跡の検出はなく、中期方形周溝墓群の中央の残地で検出されたため、その性格の注目されるが、出土遺物が皆無であったため、並行関係等の検討は不可能である。ただ壁溝をもち、中央土坑をもつ形態からすると、上流域で検出した一群と類似点が多く方形周溝墓群に後出する可能性が高い。遺構の残りは悪く、中央に径1.5mの土坑があり、幅38cmの壁溝が南半にめぐる。径70cm前後の柱穴を4ヶ所で検出している。

(2) 土 坑

S K001 (第26図)

S K001～S K021はC E Ⅰ区で検出されたもので、S K001は、径1.7mの円形の土坑で、深さ40cmをはかる。埋土は3層に類別され、第1層が灰黒色粘土、第2層が黒色粘土、第3層が灰青色粘土であった。遺物は主として第2層より出土した。

S K002 (第26図)

東西1.2m、南北70cmのややいびつな長方形の土坑である。深さ18cmをはかり、埋土は第1層が灰黒色粘土、第2層が灰青色粘土であった。出土遺物は少なく、壺3点(D439～D441)のみを図示できた。

S K003 (第26図)

東西1.5m、南北1.9mの方形の土坑で、深さ22cmをはかる。埋土は3層に類別され、第1層が灰黒色粘土、第2層が黒色粘土、第3層が灰青色粘土であった。出土遺物は少なく、図示できるものはなかった。

S K004 (第26図)

径1.3mのややいびつな円形を呈する土坑で、深さ10cmをはかる。埋土は第1層が灰黒色粘土、第2層が黒色粘土であった。出土遺物は少なく、図示しうるものはなかった。

S K005 (第26図)

東西80cm、南北1.2mの楕円形の土坑で、深さ15cmをはかる。埋土は第1層が灰黒色粘土で、第2層が黒色粘土、第3層が灰青色粘土であった。埋土中より若干の遺物が出土し、壺3点(D442～D444)を図示できた。

S K006 (第13図)

東西1.0m、南北1.4mのややいびつな円形の土坑で、深さ23.8cmをはかる。埋土は第1層が灰黒色粘土、第2層が黒色粘土で、第2層より比較的多く遺物が出土している。壺3点、台付鉢1点、甕2点(D445～D445)を図示できた。

S K007 (第13図)

東西1.0m、南北70cmのいびつな長円形の土坑で、深さ6.2cmをはかる。埋土は灰黒色粘土で、出土遺物はなかった。

S K008 (第13図)

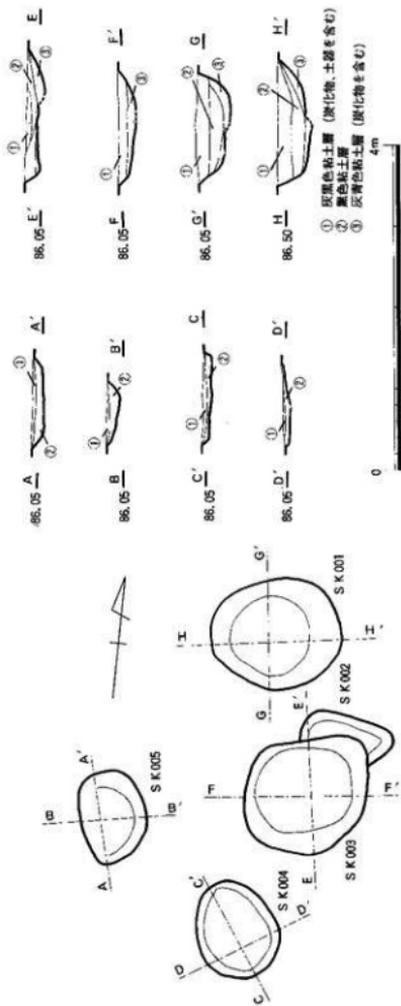
東西70cm、南北50cmの小さな円形土坑で、深さ13.2cmをはかる。埋土は灰青色粘土で、出土遺物はなかった。

S K009 (第13図)

径40cmの小土坑で、深さ12cmをはかる。埋土は灰黒色粘土で、出土遺物はなかった。

S K010 (第13図)

径80cmの円形土坑で、深さ26.7cmをはかる。埋土は第1層が灰黒色粘土、第2層が灰青色粘土で、出土遺物は少破片



第26图 C-E区土坑剖面·断面图

で、図示しうるものはなかった。

SK011 (第13図)

東西70cm、西北1.2mの長円形の土坑で、深さ45.1cmをはかる。埋土はおよそ3層に類別され、第1層が灰黒色粘土、第2層が黒色粘土、第3層が灰青色粘土であった。第2層より若干の遺物の出土があったが、図示し得たのは、壺1点(D451)のみであった。

SK012 (第13図)

東西1.0m、西北70cmのやや東西に長い円形の上坑で、深さ40.9cmをはかる。埋土は灰黒色粘土で、出土遺物はなかった。

SK013 (第13図)

S H001、S H002を掘削して築造された長円形の土坑で、東西80cm、西北1.6mをはかる。深さは19.3cmで埋土は第1層が灰黒色粘土、第2層が灰青色粘土であった。出土遺物は少破片で、図示するには至らなかった。

SK014 (第13図)

東西1.5m、南北1.0mのいびつな方形土坑で、深さ17cmをはかる。埋土は灰黒色粘土で、出土遺物はなかった。

SK015 (第13図)

径1.9mのやや大型の円形土坑である。深さ30cmをはかり、埋土は第1層が灰黒色粘土、第2層が黒色粘土、第3層が灰青色粘土であった。第3層より、多数の土器の出土があり、壺3点、高杯1点、壺4点(D452～D459)が出土した。

SK016 (第13図)

東西1.4m、南北2.3mの長円形の土坑である。深さ51cmをはかり、埋土は第1層が灰黒色粘土、第2層が黒色粘土、第3層が灰青色粘土であった。第2層より大量の土器の出土があり、壺6点、高杯2点、壺16点(D460～D484)を図示した。

SK017 (第13図)

径50cmの円形の小土坑で、埋土は灰黒色粘土で、出土遺物はなかった。

SK018 (第13図)

径50cmのややいびつな円形の小土坑で、埋土は灰黒色粘土で、出土遺物はなかった。

SK019 (第13図)

一辺80cmの方形土坑で、埋土は灰黒色粘土で、出土遺物はなかった。

SK020 (第13図)

径60cmの円形小土坑である。埋土は灰黒色粘土で、出土遺物はなかった。

SK021 (第13図)

東西60cm、西北40cmの半円形の土坑で、埋土は灰黒色粘土で、出土遺物はなかった。

SK022 (図版132)

SK022～SK025はCE3で検出したもので、SK022は、径1.4m、深さ22cmの円形の土坑である。埋土は第1層が暗灰青色粘土、第2層が暗青灰色粘土であった。出土遺物はなかった。

SK023 (図版132)

東西1.7m、西北1.6mの隅丸方形の土坑で、深さ47cmであった。埋土は第1層が暗灰青色粘土、第2層が暗青灰色粘土であった。出土遺物は小破片で、図示できるものはなかった。

SK024 (図版132)

径1.1m、深さ14cmの円形土坑で、埋土は第1層が暗灰青色粘土、第2層が暗青灰色粘土で、第2層より、比較的多くの土器が出土した。図示し得たのは、壺2点、高杯1点、甕4点(D486~D492)であった。

SK025 (図版132)

径2.5m、深さ35cmのややびつな円形土坑である。埋土は第1層が暗灰青色粘土、第2層が暗青灰色粘土であった。第3層より、比較的多くの土器が出土した。壺9点、鉢2点、甕1点(D493~D505)を図示し得た。

SK026 (図版133)

DE1の第3遺構面で検出した、不整形円形の土坑で、東西1.25m、南北2.25m、深さ120cmをはかる。埋土は暗灰青色粘土で、出土遺物は少なく、高杯、甕各1点(D506・D507)を図示した。

SK027 (図版133)

DE1の第3遺構面で検出した楕円形の土坑とみられる。東半は調査域の外にあり、全形はうかがえない。東西1.6m、南北2.5m、深さ18cmをはかり、埋土は暗灰青色粘土であった。出土遺物は比較的多く、帯4点、高杯2点、甕5点(D508~D518)が図示できた。

SK028 (図版133)

DE1第3遺構面で検出した。東西1.2m、南北5.7m、深さ20cmの長楕円形の土坑である。埋土は第1層が暗灰青色粘土、第2層が暗青灰色粘土で、出土遺物は少なく、甕2点(D519・D520)を図示するにとどまった。

SK029 (図版133)

DE1第3遺構面で、SK030に切られた溝状を呈する土坑で、東西1.35m、南北5.2m、深さ18cmをはかる。埋土は暗灰青色粘土で、出土遺物は少破片で、図示するには至らなかった。

SK030 (図版133)

DE1第3遺構面の中央付近で検出した変形土坑で、東西1.5m、南北5.7m、深さ13cmをはかる。埋土は暗灰青色粘土で、出土遺物は少なく、甕1点(D521)を図示できた。

SK031 (図版133)

DE1第3遺構面で検出した円形土坑で、東西1.2m、南北1.9m、深さ18cmをはかる。埋土は第1層が暗灰青色粘土、第2層が暗青灰色粘土で、出土遺物は比較的多く、壺4点、鉢1点、甕1点(D522~D527)を図示した。

SK032 (図版133)

DE1第3遺構面の西端で検出した土坑で、西側が未検出のため、全様はうかがえない。東西1.2m以上、南北3.9m、深さ24cmをはかる。埋土は第1層が暗灰褐色粘土、第2層が暗灰青色粘土で、出土遺物はなかった。

SK033 (図版133)

DE1第3遺構面で検出した円形の土坑で、東西1.45m、南北1.0m、深さ30cmをはかる。埋土は第1層が暗灰褐色粘土、第2層が暗灰青色粘土で、出土遺物は少なく、壺2点、甕1点(D528~D530)を図示できた。

SK034A (図版133)

DE1第3遺構面の北端で検出した幅0.6m、長さ3.6m、深さ18cmの長方形の溝状の土坑、SK034Bと対になるとみられる。埋土は第1層が暗灰青褐色粘土、第2層が暗青灰色粘土で、出土遺物はなかった。

SK034B (図版133)

SK034Aの北に所在する。幅0.7m、長さ3.7m以上、深さ19cmの長方形の土坑で、SK034Aと対をなすとみられる。埋土は暗灰青色粘土で、出土遺物はなかった。

S K 035 (図版133)

D E 1 第3遺構面の東端で検出した変形の土坑で、幅0.6m、深さ11cmをはかる。埋土は暗灰青色粘土で、出土遺物は少なく、わずかに壺1点(D531)のみを図示できた。

S K 036 (第27図)

S K 036-S K 053はD E 1 第2遺構面で検出したもので、S K 036は径1.1mの円形土坑で、深さ20cmをはかる。埋土は第1層が暗青灰色粘質土、第2層が青灰色粘質砂土、第3層が青灰色粘質土、第4層が青灰砂質粘土で出土遺物はなかった。

S K 037 (第27図)

径1.1m、深さ25cmの円形土坑で、埋土は第1層が灰褐色砂土、第2層が青灰色粘質土、第3層が暗灰褐色砂質粘土であった。出土遺物は小破片で図示しうるものはなかった。

S K 038 (第27図)

径90cm、深さ13cmの円形の土坑であった。埋土は第1層が灰褐色粘質土、第2層が黒灰色粘質土で、出土遺物はなかった。

S K 039 (第27図)

径90cm、深さ71cmの円形土坑であった。埋土は黒灰褐色粘質土で、出土遺物はなかった。

S K 040 (第27図)

径1.6m、深さ25cmのやや楕円形を呈する土坑で、埋土は第1層が黒灰褐色粘質土、第2層が黒灰色の炭化物層であった。出土遺物は多くないが、壺・甕各1点を(D532・D533)図示することができた。

S K 041 (第27図)

径1.1m、深さ16cmの円形土坑で、埋土は黒灰褐色粘質土であった。出土遺物はすべて小破片で、図示できるものはなかった。

S K 042 (第27図)

東西1.2m、南北1.4m、深さ7cmのいびつな楕円形を呈する。埋土は黒灰褐色粘質土で、出土遺物はなかった。

S K 043 (第27図)

東西70cm、南北1.0mのいびつな円形土坑である。深さは5cmをはかり、埋土は黒灰褐色粘質土であったが、出土遺物は小破片で、図示するには到らなかった。

S K 044 (第27図)

東西6.3m、南北1.8m、深さ60cmをはかる。長楕円形の土坑である。埋土は複雑な堆積を示すが、上層が青灰色粘質土、下層が暗黒灰色粘質土で、比較的多くの遺物が出土した。そのうち、壺4点、高杯1点、甕2点(D534～D540)を図示した。

S K 045 (第27図)

東西2.6m、南北2.2m、深さ15cmの不整形の土坑で、S K 044に切られており、先行することが明らかである。埋土は暗青灰色粘質土で、出土遺物は、いづれも小破片で、図示するには至らなかった。

S K 046 (第27図)

東西1.5m、南北3.4m、深さ30cmの土坑である。西側に壁溝状の幅30cm、深さ9.3cmの溝がめぐり、住居跡の残骸の可能性もある。埋土は大きく分類して、上層が暗青灰色粘質砂土、下層が青灰色粘質土で、中央付近より、若干の遺物が出土、そのうち壺2点、甕3点(D541～D545)を図示できた。

SK047 (第27図)

径70cm、深さ15cmの円形の小土坑で、埋土は灰褐色粘質土で底に厚く炭化物が堆積し、出土遺物はなかった。

SK048 (第27図)

東西1.9m、南北1.4m、深さ10cmのややいびつな円形の土坑で、埋土は、黒褐色粘質砂土で、出土遺物は少なく、竪1点(D546)を図示できた。

SK049 (第27図)

径1.2m、深さ22cmの円形の土坑で、埋土は第1層が黒灰色粘質土、第2層が暗灰色粘質土、第3層が炭化物を含んだ暗灰色粘土で、出土遺物はなかった。

SK050 (第27図)

東半は検出できていないが、東西に長い楕円形を呈するとみられる。東西1.2m、西北1.1m、深さ20cmをはかる。埋土は第1層が黒灰褐色粘質土で、第2層が暗青灰色粘質土である。出土遺物は、多くないが、竪2点、高杯1点(D547～D549)を図示できた。

SK051 (第27図)

径70cm、深さ22cmをはかる円形の土坑で、埋土は第1層が黒灰褐色粘質土、第2層が暗青灰色粘質土であった。出土遺物は、小破片で図示し得なかった。

SK052 (第27図)

東西70cm、南北90cm、深さ10cmをはかる、いびつな円形土坑である。埋土は灰褐色粘質土で、出土遺物はなかった。

SK053 (第27図)

東西2.1m、南北2.0m、深さ47cmの大型の円形土坑である。埋土は第1層が黄褐色砂質土、第2層が暗灰色粘質土、第3層が黒灰色粘質土で少量の土器を出土した。そのうち甕2点(D550・D551)を図示した。ほかに小型扁平片刃石斧1点(S230)の出土が知られる。

SK054 (第28図)

D E 1 第1遺構面で検出した東西1.5m、南北1.6m、深さ53cmのややいびつな円形土坑である。埋土は第1層が暗青灰色砂土、第2層が黒灰色粘質土で出土遺物を少数ながら出土している。このうち甕4点(D552～D555)を図示した。

SK055 (図版134)

SK053～SK069はD E 2 第3遺構面で検出したもので、SH055は、径60cm、深さ21cmの円形の土坑である。埋土は第1層が暗青灰色粘土、第2層が暗青灰色粘土で、出土遺物は小破片で、図示に至らなかった。

SK056 (図版134)

径70cm、深さ28cmの円形土坑である。埋土は第1層が暗青灰色粘土、第2層が炭化物を多く含む黒灰色粘土で、出土遺物はなかった。

SK057 (図版134)

東西80cm、南北50cm、深さ19cmの長円形の土坑である。埋土は暗青灰色粘土で、出土遺物はなかった。

SK058 (図版134)

東西1.1m、南北60cm、深さ31cmの長円形の土坑である。埋土は暗青灰色粘土で、出土土器は少破片のため、図示に至らなかった。

SK059 (図版134)

プランは明確でないが、径50cmの円形土坑とみられる。炭化物が広がるだけで、付近より若干の土器片が出土したが

図示までには至らなかった。

S K 060 (図版134)

東西70cm、南北40cmの弧形を呈する土坑である。深さは16cmで、埋土は暗灰青色粘土であった。出土遺物はなかった。

S K 061 (図版134)

径70cm、深さ10cmの円形の土坑である。埋土は暗灰青色粘土で、出土遺物はなかった。

S K 062 (図版134)

径1.5m、深さ36cmの円形の土坑である。埋土は暗灰青色粘土で、出土遺物はなかった。

S K 063 (図版134)

東西70cm、南北60cm、深さ18cmの楕円形土坑である。埋土は第1層が暗灰青色粘土、第2層が黒灰色炭化物層で、出土遺物はなかった。

S K 064 (図版134)

東西1.4m、南北80cm、深さ65cmの長楕円形の土坑である。埋土は第1層が黒灰青色粘土で、第2層が暗灰青色粘土、第3層が暗灰青色粘土で、若干の土器が出土している。そのうち壺2点(D556・D557)を図示した。

S K 065 (図版134)

径1.1m、深さ8cmの円形土坑である。埋土は暗灰青色粘土で、出土遺物はなかった。

S K 066 (図版134)

東西3.1m、南北3.5m、深さ24cmの大形の不整形の土坑である。埋土は第1層が黒灰色粘土で、第2層が暗灰青色粘土、第3層が暗灰青色粘土であった。出土遺物は少なく、わずかに壺1点のみ(D558)を図示できた。

S K 067 (図版134)

径90cm、深さ14cmの円形土坑である。埋土は黒灰色粘土で、出土遺物はなかった。

S K 068 (図版134)

径70cm、深さ9cmの円形土坑である。埋土は黒灰色粘土で、出土遺物はなかった。

S K 069 (図版134)

径70cm、深さ6cmの円形土坑である。埋土は黒灰色粘土で、出土遺物は少なく、鉢1点(D559)を図示した。

S K 070 (第27図)

S K 070～S K 090はD E 2第2遺構面で見出したもので、S K 070は、東西3.0m、南北1.9m、深さ30cmの変形土坑である。埋土は暗青灰色粘土で若干の遺物が出た。そのうち図示できたのは、壺1点(D560)のみであった。

S K 071 (第27図)

東西70cm、南北90cm、深さ30cmの長円形土坑である。埋土は複雑な堆積を示すが、大きく分けて上層が焼土を含む暗灰青色砂土、下層が暗青灰粘土で出土遺物はなかった。

S K 073 (第27図)

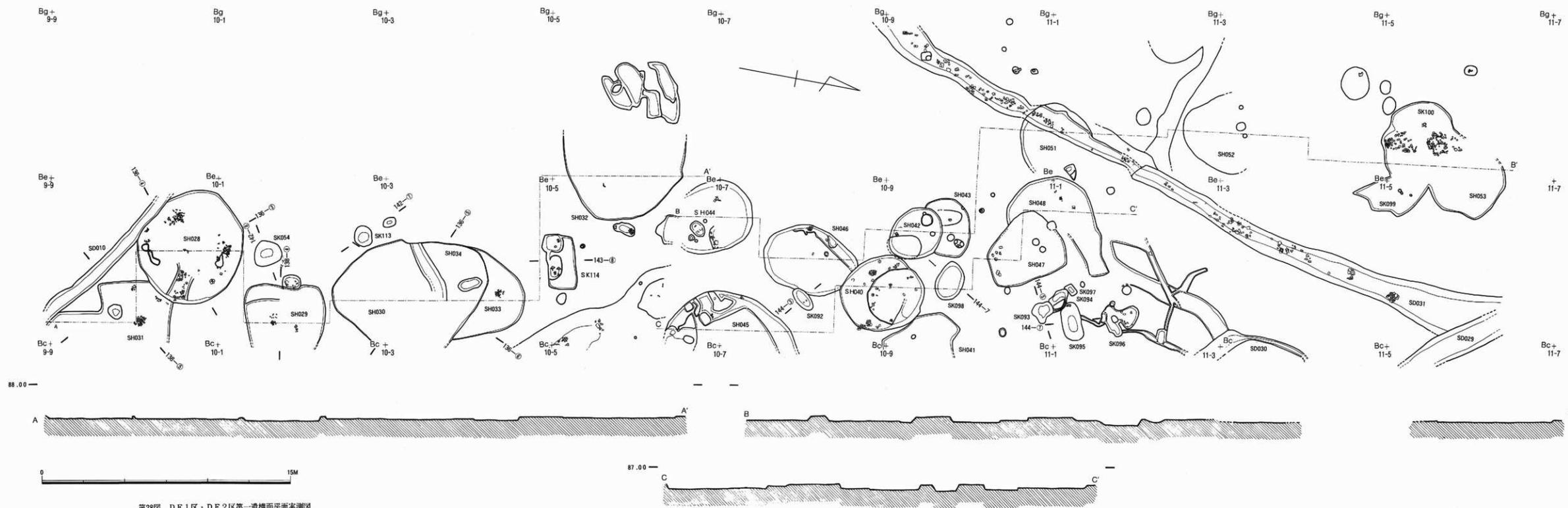
径5.1m、深さ18cmの円形の土坑である。埋土は暗青灰色粘質土で、出土遺物は少なく、図示できたのは壺1点(D561)のみであった。

S K 074 (第27図)

東西1.5m、南北80cm、深さ13cmの長円形の土坑である。埋土は暗青灰色粘質土で、出土遺物はなかった。

S K 075 (第27図)

径90cm、深さ12cmの円形土坑である。埋土は暗青灰色粘土で、出土遺物はなかった。



第28图 DE1区·DE2区第一遺構面平面実測図

S K 076 (第27回)

径1.1m、深さ30cmの円形の土坑で、埋土は第1層が暗青灰色粘質土、第2層が青灰色粘質土であった。若干の出土遺物があり、甕2点(D562・D563)を図示した。

S K 077 (第27回)

東西1.9m、南北1.4m、深さ28cmのいびつな長方形を呈する。埋土は第1層が暗青灰色粘質土、第2層が青灰色粘質土で、出土遺物はなかった。

S K 078 (第27回)

東西1.4m、南北1.6m、深さ95cmの楕円形土坑である。埋土は第1層が暗青褐色粘土、第2層が暗青灰色粘土、第3層が青灰色粘土で、出土遺物はなかった。

S K 081 (第27回)

径1.5m、深さ32cmの円形の土坑である。埋土は暗青灰色粘土で、出土遺物はなかった。

S K 082 (第27回)

東西1.0m、南北1.1m、深さ5cmの不整形土坑である。埋土は暗青灰色粘土で、出土遺物はなかった。

S K 083 (第27回)

東西2.5m、南北1.6m、深さ33cmの楕円形土坑である。埋土は第1層が暗青灰色粘土で、第2層が青灰色粘土であり、出土遺物は少なく、図示できたのは甕1点のみ(D564)であった。

S K 084 (第27回)

東西1.7m、南北1.0m、深さ42cmの長円形の土坑である。埋土は第1層が灰褐色砂質土、第2層が暗青灰色粘質土、第3層が青灰色粘質土で、出土遺物は少なく、わずかに壺1点(D565)を図示できた。

S K 085 (第27回)

東西1.1m、南北70cm、深さ17cmの楕円形を早する。埋土は暗青灰色粘質土で、出土遺物はなかった。

S K 086 (第27回)

東西1.5m、南北1.4m、深さ11cmの長円形土坑で、S K 085が、一部を切って築造されている。埋土は暗青灰色粘質土で、出土遺物はなかった。

S K 087 (第27回)

東西1.7m、南北1.8m、深さ16cmのいびつな方形土坑で、埋土は暗青灰色粘質土であった。出土遺物は、小破片で、図示するには至らなかった。

S K 088 (第27回)

東西2.0m、南北1.6m、深さ25cmをはかる長円形の土坑である。埋土は暗青灰色粘質土で、出土遺物はなかった。

S K 089 (第27回)

径1.2m、深さ48cmの円形の土坑である。埋土は暗青灰色粘質土で、出土遺物はなかった。

S K 090 (第27回)

東西2.4m、南北1.6m、深さ52cmの長円形の土坑である。埋土は暗青灰色粘質土で、若干の土器の出土が知られる。そのうち、壺・甕各1点(D566・D567)を図示できた。

S K 091 (第28回)

S K 091～S K 100はDE2第1遺構面から検出したもので、S K 091は、東西70cm、南北1.6m、深さ18cmをはかる長円形の土坑である。埋土は暗青灰色粘質土で、出土遺物は少なく鉢1点(D568)を図示できた。

SK092 (第28図)

径1.1m、深さ34cmの円形の土坑で、埋土は、第1層が黄灰色砂土、第2層が炭化物を大量に含む黒灰色粘土で、出土遺物はなかった。

SK093 (第19図)

東西1.8m、南北1.2m、深さ42cmのややいびつな方形を呈す。埋土は第1層が黒灰色粘質土、第2層が炭化物を大量に含んだ暗青灰色粘土、第3層が青灰色粘土で、底に炭化物が堆積していたが、出土遺物はなかった。

SK094 (第28図)

東西1.2m、南北90cm、深さ20cmのいびつな長円形の土坑である。埋土は黒灰色粘質土で、出土遺物はなかった。

SK095 (第19図)

東西2.3m、南北1.1m、深さ37cmの比較的大きな長楕円形土坑である。埋土は第1層が青灰色砂質土、第2層が炭化物を大量に含んだ暗青灰色粘土で、出土遺物は少なく、壺1点(D569)を図示できた。ほかに割片1点(S921)の出土があった。

SK096 (第19図)

東西1.6m、南北2.1m、深さ27cmの変形土坑である。埋土は第1層が暗青灰色砂質土、第2層が暗青灰色粘質砂土で出土遺物は少なく、図示したのは壺1点(D570)のみであった。

SK097 (第19図)

東西1.2m、南北45cm、深さ22cmの長方形を呈する土坑である。埋土は暗青灰色砂質土、出土遺物はなかった。

SK098 (第16図)

東西1.6m、西北2.4m、深さ28cmをはかる大型の楕円形土坑である。埋土は第1層が暗青灰色砂質土、第2層以下は、暗灰褐色砂質土をベースとし、炭化物の多少により数層に分かれる。出土遺物はなかった。

SK099 (第28図)

S H053とSK100と切り合いがある土坑で、東西2.4m、南北3.4m、深さ11cmの変形を呈する。切り合いの前後関係は不明で、埋土は暗青灰色砂質土であった。出土遺物は、いづれも少破片で図示するには至らなかった。

SK100 (第28図)

径5.0m、深さ10cmの円形の土坑で、竪穴住居跡の残骸の可能性もある。SK053とSK099と切り合うが、識別困難であった。出土遺物は小破片が多く壺2点(D571、D572)、甕2点(D573、D574)のみを図示できた。

SK101 (第20図)

径1.0m、深さ38cmの円形の土坑である。埋土は第1層が青灰褐色粘土、第2層が暗青灰色粘土で、下層に大量の炭化物を含有していた。出土遺物は少なく、壺1点(D575)のみであった。

SK102 (第20図)

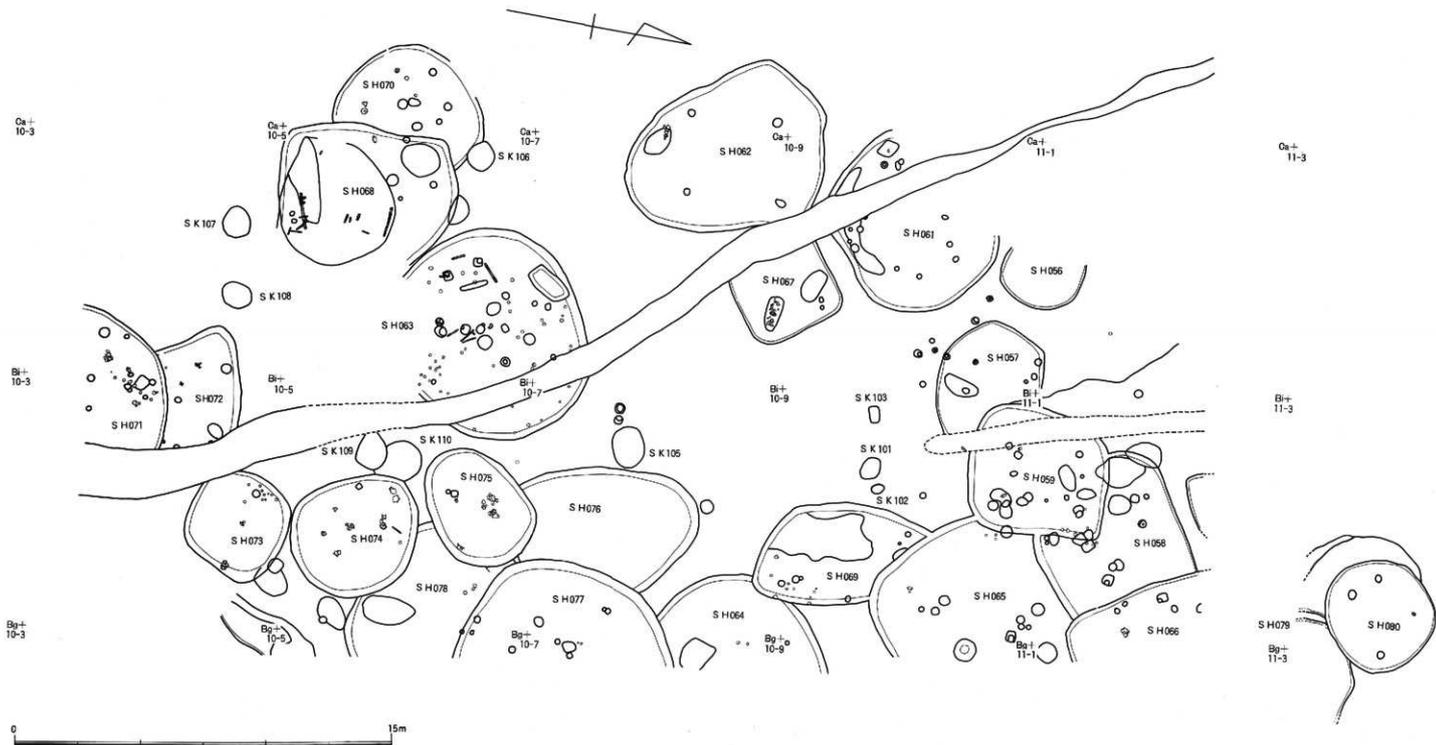
径0.5m、深さ46cmのいびつな長円形を呈する。埋土は第1層が暗青灰褐色粘土、第2層が暗青灰黒色粘土で、出土遺物は壺1点(D576)のみであった。

SK103 (第20図)

東西0.6m、南北0.4m、深さ26cmの長方形土坑である。埋土は上層が黒灰褐色粘土、下層が青灰黒色粘土で、壺1点(D577)が出土した。

SK104 (第20図)

径40cmの小型土坑である。埋土は黒灰褐色粘土で、壺1点(D578)が出土している。



第29図 ナーI・リーI 整穴住居跡群遺物出土状況実測図

SK105 (第20図)

東西1.6m、南北95cm、深さ60cmの長円形土坑である。埋土は、第1層が青灰褐色粘土で、第2層が黒灰色粘土、第3層が焼土と炭化物、第4層が黒灰褐色粘土で、竈1点、甕2点(D579-D581)が出土した。

SK106 (第20図)

径2.1m、深さ50cmの円形土坑である。埋土は4層に分かれ、第1層が黒灰褐色粘土、第2層が黒灰色粘土、第3層が炭化物、第4層が灰褐色粘土であった。

SK107 (第20図)

径1.3m、深さ30cmの円形土坑である。埋土は第1層が黒灰色粘土、第2層が青灰褐色粘土、第3層が炭化物であった。

SK108 (第20図)

径1.2mの円形の土坑で、埋土は第1層が青灰黒色粘土、第2層が黒灰褐色粘土、第3層が淡黒灰褐色粘土であった。

SK109 (第20図)

東西1.6m、南北1.2mのややいびつな円形の土坑である。埋土は第1層が青灰黒色粘土、第2層が黒灰褐色粘土、第3層が淡黒灰褐色粘土であった。出土遺物は少なく、竈・甕各1点(D582・D583)を図示できた。

SK110 (第20図)

東西1.5m、南北1.6m、深さ38cmをはかる長円形の土坑である。埋土は第1層が青灰黒色粘土、第2層が黒灰褐色粘土、第3層が淡黒灰褐色粘土で、出土遺物は少なく甕2点(D584・D585)を図示できた。

SK111 (第28図)

D E 3に所在する径1.3m、深さ42cmをはかるややいびつな円形土坑である。埋土は第1層が青灰褐色粘土、第2層が黒灰褐色粘土、第3層が青灰黒色粘土、第4層が黒灰色粘土で、出土遺物はなかった。

SK112 (図版135)

S H 029の西に接して所在する土坑で、東西85cm、南北1.2mのやや南北に長い楕円形を呈する。埋土は暗青灰色粘質土で、出土土器は、少破片のため図示できなかったが、石剣1点(S011)の出土があった。

SK113 (第28図)

D E 1第1遺構面のS H 028の北に接して所在する径1.6m前後、深さ20cmの、ややいびつな円形の土坑である。埋土は第1層が暗青灰色砂質粘土、第2層が青灰色砂質土、第3層が黒灰色粘質土で、出土遺物は、石剣1点(S008)のみであった。

SK114 (第28図)

D E 1第1遺構面の北端に所在する。東西4.3m、南北2.2mの長方形の土坑である。埋土は第1層が暗青灰色粘土、第2層が明青灰色粘土、第3層が褐色粘質土であった。

SK115 (第27図)

D E 2下層の北端に位置し、径0.8m、深さ15cmの円形の土坑である。埋土は第1層が黄褐色砂質土、第2層が暗青灰色粘土、第3層が黒灰色粘土であった。出土遺物はなかった。

SK116 (第27図)

SK115の北側に接して所在する、径1.2m、深さ24cmの円形土坑である。埋土は第1層の黄褐色粘土、第2層が黒灰色泥砂であった。出土遺物はなかった。

SK117 (第27図)

SK116の東に接して所在する、東西1.2m、南北3.1m、深さ25cmの長方形の土坑である。埋土は、第1層が暗青灰色粘土、第2層が黒色泥砂、第3層が暗灰褐色泥砂であった。

SK118 (第27図)

DE2第3遺構面の北端に所在する楕円形の土坑で、埋土は、第1層が暗灰青色粘土、第2層が暗青褐色粘土、第3層の褐色粘質土であった。出土遺物は検出できなかった。

SK119 (図版135)

DE3の南端に所在する円形土坑で、径1.4m、深さ11.5cmをはかる。埋土は暗灰青色粘土で、出土遺物はなかった。

(3) 溝 跡

SD001 (図版132)

CE2の北端を東西流する溝で、幅2.8m、深さ78cmをはかる。溝内の層序は8層に類別され、第1層は黒灰色粘土、第2層は黒灰褐色粘土、第3層は黒灰褐色砂質土、第4層は灰褐色砂質土、第5層は灰色砂土、第6層は灰褐色粘土、第7層は灰黒色砂質土、第8層は黄褐色砂土であった。出土遺物は少なく、高杯、寛各1点(D586・D587)を図示できた。

SD002 (図版132)

CE3の南端を東西流する溝で、幅2.6m、深さ60.2cmをはかる。溝内の層序は8層に類別され、第1層は黒褐色粘土、第2層は黒灰褐色粘土、第3層は青灰褐色砂質土、第4層は黒褐色粘質土、第5層は黄褐色砂土、第6層は淡青灰褐色砂土、第7層は青灰褐色砂土、第8層は黄褐色砂土であった。出土遺物は、弥生土器が若干で、壺2点、甕4点(D588-D593)を図示できた。

SD003 (第27図)

DE1第2遺構面の南端で検出した溝で、幅1.4m、深さ14cmをはかる。SH023の下層で検出したもので、埋土は黒灰色粘土であった。出土遺物は少なく、壺2点、甕2点(D594-D597)を図示できた。

SD004 (第27図)

SH022の東北部から、東北にのびる、幅60cm、長さ5.7m、深さ9cmの溝である。埋土は黒灰色粘土で、若干の遺物の出土があった。図示できたのは、壺2点(D598・D599)である。

SD005 (第27図)

DE1第2遺構面の北端に所在する幅60cm、長さ4.0m以上、深さ33cmの小溝である。埋土は黒灰色粘土で、出土遺物は壺1点(D600)のみである。

SD006 (第27図)

DE1第2遺構面の北端に所在する小溝で、幅40cm、長さ2.6m、深さ18cmをはかる。埋土は黒灰色粘土で、出土遺物はなかった。

SD007 (第27図)

DE1第2遺構面の南端に所在する小溝で、幅90cm、長さ3.0m、深さ70cmをはかる。埋土は黒灰色粘土で、出土遺物は少なく、壺1点(D601)を図示できた。

SD008 (第28図)

DE1第1遺構面で検出した溝で、幅2.9m、深さ1.38mをはかる。埋土は8層に類別され、第1層は黒灰褐色粘土、第2層は黒褐色粘土、第3層は青灰褐色粘土、第4層は青灰褐色砂土、第5層は灰色砂土、第6層は淡青灰褐色砂土、第7層は灰色砂土、第8層は黒灰色粘土であった。出土遺物は少なく壺2点(D602・D603)、甕1点(D404)のほか、石器剥片1点(S909)を図示できた。

SD009 (第28図)

DE1第1遺構面で検出した溝で、幅1.9m、深さ30cmをはかる。埋土は大きく3層に細分されるが、大きくは上層が黒灰褐色砂質土、中層が灰褐色粘質土、下層が黒灰褐色粘質土であった。出土遺物は、少なく、甕2点を図示できた(D605・D606)。

SD010 (第28図)

DE1第1遺構面の南端で検出した小溝で、東西流する。幅75cm、深さ15cmをはかり、埋土は黒灰褐色砂質土であった。出土遺物は少なく、甕1点(D607)を図示できた。

SD011 (第28図)

DE1第1遺構面北端を東西流する溝で、幅0.36m以上、深さ24cmをはかる。埋土は黒灰色砂質粘土で、出土遺物は壺5点、甕1点(D608-D613)であった。

SD012 (図版134)

DE2第3遺構面の中央に位置する小溝で、幅1.3m、深さ5cm、長さ10.5mをはかり、円弧を描く。埋土は黒灰色砂質土で出土遺物はなかった。

SD013 (図版134)

DE2第3遺構面の中央に位置する小溝で、幅60cm、深さ6cm、長さ4.9mをはかり、やや湾出する。埋土は黒灰色砂質土で、出土遺物はなかった。

SD014 (図版134)

DE2第3遺構面の中央に所在する溝で、最大幅90cm、深さ5cm、長さ6.3mをはかる。埋土は黒灰色粘質砂土で、出土遺物は少なく、甕1点(D614)を図示した。

SD015 (図版134)

DE2第3遺構面の北端に所在する溝で、上部を削平されて、幅2.1m、深さ70cm、長さ5.6mの上坑状を呈する。埋土は第1層が暗青灰色粘土で、第2層が暗青灰褐色粘土、第3層が暗青灰色粘土であった。出土遺物は、まったくなかった。

SD016 (図版134)

DE2第3遺構面の北端に所在する小溝で、幅1.1m、深さ11cm、長さ9.2m以上をはかる。埋土は、第1層が黒色粘土、第2層が暗青灰色粘土、第3層が暗黒灰色粘土であった。出土遺物は少なく、図示できるものはなかった。

SD017 (図版134)

DE2第3遺構面の北端に所在する小溝で、幅90cm、深さ26cm、長さ6.3m以上をはかる。埋土は暗青灰色粘土で、若下の出土遺物があった。そのうち壺1点、甕2点(D615-D617)を図示できた。

SD018 (第27図)

DE2第2遺構面の北端に所在する溝で、幅1.2m、深さ52cm、長さ2.2mをはかり、東西流する。埋土は第1層が暗青灰色粘土、第2層が黒青灰色粘土、第3層が暗青灰色砂土、第4層が暗青灰色砂質土、第5層が黒灰色粘質土であ

た。出土遺物は比較的多く、壺2点、甕6点(D618-D625)を図示した。

SD019 (第27図)

D E 2 第2 遺構面の南端に所在する溝で、幅60cm、深さ10cm、長さ8mをはかり、東西流する。埋土は暗灰褐色粘土で、若干の出土遺物があった。そのうち、土器で図示したのは、高杯1点、甕3点(D626-D629)で、ほかに砥石1点(S420)が出土した。

SD020 (第27図)

D E 2 第2 遺構面の北端に所在する溝で、幅1.5m、深さ24cm、長さ4.8m以上をはかり、南北流する。埋土は暗灰褐色砂質土で出土遺物はなかった。

SD021 (第27図)

D E 2 第2 遺構面の南端に所在し、東西流する小溝で、幅2.4m、深さ45cm、長さ80cmをはかる。埋土は上層が暗灰褐色粘質土、中層が暗灰褐色砂質土、下層が黒灰色粘質土で出土遺物はなかった。

SD022 (第27図)

D E 2 第2 遺構面の南端に所在する小溝で、幅80cm、深さ17cm、長さ3.0m以上をはかる。埋土は暗灰褐色砂質土で出土遺物はなかった。

SD023 (第27図)

D E 2 第2 遺構面の中央付近に所在する小溝で幅60cm、深さ12cm、長さ1.7mをはかる。埋土は暗灰褐色砂質土で出土遺物はなかった。

SD024 (第27図)

D E 2 第2 遺構面の中央に所在し、屈曲しつつ西から東へ流れる。幅60cm、深さ30cmをはかり、埋土は暗青灰色砂質土で、出土遺物はなかった。

SD025 (第27図)

D E 2 第2 遺構面の中央に所在し、SD024の延長上、屈曲しつつ西から東に流れる。幅70cm、深さ24cmをはかり、埋土は大きく3層に類別され、第1層は暗青灰色粘質土、第2層は暗青灰色砂質粘土、第3層は黒灰色粘質土であった。第2層と第3層の間に厚く焼土が堆積していた。出土遺物は少なく、甕1点(D630)を図示した。

SD026 (第27図)

D E 2 第2 遺構面の中央に所在し、西から東へ流れる。幅1.9m、深さ12cm、長さ5.9m以上をはかる。埋土は暗青灰色粘質土で、出土遺物はなかった。

SD027 (第27図)

D E 2 第2 遺構面の中央に所在し、幅1.3m、深さ11cm、長さ6.2m以上をはかり、東から西へ流れる。埋土は暗青灰色粘質土で、若干の出土遺物があった。そのうち図示できたのは、壺1点、甕1点(D631・D632)である。

SD028 (第27図)

D E 2 第2 遺構面の北端に所在し、幅1.8m、深さ22cm、長さ11.7mをはかり、南東から北西へ流れる。埋土は暗青灰色粘質土で、若干の出土遺物があった。そのうち土器では甕3点(D633-D639)のみ図示でき、ほかに砥石1点(S433)の出土があった。

SD029 (第28図)

D E 2 第1 遺構面の北端で検出した溝で、幅1.6m、深さ28cmをはかる。埋土は暗青灰色粘土で、出土遺物はなかった。

S D 030 (第28図)

D E 2 第1遺構面の北端で検出した溝で、幅1.0m、深さ28cmをはかる。埋土は暗青灰色粘土で、出土遺物は少なく、壺・鉢・高杯各1点(D640~D642)が出上した。

S D 031 (第28図)

D E 2 第1遺構面の北よりを、南から北に流れる。幅1.7m、深さ43cmの直線的な溝である。埋土は第1層が暗青灰色粘質土で、第2層は暗青灰色砂質粘土であった。出土遺物は比較的多く、壺12点、高杯1点、甕9点(D643~D663)を図示した。

S D 032 (図版135)

D E 3 の北端を南から北に流れる溝で、幅1.8m、深さ48cmをはかる。埋土は第1層が灰褐色粘質砂土、第2層が灰色粘土で、出土遺物は少なかった。そのうち、壺1点、甕2点(D664~D666)を図示した。

S D 033 (図版135)

D E 3 の南端に一部検出されたもので、S D 037に東から流入している。幅1.7m、深さ40cmをはかり、第1層は灰褐色粘質砂土、第2層は黒灰色砂粘土であった。出土遺物は少なく、壺3点、高杯1点、駒台1点(D667~D671)を図示した。

S D 034 (図版135)

D E 3 の北より、S D 035を切り込んで南北流する溝で、幅60cm、深さ20cmをはかる。埋土は灰褐色粘質土で、出土遺物は少なく、壺1点(D672)と石剣の破片1点(S912)を図示した。

S D 035 (図版135)

D E 3 の北より、S D 032、S D 034と一部で重複する溝で、南北流するとみられる。幅1.8m、深さ30cmをはかる。埋土は第1層が暗灰褐色粘質土、第2層が暗灰褐色粘土であった。出土遺物はなかった。

S D 036 (図版135)

D E 3 の南端を、東から西へ流れる溝で、幅2.5m、深さ20cmをはかる。S D 037に流入するとみられ、埋土は第1層が灰褐色粘質砂土、第2層が灰褐色粘土であった。出土遺物は少なく、壺2点(D673・D674)を図示した。

S D 037 (図版135)

D E 3 の南端を東南から北西に流入する溝で、幅2.6m、深さ30cmをはかる。埋土は上層が灰褐色粘質砂土、中層が灰褐色粘土、下層が黒灰色粘土であった。出土遺物は多く、壺6点、甕6点(D675~D686)を図示した。

S D 038 (図版135)

D E 3 の中央を東から西へ流れる溝で、幅1.2m、深さ80cmをはかる。埋土は第1層が暗灰褐色粘質土、第2層が灰褐色粘土、第3層が黒灰色粘土であった。出土遺物は少なく、鉢1点(D687)のみを図示した。

S D 039 (第20図)

チ-Iを南東から北西へ流れる溝で、S H 063やS H 061を切り込んでおり、後出するとみられる。幅1.1m、深さ33cmをはかり、埋土は暗灰褐色粘土であった。出土遺物は少なく、高杯1点、壺3点(D688~D691)を図示した。

(4) 落ち込み

S X001 (第27図)

DE1下層の中央で検出した、いびつな方形を呈する落ち込みである。東西3.1m、南北1.1m、深さ20cmをはかり、埋土は第1層が暗青色粘土、第2層が青色粘土、第3層が黒青灰色粘土、第4層が青灰色砂質土であった。竪穴住居跡の残骸とみられるが、明確ではない。出土遺物は、比較的多く、壺5点、甕4点(D692~D699)を図示できた。ほかに砥石1点(S1103)の出土があった。

S X002 (第27図)

DE1下層で検出した変形の落ち込みで、径1.0m、深さ5cmの円形の落ち込みに、幅10cm、長さ1.3mの小溝がついた形態をとる。埋土は第1層が灰青色粘土、第2層が暗灰青色粘土で、出土遺物はなかった。

S X003 (第27図)

DE1下層北端に所在する、楕円形の落ち込みで、東西1.1m、南北1.4m、深さ40cmをはかる。埋土は第1層が灰青色粘土、第2層が暗灰青色粘土で、出土遺物はなかった。

S X004 (第27図)

DE2第2遺構面の中央西より所在する、溝状の落ち込みで、東西1.8m、南北2.3m、深さ45cmをはかる。埋土は第1層が暗灰青色粘質土、第2層が暗灰青色粘土、第3層が暗灰青色泥砂で、出土遺物はなかった。

S X005 (第27図)

DE2第2遺構面の北より所在するもので、二つの円形の落ち込みを、溝でつないだ形状を示す。円形落ち込みは径1.4m、深さ33cmをはかり、溝は幅75cm、長さ1.1mをはかる。埋土はいずれも暗灰青色粘質土で、出土遺物はなかった。

S X006 (第27図)

DE2第2遺構面の南より所在する大型の円形の落ち込みで、径4.5m前後、深さ19cmと推定される。内部にSK073が、北に接してSK074・SK075が所在しており、住居跡の可能性も考えられるが、出土遺物もなく、断定できなかった。

S X007 (第27図)

DE1第2遺構面中央の西端に半ば検出した落ち込みで、いびつな長方形を呈する。東西1.5m以上、南北95cm、深さ24cmをはかり、埋土は暗灰青色粘土であった。出土遺物は少なく、壺4点のみを図示できた(D701~D704)。

S X008 (第27図)

DE1の第2遺構面北端で検出した卵形の落ち込みで、東西1.1m、南北3.1m、深さ14cmをはかる。埋土は暗灰青色粘土で、出土遺物は少なく壺1点のみを図示した(D706)。

S X009 (第27図)

DE1第2遺構面のSH023に重複して所在する遺構で、東西1.3m、南北2.3m、深さ25cmの落ち込みである。埋土は暗灰褐色粘質土で、出土遺物は内側の落ち込みより、若干出土し、壺3点、高杯1点、甕3点を図示した(D708~D714)。

S X010 (第27図)

DE1第2遺構面の南端に所在する一辺90cmの三角形を呈する落ち込みである。深さ18cmをはかり、埋土は暗灰褐色

色粘質土であった。出土遺物は少破片で、図示できなかった。

S X 011 A (第27図)

D E 1 第2遺構面の南端で検出した卵形の落ち込みで、S X 011 B を切り込んでつくられている。東西1.3m、南北70cm、深さ15cmをはかり、埋土は暗灰褐色粘質土であった。出土遺物は少なく、壺3点(D 715～D 717)のみを図示した。

S X 011 B (第27図)

S X 011 A に切られる卵形の落ち込みで、東西1.2m以上、南北70cm、深さ36cmをはかる。埋土は暗灰褐色粘質土で、出土遺物はなかった。

S X 012 (第27図)

D E 1 第2遺構面南端に所在する、東西1.5m、南北1.6m以上、深さ14cmをはかる方形の落ち込みで、その内部に幅40cm、長さ1.4m、深さ13cmの溝状の落ち込みがある。住居跡の一部とも考えられるが、出土遺物は小破片であった。

S X 013 (第27図)

D E 2 第2遺構面の北端に所在する東西3.6m、南北2.9mの、ややいびつな長方形を呈する。深さは17cmと浅く、住居跡の残骸ともみられるが、柱穴等の施設は検出されていない。埋土は暗灰青色粘土で、出土遺物は少なく、壺1点(D 718)のみ図示できた。

S X 014 (第20図)

D E 2 第3遺構面の南端で検出された不整形の落ち込みで、深さ32cmをはかる。埋土は上層が暗灰青色粘土、下層が暗青灰色粘土で、出土遺物は、比較的多く、壺6点、甕2点(D 719～D 726)を図示した。ほかに石斧1点(S 233)が出土した。住居跡の可能性もあるが、プランを明確にできなかった。

S X 015・016 (第20図)

S D 151の北端の上層包含層をS X 015として、遺物を取り上げた。プランとしては明確でなく、多くの遺物が出土した。そのうち、壺3点、甕3点(D 727～D 732)を図示した。

S X 017 (第20図)

S D 151から分枝して、南から北へ流れる溝状の落ち込みで、住居跡の下層より検出された。幅1.0m、深さ18cmをはかり、埋土は暗灰青色粘土であった。出土遺物は少なく、壺1点、鉢1点、甕2点を図示できた(D 733～D 736)。

S X 018 (第20図)

チ-1の南端で、S D 151に流入するように、東から西へ流れる溝状の落ち込みで、幅1.2m、深さ30cmをはかる。埋土は暗灰青色粘土で、出土遺物は比較的多かった。そのうち壺3点、高杯1点、鉢1点、甕4点(D 737～D 745)を図示した。

2. 中期末～後期初頭の遺構

上流域(A・B区)では、弥生前期水田跡が、中期前葉の洪水で埋没した後、しばらく遺構の存在は確認されず、中期中葉後半に到って、一群の方形周溝墓が築造される。しかしこれらも、その直後に洪水堆積土によっておおわれ、中期末葉から、円形プランの堅穴住居跡群が形成される。この集落は、再び後期初頭、洪水堆積土によりおおわれるが、中期末には、集落の西よりを、南から北へ、大きく湾曲して流れるV字溝(S D 201)が築造され、環溝的な様相を示す。

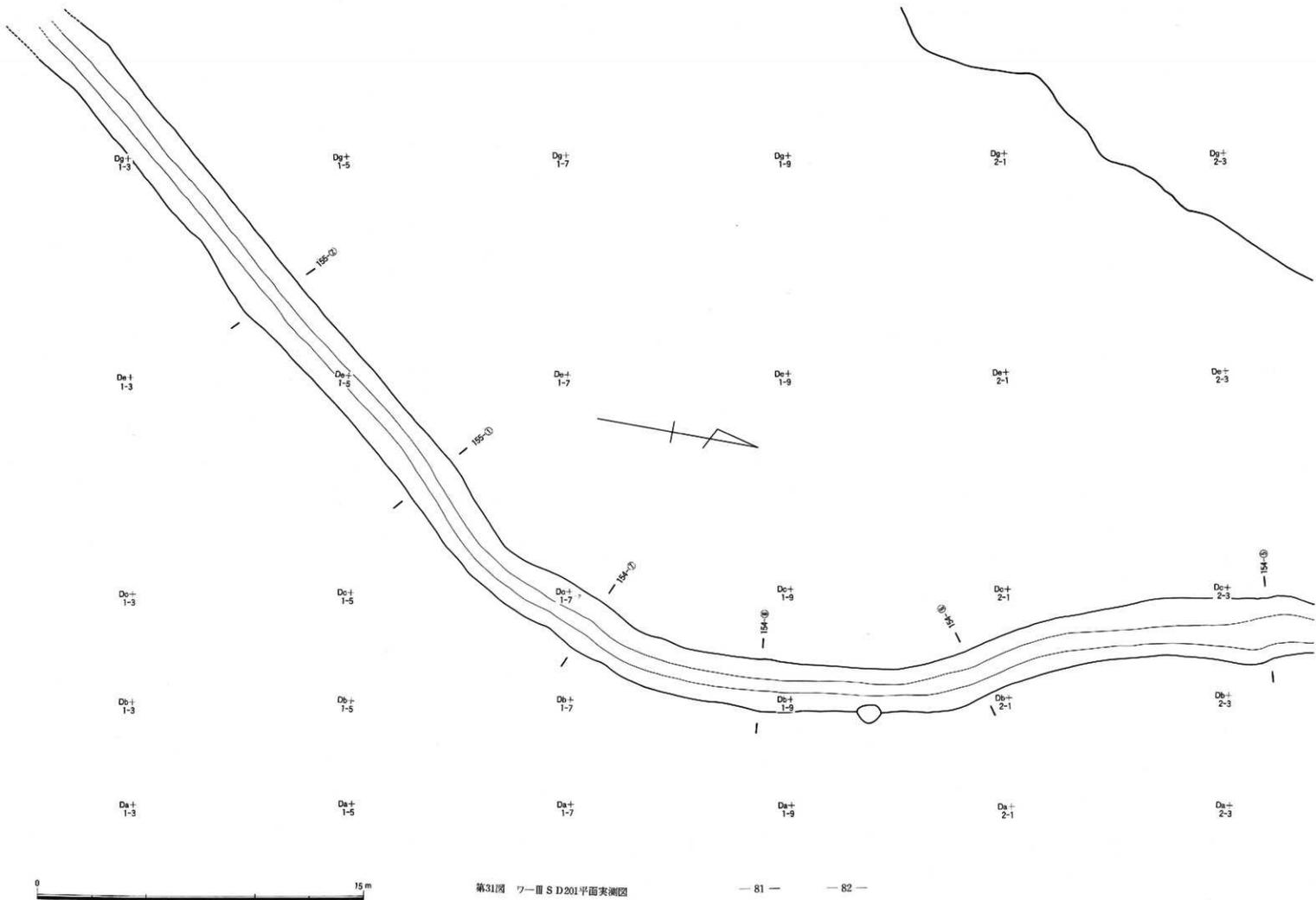
それを土層で説明するなら、弥生後期後半および、古墳時代後期初頭の遺構検出面で、弥生後期前半の洪水堆積土が、大きく2層に分類される。第1層が暗灰黄色粘土、第2層がマンガンの沈着のある暗灰黄色粘土で、それぞれ30cm前後の厚みをもつ。その下層の第3層は、弥生中期末～後期初頭の遺物包含層で、炭化物を微量に含んだ青灰色粘土で、10cm前後の厚みをはかる。そして、第4層の青灰色泥土は、弥生中期後半の洪水堆積土で、中期末～後期初頭の遺構群の地山となっているものである。厚さも1m前後あり、本来は、弥生前期の水田跡を埋没させ、中期後半の方形周溝墓の地山となった遺構面が、当然類別されるはずであるが、明確にできなかった。そして第5層が黒色粘土で、前期水田跡の耕土となったもので、約10cm前後の厚みをもつ。第6層には再び、青灰色粘土が1m以上あり、弥生時代以前の洪水堆積土とみられる。ここではまず記述の便宜上、S D 201を、次いで、集落跡について説明を加えたい。

A. S D 201(環溝C)の調査(第31図、第32図、図版152)

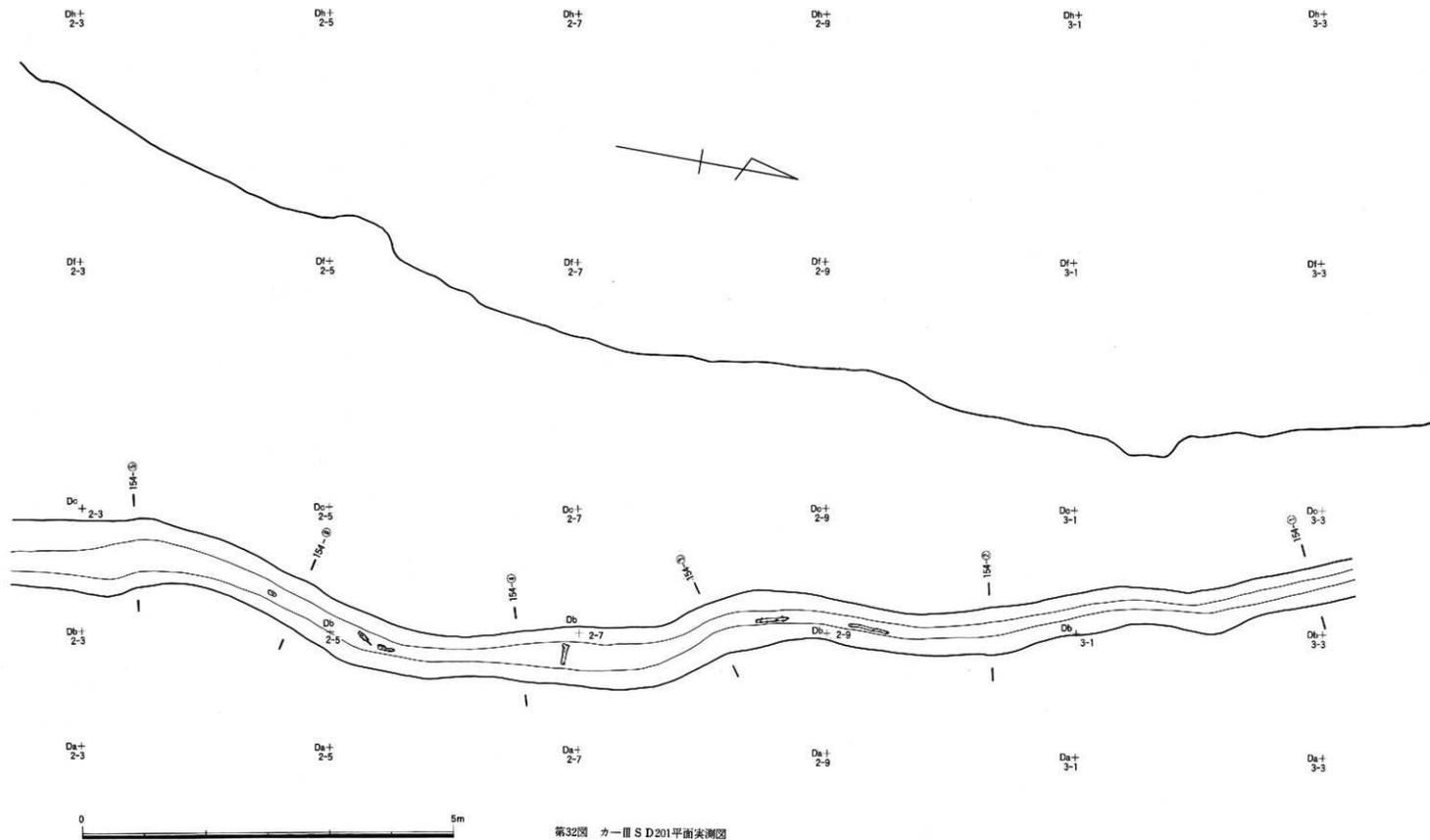
S D 201は、A・B・C地区を、一部屈曲しつつも、ほぼ直線的に南から北へ流れるV字溝で、北端と南端が、いづれも大きく西にカーブを描き、その先端は旧河道Aによって削平を受けているとみられる。直線部分で250m、全長355m余を検出している。幅1.3～2.6m、深さ0.8～1.6mをはかるU字ないしV字溝であるところから、やや幅は狭いものの環溝状の施設とみることも可能かと考える。ただし、環溝とした場合、その内側に当たる部分が、旧河道Aにより、大きくえぐられており、住居跡等の施設を検出できず、問題の残るところである。

溝内の堆積は、大きく三層に分類されるが、上層としたのは、①緑灰色砂質土、②灰緑色細砂土、③青灰褐色砂質土、の砂質系土からなり、中層としたのは、④灰色砂、⑤暗灰色砂の砂土、下層としたのは、⑥青灰褐色砂泥、⑦青灰黒色粘土、⑧黒灰色泥土、⑨暗青灰褐色泥土などの泥土からなっている。上層は洪水堆積土とみられ、ほとんど遺物を含んでいない。中・下層は、S D 201が機能している時期の堆積土とみられ、特に中層としたものは、地点によって消失している場合が多かった。

出土土器は、コンテナ80箱にのぼるが、大半が下層で、溝底にはりついたり、少し浮いた状態で検出されており、集落的な投棄を示す様相はなかった。中層・上層出土遺物は僅少であった。出土土器は、後述するように、大きな時期幅を持つものではなく、廃棄されず、一定の機能を果たしていた段階に、洪水により埋没したと推測される。これに対し、S D 201の内外に分布する堅穴住居跡群は、弥生中期に遡るものも含まれており、やや長い期間、存在したとみられる。そして、S H 108や、S H 125のように、S D 201によって掘削されるものもあるところから、上流域の集落が形成してより、廃絶するまでの、ある時期にS D 201が築造され、集落の廃絶とともに、埋没したと考えられるのである。なお、石製品としては、用途不明のもの2点(S 907・S 938)の出土が知られるのみである。



第31圖 ワーⅢ S D 201 平面実測図



第32図 カ-Ⅲ S D 201平面実測図

B. 集落跡の調査

(1) 竪穴住居跡

B区で検出された、この時期の竪穴住居跡は、総数40棟にはなるが、そのうち円形プランで、中央に土坑を持つ、一般的なタイプは25棟で、残り15棟は、方形プランをとるものが多い。全体に密集することや、重複することは少なく、後期後半の集落にくらべ、ゆったりした分布を示すことが注目される。なおこれらの住居跡は灰褐色粘土を地山とするが、約10cm前後でその下には青灰色グライ層の不安定な地山が厚く堆積している。

SH101 (図版150)

径7.5mの円形プランであるが、南北が8.0mとやや長い。東端は旧河道Bにより削平を受け余様はうかがえない。西端に小さく突出部があり、いくらかの施設が推定されるが、今後の課題としたい。この種の施設は、SH103や、SH109にもみえる。内部施設としては、中央に東西2.1m、南北1.4mの長楕円形の土坑があり、中央北よりに径75cm、深さ4.9mのピットがみえる。主柱穴はN-22°-Eの軸で、四箇所で見出し、SWの柱穴が径52cmとやや小さいほか、径70cm前後をはかる。柱穴は、深さ70cmをはかった。建て替え痕はないが、西よりに径60cm前後のピットが二、三あり、修復の可能性が考えられる。壁溝は、東壁に一部あって、幅40cm、深さ6.6cmをはかるが、東端には、径1.6m、深さ17cmをはかる、半円形の土坑があり、壁溝とつながっている。この東端の土坑は、貯蔵穴の可能性をもつものであろう。

出土遺物は、いずれも細片で、図示しうるものはなかった。

SH102 (図版150)

SH101の北6.0mに所在する竪穴住居跡で、ややいびつな隅丸方形形状を呈する。東西5.0m、南北5.0mをはかり、住居跡としては、やや疑問の残るものである。西側に接して、SK201が所在するほか、南西に竪穴住居跡の可能性も一部残るSK202もあって、一般的な円形プランをとるものとは、別な系統のものともみられる。内部施設としては、中央よりやや北よりに間仕切りの幅25cm、深さ9.4cmの溝が東西に切られており、その両側に、径50cm前後のピットが数個検出されている。これらが柱穴になるかどうかは、やや問題を残すが、上屋に関するものであることは間違いないと考える。

出土遺物は小破片が多いが、甕(F001)1点を図示した。いわゆる受口状の口縁を有する甕である。

SH103 (第34図)

径8mの円形プランをとる。壁溝が全周し(幅70cm、深さ16cm)、東端に東西9.5cm、南北1.2cm、深さ51cmの長円形の土坑があり、壁溝とつながっている。中央には径95cm、深さ32cmのやや小型の土坑があり、主柱穴は四ヶ所で検出された。いずれも、径95cm、深さ50cm前後で、礎板をもっていた。上述のように、これらの住居跡の立地する地域は、中期中葉と中期後半の二度にわたって、洪水によって埋没したところであって、集落形成時点においても、かなり不安定な地質であったとみられる。そのことが、かかる礎板の使用を促したとみられる。柱穴の方位はN-50°-Eで、NWの柱穴を除いて、建て替えが認められるほか、いくつかの補強用とみられる柱痕があり、それらにも礎板が認められた。また、北・西の柱穴間に間仕切りとみられる小溝が検出され、南東壁にも、東西1.4m、南北90cm、深さ40cmの長円形の土坑があり、東壁のものと同じく、貯蔵穴の可能性をもつ。

住居跡は深さ31cmをはかり、埋土は第1層が暗灰色粘土、第2層が灰青色粘土、第3層が青灰褐色粘質土で、堆積

そのものは比較的短期間になされたとみられる。遺物はやや多く、土器では、壺・鉢・甕など7点（F003—F009）を図示できた。石器では砥石1点（S406）の出土が知られる。

SH104（図版151）

径5.4mのややいびつな円形プランを呈する。東壁に幅90cm、長さ3.1m、深さ14cmの溝状遺構がとりつき、西側に接して、径1.0m、深さ11.6cmの小土坑が所在する。壁溝・中央土坑は検出されず、主柱穴が四ヶ所で検出をみた。いずれも径45cm、深さ14.4cm前後のもので、N-22°-Eの軸をとるが、建て替えの痕跡はなかった。

住居跡の深さは10.3cmをはかり、埋土は暗灰青色粘土であった。出土遺物の小破片ばかりで、図示できるものはなかった。

SH105（図版151）

外形は、径5.1mの円形プランをとり、北側に1.5m×1.6mのやや大きな張り出し部をもつ。壁溝・中央土坑は検出されず、主柱穴は、S-Eのものを除き、3ヶ所で検出した。径40cm、深さ33.9cm前後をはかり、N-12°-Eの軸をとるが、建て替えは認められなかった。

住居跡の深さは14.5cmをはかり、埋土は第1層が暗灰青色粘土、第2層が灰青色粘土であった。出土土器は少破片が大部分で、わずかに壺と甕の底部を各1点、図示するにとどまった（F010・F011）。石器では用途不明品1点（S937）の出土が知られる。

SH106（第35図）

径7.4mの円形プランをとり、南にS X 208、北西にS K 209が所在する。中央に東西1.5m、南北1.9m、深さ90cmの楕円形の土坑があり、主柱穴はN-23°-Wの軸をとり、四ヶ所で検出され、建て替えは認められない。いずれも径60cm、深さ66cm前後で、S-W・N-Eには、柱根の一部が残存していた。壁溝は南西部に認められるだけで、全周はしない。幅35cm、深さ31cmである。このほか南より若干の土坑が認められた。

住居内は床面まで30cm残存していたが、埋土は、第1層が暗灰青色粘土、第2層が灰青色粘土、第3層が青灰褐色粘土で、床面の貼り替えは確認できなかった。出土遺物は多くなく、土器では、台付鉢・器台・甕各1点（F012—F014）を図示できた。石器では、砥石4点（S438—S440・S442）、用途不明品1点（S939）を図示した。

SH107（図版152）

調査区の西端、南西半を旧河道によって削平された住居跡で、径8.1mの円形プランをとる。中央に東西1.4m、南北1.0m、深さ32cmの長円形の土坑をもち、主柱穴は、N-21°-Eの軸をとっている。削平されたS-Wのものを除き、径60cm前後、深さ42cmをはかる。壁溝は認められず、住居内には、若干の小ピットが散在していた。

住居跡は床面まで22cm残存していた。埋土は、第1層が暗灰青色粘土、第2層が灰青色粘土、第3層が青灰褐色粘土で、床面の貼り替え等は確認できなかった。出土遺物は多く、総数13点を図示できた。壺3点をはじめ、鉢2点、高杯1点、甕5点、蓋2点（F013—F024）である。

SH108（図版152）

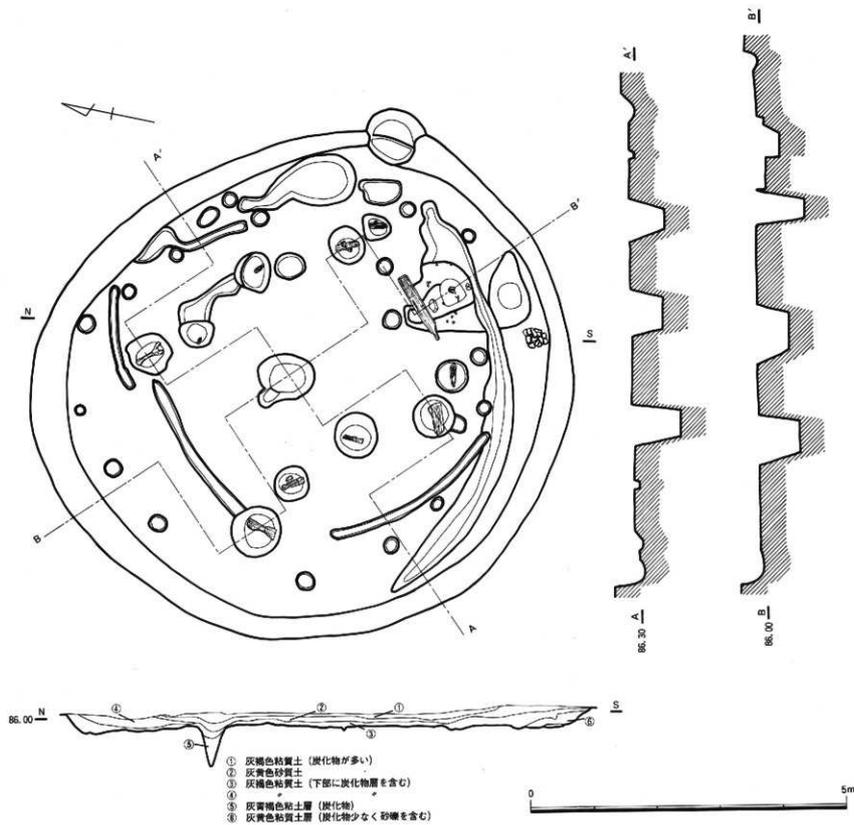
SH107の北に接して所在する東西5.6m、南北5.7mのややいびつな隅丸方形プランをとる。中央東よりを南北にS D 201が切っており、全様はうかがえないが、S-W・S-Eに、径30cm程度の小柱穴を検出しており、N-11°-Eの軸をとり、主柱穴となる可能性をもつ。ただし、全体に残りは無く、出土遺物もないところから、住居跡としては疑問のあるものである。なお、住居跡の深さは、20cm前後残存しており、埋土は暗青灰色粘土であった。

SH109（第36図）

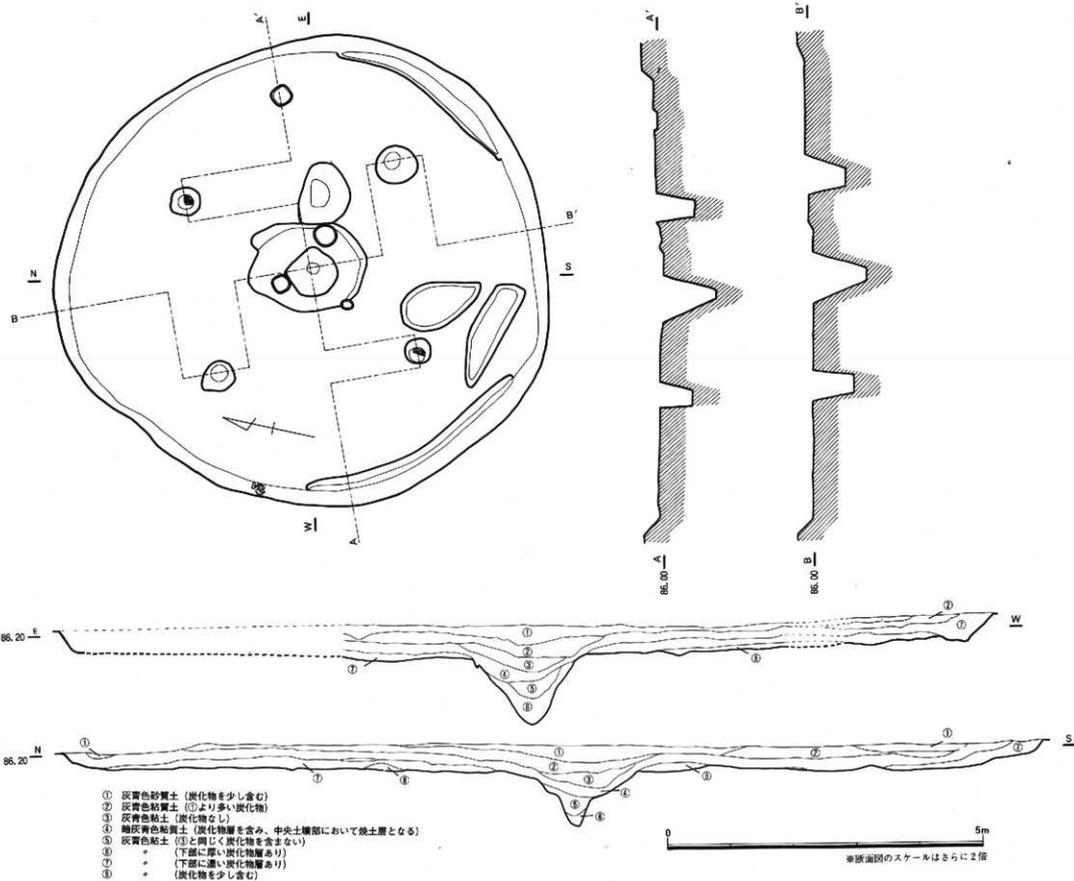
SH108の北に接して所在する径7.8m、深さ38cmをはかる、ほぼ円形プランを呈する竪穴住居跡である。壁溝は全周



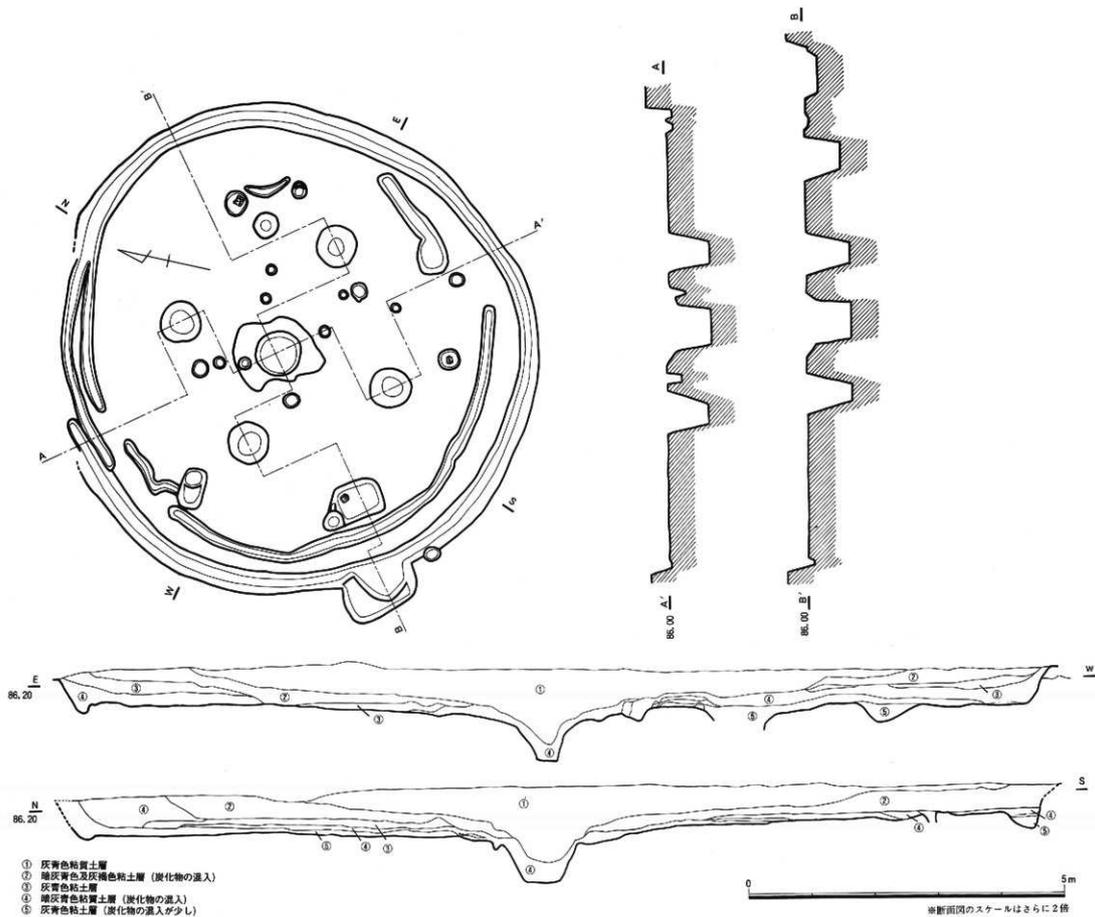
第33图 口一Ⅲ·S D 201 型穴居墓葬群平面实测图



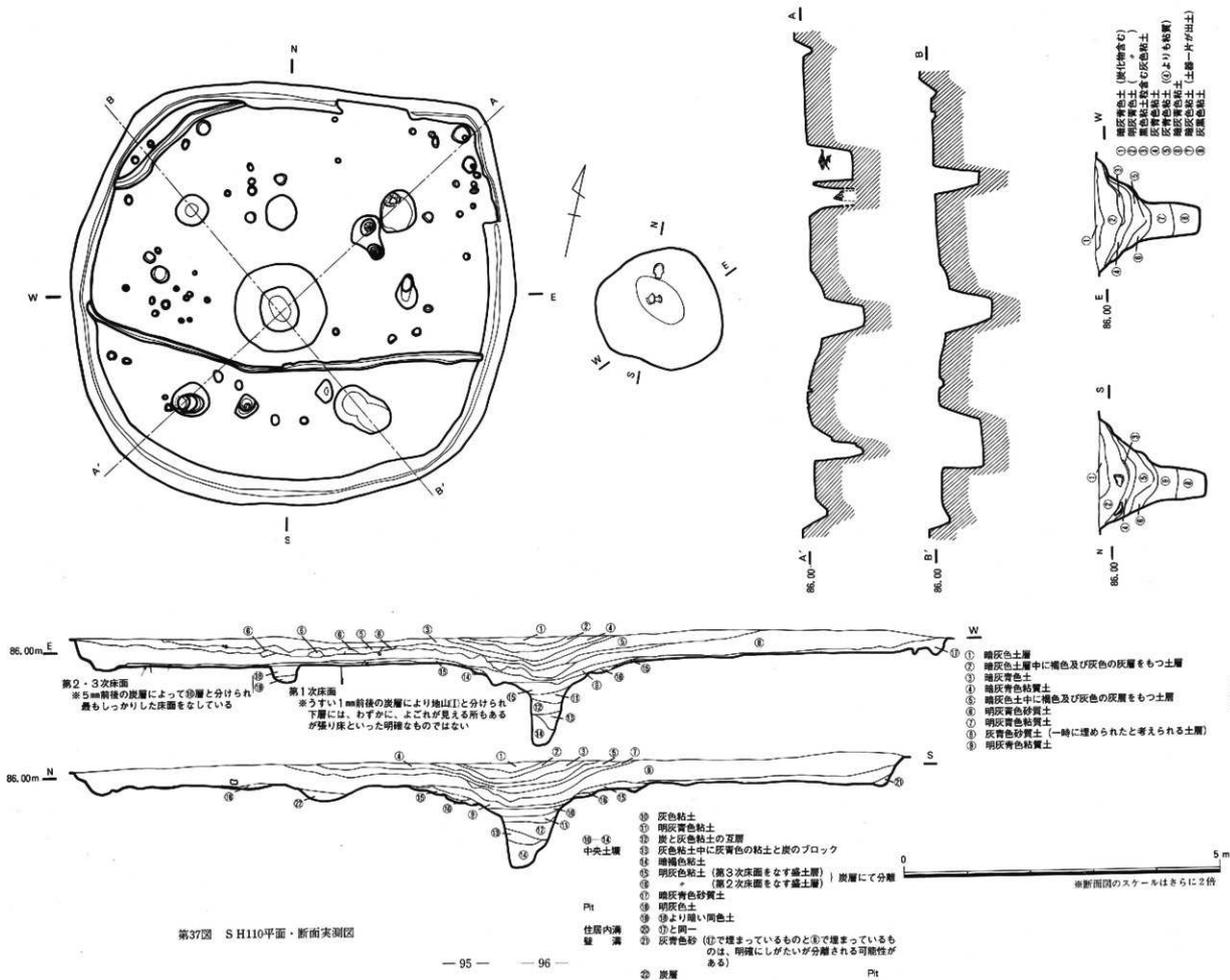
第34図 SH103平面・断面実測図



第35図 SH106平面・断面実測図



第36図 S H109平面・断面実測図



し、幅15cm、深さ17cmをはかる。南側と西側および北側の一部には、内側に幅25cm、深さ14cmの溝がめぐって、二重の壁溝をもつ如き様相を示す。西側には、南北1.3m、東西90cmの土坑状の張り出しがあって、SH101や、SH105と類似した施設である。中央には東西90cm、南北1.4m、深さ46cmの土坑があり、内側は径70cmの円形を呈する。底には炭化物が堆積し、そのまわりにも炭化物が広がっていた。主柱穴は四ヶ所とも明確に検出し、いずれも径50cm、深さ80cmをはかる。軸はN-34°-Wをとり、SH118、SH124、SH125などとほぼ同じであった。そのほか、住居跡内には、大小の土坑が数基あり、西よりのものは、東西60cm、南北65cmの方形を呈し、深さ30cmをはかる。内部より板状の木製品が出土したが、性格は明らかでない。中央土坑の周囲や、主柱穴のまわりには、大小のピットがあり、住居跡の東寄りには、径30cm前後、深さ20cmの中規模のピットが、3個あり、そのうち二ヶ所には、柱根の破片が残存していた。なお、他の小ピットは、径15cm前後、深さ15cmをはかるものが多かった。

住居跡は、床面まで38cm前後残存し、床面は3面認められた。埋土は、第1層が灰青色粘質土、第2層が暗灰褐色粘土、床面は灰青色粘土が敷かれていた。出土遺物は多くないが、土器では、竈2点、高杯1点(F025~F027)を、石器では砥石(S412)、剃片(S922)各1点を図示した。

SH110 (第37図)

ロ-I区の西より、SH113、SH115の東に所在する。東西7.0m、南北6.6mの隅丸楕円形を呈する。壁の内側に幅20~40cm、深さ6cmの小溝がめぐり、NEコーナーの一部のみ壁溝が途切れている。又、NWコーナーには、壁溝の内側に幅15cm、深さ10cmの小溝が切られている。住居内には、多数の小ピットがあり、主柱穴は、径46cm、深さ85cm前後で四ヶ所で検出されたが、N-12°-Wの軸をとり、NEのものは3回の建て替えが認められ、SEも2回の建て替えがある。主柱穴の間には、NE・NW間を除き、径25cm、深さ25cm前後の中規模のピットがあり、SW・SE間のものには柱根が残存していた。なお主柱穴のうちNEのものには、すべて柱根を残しており、径17cm前後をはかる。中央土坑は径1.4mをはかり、二段掘りの内側の径は60cm、深さ85cmをはかるきわめて深いものである。中央土坑の北側には径48cm、深さ5cmの浅い落ち込みがあって、内部は炭化物のみであった。中央土坑の南側には、住居内を区画するように、幅12cm、深さ5cm前後の小溝が東西に走っており、間仕切りとみられる。

住居跡は深さ35cmほど残存し、埋土は第1層が暗灰青色粘土、第2層が灰青色粘土で、中央部は、深い中央土坑が存在するため、最後まで埋没しなかったことが判明する。床面は上述のように、3回の張り替えがあるが、中央土坑のまわりと、その東側に限定されていた。なお、住居跡の東側に接して、径1.9m、深さ1.6mのややいびつな円形を呈する。深い土坑が検出されているが、住居跡より、やや後出することが、出土遺物より指摘できる。ただし住居内の出土遺物は、土器では小破片で、図示できるものはなかったが、石器では磨製石鏃の未製品とみられる剃片2点(S914・S915)の出土が知られた。

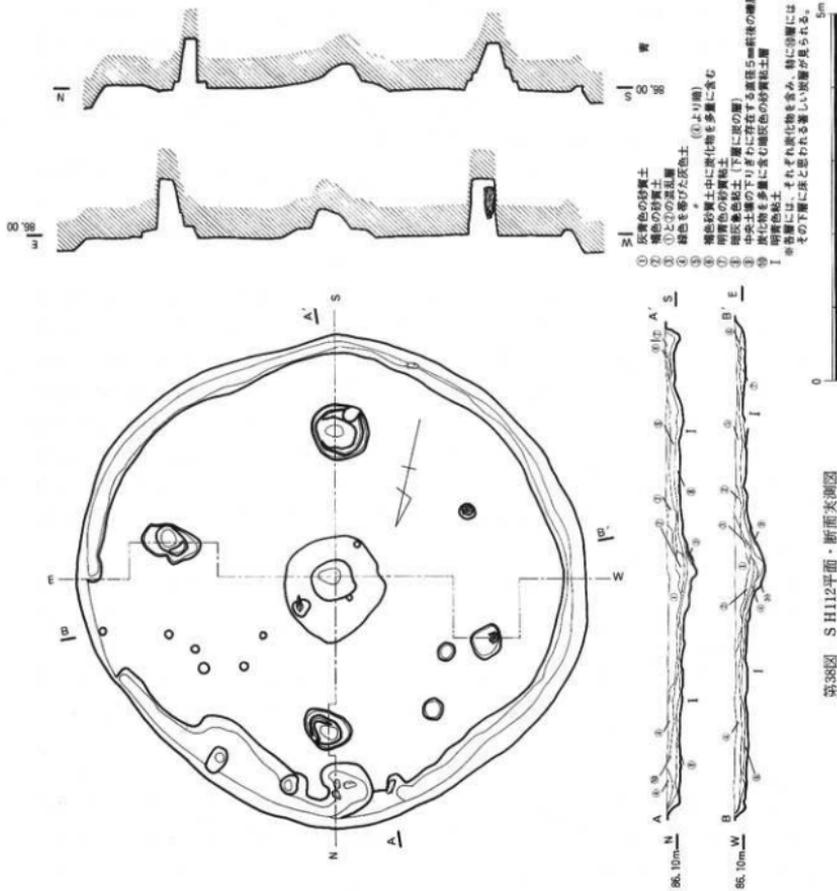
SH111

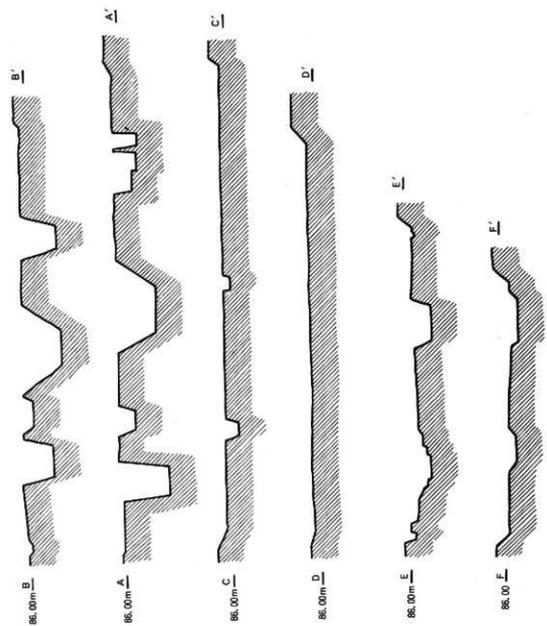
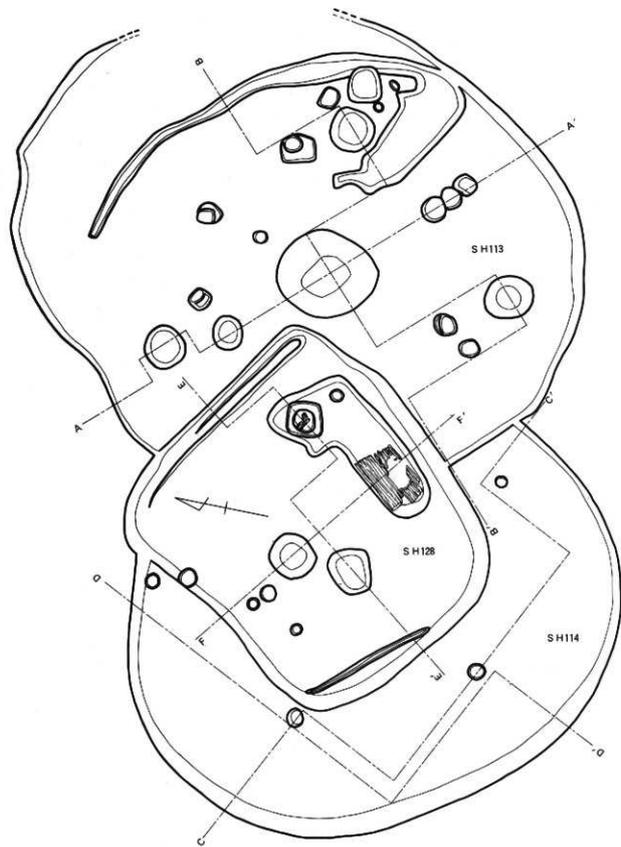
ロ-I区の北西端で検出した、東西4.0m、南北3.0mの隅丸楕円形プランを呈する、小規模な住居跡で、北側は明確でない。壁に沿って、幅15cm、深さ8cmの小溝がめぐり、中央より南と東よりに径40cm、深さ30cm前後のピットが、4ヶ所検出された。N-13°-Wの軸をとるが、主柱穴となるかは不明。

住居跡は深さ15cm残存し、埋土は暗灰青色粘土で、出土遺物は、少破片で図示するには至らなかった。

SH112 (第38図)

ハ-I区の南端、SH111の北東に所在する。径6.9mのややいびつな円形プランをとる。壁溝は幅8~12cm、深さ15cmで、東壁の一部を除いて廻らしている。ただし、北端に円形の落ち込みがあり、東端に向けて別の溝となっている。中央土坑は径1.45mのややいびつな円形を呈し、二段掘りの内径は55cm、全体の深さは35cmをはかる。なお中央土坑の





第39图 S H113 · S H114 · S H128平面及剖面图

内側、東側に、径20cm前後のピットがあり、柱根が残存していた。主柱穴は、東西南北に四ヶ所検出し、N-42.5°-Eの軸をとるが、径50~80cmの円形ないし楕円形を呈し、東の柱穴が最も深く85cm、南が78cmで、柱根を残していた。東の柱穴が三回建て替えられているほか、建て替へは認められなかった。北と西、西と南の主柱穴の間と、西の柱穴の東に、中規模の柱穴があり、径22cm~30cm、深さ20cm~55cmをはかる。このうち、西と南の間のものには、柱根が残存していた。

住居跡は深さ12~20cm前後残存しており、少なくとも1回の床の貼り替えが認められた。埋土は大きく2層に分かれ、第1層が灰青色の砂質土、第2層が、褐色の砂質土であった。なお出土遺物は、小破片で、図示するには至らなかった。

SH113 (第39図)

ロ-II区の東端に所在する竪穴住居跡で、径6.8mの円形プランをとるが、北東側に拡張しており、南北が径8.5mをはかる。本住居跡は、北側のSH115に切られるほか、西側に重複するSH114を切り、SH128によって、西側を切られており、SH114→SH113→SH115、SH114→SH113→SH128の序列が明らかになる。

上述のようにSH113は北東に拡張しており、壁溝はもとの北東壁のみに、幅12~42cm、深さ12.5cmの小溝がめぐっている。この小溝は、東壁に接して所在する、東西2.2m、南北0.8m、深さ14cmの上坑に流入している。中央土坑は東西1.3m、南北1.65m、深さ62cmをはかる楕円形を呈する。主柱穴はN-37.5°-Eの軸をとり、SWが検出できなかったが、他の三ヶ所検出し、径65cm、深さ56cm前後をはかる。主柱穴の中間および周辺には、径30~45cm、深さ50cm前後の中規模ピットがあり、上部施設に伴うものと考えられる。

住居は深さ12cmが残存するもので、埋土は暗灰青色粘土であった。出土遺物も少破片が多く、わずかに、高杯・鉢の破片各1点(F028・F029)を図示できた。

SH114 (第39図)

SH113に切れ、東に接して所在する竪穴住居跡である。東西6.5m、南北8mの楕円形プランを早する。中央をSH128により、大きく割半されており、全様はうかがえないが、壁溝はないとみられ、主柱穴もNW、SEに径25cm、深さ10cm前後の小ピットで、N-22.5°-Wの軸をとるが、疑問が残る。中央土坑も不明で、深さ60cmほど残存し、埋土は暗灰青色粘土であった。出土遺物は少破片で、図示には至らなかった。

SH115 (第40図)

SH113の北に接して所在する竪穴住居跡で、SH113を切っており、後出することが明らかである。径7.5mの円形プランをとり、壁溝は認められなかった。中央土坑は検出していないが、東南に、径95cm、深さ50cmの円形の上坑があり、それに準ずるものとみられる。

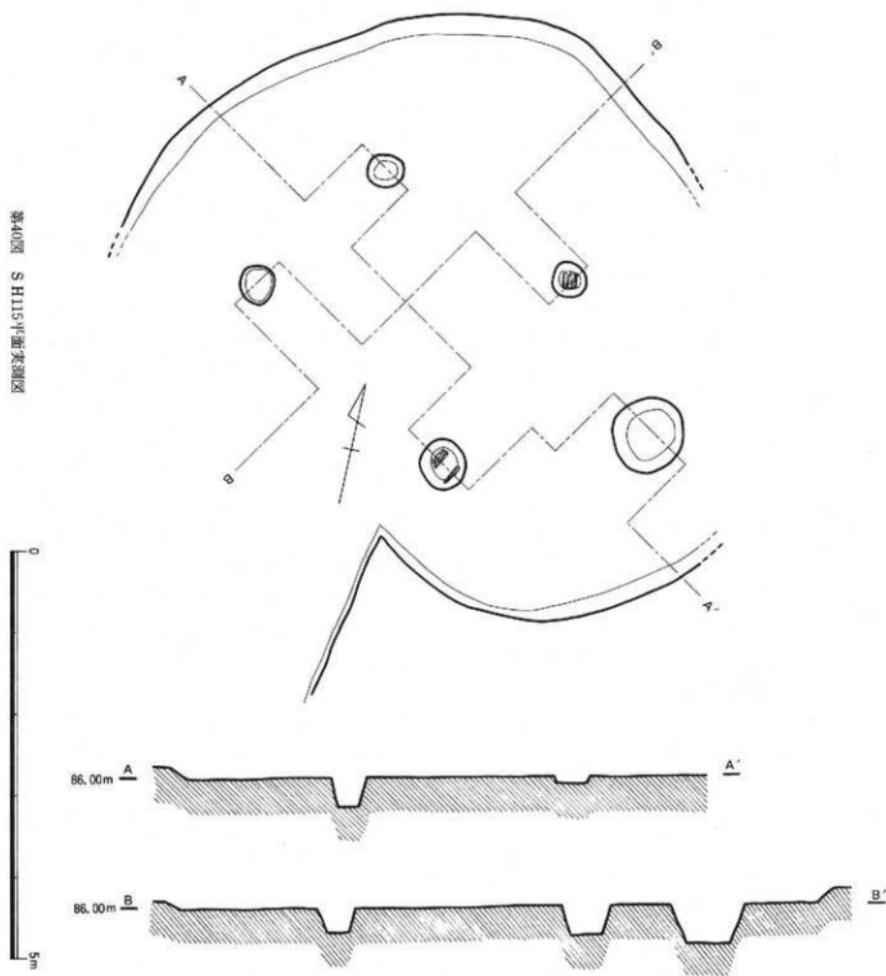
主柱穴は4ヶ所検出し、N-23°-Eの軸をとるが、いずれも、径45~60cm、深さ30cm前後をはかり、東と南の柱穴には、礎板が残存していた。

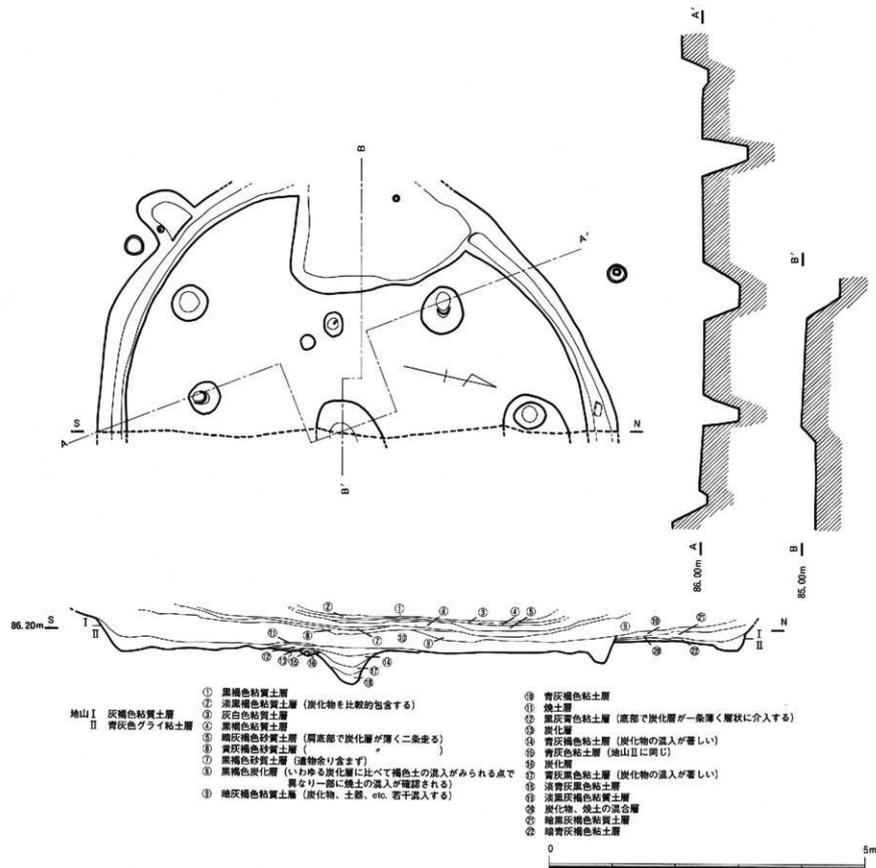
住居跡は、深さ10~15cm残存するのみで、埋土は暗灰青色粘土であった。出土遺物は少なく、罌1点(F030)のみ図示することができた。

SH116 (図版153)

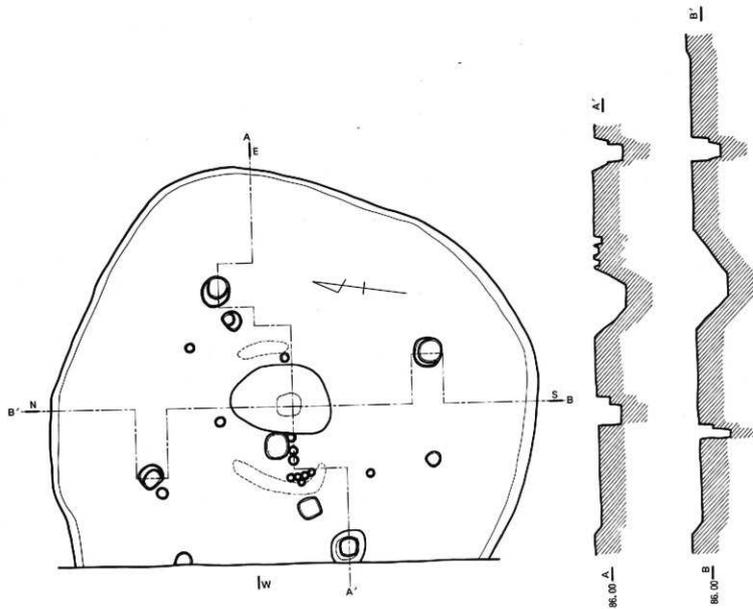
ロ-IIの中央、SH115の北西に所在する竪穴住居跡で、弥生後期の環濠(SD202)によって、北端部を削平されている。西に接して所在するSH117を切っており、後出することが知られる。径6.0mの円形プランをとり、壁溝は検出しなかった。いわゆる中央土坑は、やや西よりに所在し、径65cm、深さ30cmと規模は小さかった。そして、その東と南には、ほぼ同規模の浅い土坑があり、一連のものとも考えられる。南東の壁よりに、東西1.2m、南北0.7m、深さ20cmの長方形を呈する土坑があり、貯蔵的な性格をもつものか、主柱穴は、四ヶ所検出され、N-26°-Eの軸をとり、北

第40圖 SH1111遺址平面圖

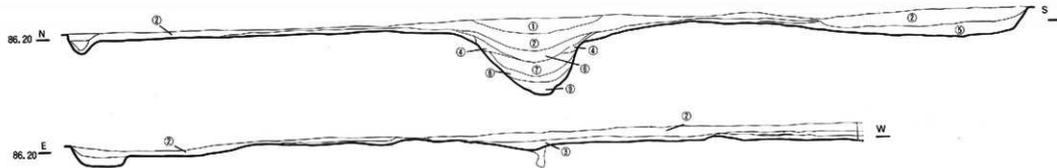




第41図 SH118平面・断面図



- 地山Ⅰ 反褐色粘質土層（下部では還元化を極めてグライ化する箇所あり）
- ① 反褐色粘質土層（腐葉物）
 - ② 黄灰色粘質土層（炭化物、土器、etc. 比較的多数）
 - ③ 炭化層
 - ④ 粘土層
 - ⑤ 反褐色粘質土層（地山Ⅰに類似するがわずかに炭化物が確認される）
 - ⑥ 反褐色粘質土層
 - ⑦ 黄灰色粘土層（焼土、炭化物の混入が著しい）
 - ⑧ 黄灰色粘土層（焼物ナシ）



第42図 SH120平面・断面実測図

と西のものが、径60cm、深さ18cmとやや大きく、東と南のものは、径40cm、深さ11cmであった。

住居跡の深さは40cmときわめて残りは悪い、埋土は4層に分類され、第1層が灰褐色砂質土、第2層が暗灰褐色砂質土、第3層が暗灰褐色粘土、第4層が淡黒灰褐色粘土で、出土遺物は少なかつた。土器ではわずかに、小型の甕1点(F031)を図示するにとどまった。

SH117 (図版153)

SH116の西に接して所在する住居跡で、SH116に切られており、先行することが知られる。残りは悪く、全体の3分の1程度しか検出できなかつたが、径6.5m前後の円形プランをとるとみられる。壁溝・中央土坑・支柱穴等、住居跡に伴う施設は全く検出できなかつた。

住居跡は、深さ26cmにすぎず、埋土は暗灰青色粘土で、出土遺物は少なく、わずかに、甕1点(F032)を図示するにとどまった。

SH118 (第41図)

ロ-II・III間に所在する。径8.3mの円形プランをとる。SH119と重複して築造されており、先行することが知られる。西壁に接して、東西3.0m、南北2.4m、深さ40cmのいびつな円形土坑があり、それにとりつく形で、幅48cm、深さ25cmの壁溝が廻るが、東側では途切れていた。中央には、径75cm、深さ38cmの円形土坑があり、支柱穴はNW・SW・SEの三ヶ所で検出し、径60cm前後、深さ50cm前後をはかる。N-23°-Wの軸をとると、NEは未検出で、SEのみ1回の建て替えが認められる。柱根の残存はみられず、ほかに壁溝ぞいに、5ヶ所のピットないし、土坑が検出された。住居跡の深さは15cm前後で、埋土は大きく3層に分類され、第1層が黒灰褐色粘土、第2層が黒灰色粘土、第3層が淡青灰褐色粘土であった。出土遺物は、比較的多く、土器では壺5点、高杯1点、鉢1点、甕3点(F033~F042)、石器では、石剣1点(S010)、砥石1点(S418)を図示できた。

SH119 (図版153)

SH118に重複して所在する竪穴住居跡で、SH118を拡張した可能性もある。壁溝等の施設はなく、北側に小ピットが若干検出されたのみであった。推定で径6.2mの円形プランをとり、深さ25cmをはかる。埋土は黒灰褐色粘土で、出土遺物はなかつた。

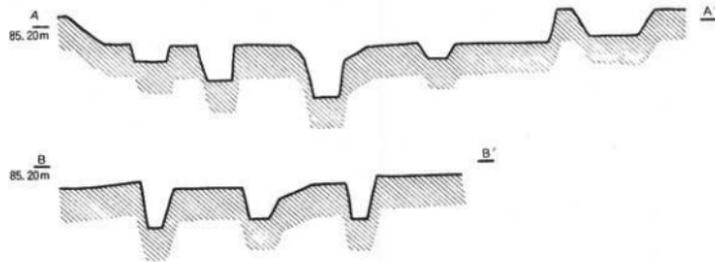
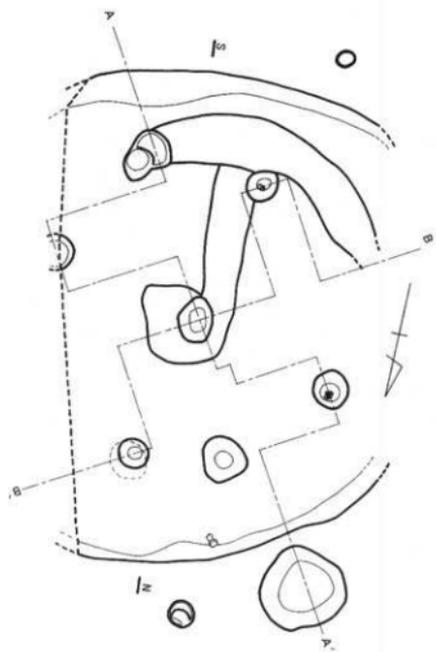
SH120 (第42図)

SH119の北に所在する。径7.8mの隅丸方形気味の円形プランをとる。壁溝はつくらず、中央に東西1.2m、南北1.8m、深さ1.2mをはかる、楕円形の土坑をもつ。支柱穴は、4ヶ所で検出され、N-11°-Eの軸をとる。いづれも径50cm、深さ20cmをはかり、柱根等の残存はなかつた。床面にはこのほか、中・小のピットが、若干認められたほか、中央土坑の東と西に、焼土塊が、幅10cm前後の溝状に広がっていた。

住居の深さは、20cm前後残存し、埋土は第1層が灰黒色粘質土、第2層が黒灰色粘質土で、中央土坑内には、炭化物・焼土と灰褐色粘土が堆積していた。出土遺物は比較的多く、土器では甕3点、高杯2点、鉢1点、甕1点、蓋1点を図示した(F043~F050)。石器では、大型蛤刃石斧1点(S215)の出土が知られる。

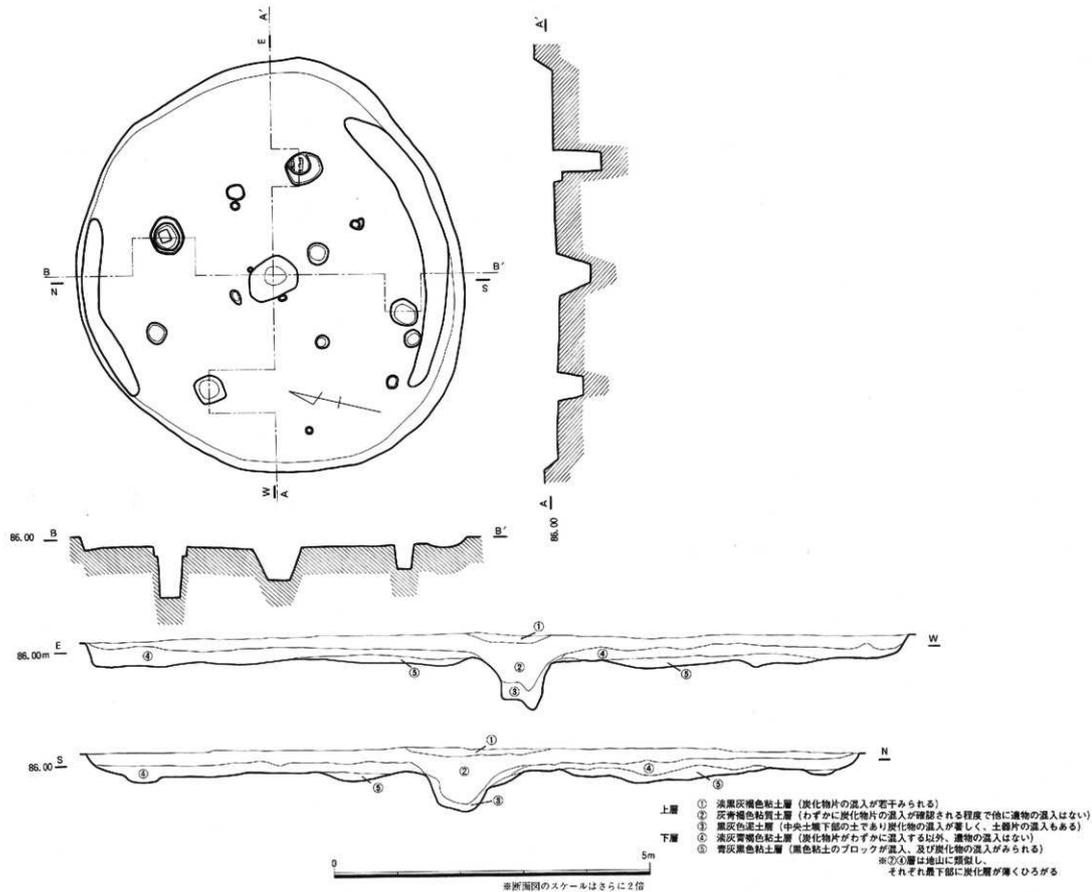
SH122 (第43図)

SH120の北西に所在する。径6.8mのいびつな円形プランをとる。壁溝は認められないが、南の壁沿いに、幅50cm、深さ15cmの溝が弧を描いてめぐり、中央土坑から南にのびる。幅65cm、深さ10cmの溝が合流している。住居内を区画するためのものか、中央土坑は東西1.2m、南北1.0m、深さ58cmをはかり、隅丸方形を呈する。二段掘りで、内径は43cmをはかる。支柱穴は4ヶ所で検出し、N-32°-Wの軸をとる。NW・SWには柱根が残存しており、いづれも径45cm、深さ60cmをはかる。NE-NW・SE-SWの中間に径60cm前後、深さ70cmのやや大きな柱穴が検出されており、機持的



- ① 灰褐色粘质土
- ② 黄褐色粘质土
- ③ 灰褐色粘质土
- ④ 黄褐色粘质土
- ⑤ 灰褐色粘质土
- ⑥ 黄褐色粘质土
- ⑦ 黄褐色粘质土

第43图 SH122平面·断面未测区



第45図 SH124平面・断面図

な役割をもつものかも知れない。南東壁には、東西90cm、南北1.5mの隅丸長方形を呈する、深さ13cmの土坑があり、住居外にも、北に接して、径1.1m、深さ30cmの円形の土坑が所在し、本住居跡にかかわるものとみられる。

住居跡は深さ40cmまで残存し、埋土は第1層が黒灰褐色粘質土、第2層が灰褐色粘土、第3層が青灰褐色粘質土であった。出土遺物は少なく、器台、台付鉢、葦各1点（F 051～F 053）を図示するとどまった。

S H 123 (第44図)

S H 118の西に接して所在する。径6.8mの円形プランをとる。壁溝はもたないが、南半の壁に沿って、幅30cm前後、高さ5.5cmのベット状遺構がめぐり、一方、主柱穴によって囲まれた東西3.9m、南北4mの部分が、高さ13cmと一段高まっており、ベット状遺構との間は、幅90cmの溝状を呈している。或は排水を意図したもののか。中央には、東西90cm、南北70cmの方形の土坑があり、二段掘りの内径は50cmをはかり、深さは20cmであった。土坑の周囲には、径30cm前後の中規模のピットと小ピットが認められた。主柱穴は東西南北の4ヶ所で検出され、N-33°-Eの軸をもつ。径50cm前後、深さ55cmをはかり、東と西のものに建て替えが認められ、北のものに柱根の一部が残存していた。なお、本住居跡の南西にはS K 211、北にS K 210など大型の土坑が所在し、関連が注意される。住居跡の深さは25cmをはかり、埋土は大きく3層に分かれ、第1層は黒灰褐色粘土、第2層は暗青灰褐色粘土、第3層は黒褐色粘土で、中央土坑周辺を中心に床面に10cm前後の炭化物の堆積があった。出土遺物は比較的多く、土器では壺2点、鉢1点、高杯1点、甕3点（F 054～F 060）を図示した。石器では、砥石1点（S 232）の出土が知られる。

S H 124 (第45図)

S H 122の西に隣接して所在する。径6.3mの円形プランをとる。北壁に沿って幅45cm、長さ3.2m、深さ5cmの、南壁に沿って、幅40cm、長さ4.5m、深さ7cmの部分的な壁溝がみられた。中央に東西65m、南北75cm、深さ1.2mの隅丸形の土坑があり、主柱穴は4ヶ所で検出し、軸はN-40°-Eをとる。径50cm、深さ36cmをはかり、N E・S Eには柱根が残存していた。建て替え痕はなく、主柱穴間には、径30cm、深さ38cmの中規模のピットがあり、上層に関連するものであろう。

住居跡の深さは20cmをはかり、埋土は第1層が黒灰褐色粘質土、第2層が灰青褐色粘質土、第3層が黒灰色泥土、第4層が淡灰青褐色粘質土で、中央土坑の周辺に、一部炭化物のたまりがみられた。出土遺物は少なく、土器では壺1点、甕1点（F 061・F 062）を図示した。石器では石剣1点（S 004）の出土が知られる。

S H 125 (第46図)

S H 124の西に所在する。径6.6mの円形プランをとる。東端をS D 201により切られており、全様をうかがうことはできないが、残りの良好な住居跡である。幅35cm、深さ18cmの壁溝がめぐり、中央には東西1.0m、南北1.1m、深さ83cmの長方形の土坑があり、4ヶ所で主柱穴を検出した。N-39°-Wの軸をとり、いづれも、径70cm、深さ60cm前後をはかり、N EとS Wの柱穴に礎板が残存していた。主柱穴間には、径10cm、深さ30cmの小ピットがあるほか、床面には無数の小ピットがみられた。そして、この住居跡だけであるが、壁溝の中央に、一定間隔で、径10cm前後、深さ5cm前後の小ピットが検出された。これも上層にかかわる可能性が大きい。

住居跡は深さ40cm前後をはかり、床面は二度貼り替えられているが、西側についてのみ、その痕跡はなかった。埋土は、第1層が黒灰褐色粘土、第2層が暗青灰褐色粘質土で、中央土坑の底と、その周囲の床面上に、炭化物の厚い堆積がみられた。出土遺物は少なく、土器では壺2点（F 063・F 064）を図示するとどまった。石器では、石剣2点（S 005・S 013）、大型給刃石斧1点（S 213）、用途不明石製品3点（S 925～S 927）。

S H 126 (図版151)

I-II区のS H 103の南に所在する、やや小型の隅丸方形プランの竪穴住居跡である。東西3.9m、南北4.1m、深さ

16.3cmをはかる。壁溝や中央土坑は検出されず、主柱穴のみ4ヶ所で検出された。N-25°-Wの軸をとり、径50cm、深さ8.4cmをはかる。埋土は暗灰青色粘土で、出土遺物はなかった。

S H128 (第39回)

S H113・S H114に重複して検出された竪穴住居跡で、東西4.6m、南北5.2mの方形プランをとる。N-37°-Eの軸をとり、北壁と南壁の一部に沿って、壁溝がめぐり、前者は幅18cm、深さ6.5cm、後者は幅10cm、深さ5cmをはかる。中央付近に径75cm、深さ28cm前後の上坑が二基所在するが、いわゆる中央土坑となるかどうかは疑問である。住居内の東側に、東西1.0m、南北3.0m、深さ13cmの大きな落ち込みがあり、南よりで1.0m×60cmの板材が2枚検出され、北端に、一辺70cmの方形の掘り方をもつ柱穴があり、柱根が残存していた。この施設の性格は、明らかでない。いわゆる主柱穴とみられるものはなく、西よりに、径30cm前後の小ピットが数個検出されたにすぎない。住居の深さは20cm前後残存し、埋土は暗灰青色粘土であった。出土遺物は少なく、台付鉢1点(F065・F066)を図がした。

S H129 (図版153)

S H128の西に所在する、一辺4.3mの方形プランをとる竪穴住居跡である。N-9.5°-Wの軸をとり、壁溝・中央土坑・主柱穴などの諸施設は検出できなかった。北壁沿いの一部に、幅10cm、深さ9.8cmの小溝が1.1mほど検出され、壁沿いに、径25cm前後の小ピットが多数検出された。中央よりやや北よりに、焼土・炭化物の広がりが検出された。住居の深さは23cm前後で、埋土は暗灰青色粘土であった。出土遺物は少なく、壺1点(F067)のみを図示できた。

S H130 (図版153)

S H129の北に所在する。一辺3.3mの方形プランをとる。N-28°-Eの軸をとり、中央土坑・壁溝・主柱穴等の施設は認められなかった。住居内には径25cm前後の小ピットが、数個検出されただけである。住居跡の深さは16cm前後で、埋土は暗灰青色粘土であった。北東に隣接して、S K207があるが、関連するものとみられる。なお出土遺物はなかった。

S H131～S H139

これらの住居跡は、必ずしも、明確なプランで確認したものでなく、炭化物・焼土等の広がりにより、住居跡と推定したもので、若干の出土遺物があった。これらについては、上層で検出した住居跡の残骸の可能性もあり、あくまで参考資料として、遺物のみを掲出した(F068～F081)。

S H140 (図版153)

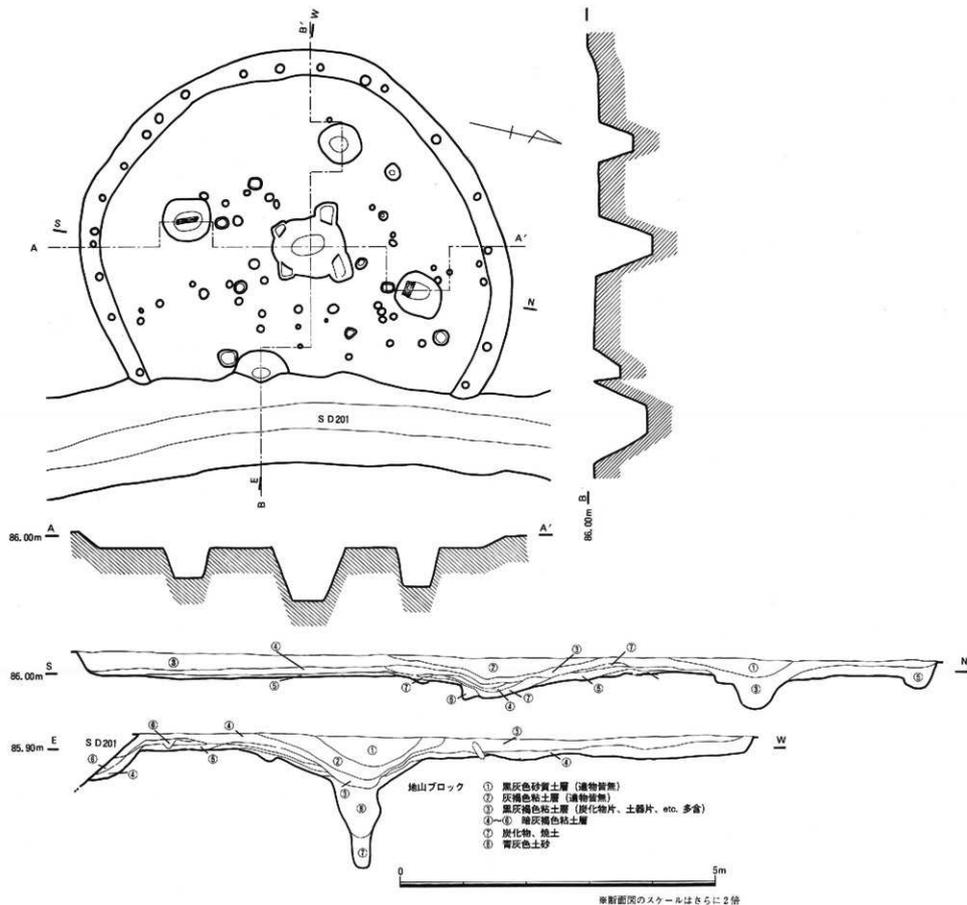
S H120の北で検出した、一辺3.3mの方形プランをとる、小型の竪穴住居跡である。壁溝・中央土坑・主柱穴などの施設はなく、北壁の内外に、焼土・炭化物の広がりが認められるのみであった。住居跡の深さ17cmをはかり、埋土は暗灰青色粘土であった。出土遺物は少なく、土器ではわずかに甕底部1点(F082)を図示するにとどまった。石器では、石剣1点(S012)の出土が知られる。

(2) 土坑

住居跡の周辺には、径10cm前後の小ピットが、かなり多く検出されており、径30cm前後の中規模なピットが、その周辺に点在していた。そして、全長4.0m前後の、やや大規模な上坑も、かなり検出されており、葉落内の機能として注目されるところである。ここでは、主として、出土遺物のある土坑を中心に説明しておきたい。

S K201 (図版150)

イ-IのS H102の西に接して所在する、円形の土坑である。径2.5m、深さ42cmをはかり、埋土は暗灰青色粘土であ



第46図 S H125平面・断面図

った。出土遺物は少破片で、図示するには至らなかった。

SK202 (図版150)

SH101の北西に所在する、東西2.8m、南北4.5mのいびつな長方形の土坑である。深さ17cmの平坦な底を呈し、住居跡の残骸の可能性もある。埴土は暗灰青色粘土で、出土遺物はなかった。

SK203 (図版150)

SH101の西に所在する、径95cm、深さ30cmの円形ないし、長円形の土坑で、埴土は、第1層が炭化物を含む灰青色砂質土、第2層が淡灰青色砂質土、第3層が灰青色粘土であった。出土遺物は、比較的多く、高杯1点、無頭壺1点、甕4点(E085～E090)などを図示した。

SK204 (図版150)

SH101の南西に接するように所在する小土坑で、東西1.8cm、南北1.2cmをはかる。埴土は暗灰青色粘土で、出土遺物はなかった。

SK205 (図版150)

SK204のさらに南西に所在する、変形土坑で、L字形を呈する。全長4.0m以上、幅1.6m、深さ60cmをはかる。埴土は、第1層が暗灰青色粘土、第2層が青灰青色粘土、第3層が暗青灰青色粘土で、いずれも炭化物を含んでいた。出土遺物は少なく、甕2点(E092・E093)のみ図示できた。

SK206 (図版150)

イ-I区の最南端で検出した土坑で、南半が調査域の外で、全様はうかがえない。一辺4.8mの三角形を呈し、深さ35cmをはかる。埴土は、暗青灰青色粘土であった。出土遺物は少なく、図示できたのは、水差型土器1点(E094)のみであった。

SK207 (図版153)

ロ-II区中央、SH130の北東で検出した変形土坑で、東西1.9m、南北2.2mの台形に、幅80cm、深さ2.3mの溝が接続した如き形状を示す。埴土は暗青灰青色粘土で、出土遺物は少なく、広口壺1点(E095)、甕1点(E096)のみを図示した。

SK208 (図版152)

SH109の南東に接して所在する、東西1.8m、南北4.1mの長円形の土坑で、深さ45cmをはかる。埴土は暗青灰青色粘土で、多数の土器が出土した。そのうち広口壺2点、甕4点(E097～E102)を図示した。

SK209 (図版152)

SK208の南、SH106の北西に所在する、東西2.1m、南北4.0mの、ややスリムな楕円形の土坑である。深さ50cmをはかり、埴土は第1層が灰黄色砂質土、第2層が灰青褐色砂質土、第3層が黄褐色砂質土、第4層が暗灰青色砂土、第5層が暗灰青色砂質粘土であった。出土遺物は、比較的多く、そのうち、壺2点、甕1点、高杯1点、鉢1点(E103～E106)を図示した。

SK210 (図版153)

SH123の北に所在する、東西3.1m、南北1.2mの長楕円形の土坑である。深さ65cmをはかり、埴土は第1層から第3層までは暗青灰褐色粘土で、炭化物の多少により3層に顕別され、第4層は暗青灰青色粘土であった。出土遺物で図示できたのは、高杯の脚部1点(E108)のみであった。

SK211 (第33図)

SH123の南西に接して所在する、東西5.1m、南北1.8mの変形土坑である。深さ19cmをはかり、埴土は暗青灰褐色

粘土であった。出土遺物は少なく、壺・甕各1点（E109・E110）を図示した。

S K216（第33図）

S H125の南に接して所在する、東西2.1m、西北1.0mの変形土坑である。深さ22cmをはかり、埋土は、暗青灰褐色粘土であった。出土遺物は少なく、付鉢1点（E112）を図示できたにとどまった。

S K217（第33図）

ロ-Ⅲ区西端に位置し、西半を旧河道Bによって削平され、全様はうかがえないが、長円形土坑によるとみられる。現存長1.6m、幅1.4mをはかり、深さは44cmであった。埋土は暗青灰褐色粘土で、出土遺物は少なく、甕1点（E112）のみを図示した。

S X208（図版152）

S H106の南に所在する、径1.5mの円形土坑である。深さ27cmをはかり、埋土は、暗灰青色粘土で、比較的多くの土器が出土した。そのうち、壺1点、甕2点（E115～E117）を図示した。

（大橋尚弥）

V. 出土した遺物

弥生時代中期から後期初頭の集落に伴う遺物は、土器のほか若干の石製品がみられる。

上述のように、当該期の遺構は、中期後半を主体とする下流域（C・D地区）と中期末から後期初頭を主体とする上流域（A・B地区）に大きく区分される。したがって、出土遺物についても、別個に扱うこととする。なお、土器の形態分類については、いずれの場合も、『服部遺跡発掘調査報告書Ⅱ』のそれに準じ、適宜追加した。

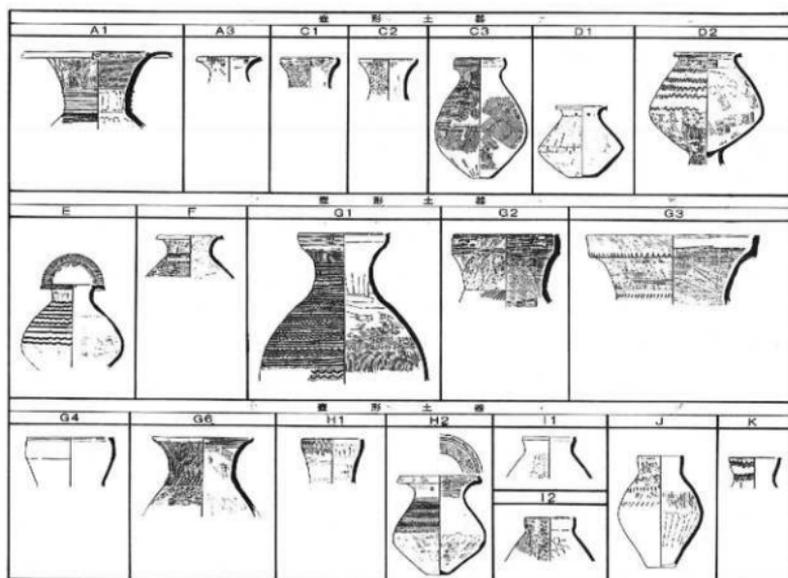
1. 中期後半の土器

中期後半の土器は、中期後半の集落を開闢するとみられる2条の溝。S D 151（環溝A）・S D 152（環溝B）と、その内外に分布する竈穴住居跡・土坑・溝から出土したもので、便宜上、遺構ごとに記述することにした。

A. 形態の分類

壺型土器

- [A] 口頸部が外湾又は外反して広がるもので、形態によりA1とA3に細分される。
- A1 口頸部が大きく外湾して広がるもので、肩部は下方に著しく拡張する。頸部位に数条の断面三角形凸帯を有す。
- A3 緩やかに外湾して開くもの。端面にヘラ又はハケ圧痕文を施文。
- [C] 外湾気味にのびる細い筒状の口頸部で、上方において短かく立ち上がるもの。C1～C3がある。
- C1 細く筒状にのびる口頸部で、上方において短かく立ち上がるもの。口頸部外面ハケ調整。複帯構成の直線文帯を有す。
- C2 C1に類似した形状を早するが、立ち上がりは非常に甘いものである。口頸部外面ハケ調整、無文。
- C3 C1、C2に較べ頸部が短かく、口縁部外面に円線文をめぐらせる。下ぶくれの体部をもつ。
- [D] ほは算盤玉状の体部を有し、口縁部は鋭く屈曲して開くもの又は湾曲して開くものがみられる。口縁部下に2個1組の円孔を穿つものが多い。台のないものをD1、台付をD2とした。
- [E] 外湾して広がる口頸部で、外反してさらに水平近く大きく広がるものである。肩部を拡張。偏球状に膨らむ体部を有し、加飾の著しい壺である。
- [F] 太頸でやや外反気味に短かく立ち上がる頸部より口頸部は屈折して水平近く広がるもの。端面横ナア調整。凹線文又は帯描波状文等を施文する。
- [G] 外湾して開く筒状の頸部より屈曲して巾広く立ち上がる口縁部を有す壺である。形態によりG1～G6に細分される。（ただしG5は欠く）
- G1 外湾してのびる筒状の頸部より口縁部は大きく屈曲してほぼ直上に立ち上がるもの。口縁部外面には、4～5条の明瞭な円線文を廻らし、頸腹部には種々の帯描文を有す。



G2 口縁部は、直立乃至内反気味に巾広く立ち上がるものである。口縁部外面横ナゲ調整。上端又は上・下端に浅く太い凹線文を廻らす。頸部屈曲部には指頭圧痕文凸帯又はハケ圧痕文凸帯を付す。

G3 頸部が比較的短かく、口縁部はふ厚く段をなす。

G4 やや内湾気味にのびる口頸部である。口縁部外面には、多条の凹線文を廻らす。

G6 口頸部は同じく外湾気味にのびるが、口縁部の屈曲はなく、端部がわずかに内反する。

[H] いわゆる受口状の口縁をもつ壺で、頸部が細く腹部が張るものをH1、受口状口縁裏に近い形態を示すものをH2とする。

[I] 筒状の頸部より口縁部は屈曲して短かく立ち上がるもの。

I1 短かく内湾して立ち上がる口頸部の端部が屈曲して内反するもの。

I2 端部の屈曲はなく、ゆるやかに内湾するもの。

[J] 筒状の直口する短かい口縁部をもち、体部はスリムな卵形を呈する。

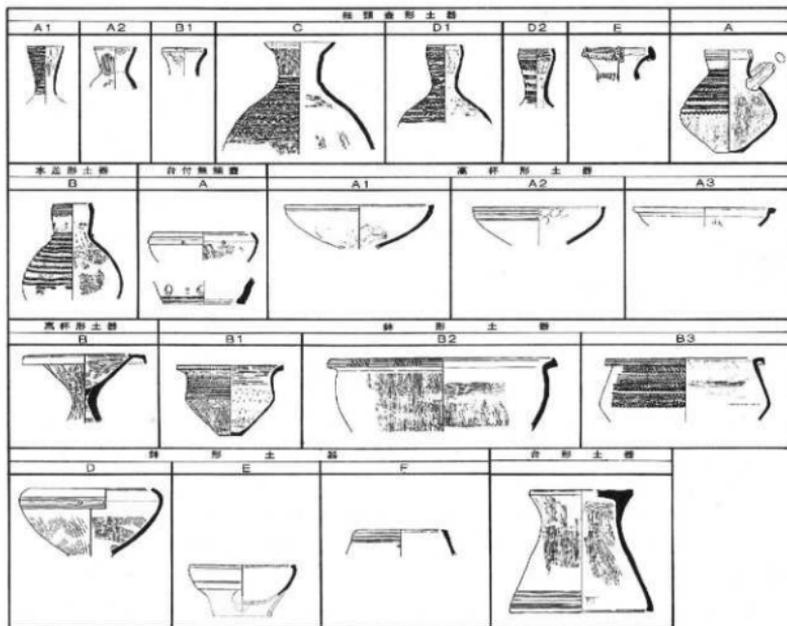
[K] 外湾又は外反してのびる口頸部で、上方において内折する。

細頸壺型土器

口縁部が漏斗状にのびるA (A1、A2)、内折するB (B1)、外反するC、内湾してのびるD (D1、D2) 等が認められる。

[A] 漏斗状に外反してのびる口頸部である。口頸部外面に佛指直線文(単帯)を施文するものもみられる。

A1 細長くラッパ状に開くもの。



A 2 短かくラッパ状に開くもの。

[B] 細く外湾気味にのびる口頸部で、上方において内折する。立ち上がり部外面に櫛指波状文、口頸部に櫛指直線文（複帯構成）を施文する。（B1）

[C] 筒状の直口する頸部で口縁部は外反して斜上方にのびる。

[D] 内湾してのびる口頸部。口縁部に凹線文、以下羽状列点文、櫛指文等を施文。ほは算盤玉状の体部を有する。

D1 凹線文を施さないもの。

D2 凹線文をめぐらせるもの。

[E] 袋状の口縁をもつもの。

水差型土器

内湾気味にのびる口頸部で、片口を呈す。口頸部外面に凹線文を施文。胴部に横位の半環状把手を付す。

A 胴が短かく算盤玉状を呈するもの。

B 胴長で丸味のある体部を呈するもの。

台付無頭蓋

内湾してすばまる体、口縁部で、脚台は直線的に下方にのびるもの。脚体部には円形又は楕円形の透穴を穿つ。体、口縁部に凹線文を施文。

高杯型土器

体、口縁部が内湾気味に開くAと水平縁口縁を有すBがある。

- [A] 体、口縁部が内湾してのびるもの。口縁部外面には1条乃至数条の凹線文を施す。又、段状口縁を有するものもある。
- A 1 ゆるやかに内湾するもの。
- A 2 体部と口縁の境界が、やや屈曲しているもの。
- A 3 段状の口縁をもつもの。
- [B] 内湾して直線的に開く杯部より口縁部は屈折して水平に広がるもの。口縁端部は、面をなして終わるものや下方に拡張するものがある。

鉢型土器

形態によりB-Fに分類し得る。

- [B] 口縁部が外湾ないし外反するもの。
- B 1 口縁部は緩やかに外反して開くもの。体部は算盤玉状を呈し、腰に稜を持つものが多い。加飾が著しい。
- B 2 鋭く屈曲して開く口縁部を有す。端部は、拡張気味で凹線文を施文する。
- B 3 同じく「く」の字に鋭く屈曲するが、腰に稜をもち、加飾が著しい。
- [D] 内湾気味にのびる体部より口縁部は内折してすぼまるもの。口縁部外面には1-数条の凹線文を施文する。口縁部下に2個1組の円孔を穿つものが多い。
- [E] 緩やかに内湾する口縁部で、端部は内側に屈曲して面をもつ。円孔を穿った脚台がつく。
- [F] 体部は算盤玉状を呈し、口縁部は直線的に内傾してのびる。端部は内側に少し引き出す。

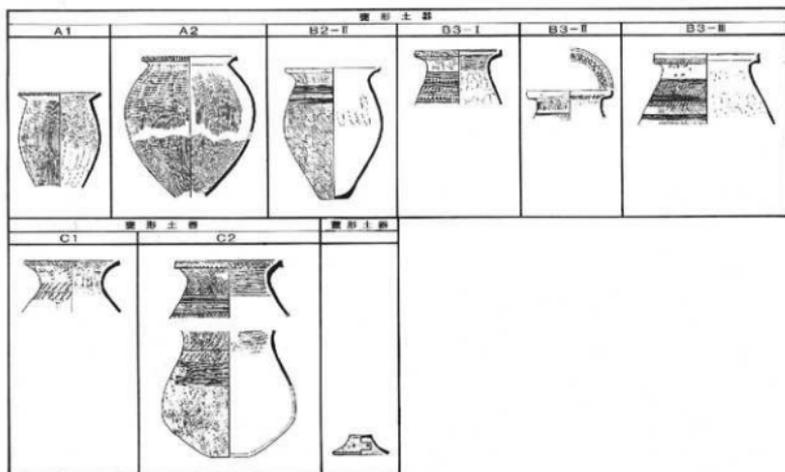
台形土器

くびれた体部より口縁部又は底部に向かって緩やかに外反して開くものである。凹線文を有す。台形土器と考えられる。

甕型土器

「く」字状に外反して開くA、受口状口縁部B、緩やかに外湾して広がるC等がある。

- [A] 端部の形状によりA 1、A 2に細分される。
- A 1 端部が面を成して終わるもの。端部にはヘラ又はハケ圧痕文等を施文。
- A 2 端部が肥厚してぶ厚いものである。端部に圧痕文を施文するものが多い。
- [B] 口縁部の形態によりB 2、B 3に細分し得るが、いずれも上腹部の膨らむ縦長の体部を有し、頸腹部は種々の襷指文によって加飾を施すものである。
- B 2-II 立ち上がり弱くややつまみ上げたような形状を呈す。外端面は面を成しているが、内面に稜はみられない。端部は丸味を持つ。
- B 3-I 傾斜して開く第2口縁に鋭く内折する第1口縁を有す。内外面ともハケ調整。
- B 3-II 傾斜して開く第2口縁より第1口縁は内反して立ち上がる。外面上端ナデ調整。
- B 3-III ほほ水平に開く第2口縁より第1口縁は鋭く内反して立ち上がる。外面列点文で加飾。
- [C] 緩やかに外湾して開く口縁部である。下腹部が大きく膨らむやや下ぶくれの体部を有しており、頸腹部には襷指列点文、直線文等の加飾を施す。
- C 1 口縁部が長く弓なりに外湾するもの。



C 2 口頸部が短かく屈曲するもの。

蓋形土器

平皿又は凹状のつまみ部より外反乃至外湾気味に開く体部を有す傘型を呈するものである。(B)

B. 各遺構出土の土器

(1) S D 151 (環溝A) 出土土器

S D 151の出土土器は、大きく上・中・下の3層に分けて取り上げており、各層に分けて記述したい。

a. 下層出土土器

甕C (C 1～C 3)、D、G (G 1～G 4)、J、L (L 2)、細頸甕A、B、D、高杯B、鉢A、C、甕A (A 1～A 2)、甕B (B 2、B 3)、甕C (C 1、C 2)等がある。

甕型土器

C 1 (A001) 筒状の細い頸部より口縁部は屈曲して短かく内折する。端部は外傾する面を成す。口縁立ち上がり部外面横方向のハケ調整後横ナデ。口頸部外面ハケ調整。内面ハケ調整後ナデを加える。

C 2 (C012) 外湾気味に開く口頸部が上方において屈折して立ち上がる。端部は内傾する面を成す。口縁立ち上がり部内外面共横ナデ調整。口頸部外面にハケ調整。

C 3 (A010、A011) 体下部が張る縦長の体部で、口縁部は外反して閉き屈曲して短かく立ち上がる。口縁部外面横ナデ。3条の細い凹線文を廻らす。A010口頸部以下粗いハケ調整。体部上半に先行する明きが認められる。体下部ヘラケズリ。器体内面ハケ調整後口頸部にナデ。

D 1 (A002) 「く」字状に鋭く屈曲して開く口縁部で、端部は肥厚気味、算盤玉状の体部を有すと考えられる。口縁部内外面共横ナデ調整。口縁部下に2個1組の小孔を穿つ。体部外面ハケ調整後ナデを加える。内面ハケ調整後ナデ。

G 1 (A003～A005、A009、A011) 外湾して開く頸部より口縁部は屈曲して直上に短かく立ち上がるもの。端部は凹面を呈す。口縁部外面横ナデ調整。3条の凹線文を廻らす。頸部外面ハケ調整。下位に梅播波状文1帯。頸部内面ハケ調整。

G 2 (A008) 口縁部の屈曲は甘く、立ち上がり部は外傾する。

G 3 (A006、A007) 外湾して開く太い筒状の頸部より口縁部は屈曲してほぼ直上に巾広く立ち上がる。A007は、若干下方に肥厚する。端部は平坦乃至傾斜する面を成す。口縁部外面は、斜方向のハケ調整後横ナデを加えるものが多いが、A007はハケ調整後下端に刻目を廻らし、頸部外面ハケ調整。A007斜線文(ハケ)を施文。内面口縁部横ナデ。頸部横又は斜方向の粗いハケ調整。

G 4 (A030) 口縁部は内湾して、屈曲も甘い。

I 1 (A014) 直口して立ち上がる口縁部で端部が短かく内反、上端には強い横ナデを廻らす(擬凹線文)。器体内面ハケ調整。内面ナデ。両者共体部欠失。

I 2 (A013) 同じく直口する口縁でゆるやかに内湾する。

壺底部 (A015～A023) A015、016、019～021は、ほぼ安定した平底を呈す。内外面共ハケ調整。A022は突出気味のドーナツ底。A017、A018、A023はやや突出気味の上げ底を呈す。内外面共ハケ調整。

細頸壺型土器

Ⅰ頸部が漏斗状にのびるA1・A2、屈曲して内折するB1、内湾してのびるD2等が認められる。

A1 (A025) 両者共体部欠失。細く漏斗状にのびる口頸部で、上端に強い横ナデを施す。外面ハケ調整。内面ハケ調整後ナデ。頸部内面にしぼり目残存。高杯脚部の可能性有。

A2 (A024) A1とはほぼ同じ形態をとるが、頸部がやや短かく太い。

B1 (A026) 外湾気味にのびる筒状の頸部より口縁部は内折して短かく立ち上がる。端部は内傾する面を成す。

Ⅱ縁部外面に櫛描波状文、直線文各1帯を施文。頸部には直線文帯（複帯構成）を施す。内面ハケ調整後ナデ。

D2 (E027) 内湾してのびる口縁部。外面に4条の凹線文。内面ナデ仕上げ。

高杯型土器

B (A028) 水平線口縁を有する高杯で、杯部欠失・口縁部下端は若干下方方に拡張する。

鉢型土器

球状の体部に口縁部が「く」字状に外反して開くBと直口乃至内折するDがある。

B2 (A029) 球状の体部よりⅡ縁部は鋭く屈曲して外方に開くもの。端部は肥厚する。Ⅱ縁部外面横ナデ調整。端部下端には、ハケ状具による刻目を施す。体部外面ハケ調整後上半ナデ、ハケ圧痕文2列、直線文帯等を施文。内面ハケ調整後上半ナデ。

D (A031, A032) 内湾して開く体部に口縁部が内折してすぼまるものである。口縁部外面横ナデ調整。体部外面ハケ調整。内面ハケ調整。Ⅱ縁部横ナデ。

A032は脚台と考えられる。緩やかに外湾して広がり裾端部は、強い横ナデにより凹状を呈す。外面ハケ。内面裾部ハケ調整。しぼり目残存。

甕型土器

口縁部が「く」字状に外反して開くA、受口状口縁部B、緩やかに外湾して広がるC等がある。

A1 (A033~A037) 「く」字状に外反して開く口縁部で、端部は面を成して終わる。端面横ナデ後ヘラ圧痕文を施文（A035~A038）。器体外面ハケ調整後口縁部付近にナデを加えるものがある（A033, 034, 036, 037）。体部は、上腹部の張る縦長を呈すと思われるが、A036体部は張りの弱い倒錐形を呈す。

A2 (A038~A040) 上腹部が膨らむ縦長の体部に「く」字状に外反して開くⅡ縁部。端部は肥厚する。端面横ナデ後ハケ列点文（A038）。又は波状文（A039）を施すものがある。体部外面叩き後縦方向の粗いハケ調整を施す（A038, A039）。器体内面ハケ調整後Ⅰ頸部にナデ。

A2 (A041, A042) 「く」字状に外反して開く口縁部で、端部を著しく拡張するものである。口縁部内外面共横ナデ調整。体部内外面共ハケ調整。

甕底部 (A043) やや上げ底の底部。外面に右上りの叩き調整。内面ナデ仕上げ。

C (A044~A049) 腹部の張る体部で、緩やかに外湾して広がる口縁部を有す。端部は面を成して終わるもの（A044~A046）や若干拡張するもの（A047~A049）がみられる。端部外面横ナデ後ヘラ描沈線1~2条を施すものが多く、さらに端部下端乃至上・下端に圧痕文（ヘラ又はハケ）を施す。器体外面粗いハケ調整後上腹部に列点文、直線文等を施す（A047）。内面口頸部に横方向のハケ調整。A047口縁部にはハケ状具による歯文が施す。頸部の長いC1（A044, A046, A048）と、頸部の短いC2（A045, A047, A049）に分類される。

甕B

受口状口縁を有する甕である。口縁部の形態によりB2-I・II、B3-Iに細分し得るが、いずれも腹部の張る体部

より頸部は大きく湾曲して閉く。器体外面に縦又は斜方向の粗いハケ調整を施し、上腹部には列点文、直線文等を廻らす。内面は、ハケ調整後体部にナデを施す。

B 2-I (A051, A054, A059~A061, A064) 傾斜して閉く第2口縁より第1口縁は直上乃至外反気味に短かく立ち上がる。端部は、ほぼ平柄に収めるものが多い。口縁立ち上がり部外面斜方向のハケ調整。A059~A061, A064端部にヘラ圧痕文。外面口頸部以下粗いハケ調整。胴部には櫛描列点文、直線文等を施文。内面口頸部に横方向のハケ調整。体部ハケ調整後ナデ。

B 2-II (A052, A053, A055, A056~A058, A062, A066, A068, A069, A072) 傾斜して閉く第2口縁より第1口縁は内反して短かく立ち上がる。端部は内傾する面を成す。外面ハケ調整。A069, A072口縁部上端に横ナデ。A069端部にヘラ圧痕文を施文。内面ハケ調整。A069, A072立ち上がり部にナデ。A072口縁部には列点文を廻らす。

B 3-I (A063, A065, A067, A070~A071) 傾斜して閉く第2口縁より第1口縁は短かく内反して立ち上がる。端部は平坦ないし内傾する面をなす。内面ハケ、立ち上がり指ナデ。

壺体・底部 (A050, A073, A074) 腹部の膨らむ縦長の体部で、平底の底部を有す。器体外面ハケ調整。胴部には列点文、直線文等を施文、内面ハケ調整後ナデ。

b. 中層出土土器

壺C (C2, C3)、K、鉢B (B1) 台付無頸壺A、甕A (A1, A2)、甕B (B2-I, B2-II, B3-I) 等若干認められる。

壺型土器

C 2 (A075) 外湾気味にのびる口頸部で、上方において内折して立ち上がる。内外面共増減が著しく調整等不分明。

C 3 (A076) 外湾して閉く頸部より口縁部は屈曲して内反気味に立ち上がるもの。端部は内傾する浅い凹面を成す。口縁部外面斜方向のハケ調整後横ナデを加える。頸部ハケ調整。内面ハケ調整後口縁部にナデ。

C 2 (A077) 細く外反気味にのびる口縁部で、上方で内折する。端部は強く内傾し、端面に直線文を廻らす。口縁立ち上がり部横ナデ後直線文、列点文等を施文。口縁部外面ハケ調整。内面ナデ仕上げ。

K (A078, A079) やや外反してのびる直口の口縁部。A078外面ハケ調整。端部にハケ圧痕文を廻らす。A079口縁部上端に凹線文1条を廻らし、その下方には波状文2帯(5~6条単位)を施文する。内外面共ナデ。

壺底部 (A080~A082) 平底の底部。外面ハケ調整、内面ハケ調整後ナデを加える。

鉢型土器

B 1 (A083) 短かく外湾して広がる口縁部で、端部はやや肥厚し内傾する面を成す。体部は腰に稜を持ち直線的に平底の底部に至る。端部横ナデ調整、上端にハケ圧痕文。器体外面ハケ調整後上半ナデ。直線文、ハケ圧痕文等を廻らす。内面ハケ調整後上半ナデ・砂粒を多含する胎土で、淡褐色を呈す。外面に稜付着。

台付無頸壺

A (A084) 内湾気味にのびる体部に口縁部は内折してすぼまる。端部は丸味を有す。器体内外面共横ナデ。体部外面に4条の凹線文。口縁部下に2個1組の小孔を穿つ。

壺型土器

口縁部が「く」字状に外反して開くA1・A2、受口状I縁帯B（B3-I、H3-I）がある。

A1（A085） 「く」字状に外反して開くI縁部で、端部は面を成して終わる。端面にヘラ爪痕文、I縁部外面横ナデ調整。体部外面叩き後ハケ調整。内面口縁部に横方向のハケ調整。体部ナデ。

A2（A086） 外反して開く口縁部。端部上・下端を拡張する。内外面共横ナデ調整。

B2（A087、A088、A091） 傾斜して開く第2口縁より第1I縁は直上乃至外反気味に立ち上がる。内外面共ハケ調整。A091端部にハケ爪痕文、又I縁部内面に歯状文を廻らす。立ち上がり部ナデ。A087は、張りの弱い縦長の体部を有し、胴部に直線文帯を廻らす。I縁部下に2個1組の小孔を穿つ。内面ハケ調整後ナデ。

B3-I（A089） 水平に開く第2口縁より第1口縁は短かく直立する。端部は内傾する凹面を成す。口縁立ち上がり部外面斜方向のハケ調整。端部にハケ爪痕文を施文。外面口頸部以下ハケ調整、胴部に櫛描列点文、直線文等を廻らす。口頸部内面横方向のハケ調整。体部ナデ。

B3-I（A090） 傾斜して開く第2口縁より第1口縁は内反気味に立ち上がる。端部は内傾する凹面を成す。口縁立ち上がり部外面ハケ調整。ハケ爪痕文、4本1組とするヘラ指歯文等を施文。I頸部外面ハケ調整後ナデ。列点文、直線文等を廻らす。内面ハケ調整、ハケ具により鋸歯状の列点文を廻らす。立ち上がり部ナデ。

c. 上層出土土器

壺A（A1、A2、A3）、C（C2）、D（D2）、F、G（G1～G4）、I（L2、I2）、細頸壺A（A1）、高杯A（A2）、B、E、鉢C、甕A（A1）、A2、B（B2、H3）、C（C1、C2）等がある。

壺型土器

A1（A092～A094） 外湾して大きく広がる口頸部で、端部を外下方に著しく拡張する。端面横ハケ調整。A092、A094端面には3～4条の凹線文を廻らし、後A092には波状文、A094は凹形浮文を付加する。器体内外面共ナデ。A092I縁部内面には扇形文、波状文、A093は羽状列点文を廻らす。

A3（A099） 太頸で筒状に立ち上がる頸部より口縁部は外反して広がる。端部は肥厚しお厚い。端面横ナデ後波状文、又はヘラ爪痕文を施文。口頸部外面ハケ調整。内面ナデ。列点文を施文。

F（A101、A102） 外反して開く口縁部で、屈曲してさらに広がり端部を拡張する。内外面共横ナデ調整。

C2（A095、A096） 細く外湾気味にのびる筒状の口頸部で上方において内折する。内外面にハケ調整。

D2（A097） 体下部の強く張るほば算盤玉状の体部で「ハ」字状に開く脚弁を付す。口縁部は屈曲して短かく外方に突き端部を若干拡張するもの。端面横ナデ調整。凹線文1条を廻らす。器体外面ハケ調整後上腹部ナデ。櫛描波状文5帯（4条単位）を施文。I縁部下に2個1組の小孔を穿つ。内面ハケ調整後ナデ。底部は粘土板光顔により形成。

F（A098、A100） 外反気味に開く筒状の頸部より口縁部は外反して水平近くに広がる。端部は若干拡張気味で、端面横ナデ調整を施す。口頸部外面ハケ調整後、A100ナデ。A100口縁部内面に列点文。

G2（A106、A107、A109） 口径17cm前後を測る。A106は36.7cmを測る大型品。口縁部外面斜方向のハケ調整後横ナデを施す。頸部外面ハケ調整、屈曲部に指頸爪痕文凸帯（A106）を貼付ける。内面ハケ調整後ナデを加える。

G4（A103、A112～A114） 緩やかに内湾してのびる口頸部。口縁部内外面共横ナデ。外面に1条乃至4～5条の凹線文を廻らし、その下方に列点文を施文（A113、114）、口縁端部は平坦（A112）又は内傾する面を成す。

G1 (A104, A105, A108, A111, A115) 外湾して開く筒状の頸部より口縁部は屈曲してやや内反気味に立ち上がる。口縁部内外面共横ナデ。外面に4条の凹線文 (A115)、1条 (A104, A105)、5条 (A111)。頸部ハケ調整、内面ナデ。屈曲部にハケ庄底文凸帯 (A108)。

A2 (A116) 外反して開く口縁部で上端は屈曲して立ち上がる。立ち上がり部外面横ナデ、口縁部ハケ調整、内面ナデ。

I (A117~A119) 直口の口縁部、端部は平担乃至内傾する面を呈するが、A118は内方に著しく肥厚する。口縁部外面ハケ調整、上端に1~2条の凹線文を廻らす。A117体部外面叩き後ハケ調整、内面ナデ仕上げ、I1 (A117, A118)、I2 (A119) に細分される。

壺底部 (A120~A127) A120~A124, 126, 127は、平底、A125はドーナツ底を呈するもの。外面ハケ調整。A120ヘラナデ。内面ハケ調整後ナデ。

細頸甕型土器

A1 (A128) 細く漏斗状にのびる口頸部で、口縁部は若干内湾気味。口頸部外面ナデ、櫛掻波状文、直線文を交互に施文。内面ナデ、しほり目残存。

高杯型土器

直口の口縁部を有するAと水平線口縁を有するBがある。

A (A129, A130) 内湾気味に開く杯部に直立して立ち上がる口縁部。磨滅が著しく調整等不分明であるが、口縁部外面に1条の凹線文。

B (A131, A132) 直線的に開く杯部より屈曲して水平に広がる口縁部。A131口縁端部は若干肥厚。A132外下方へ拡張する。内面に1条の凸帯を貼付ける。口縁部内外面共横ナデ調整。A131杯部内外面ハケ調整。A132ヘラミガキ。杯部は粘土板充填法により形成。

高杯脚部 (A133~A139) 緩やかに外反して広がる脚部で、裾端部が面を成して終わるもの (A133, 134)、上端乃至上・下端を拡張するもの (A135~A139) がある。いずれも外面ハケ調整、裾端部横ナデ。内面ハケ調整後ナデを施す。

鉢型土器

D (A140~A143) 内湾気味に斜上方にのびる体部で、口縁部は内折してすばまる。端部は内傾する面を残す。口縁部外面横ナデ調整。2~4条の凹線文を廻らし、口縁部下に2個1組の小孔を穿つ (A141, A142)。体部外面ナデ。A141ハケ調整。A143は、「く」字状に開く脚台である。外面ハケ調整、裾端部横ナデ、脚台付根部分に低い貼付凸帯2条。内面ナデ。

E (A130) 口縁は緩やかに内湾し、端部を内側に引き出し、内傾する面をなす。内外面ともハケ調整。

寛型土器

寛には、口縁部が「く」字状に外反して開くA (A1)、受口状口縁部B、弓なりに大きく外反するC (C1, C2) がある。

A1 (A144~A148) 「く」字状に外反して開く口縁部で、端部は面を成して終わる。端部横ナデ後へラ庄底文を廻らす。体部は上腹部の張る縦長を呈するか。外面ハケ調整。A145, A148口縁部にナデ。内面ハケ調整、ナデ。

A1 (A149~A151) 口縁端部がぶ厚く肥厚気味のものである。端部横ナデ。A149, A151に縦位のハケ庄底文、体部外面叩き後ハケ調整、内面ハケ調整。

A 1 (A152) 口縁端部を拡張するもの。端面に強い横ナデを施す。口縁部内外面共横ナデ調整。

C (A153~A160) 頸部は大きく湾曲し、口縁部は外湾して広がる。端部は面を成して終わるもの (A153~A158) と若干拡張気味のもの (A159, A160) がある。いずれも端面に強い横ナデを施し、下端 (A153, A155, A157, A160)、又は上・下端 (A156, A159) にヘラ圧痕文を廻らす。口縁部以下ハケ調整、胴部に構構列点文、直線文等を施文。内面ハケ調整。A156, A159~A160口縁部にナデを施し列点文を廻らす。口頸部の形状より、C1 (A154, A156~A160)、C2 (A153, A155) に細分される。

B 2-I (A166, A169, A170) 傾斜して開く第2口縁より第1口縁は直立乃至外反気味に短かく立ち上がる。端部は平坦又は内傾する面を成す。口縁立ち上がり部外面ハケ調整。上端に横ナデを施すものがある (A169)。又端部にヘラ圧痕文を廻らすものが多い。口頸部以下ハケ調整、胴部に構構列点文、直線文等を施文。口頸部内面横方向のハケ調整を施す。

B 2-II (A164, A165, A167, A172, A174, A179) 水平に開く第2口縁より第1口縁は短かく直立する。端部は平坦面を成す。器体外面ハケ調整。さらにヘラ圧痕文を施文。内面ハケ調整後ナデ。

B 3 (A163, A168, A173, A175~A178, A180~A189) 傾斜して開く第2口縁より第1口縁は短かく内反して立ち上がる。端部は内傾する凹面を呈す。口縁立ち上がり部外面ハケ調整。上端又はほぼ全面 (A181, A186~A188) に横ナデを施す。A181, 184, 端部にヘラ圧痕文、口縁部外面ハケ調整、内面ハケ調整。立ち上がり部ナデ。A183, 184, 188に列点文、鋸歯文等を施文。立ち上がり部外面の調整からB3-I (A168, A179, A180) とB3-II (A163, A181~A184, A186~A189) に細分できる。

B 3-III (A190) 傾斜して開く第2口縁より第1口縁は短かく外反して立ち上がる。端部は内傾する。口縁部内外面共横ナデ調整。外面立ち上がり部にヘラ圧痕文を廻らす。器体外面に構構列点文、直線文。

B 3-IV (A191, A192) 水平に開く第2口縁より第1口縁は短かく直立し、端部を外方へ引張る。口縁部内外面共横ナデ調整。A190外面には3本1組の棒状浮文を貼付ける。器体外面ハケ調整。構構列点文、直線文、波状文等を施文。内面ナデ。

壺体、底部 (A161, A162, A193, A194) A161, A162は下腹部が膨らむ副長の器体である。安定した大きな平底の底部を有する。外面ハケ調整。胴部には構構列点文、直線文、ヘラ描斜格文等を施文。内面ナデ仕上げ。A193, A194は腹部が膨らむ縦長の器体で、小さな上げ底の底部を有す (A193)。外面ハケ調整、腹部には構構弧状文 (A193)、直線文、同心円文、弧状文 (A194) 等を施文。低いヘラ圧痕文凸帯を有する。内面ハケ調整後ナデ仕上げ。

(2) S D152A (環溝B) 出土土器

S D152A出土土器は、大きく上・下の2層に分けて取り上げており、各層に分けて記述したい。

a. 下層出土土器

壺A (A1, A2)、B (B1)、E、F、G (G1~G3, G6)、I (I1)、台付無頸壺A、細頸壺D (D2)、水笠型土器A、高杯A (A1)、B、鉢D、甕A (A1~A2)、壺B (B3-I・II・III) 等がある。

壺型土器

A 1 (B002, B003) 大きく外湾して広がる口頸部で、端部外下方に著しく拡張する。端面横ナデ後波状文を施文(B002)。口頸部外面ハケ調整。B003頸部に5条の断面三角形凸帯を貼付ける。肩部に柳描直線文、波状文を施文。口頸部内面に横方向のハケ調整。口縁部には羽状列点文及び2個1組の瘤状突起を4方に貼付ける。肩部ナデ。同一個体の可能性有。

A 3 (B006, B007) 緩やかに外反して開く口縁部。端面ハケ調整。B006上・下端にハケ圧痕文。B007には縦位のハケ圧痕文を施す。内外面共ハケ調整。

E (B001) 外湾して開く口頸部で、口縁部は水平近くに大きく広がる。端部はぶ厚く著しく肥厚する。端面横ナデ後4条の凹線文を廻らし、縦線文(ヘラ)を等間隔に付加。器体外面ハケ調整後器体にナデを加える。頸部屈曲部にH/2.5cmの低いハケ圧痕文凸帯。体部に直線文、斜線文(ハケ)等を施文。器体内面ハケ調整後ナデ。口縁部に羽状列点文。

E (B009, B010) 筒状ののびる口縁部で水平近くに大きく広がる。端部は肥厚する。端面に柳描波状文(B009)、門線文3条(B010)を施文。B009口縁部内面に列点文2列。内外面共ハケ調整後一部ナデ。

F (B004, B005) 外反して広がる口縁部で、上方においてさらに外方に開く。端部は面を成し、端面に横ナデ調整。口頸部外面ハケ調整。内面にハケ目(B005)。

壺G

外湾気味にのびる筒状の頸部より口縁部が屈曲して立ち上がるもの。形態によりG1～G6に細分し得る。

G 1 (B011, B012, B015, B016) 筒状の頸部より屈曲して直上に立ち上がる口縁部を有す。体部は腹部の大きく膨らみ形状を呈す。口縁部外面には、3～4条の細い門線文を廻らし、縦線文を等間隔に施文。器体外面ハケ調整後口頸部に柳描直線文、上腹部には、直線文と波状文(2条×3連)を交互に廻らす。器体内面ハケ調整後口頸部にナデ。

G 3 (B014) 外湾気味にのびる頸部より口縁部は屈曲して直上に巾広く立ち上がる。端部は平坦に取める。口縁部外面ハケ調整後横ナデを加える。頸部外面ハケ調整。屈曲部付近にハケ圧痕文凸帯を貼付ける。内面ハケ調整。

G 2 (B013, B017) 外湾気味に開く頸部より口縁部は緩く内反して立ち上がる。口縁部は内方に肥厚。外面ハケ調整。上端に強い横ナデを施す。内面ハケ調整。

G 3 (B018) 外湾して開く頸部に口縁部は段を成して外反する。端部は内方に肥厚し平坦に取める。口縁部内外面共横ナデ調整。頸部外面に縦方向のヘラミガキが認められる。

G 6 (B019) 外湾気味に開く口頸部で、上方において緩く屈曲する。端部は平坦に取める。口縁部上端内外面共横ナデ。口頸部外面ハケ調整。頸部屈曲部には、H/1.8cmの低いハケ圧痕文凸帯を貼付ける。内面ハケ調整後ナデ。

B 1 (B008) 外湾して広がる頸部より口縁部は短かく直立して受口状を呈する。端部はやや外方に引き出し内傾する面を成す。端部にヘラ圧痕文を施文。外面磨減が著しく調整等不明。内面に横方向のハケ調整。

I 1 (B020, B021) 直口の口縁部である。B020は屈曲して内湾気味に立ち上がる。両者共上端に凹線文を廻らす。外面にハケ調整。内面ナデ。

壺体、底部 (B022～B031) B022～B025は、いずれも上腹部が膨らみ胴長の体部で安定した平底の底部を有す。全て器体内外面共粗いハケ調整を施す。B024、B026、体部外面には先行する吹き目が認められ、又、下半部にはヘラケズリを施す。B026肩部に縦線文。B025は、胴部中位が張るほぼ球状を呈すると考えられ、器体外面ハケ調整後

上半にナデを加える。櫛溝波状文を施文。B027～B030は全て安定した平底を呈す。内外面共ハケ調整。B028内面ヘラケズリ。B031はやや突出気味の平底で有孔。

台付無頸甕

A (B032、B052) 体、口縁部欠失。脚台下方に径1.6cmの円孔を下方に穿つ。下端に2条の凹線文。器体内外面共ハケ調整後ナデ。

細頸壺型土器

D2 (B033、B034) 内湾気味にのびる口頸部。口縁部上方に3条の凹線文を廻らし、以下櫛溝列点文、直線文等を施文。器体外面ハケ調整後ナデ、内面口縁部に横方向のハケ調整、頸部ナデ、しほり目残存。B034は、箕盤玉状の体部で、平底の底部を有す。器体内外面共ハケ調整。外面上半にナデ。櫛溝波状文が認められる。

水差型土器

A (B035) 口縁部及び体下部欠失。体部は中位が強く張る箕盤玉状を呈するか、肩部に横位の平環状把手を付す。外面ハケ調整後ナデ。上腹部には、櫛溝直線文、波状文、斜格文等を施文。内面ハケ調整後ナデ。

高杯型土器

杯、口縁部が内湾してのびるAと水平縁口縁を有するBがある。

A1 (B036、B037) 杯、口縁部が内湾してのびるものである。口縁部外面に凹線文1～2条、両者共杯部外面ハケ調整、内面ハケ調整後B036にナデを加える。

B (B038～B041) 内湾又は直線的に開く杯部に水平に広がる口縁部を有す。内面に断面方形の低い凸帯を1条貼付する。口縁部端は肥厚気味のもの(B038)、下方に拡張するもの(B039)、外下方へ著しく拡張するもの(B040、041)等がみられる。端面横ナデ調整。杯部内外面にハケ調整。B040内面及び脚部外面ヘラミガキ。杯部は粘土板充填によって形成する。

高杯脚部 (B042～B049) 筒状の脚柱状部より「ハ」字状に緩やかに広がる裾部。裾端部は肥厚し上端を拡張するものがある(B042～B045)。外面ハケ調整(B042～B045)、ヘラミガキ(B046～B049)を施す。裾端部横ナデ調整。内面ハケ調整後ナデを加える。

鉢型土器

D (B050、B051、B053、B054) 内湾して斜上方にのびる体部に口縁部は内折してすはまる。端部は内傾する面を成す。口縁部外面横ナデ調整。3～5条の凹線文を廻らす。B050口縁部下に2個1組の小孔を穿つ。杯部外面ハケ調整(B050)、ヘラミガキ(B051)を施す。内面ハケ調整後口縁部にナデ。B053、B054は脚台である。「ハ」字状に開く低い脚台で、B053端部は若干拡張する。両者共外面ハケ調整を施し、B053には5条のヘラ描沈線を廻らす。端部外面横ナデ調整。内面ハケ調整後ナデ。

甕型土器

口縁部が「く」の字状に外反して開くAと受口状口縁部Bがある。

A1 (B055、B057、B058～B060) 上腹部が膨らむ縦長の体部に「く」字状に外反して開く口縁部を有す。端部は面を成して終わり、端面横ナデ後ヘラ又はハケ圧痕文を廻らす。器体内外面共粗いハケ調整。B057底部に穿孔。

A2 (B056) 縦長の体部に口縁部は「く」字状に外反して開くが、端部は肥厚乃至若干拡張気味のものである。端面横ナデ後ハケ圧痕文を廻らす。器体内外面共ハケ調整。

甕底部 (B061) 安定した平底の底部。器体内外面共粗いハケ調整。色調は淡褐色を呈すが、内面底部に煤の付着が認められる。

甕B

受口状口縁臺である。口縁部の形態によりB3-I・II・IIIに細分し得る。

B3-I (B062~B065, B071, B072, B079, B080, B082, B083, B086, B087) 傾斜して開く第2口縁より第1口縁は短かく直立する。端部は、尖り気味(B062)、平坦(B063, B079)。内傾する凹面(B064, B080, B082)を成す。口縁立ち上がり部外面ハケ調整、後上端又はほぼ全面に横ナデを施す。B065端部にハケ疚文。外面ハケ調整、胴部に描線列点文、直線文、斜格文(ヘラ)等を施文。外面口頸部に横方向のハケ調整。B062, B063、口縁部に列点文、鋸歯文を施文。B064、立ち上がり部ナデ。体部内面ナデ仕上げ。

B3-II (B064, B066~B070, B073~B076, B081, B084, B085) ほほ水平に広がる第2口縁より第1口縁は直立乃至外反気味に立ち上がる。端部は平坦又は内傾する浅い凹面を呈す。口縁立ち上がり部外面ハケ調整後上端横ナデ、立ち上がり部上端(B070)、又は下端(B069)にヘラ疚文を施す。器体外面ハケ調整、胴部に直線文、列点文、波状文等を施文。口頸部内面に横方向のハケ調整。大半の口縁部には列点文又は波状文等を施す。立ち上がり部ナデ。

B3-III (B077) 傾斜して開く第2口縁より第1口縁は内反して立ち上がる。端部は平坦乃至内傾する凹面を成す。口縁立ち上がり部外面ハケ調整後上端又はほぼ全面に横ナデを施す。波状文を施文。外面口頸部以下ハケ調整。胴部に若干ナデを加えるものもみられるが、いずれも描線列点文、直線文、波状文、斜格文(ヘラ)等により加飾する。口頸部内面ハケ調整。立ち上がり部にナデを施す。

甕体、底部(B089~B091) 腹部の張る縦長の体部で、直線的にすぼまり底部に至る(B089)。外面ハケ調整、上腹部には列点文、波状文、直線文等を施文。内面ハケ調整後ナデ仕上げ。B090, B091は平底の底部、外面ハケ調整、内面ナデを行なう。

甕型土器

B (B092) 凹状のつばみ部より体部は緩やかに外湾して広がる。器体内外面共ハケ調整後ナデ。端面横ナデ調整。

b. 上層出土土器

甕A (A1, A3)、B (B1)、C (C1-C3)、D、E、F、G (G1-G4, G6)、I (I1)、台付無頸甕A、細頸甕、D (D1, D2)、水差型土器B、高杯A (A3)、B、鉢A (A4)、D、E、甕A (A1, A2)、甕B (B3-I, B3-II, B3-III)、台形土器、甕型土器B等がある。

壺型土器

壺A

外湾又は外反して開く口頸部で、形態によりA1, A3に細分し得る。

A1 (B093~B096, B110) 大きく外湾して広がる口頸部で、口縁端部を下方に著しく拡張する。端面横ナデ調整。B094に凹線文3条。B095には羽状列点文を施し、円形浮文・竹筒文等を施文。口頸部外面ハケ調整後ナデ。口頸部内面ナデ、又はハケ調整後ヘラミガキを加える(B095)。口縁部内面に羽状列点文。B096頸部外面に4条の断面三角形凸帯を貼付、竹筒文を施文する。肩部に描線波状文・直線文が認められる。口頸部内面にハケ調整。

A3 (B108) 外反して開く口縁部で上方においてさらに外方に広がる。端部は肥厚する。口縁部内外共横ナデ調整。外面にハケ調整。

F (B098, B099) 外湾して開く口縁部で、端部を外下方に若干拡張する。端面外面横ナデ調整。器体外面縦方向のハケ調整後体部に横方向のハケ調整を施す。内面ハケ調整。

A3 (B097) 外湾して開く口頸部で、端部は面を成す。端面横ナデ調整後上・下端にヘラ尻痕文を廻らす。口縁部内外面にハケ目。

C2 (B211) 太頭で筒状に湾曲してのびる頸部より口縁部は外反して大きく広がる。端面横ナデ調整。外面ハケ調整。頸部に櫛状列点文、口頸部内面に横方向のハケ調整、体部ナデ。

C1 (B100, B134) 外反してのびる細い筒状の口頸部で上方において内折して立ち上がる。端部は平坦に取める。立ち上がり部内外面に横方向のハケ調整。口頸部外面縦方向のハケ調整。頸部に直線文が認められる。内面ハケ調整後ナデ。

D (B101~B103, B106) 斝盤玉状の体部に口縁部は短かく湾曲して開く。端部は面を成して終わる。口縁部内外面共横ナデ調整。B102, B103口縁部下に2個1組の小孔を穿つ。体部外面ヘラミガキ (B102)。B101, B103剥離。内面ハケ調整後ナデ。

A1 (E093) 大きく外湾して広がる口縁部で、端部は外下方へ若干拡張する。端面横ナデ調整、4条の凹線文を廻らし、4本1組の縦線文を7方に付加。口縁部外面ハケ調整。頸部に巾2.5cmの低いハケ圧痕文凸帯。肩部外面には櫛状直線文・列点文を廻らす。内面ハケ調整後ナデ。口縁部に羽状列点文を施文。

F (B104, B105, B107) 外反気味にのびる口縁部で上方において水平近くに広がる。端部は肥厚乃至若干拡張するものもある。端面横ナデ調整。凹線文2条 (B104)、波状文 (B105) を廻らす。口縁部外面ハケ調整。B107ナデ。内面ハケ調整後ナデ。B103口縁部に列点文を廻らす。

E (B109) 外反気味にのびる口縁部で大きく水平に広がる。端部は下方に拡張。体部は、腹部が大きく張る球状を呈す。端面外面横ナデ調整後波状文を廻らす。器体外面ハケ調整、体下部ヘラケズリ。上腹部には、櫛状波状文、直線文 (3条×2連) 等を施文。口縁部内面に羽状列点文。瘤状突起等を施す。器体内面ハケ調整後上半ナデ。

ⅡG

外湾気味に開く筒状の頸部より口縁部は屈曲して立ち上がるもの。形態によりG1~G4に細分し得る。

G1 (B111~B115, B120, B123~B128) 筒状の頸部より口縁部は屈曲してほぼ直上に立ち上がるもの。端部は平坦乃至内傾する面を成す。口縁部外面横ナデ調整。3条の浅い凹線文を廻らす。頸部外面ハケ調整、内面ナデ仕上げ。器体外面ハケ調整後櫛状直線文、波状文等を施文。内面ナデ仕上げ。

G2, G3 (B116~B118, B121, B122) 外湾気味にのびる太い筒状の頸部より口縁部は屈曲して直上、又は内反気味に巾広く立ち上がる。端部は、平坦乃至凹面を呈す。口縁部外面ハケ調整後横ナデを加えるものが多い。上端又は上・下端に凹線文を廻らす。頸部外面に斜方向のハケ調整。屈曲部には、巾2cm前後の低いハケ圧痕文凸帯又は指頭圧痕文凸帯を貼付ける。口頸部内面ハケ調整。口頸部の形状よりG2 (B117, B118, B121) とG3 (B116, B122) に細分できる。

G4 (B130) 内湾してのびる口縁部で、端部は内傾する浅い凹面を呈す。口径18.4cm。口縁部内外面共横ナデ調整。外面には8条の不整の凹線文を廻らす。内面ナデ。

C3 (B131) 細い筒状の頸部より口縁部は屈曲して内湾気味に立ち上がる。端部は内方に肥厚し平坦面をなす。口縁部内外面共横ナデ調整。外面に2条の細い凹線文が廻る。頸部外面ハケ調整。

G3 (B132) 外湾して開く頸部より口縁部は段を成して外反する。端部は平坦に取める。外面横ナデ調整。

G 6 (B133) 外湾気味にのびる口頸部で、上方において緩く屈曲して短かく立ち上がる。口縁立ち上がり部外面横ナデ調整。口頸部以下縦又は斜方向の粗いハケ調整。頸部屈曲部に口径2cm弱の低いハケ尻直文凸帯を貼付ける。器体内面ハケ調整後若干ナデを加えるか。

G 1 (B135) 緩やかに湾曲してのびる頸部に屈曲して短かく直立する口縁部を付す。口縁部外面横ナデ調整後6～7条を単位とする沈線（ヘラ又は櫛）による鋸齒文を施文する。口頸部外面ハケ調整後ナデ。頸部屈曲部にハケ尻直文を廻らす。口頸部内面に横方向のハケ調整。

B 1 (B136, B137) 口径7.5cm前後。細く外反してのびる口頸部で、上方で内折する。端部は内傾する面を成す。口縁部外面ハケ調整後ナデを加えるか。

I 1 (B138, B139) ほぼ直口にのびる口縁部である。上端横ナデ後1～2条の凹線文を廻らす。B138口縁部外面にハケ調整痕をとどめる。

B (B140, B141) 内湾気味にのびる直口の口縁部で、球状の体部を有す。口縁端部は、ほぼ平担に収める。口縁部外面横ナデ調整。2～3条の凹線文を廻らし、その下位に羽状列点文を施文。いずれも頸部屈曲部には断面三角形貼付凸帯を有す。体部外面ハケ調整。B141体部上半部にナデ、又下半部にはヘラケズリを加える。B140上腹部には、櫛描直線文・波状文（3条×2連）を交互に廻らす。器体内面ハケ調整後若干ナデ。

壺体、底部 (B143～B153) B143、B144は、胴部中位が張る算盤玉状を呈し平底の底部を有す。B143外面ハケ調整後ナデ。上半部に櫛描波状文を廻らし、最下段に列点文を施文。内面ハケ調整後ナデ。B144体部外面縦方向の細かいヘラミガキを全面を施す。内面ハケ調整、上半にナデを加える。B145～B150は、安定した平底の底部で、体部は直線的に斜上方に広がる。外面ハケ調整。B145、B151はヘラケズリを施す。内面ハケ調整。B152、B153は、突出した平底の底部でやや外傾する。内外面共ハケ調整。

台付無頸部 (B154, B169)

脚台 (B154, B169) B154は脚台のみ残存。下方に径2cmの円孔を四方に穿ち、下端には太く浅い凹線文を2条廻らす。内外面共ナデ仕上げ。B169は、口縁部は体部より内湾し、端部を内折させずはまる。

細頸壺型土器

D 2 (B155) 細く筒状にのびる口頸部。口径7.2cmを測る。外面ナデ。櫛描直線文（3条単位）を廻らす。内面ナデ仕上げ。

D 1 (B156, B157) 算盤玉状の体部に内湾気味にのびる口頸部を有す。器体外面ハケ調整後ナデ。B157体部ヘラミガキ。B156口縁部外面に羽状列点文、以下頸部上半より腹部にかけ櫛描直線文、波状文、列点文等を廻らす。器体内面ハケ調整後ナデを加える。頸部内面にしぼり目残存 (B156)。

水釜型土器

B (B158) 内湾気味にのびる口縁部で片口を呈す。口縁部外面横ナデ調整。6条の凹線文を廻らす。頸部に櫛描直線文。内面ハケ調整後ナデ。

高杯型土器

直口の口縁部を有すA、水平線口縁部を有すBがある。

A 3 (B159) 内湾気味に開く杯、口縁部。口頸部はふ厚く段状を成す。外面横ナデ調整。内面杯部にヘラミガキの痕跡が認められる。

B (B160～B168) 内湾又は直線的にのびる杯部に口縁部は屈折して水平に開くもの。内面に1条の凸帯を廻らす。口縁端部は、肥厚乃至若干弛張気味のもの (B160～B164)。下方に著しく弛張するもの (B165～B168) がある。口

縁端部外面横ナデ調整。B166、B168に2～3条の細い凹線文を施文、杯部外面ハケ調整、内面ハケ調整後ナデを施す。

鉢型土器

口縁部が碗状を呈するA、半球碗状の体部に口縁部が緩やかに外湾して開くB、内湾して端部の内反するD、口縁部がゆるやかに内湾し、端部を肥厚させるE等がある。

B1 (B174～B176) 半球碗状の体部に口縁部が緩やかに外湾して開くもの。腰に稜を有するものがある (B174)。端部外面横ナデ後ハケ圧痕文を施す。器体外面ハケ調整後上半部にナデを施し列点文、直線文等を施文。口縁部内面に横方向のハケ調整。B164には列点文が施す。体部ナデ仕上げ。

D、E (B170、B171) 内湾気味にのびる体部で、口縁部が内折してすぼまるもの (B170)、又内湾気味に立ち上がるもの (B171) 等がある。B170口縁部は、内傾する浅い面をなすが、B171は内方に著しく肥厚し浅い凹面を呈す。

B170口縁部内外面共横ナデ調整。B170口縁部に扇形文を施文、又端部には波状文を施す。B171口縁部外面は、上面に2条の凹線文を施す、以下ハケ調整、内面ハケ調整、ヘラミガキを加える。B170がD、B171がEである。

A4 (B172、B173) 体、口縁部は内湾して斜上方にのびる碗状を呈す。口径13cm前後を測る。器体内外面共磨減が著しく調整等不分明であるが、内面にハケ調整痕をとどめる。両者共口縁部上端に1条の凹線文を施す、さらにその下方には羽状列点文が認められる (B172)。

脚部 (B177～B188) B177～B181は高杯の脚部と考えられる。「ハ」字状に緩やかに開く脚部で、裾端部は面を成して終わるもの (B177、B178) と若干拡張するもの (B179～B181) がみられる。いずれも器体外面ハケ調整、内面ハケ調整後ナデ。又はヘラケズリ (B179、B180)、裾端部は横ナデ調整。B182～B188は、鉢脚台と考えられる。筒状の柱状部より裾部が短く、外方に広がるもの (B182、B186、B187)、又「ハ」字状に短く広がるものがある。裾端部は、若干拡張するものが多いが、B187、B188は下方に折れる。外面ハケ調整。内面ハケ調整後ナデ。又はヘラケズリを施す (B182、B184)。

台形土器 (B189)

口径21cm、器高26cm、底径29.8cmを測る。内湾気味にのび上がる体部より口縁部は屈曲して緩やかに外反する。内外面共ハケ調整。底部外面横ナデ調整。5条の凹線文を施す。台形土器としての回転台としての機能を持つことも想定されるが、鉢型土器の可能性も多分にある。

甕型土器

口縁部が「く」字状に外反して開くA (A1、A2)、緩やかに外湾して開くC (C1、C2)、受口状口縁部B (B3) がある。

A1 (B190、B191、B193、B197～B200) 上腹部が膨らむ縦長の体部に口縁部は「く」字状に外反して開き、端部は面を成して終わる。端部外面横ナデ後ハケ又はヘラ圧痕文を施す。器体外面ハケ調整、内面ハケ調整後体部にナデを加える。

A2 (B192、B194～B196、B201～B204) 口縁部が肥厚乃至若干拡張気味のものである。端部外面は、横ナデにより浅く凹むもの (B194、B195)、波状文 (B196) 等を施すもの等々みられる。器体外面ハケ調整。B194、B195、体部には先行する叩きが認められる。B196体部は、ハケ調整後ナデを施し楕圓直線文、波状文等を施す。器体内面ハケ調整。B194、B195ナデ仕上げ。B192体下部ヘラケズリ。B192は完形で口径13cm、器高17cm、最大腹径14.4cm、底径4.4cmをはかる。

C 1 (B 205~B 208) 口縁増部を上方に拡張するもので端面は外傾する面を成すもの。端部外面横ナデ調整。体部外面ハケ調整。内面ハケ調整後ナデ。

C 2 (B 209, B 210) 緩やかに外湾して広がる口縁部で、頭部は湾曲する。端部は面を成して終わるもの、若干拡張気味のものがある。いずれも増面横ナデ後ヘラ又はハケ研痕文を廻らす。器体外面ハケ調整後上腹部に列点文、直線文等を施文。口頸部内面横方向のハケ調整、口縁部に列点文 (B 210) 等で廻らすものがある。体部内面ナデ仕上げ。

堿 B

受口状口縁である。口縁部の形態により B 3 (B 3-I、B 3-II) に分類できる。

B 3-II (B 212~B 216) 傾斜して開く第 2 口縁より第 1 口縁は内湾気味に短かく立ち上がる。口縁立ち上がり部外面横ナデ調整、口頸部以下ハケ調整後ナデを施こし、列点文、波状文、斜格文 (ヘラ) 等を施文 (B 214~B 216)。口頸部内面横方向のハケ調整。B 216 横ナデ、体部ナデ仕上げ。

B 3-I (B 217, B 218, B 221, B 223, B 225, B 238) 傾斜して開く第 2 口縁より第 1 口縁は短かく直立する。口縁立ち上がり部外面ハケ調整後上端に横ナデを施こす。B 223 端部にヘラ研痕文。外面口頸部以下ハケ調整、口頸部にナデを加えたものがある。上腹部に列点文、直線文、弧状文等を施文。口頸部内面に横方向のハケ調整。B 225 口縁部に列点文を廻らす。体部ナデ仕上げ。

B 3-II (B 227~B 229, B 233~B 235) ほほ水平に開く第 2 口縁より第 1 口縁は直上乃至やや外反気味に短かく立ち上がる。端部は平坦乃至内傾する浅い凹面を呈す。口縁立ち上がり部外面ハケ調整後上端に横ナデを施こすもの。又全面横ナデ調整を施こし、ヘラ描波状文 (B 235) を廻らすものがある。外面口頸部以下ハケ調整。直線文、列点文等を施文する。口頸部内面横方向のハケ調整。口縁立ち上がり部にはナデを施こす。B 233~B 236 口縁部内面には列点文・波状文等を施文。体部ナデ仕上げ。

B 3-II (B 219, B 220, B 224, B 226, B 237) 傾斜して開く第 2 口縁より第 1 口縁は短かく内傾して立ち上がる。端部は丸味を有す。口縁立ち上がり部外面ハケ調整後上端に横ナデを施こす。外面口頸部以下ハケ調整。上腹部に列点文、直線文、弧状文等を施文。口頸部内面に横方向のハケ調整。立ち上がり部ナデ。体部内面ナデ。

B 3-I (B 230~B 232, B 236, B 239, B 240) 傾斜気味に開く第 2 口縁より第 1 口縁は内反して立ち上がる。端部は内傾する浅い凹面を呈す。口縁立ち上がり部外面ハケ調整。上端 (B 239, B 240) 又はほほ全面に横ナデを施こす。口頸部以下ハケ調整。上腹部には列点文、直線文等を施文。口頸部内面に横方向のハケ調整。B 240 ナデ。全て口縁立ち上がり部にナデ。

B 3-II (B 241~B 247) ほほ水平に開く第 2 口縁より第 1 口縁は内反して立ち上がる。端部は内傾する浅い凹面又は平坦面 (B 243, B 245) を呈す。口縁立ち上がり部外面ハケ調整後上端に強い横ナデを施こし、さらに B 242~B 246 端部にヘラ研痕文を施文。外面口頸部以下ハケ調整を施こすが、B 245~B 247 口頸部にナデ。頸部に列点文を施文。口頸部内面に横方向のハケ調整。B 243, B 244 口縁部内面には波状文、列点文等が廻る。全て口縁立ち上がり部内面にナデ。

堿底部 (B 248) 平底の底部で、直線的に斜上方にのびる体部を有する。外面ハケ調整。内面ハケ調整後ナデ仕上げ。

蓋型土器

B (B 249, B 250) 低い傘型を呈す。ほほ平坦な天井部より体部は「ハ」字状に緩やかに広がる。口縁部に 2 個 1 組の円孔を穿つ。器体内外面共ハケ調整。

(3) S D152 B (環溝 B) 出土土器

S D152 B 出土土器は、一括取り上げのため、まとめて記述したい。

壺 A (A 3)、D (D 1)、E、F、G (G 1、G 2)、H (H 2)、台付無頸壺 A、E、細頸壺 D、高杯 B、E、鉢 B (B 1)、C、甕 A (A 1、A 2)、B (B 2-II、B 3-I、B 3-II) 等がある。

壺型土器

E (C001) 大きく外湾して広がる口頸部で、口縁部は外方に若干湾曲気味に開き内面が高い。端部は肥厚する。端面横ナデ調整、3条の凹線文を廻らす。口縁部外面ハケ調整後ナデ。内面刺離、口縁部に羽状列点文を施文。

D 1 (C004) 算盤玉状の体部より口縁部は短かく湾曲して開く。底部は安定した平底を呈す。端部上・下端をわずかに拡張し、端面横ナデ後凹線文1条を廻らす。口縁部内外面共横ナデ調整。口縁部の相対位置に2個1組の小孔を穿つ。体部外面縦方向の細かいヘラミガキを施し、上半部と下半部の境界には横方向のヘラミガキを加える。内面ハケ調整。完形品で、口径10.3cm、器高14.6cm、最大腹径17.5cm、底径5.8cmを測る。

E (C002、C003) 太頸で大きく外湾して開く口縁部である。C002端部は外下方に大きく拡張。C003は肥厚する。両者共端面には3-4条の凹線文を廻らし円形浮文を等間隔に貼付ける (C003は2個1組)。C002頸部屈曲部に指頭圧痕文凸帯。腹部の大きく膨らむ体部を有し、外面ハケ調整後ナデ、櫛指波状文、直線文、斜格文等で加飾する。内面口縁部に櫛指直線文、扇形文等を施文。体部ハケ調整。

A 3 (C005) 外湾して開く口頸部である。端部は若干肥厚し面を成す。端面横ナデ調整。口頸部外面ハケ調整。頸部屈曲部に指頭圧痕文凸帯、口頸部内面ナデ。

G 1、G 2 (C006~C009) 外湾して開く頸部より口縁部は屈曲して直上又は内反気味に巾広く立ち上がる。端部は内方に肥厚し平坦又は内傾する凹面を呈す。口縁部外面ハケ調整後横ナデを加え、上端又は下端に凹線文を施文。口頸部内外面共ハケ調整。口縁部内面にナデ (C006、C008、C009)。C006頸部屈曲部に巾1cmの指頭圧痕文凸帯を貼付ける。立ち上がり部の形態により G 1 (C006-C008) と G 2 (C009) に細分できる。

H 2 (C010) 受口状口縁の形態を有す壺である。緩やかに傾斜して開く第2口縁より第1口縁は鋭どく内傾して立ち上がる。端部は内傾する凹面を呈す。下腹部の強く張る体部で平底の底部を有す。口径16.0cm、器高20.5cm、最大腹径18.8cm、底径4.3cmを測る。口縁立ち上がり部外面横ナデ後斜格文を施文。端部に圧痕文 (ヘラ又は櫛) を廻らす。器体外面ハケ調整後上腹部にナデを加え羽状列点文、直線文等を施文。口縁部下の対面位置には2個1組の小孔を穿つ。口頸部内面ハケ調整。列点文を廻らす。体部ハケ調整後上半ナデ。色調は、内外面共茶褐色を呈す。

B 1 (C011) 外反気味にのびる口縁部で上方において短かく内折する。端部は内傾、立ち上がり部内外面共横ナデ調整。口縁部外面ハケ調整。

F (C012) 外反気味にのびる筒状の口縁部、端部は外傾する面を成す。内外面共横ナデ調整。

細頸壺型土器

D (C103) 口頸部欠失。肩の張るほぼ算盤玉状の体部で、やや突出気味の平底の底部を有す。外面ハケ調整。肩部には山形文 (ヘラ?) 5列が認められる。内面ハケ調整。底部付近にヘラ削り。

壺口縁部 (C014) 内傾してのびる上がる口縁部。端部は肥厚し外傾する面を成す。内外面共横刺離。内面にハケ調整痕残存。

台付無頸壺

E (C015, C016) C015は、内湾してのびる体・口縁部である。端部は内方に肥厚し平坦面を呈す。外面口縁部に2条の凹線文を廻らす。内外面共横ナデ調整。C016は直線的に斜上方に開く脚台で、下端は内方に肥厚する。器体内外面共ハケ調整後ナデ仕上げ、楕円形の透孔を四方に穿つ。

水笠型土器

A (C017, C018) 腹部の強く張り出す算盤玉状の体部にやや外反気味にのびる直口の口縁部を有するもの。口縁部に挟りを入れ片口を呈す。底部は安定した平底を有す。肩部に横位の半環状把手を貼付ける。外面口縁部上方横ナデ調整。3条(C017)、又は1条(C018)の凹線文を廻らす。両者共外面ハケ調整後、口頸部より体部上半にナデを加え(C018は肩部に若干ナデを施す)、櫛指波状文、直線文、列点文等を施文する。口頸部内面ナデ。体部ハケ調整。口径9.6cm、器高21.4cm、最大腹径20.0cm、底径5.8cmを測る。

高杯型土器

直口の口縁部を有すE、水平縁口縁を有するBがある。

E (C019, C020) 直口の口縁部で、端部は内方に著しく肥厚し平坦面を成す。C019口縁部外面ハケ調整後横位のヘラミガキ。C020横ナデ調整。両者共1～2条の浅い凹線文を廻らす。内面ハケ調整。C019はヘラミガキを加える。

B (C021～C023) 内湾気味に開く杯部より口縁部は屈曲して水平に広がり、端部を外下方へ著しく拡張する。口縁部内面に1条の凸帯を貼付ける(C021, C022)。口縁部外面横ナデ調整。C022に4条の細い凹線文を施文。杯部外面ハケ調整。内面ナデ仕上げ。

高杯脚部 (C024～C030) 筒状の柱状部より緩やかに外反して広がる裾部を有す。裾端部下端を若干拡張し、端面には横ナデを施す。脚部外面ハケ調整。内面ハケ調整、ヘラ削り。C030は、太い柱状部より短かく外反して開く裾部を有す。形状等詳細不明。内外面共剥離。

鉢型土器

半球状の体部に口縁部が緩やかに外湾して開くBと口縁部が内折してすぼまるCがある。

B1 (C031, C032) 腰に稜をもつ半球状の体部より口縁部は緩やかに外湾して開く。底部は安定した平底。端部外面は凹状を成し、横ナデ調整後下端(C031)、又は上・下端(C032)にヘラ圧痕文を廻らす。器体外面ハケ調整後上半ナデ。櫛指列点文、直線文、波状文等を施文。器体内面ハケ調整後体部ナデ仕上げ。C032口縁部内面には波状のハケ調整1帯を廻らす。

C (C043) 口径7.4cmの小型品で、ミニチュアとも考えられる。球状の体部に短かく外反して開く口縁部を有し、端部上端を内方に若干拡張、端部にヘラ圧痕文、内外面共ハケ調整後ナデ。

台付無頸壺

A (C033, C034) 内湾気味に開く体部より口縁部は内折してすぼまる。口縁部内外面共横ナデ調整。C033体部外面ハケ調整。C034横ナデ、細い凹線文を廻らす。内面ハケ調整。

甕型土器

口縁部が「く」字状に外反して開くA(A1, A2)と受口状口縁部B、口縁が大きく外湾するCがある。

A1 (C035～C037) 「く」字状に外反して開く口縁部で、端部は面を成して終わる。上腹部が膨らむ縦長の体部を有し、安定した人きな平底を有す。端面横ナデ後C035、C036ヘラ又はハケ圧痕文を廻らす。体部外面ハケ調整。C035体部はハケ調整に先立ち横又は斜方向の叩きを施す。内面ハケ調整。

A 2 (C038~C040) 「く」字状に外反して開く口縁部で、端部は若干拡張気味。端面横ナデ調整。内縁文1条を廻らし、端面下端 (C039)、又は上・下端にヘラ尻痕文を施す。C039体部外面に櫛描直線文、波状文を交互に廻らす。ハケ調整痕残存。器体内面ハケ調整後ナデ。C039口縁部下に2個1組の小孔を穿つ。

C 1 (C042) 外反して開く口縁部・端部は外傾する凹面を成し、横ナデ後ヘラ尻痕文を施文。口縁部内外面共ハケ調整。

変B

受口状口縁を呈す甕である。口縁部の形態によりB 2-II、B 3-I・IIに分類される。

B 2-II (C046) 傾斜気味に開く第2口縁より第1口縁はやや外傾し短かく立ち上がる。端部は平坦乃至内傾する面を成す。口縁立ち上がり部外面斜方向のハケ調整後上端に横ナデを施す。外面口頸部以下ハケ調整。上腹部に直線文、列点文、波状文等を廻らす。口頸部内面に横方向のハケ調整。立ち上がり部ナデ。体部内面ナデ。

B 3-I (C048、C053) ほほ水平に開く第2口縁より第1口縁は短かく直立する。端部は内傾する凹面を呈す。口縁立ち上がり部外面ハケ調整後上端横ナデを加え、口頸部外面ハケ調整、櫛描列点文、直線文を廻らす。内面口頸部横方向のハケ調整。鋸歯文を施文。立ち上がり部ナデ。

B 3-II (C044、C045、C047、C049~C052、C054~C058) 傾斜して開く第2口縁より第1口縁は短かく内折して立ち上がるもの。端部は平坦乃至内傾する凹面を呈す。口縁立ち上がり部外面ハケ調整後上端又はほほ全面 (C057) に横ナデを加える。外面口頸部以下ハケ調整。後上腹部にナデを施し櫛描列点文・直線文・波状文・弧状文等を廻らす。口頸部内面ハケ調整。立ち上がり部ナデ。C058口縁部には列点文が廻る。体部ナデ仕上げ。端部にハケ又は櫛による櫛描列点文 (10個1組) を等間隔に施文 (C050)。

(4) 堅穴住居跡出土土器

下流域で検出された堅穴住居跡は、不明確なものも含め、約81棟にのぼるが、CE区、DE区、チ-I、リ-I、ト-IVの順で説明を加える。なお、CE、DEについては、第1遺構面、第2遺構面、第3遺構面の順序で述べる。

SH001

甕口縁部・底部等若干認められる。D001は、「く」字状に外反して開く口縁部である (変A1)。端部は丸く取める。口縁部内外面共横ナデ調整。体部外面ハケ調整。

SH003

変B 3-IIIの口縁部片1点 (D004) がある。傾斜して開く第2口縁より第1口縁は内反して短かく立ち上がり、端部は内傾する面を成す。口縁部外面ハケ調整後横ナデ調整。下方に櫛描列点文を廻らす。

SH004

無頸甕・高杯・甕等の器種がある。

D005は、口径7.8cmを測る小型の無頸甕で、脚台を有するものと考えられる。内傾してのびる体・口縁部で、端部は内傾する。内外面共横ナデ調整。外面に6条の内縁文を廻らし、その下位に列点文を施文。

高杯A 2 (D006) は杯・口縁部が内湾してのびるもの。口縁部外面に3条の内縁文、内外面共ナデ。

甕にはA 2 (D007)、A 2 (D008)、B 3-I (D009) 等がある。D007、D008は「く」字状に外反して開く口縁部で、D007口縁端部は若干肥厚。D008は拡張する。口縁部内外面共横ナデ調整。D007体部外面ハケ調整。腹部にハケ尻痕文を1列廻らす。体部に焼成後穿孔。D009は、内反して立ち上がる受口状口縁甕である。端部は内傾する。内外

面共ハケ調整。口頸部外面にナデ。櫛描列点文、直線文を施文。

SH005

壺・高杯・鉢・甕等の器種が認められる。

細頸壺C (D010) は筒状の頸部より口縁部は外反して大きく広がり上方において短かく直立する。器体内外面ハケ調整後ナデ。11線立ち上り部横ナデ後直線文を廻らし、縦線文(2条単位)を等間隔に施文。口頸部より上腹部にかけ櫛描直線文、波状文等を廻らす。

高杯にはE (D013)、A2 (D012)がある。D013は、杯・口縁部が内湾してのびるもので、口縁部外面に4条の凹線文を施文。内外面共ナデ。D012は、直線的に広がる深い杯部より口縁部はやや外反気味に直口する。外面ヘラミガキ。口縁部には3条の凹線文を施文。口縁部内面ハケ調整。

鉢にはC (D014)がある。体・口縁部はやや内湾気味に斜上方にのびる。脚台欠失。口径19cmを測る。口縁部外面に凹線文1条。体部外面にハケ調整痕残存。内面口縁部に凹線1条。体部ハケ調整。しほり目残存。

甕にはB2-II (D016、D018、D019)、B3-I (D017)がある。いずれも腹部の張る縦長の体部を有す。器体外面粗いハケ調整。D019口縁部外面横ナデ。外面上腹部には櫛描直線文、列点文、波状文等を施文。内面ハケ調整。D016、D019立ち上がり部にナデ。体部ナデ。口径20cm、器高28.8cm、最大腹径22.4cm、底径5.6cm (D018)を測る。

SH007

壺B1 (D020)、甕C1 (D021)がある。D020は、外反してのびる口頸部で上方において内折する。立ち上がり部内外面共横ナデ。外面ハケ調整。D021は外湾して広がる甕口頸部で、端部は面をなす。端部外面横ナデ調整後列点文を施文。口頸部外面に縦方向のハケ調整。内面横方向のハケ調整。口縁部に列点文を施文。

SH009

壺B3-II口縁部(D022)1点が出土している。傾斜して開く第2口縁より第1口縁は短かく直立する。口縁部外面斜方向のハケ調整。上端に横ナデ調整。口頸部外面ハケ調整後ナデ。頸部に列点文が認められる。口頸部内面に横方向のハケ調整。

SH012

壺、鉢脚台、甕等の器種がみられる。

壺にはG2 (D023)、G4 (D024)、J (D025)がある。D023、D024は外湾気味に開く頸部より口縁部は屈曲して巾広く立ち上がる。端部は凹面を呈す。口縁部外面横ナデ調整。上・下端に各1条の凹線文を廻らす。D025はやや外反気味にのびる直口の口縁部。内外面共横ナデ調整。外面に細い凹線文を施文。口径17cmを測る。

甕にはA2 (D027)、A2 (D028)、B3-III (D033)、B3-III (D029-D032)がある。D027、D028は「く」字状に外反して開く寛A2口縁部である。口縁部内外面共横ナデ調整。D028口縁部に2条の凹線文。D027体部外面にハケ調整。D029-D033は受口状口縁部Bである。D033は内湾気味に立ち上がる。いずれも腹部の張りが強く頸部で大きく湾曲する。口縁部内外面共横ナデ調整。外面下方に列点文を施文。寛腹部ハケ調整後ナデを加え直線文、列点文等を施文。D029口頸部内面に横方向のハケ調整を施し列点文を施文。他は、いずれも内面ナデ仕上げによる。D033は口径11cmを測る小型。他は9-21cm前後。

SH013

壺、甕が認められる。

壺にはG1 (D034)、F (D035)がある。D035はやや内湾気味にのびる口頸部。上方にヘラ庄裏文凸帯2条を貼付ける。凸帯下方に櫛描列点文。内外面共ハケ調整後ナデ。口径11cmの小型。

莖にはB 2-II (D036、D037)がある。両者共磨減が著しく調整・施文等不鮮明。内外面にハケ調整を施す。

S H015

壺B 2-I (D038)、B 3-II (D039、D040)がある。器体内外面共ハケ調整。D040口縁部外面横ナデ調整。腹部ナデ後櫛指列点文を施文。内面体部ナデ仕上げ。口径19cmを測る。

S H016

壺H 2、高杯脚部がある。D041(壺H 2)は、外反して開く口縁部で上方において内折する。端部は内傾する面を成す。口縁部上方横ナデ後波状文を施文。口頸部ハケ調整。内面ハケ後ナデ。櫛指列点文を施文。D042は、やや開きの小さい高杯脚部である。裾端部は内傾する凹面を呈す。内外面共ハケ調整。

S H017

壺、甕等の器種が認められる。

壺にはF (D043)がある。筒状の頸部より口縁部は、水平近くに広がる。端部は若干拡張気味で外傾する面を成す。端部外面横ナデ調整。口頸部内外面共ハケ調整後ナデを加える。

甕にはA 1 (D044)、B 2-II (D045)がある。D044は、「く」字状に外反して開く口縁部で、端部は若干肥厚する。端部外面横ナデ調整。体部外面横後縦方向のハケ調整を施す。体部内面横方向のハケ調整残存。

D047は、傘型で平坦な天井部より体部は外湾気味に広がる(蓋B)。口縁端部は、凹面を成し、上端にヘラ疋痕文を廻らす。体部に2個1組の小孔を穿つ。器体内外面共ハケ調整。

S H018

壺、甕等の器種が認められる。

壺にはF (D048)、G 1 (D049)がある。D048は、外湾して広がる短かい口縁部、端部は面を成し、凹線文1条を廻らす。口縁部内外面共横ナデ調整。D049は、筒状で外湾気味にのびる頸部より屈曲して直上に立ち上がる口縁部、端部は凹面を呈す。口縁部外面横ナデ調整。3条の凹線文を廻らす。頸部外面ハケ調整後ナデ。3条+αの断面三角形凸帯を貼付ける。内面ハケ調整後ナデ。

甕にはC 1 (D051)、B 2-I (D052)、B 2-II (D053)、B 3-I (D054)がある。D051は、緩やかに外湾して広がる口頸部である。端部にヘラ疋痕文。頸部外面には櫛指列点文を廻らす。口縁部内面に波状文。

D052-D054は、いずれも器体内外面にハケ調整を施す。D040は張りの弱い縦長の体部を有すと思われる。体部外面ナデ。櫛指直線文、列点文を施文。内面ハケ調整、口縁立ち上がり部及び体部ナデ仕上げ。

S H019

鉢、甕等がある。

鉢E (D056)は内湾気味にのびる体・口縁部で、端部は若干内方に肥厚し平坦面を成す。器体内外面共ハケ調整後ナデを加える。口縁部上端に2条、下端に1条の細い凹線文を廻らす。

甕にはA 2 (D057)、C 1 (D058)、B 2-II (D059)がある。D057は、鋭どく屈曲して開く口縁部、端部上端を拡張、内外面共横ナデ調整。D059はやや内湾気味に短かく立ち上がるもの。内外面ハケ調整。

S H020

壺、甕がある。

壺にはF (D060)、G 3 (D061)がある。D060は、湾曲して大きく水平近くに開く口縁部である。口縁部内外面共ナデ仕上げ。D061は内反して巾広く立ち上がる口縁部、外面ハケ調整。内面ハケ調整後ナデ。

甕B 3-I (D062)は傾斜して開く第2口縁より第1口縁は短かく直立する。内外面共ハケ調整。

S H021

甕 G 1 (D063)、甕 2-II (D064) がある。D063は外湾気味に開く太い筒状の頸部より屈曲して巾広く立ち上がるII線部を有す。口縁部外面横ナデ調整。上方に1条の凹線文を廻らし、中位に竹管文を施文。D064は、口径11cmの小型品で口縁部下に2個1組の小孔を穿つ。

S H022

蓋型土器 (D065) 1点のみ出土。わずかに凹状を早す天井部より体部は緩やかに外湾して広がる(蓋B)。II線端部は面を成し横ナデを施す。器体内外面共ハケ調整。体部に2個1組の円孔を穿つ。天井部径4.6cm、器高3.4cm、口径12cmを測る。

S H024

甕(体部)、細頸甕、鉢、壺、甕等の器種がある。

壺体部(D066)は球状を呈し、上半にはタタキが、下半にはハケ目がのこる。H 2 (D074)は、受口甕で立ち上がり部はナデ、II頸部はハケ調整。

細頸甕D 2 (D067)は脚台欠失。小型で口径4cm、器高9cm、最大腹径7cmを測る。鉢型玉状の体部より口頸部はやや内湾気味にのび上がる。端部は平坦に取める。器体外面ハケ調整後上半ナデ。口縁部に2条の凹線文を廻らし、その下方に帯描列点文。上腹部には帯描直線文、波状文を交互に施文。内面ナデ仕上げ。

台付無頸甕A (D068)は内湾気味に開く体部に口縁部は内折してすぼまる。口縁部内外面共横ナデ、外面に凹線文1条を廻らす。体部内外面共ハケ調整後ナデ。

甕にはA 1 (D069)、C 1 (D070、D071)、B 2-I (D072)、B 2-II (D073) 等がある。D069は、腹部が大きく膨らむ体部を持つと考えられ、口縁部はさらに「く」字状に外反して開く。端面にへら圧痕文。器体内外面共ハケ調整。体部内面にナデ。D070、D071は緩やかに外湾して開く壺口頸部で、器体内外面共ハケ調整。D071II線部内面に波状文。端面横ナデ。D070にへら圧痕文を廻らす。D072~D074は器体内外面共ハケ調整後一部ナデを加える。

D075は、口径8.4cm、器高1.8cmを測る低い傘型の甕で、やや外湾気味に広がる(蓋A)。II線部に2個1組の小孔を穿つ。

S H025

壺A 1 (D076)、G 1 (D077) がある。D076は、外湾して大きく広がる口頸部、端部を外下方に著しく拡張する。内外面共ナデ。端面に4条の凹線文を廻らし、4個1組の円形浮文を等間隔に貼付ける。口縁部内面に羽状列点文。D077は、屈曲して内反気味に立ち上がる口縁部。外面に4条の凹線文を廻らし、さらに頸部にも細い凹線文を施文。D 2 (D079)は細く外反気味にのびる口頸部で上方において内折する。口縁部外面に帯描列点文。

S H028

甕、水差型土器、高杯、甕等の器種が認められる。

甕H 2 (D078)は、筒状の頸部に屈曲して短かく直立する口縁部を有す。口縁立ち上がり内外面共横ナデ調整、II頸部ハケ調整。

細頸甕D 2 (D079)は、細く外反気味にのびる口頸部で、上方において内折する。口縁部外面に帯描列点文。

小型の水差Aである(E080)。口径3.2cm、器高6.9cm、最大腹径7cm、底径2.6cmを測る。鉢型玉状の体部に直立の口縁部を有す。肩部に横位の平環状肥手、内外面共ナデ。外面体下部へらミガキ。

高杯にはA 4 (D081) がある。内湾して斜上方に広がる杯・口縁部である。端部はぶ厚く外傾する面を成す。外面ハケ調整後ナデ。内面ナデ仕上げ。口径27cm。

甕にはA 2 (D082)、B 2-II (D083-D085、D087)、B 3-I (D086)がある。D082は、球状の体部に狭かく屈曲して開く口縁部を有す。端部は、若干拡張。口縁部内外面共横ナデ調整、体部外面ハケ調整、内面ハケ仕上げ。D083-D087は、いずれも頸部の湾曲は緩やかで、口縁部は狭かく直上又は内傾気味に立ち上がる。D087口縁部の立ち上がりは甘い。器体外面ハケ調整。D085口縁部内外面共横ナデ。外面立ち上がり部及び端部内方にヘラ圧痕文を施文。又口縁部内面には露南文(ハケ状具)を施らす。

SH029

鉢、甕等がある。

D088は内傾してすぼまる口縁部で、端部はほぼ平坦面を呈す(鉢F)。内外面共横ナデ。外面には、4条の凹線文を廻らし、その下位に波状文の痕跡が認められる。

甕にはC 1 (D089)、B 2-II (D090)がある。D090は、傾斜して開く第2口縁にやや外反気味に立ち上がる第1口縁を有す。頸りの弱い縦長の体部を有するか。器体外面ハケ調整。胴部に列点文、直線文、口頸部内面に横方向のハケ調整、体部ナデ仕上げ。

SH030

甕、鉢脚台、甕等の器種がみられる。

甕にはG 2 (D092)、G 3 (D095)、K 2 (D093、D094)がある。D095は、短い筒状の頸部に屈曲して短かく直立する口縁部を有す。口縁立ち上がり部外面に凹線文、口頸部内外面共ナデ。D093、D094は、外反気味にのびる口頸部で、上端は内折する。器体内外面共ハケ調整。内面にナデを施す。

甕にはA 1 (D098)、A 2 (D097、D099)、C 1 (D100、D101)、C 2 (D091)、B 3-I (D102-D104)がある。D097、D098端面にヘラ圧痕文。D099は、口縁端部を上・下に拡張し巾広い端面を成す。2条の凹線文を廻らす。D102-D104は、いずれも傾斜して開く第2口縁より、第1口縁はほぼ直上に立ち上がる。端部はほぼ平坦に取める。外面ハケ調整。D102口縁部には列点文を廻らす。又、D102、D103口縁部内面に露南文(ハケ状具)を施文。D100は、外湾して開く口縁部。内外面共ハケ調整痕残存。D091は、外湾して開く口縁部で端部を若干拡張する。端面横ナデ後波状文を施文。

SH031

甕A 2口縁部片1点のみ出土(D106)。口縁部は弱く屈曲して開き端部を上方に拡張する。口縁部内外面共横ナデ調整。

SH032

甕F (D107)が1点出土している。外湾して開く口縁部で、端部は面を成す。外面斜方向、内面横方向のハケ調整。

SH033

甕、高杯、甕等の器種がみられる。

甕にはA 1 (D108)、C 2 (D110)、G 4 (D109)がある。D108は外湾して広がる口縁部で、端部を外下方に著しく拡張する。端面に2条の凹線文を廻らし4個1組の竹管文を施文。D110は細く外湾気味にのび上がる口頸部で、端部を若干下つまみ上げる。内外面共ハケ調整。D109は、外湾気味にのびる太い筒状の頸部より緩く屈曲して立ち上がる口縁部。端部は内方に肥厚しほぼ平坦に取める。内外面共ハケ調整後若干ナデを加える。

高杯にはE (D111)、B (D112)がある。D111内外面共横ナデ調整。口縁部上・下端に凹線文各1条を廻らす。D112は水平縁口縁を有すもので、端部を外下方に著しく拡張する。端面横ナデ調整、浅い凹線文を施文。内外面共横ナデ調整。

甕にはA 1 (D113)、A 2 (D114)、C 2 (D115)、B 3-I (D116-D119)、B 2-II (D120、D121)がある。受口状口縁甕B (D115-D121)は、いずれも器体内外面にハケ調整を施すが、D117-D119、D121口縁部外面及び内面立ち上がり部に横ナデ。D119端部にヘラ圧痕文。口縁部外面にはヘラ斜格文を施文。口頸部内面横方向のハケ調整。D118、D121内面に列点文。

S H034

鉢、甕等の器種がある。

鉢F (D122)は、内傾してすぼまる口縁部である。外面上端に強い横ナデを施し、以下櫛描直線文・波状文等を施文。内外面共ナデ。B 1 (D124)は、口径10cmの小型鉢で、口縁部下に2個1組の小孔を穿つ。

甕にはC 2 (D123)、B 3 (D125-D128)がある。D123は、口径12.4cm前後の小型甕、緩やかに外湾して開く口頸部で、端部は、面を成して終わる。端面横ナデ、以下縦方向の粗いハケ調整。胴部に直線文帯。D125-D128は受口状口縁甕Bである。内外面共ハケ調整。D125、D128口縁部外面に横ナデ調整。全て立ち上がり部内面にナデを施す。D128頸部外面に列点文。

S H035

甕B 2-II口縁部片3点 (D129-D131)の出土が知られる。傾斜して開く第2口縁より第1口縁は内折して立ち上がる。内外面共ハケ調整。口縁部内外面に横ナデを施す (D130・D131)。

S H037

壺、甕等がある。

壺G 2 (D133、D134)は屈曲して巾広く直上に立ち上がる口縁部で、端部は凹面を成す。口縁部内外面共横ナデ調整。頸部外面ハケ調整。

甕にはA 1 (D135)、A 2 (D136)、C 2 (D132、D137)、B 2-II (D138、D142、D143)、B 3-I (D139-D140)、B 3-II (D141)等がある。D132、D137は、緩やかに外湾して開く口縁部である。D132は、腹部に張る縦長の体部を有す。端面横ナデ調整。D137下端にヘラ圧痕文。口縁部以下粗いハケ調整。口頸部内面横方向のハケ調整。体部ナデ。D132は、口径21.5cm、器高34.6cm、最大腹径25cm、底径6cmを測るもの。磨滅が著しく煤の痕跡は認められない。甕Bは、口縁部の形態によりB 2-II、B 3-I、B 3-IIに分けられるが、いずれも器体内外面にハケ調整を施す。口縁部内外面共横ナデ調整。D143端部にヘラ圧痕文。D140、D141、D143口頸部内面に列点文を施す。

S H038

甕の体部 (D144)が1点のみ出土している。腹部の張る体部で直線的にすぼまり底部に至る。器体外面ハケ調整。胴部に弧状文、直線文を施文。内面ハケ調整後ナデ仕上げ。

S H040

壺、台付無頸壺、細頸壺、高杯、甕等の器種が認められる。

壺にはA 1 (D145、D146)、E (D148)、G 1 (D149、D150)、G 2 (D152)、G 3 (D151)、H 1 (D155)、I 1 (D153)等がある。D145は、大きく外湾して広がる口縁部で端部を外下方に著しく拡張する。端面横ナデ調整。凹線文、列点文を施文。口縁部内面ナデ。列点文を施文。D148は、上腹部が膨らむ縦長の体部に口縁部が筒状のび水平近くに折れるもので、肩部に円窓を穿つ。口縁部外面横ナデ、器体内外面共ハケ調整。D149-D152は、太く外湾気味に開く頸部に緩く屈曲して直上又は内反気味に巾広く立ち上がる口縁部を有す。端部は、平担乃至凹面を呈す。外面ハケ調整後口縁部に若干ナデを加える。いずれも上端乃至下端に浅く太い1条の凹線文を施す。D153は、直口の口縁部で、上方において屈曲する。上端横ナデ調整。凹線文1条を施す。口縁部外面ハケ調整。肩部叩き。内面ハケ

調整後ナデ。

細頸型D 2 (D156) は内湾してのびる口頸部。外面ナデ、上方に凹線文3条、以下羽状列点文、直線文等を施文。内面ハケ調整後ナデ。

高杯B (D157) はやや内湾気味にのびる杯部より口縁部が早く屈折して水平に開くもの。内面に1条の凸帯を廻らす。杯部外面にハケ調整直残存。

鉢G (D147) は、口径15cmを測る小型で、球状の体部を有す。口縁端部に櫛播波状文を施文。外面ハケ後上半ナデ。肩部に櫛播直線文、波状文を施す。口縁部内面に横方向のハケ調整。体部ナデ仕上げ。

甕にはA 1 (D160-D163)、A 2 (D164-D166)、A 2 (D169、D170)、C 1 (D171-D176)、B 2-I (D177-D179)、B 2-II (D180-D186)、B 3-I (D187-D190) 等がある。

A 1 (D160-D163) は口縁端部には、ヘラ圧痕文、器体外面ハケ調整。口縁部内面に横方向のハケ調整。体部ハケ後ナデ (D160)。

D169、D170 (A 2) は口縁端部は上方に拡張。口縁部内外面共横ナデ調整。

D171-D176は、緩やかに外湾して広がる甕口縁部。D171、D172端部外面横ナデ後沈線を廻らし、下端にヘラ圧痕文を施文。口縁部内外面共ハケ調整。D172口縁部内面に櫛播列点文を施文。

D177-D190 (甕B) は、受口状に立ち上がる口縁部を有するもので、形態によりB 2-I (D177-D179)、B 2-II (D180-D186)、B 3-I (D187-D190) に大別される。いずれも器体内外面に粗いハケ調整を施すが、外面口縁部上端乃至は全面に横ナデを加えるもの。さらには口縁部内面に横ナデを施すものも認められる (D178-D185)。D181、D187、D189端部にヘラ圧痕文。D181口縁部下方には列点文を施文。口縁部内面には波状文 (D182)、又は列点文 (D187、D188) を廻らす。外面頸腹部に列点文、波状文等を施文する。

SH041

甕G 2 (D192) 1点が出土している。外湾気味に開く筒状の頸部に口縁部は屈曲して巾広く立ち上がるもので、端部は内方に著しく肥厚し、端部は凹状を呈す。口縁部外面ハケ調整後ナデ。上端に凹線文1条を廻らす。

SH042

甕、甕が認められる。

甕G 1 (D193) は外湾して大きく開く頸部に屈曲して立ち上がる口縁部、端部は内方に肥厚し浅い凹面を呈す。内外面共ハケ調整。頸部屈曲部にヘラ圧痕文凸帯。A 3 (D195) は、口縁部が短かく外湾し、端部は面をなす。内外面ともハケ調整。

甕A 1 (D194) は端部横ナデ後ヘラ圧痕文を施文。口縁部内外面共ハケ調整。B 3-I (D196) は、傾斜して開く第2口縁より内傾して立ち上がる第1口縁を有す受口状口縁甕。内外面共ハケ調整。

SH043

甕A 2 (D197)、G 1 (D198) がある。D197は、外湾して広がる口縁部で、端部上・下を若干拡張し外傾する面を成す。端部外面横ナデ後波状文を廻らすか、口縁部内外面共ハケ調整。D198は、外湾して開く頸部に屈曲して巾広く立ち上がる口縁部を有す。内外面共ハケ調整。

SH044

甕、高杯、甕等の器種が認められる。

甕にはC 2 (D199、D200) がある。外湾して開く口縁部で上方において短かく立ち上がる。立ち上がり部外面横ナデ。内外面共ハケ調整。

高杯にはA 2 (D201)、B (D202)がある。D201は、内湾してのびる杯、口縁部である。内外面共ナデ仕上げ。口縁部外面に3条の凹線文を廻らす。D202は、内湾気味にのびる杯部より屈折して口縁部は水平に開く。内面に1条の凸帯を貼付ける。口縁部外面横ナデ、杯部外面ハケ調整後ナデ。内面ナデ仕上げ。

甕にはA 1 (D203、D204)、A 2 (D205)、C 1 (D206)、B 3-I (D208)、B 3-II (D207)等がある。

D205は「く」字状に外反して開く口縁部で、端部を若干拡張する。端面横ナデ調整。器体外面ハケ調整。口縁部内面ハケ調整。体部ハケ調整後ナデ。上腹部が張る縦長の体部を有すか。D207 (B 3-II)は、傾斜して開く第2口縁にわずかに内反して立ち上がる第1口縁を持つものである。立ち上がり部外面ハケ調整後上端横ナデ。下端にヘラ庄痕文、口頸部内面ハケ調整。銅銜文(ハケ)を施文。

SH045

壺、細頸壺、鉢、甕等の器種がある。

壺にはA 1 (D209)、G 1 (D210)がある。D209は、外湾して広がる口縁部で、端部を外下方に拡張。端部外面横ナデ後3条の凹線文を廻らす。口縁部内面に列点文を施文。D210は、筒状の頸部より口縁部が屈曲してやや内反気味に立ち上がるもの。口縁部外面に4条の凹線文。頸腹部外面ハケ調整後ナデ。腹部に櫛指直線文を施文。内面ハケ調整後ナデ。

細頸壺D 2 (D211)は口縁部が内湾してのびるもの。外面には凹線文、櫛指列点文、直線文等が認められる。

鉢にはD (D212)がある。内湾してのびる体部に口縁部は内折してすぼまる。端部は丸く取める。器体内外面共ナデ。外面に5条の凹線文を廻らす。口径11.4cmを測る。

甕にはC 1 (D214)、C 2 (D215)、B 3-I (D216、D217、D218)がある。D214、D215は、外湾又は外反して開く口縁部を有す。D215端部は若干拡張。両者共下縁又は上・下端にヘラ庄痕文を有す。D216～D218器体内外面共ハケ調整。D216外面ハケ。口縁部内面に列点文を施文。

SH046

壺、甕等が認められる。

壺G 2 (D219)は緩く屈曲して巾広く立ち上がる口縁部で、端部は平担に取める。外面横ナデ。上・下端に凹線文各1条を廻らす。

甕にはB 2-I (D221)、B 2-II (D222)がある。D222は、張りの弱い縦長の体部を持ち、傾斜して開く第2口縁より第1口縁は短かく直立する。口径16.2cm、器高20cm、最大腹径14.4cm、底径4.8cmを測る。口縁部外面横ナデ後下端に列点文を施文。頸腹部外面ハケ調整。上腹部には櫛指直線文、列点文を施文。I頸部内面横方向のハケ調整。立ち上がり部及び体部にナデ。

SH047

高杯、甕等がある。

高杯にはB (D223)がある。水平縁口縁を有するもの。端部を外下方に著しく拡張する。口縁部内外面共横ナデ調整。

甕にはA 1 (D224)、B 3-II (D225)がある。D225の口縁部外面は、斜方向のハケ調整を施こし、上端に横ナデを加える。器体外面ハケ調整後胴部に列点文を施文。内面横方向のハケ調整。立ち上がり部にナデ。

SH048

甕I口縁部2点の出土が知られる。緩やかに外湾して開くC 1 (D226)と傾斜して開く第2口縁より短かく直立して立ち上がる第1口縁を有するB 2-II (D227)がある。D227口縁部外面に斜方向、頸部以下縦方向のハケ調整を施こ

す。口縁部上端にヘラ疋痕文を施文。内面口頸部に横方向のハケ調整。

SH049

壺、高杯、甕等の器種がある。

壺にはD (D228)、C1 (D229、D230)、H1 (D231)がある。D228は、外反気味にのびる口縁部で水平近くに関くもの。D229、D230は、細く外湾してのびる筒状の口頸部で、上方において屈曲して短かく立ち上がる。立ち上がり部外面に1-2条の凹線文。口頸部内外面共ハケ調整後ナデ。D231は、細く外反してのびる口頸部で上方において内折する。立ち上がり部に斜格文(ヘラ)の痕跡、口頸部外面には梅播波状文、直線文等を施文。

D232は、細頸壺Dの体部か、尊盤玉状を呈す。外面には梅播列点文、列点文を交互に施文。内面ハケ調整。

高杯にはB (D233)がある。内湾気味にのびる杯部より口縁部は屈折して水平に広がる。肩部は外下方に著しく拡張。口縁部内面に1条の凸帯を貼付ける。端面ヘラミガキ。内外面共ナデ仕上げ。

壺にはC1 (D239、D240)、C2 (D237、D238)、B3-I (D241~D244)がある。D237~D240は、緩やかに外反して広がる口縁部を有す。肩部は肥厚気味。肩部外面横ナデ後下端 (D237、D239)、又は上・下端 (D238、D241)にヘラ疋痕文。口頸部内外面ハケ調整。D238、D240頸部外面に列点文。D241~D244内外面共ハケ調整。口縁部外面上端 (D241)、又はほぼ全面 (D243、D244)に横ナデを施す。全て立ち上がり部内面ナデ。D243口縁部に列点文を施文。

SH050

壺、甕がある。

壺にはC1 (D245)、J (D246)がある。D245は受口状口縁を呈すもの。D246は直立後外反して関く口縁部。頸部外面に列点文の痕跡が認められる。

壺にはC1 (D247)、B3-I (D248、D249)がある。D248器体内外面共ハケ調整。肩部にヘラ疋痕文。胴部外面には直線文、列点文等を施文。内面横方向のハケ調整。立ち上がり部ナデ。腹部が大きく膨らむ縦長の体部を有すと考えられ、復径が口径を上回るものである。口径27cmを測る。

SH052

壺、高杯、甕の器種が認められる。

壺にはF1 (D250)、H1 (D251)、H2 (D256)がある。D251は、外湾してのびる口頸部で上方において内折する。内外面共ハケ調整。D256は、外湾して関く頸部に口縁部は屈曲して内反気味に立ち上がる。口縁部外面斜格状のハケ調整。内面横ナデ。頸部内外面共ハケ調整。

高杯にはA3 (D234)がある。内湾してのびる口縁部で、肩部は凸状を成す。内外面共横ナデ。

甕にはC1 (D252)、B2-I (D253、D255)、B3-II (D254)がある。D252は緩やかに外反して関く口縁部を有し、肩部はやや拡張気味。端面横ナデ後下端にヘラ疋痕文。口頸部内外面共ハケ調整。外面に直線文、列点文を施文。口縁部内面に羽状列点文。

SH057

壺、高杯、甕等の器種が認められる。

壺C1 (D257)は外湾して関く頸部に屈曲して短かく立ち上がる口縁部を有す。内外面共ハケ調整。

高杯A3 (D258)は、直口の口縁部を有するもの。外面横ナデ調整。2条の凹線文を施す。

甕にはB2-I (D259)、B2-II (D260、D261)がある。内外面共ハケ調整。D260口縁部外面横ナデ調整。口縁部立ち上がり部ナデ。D260内面に列点文を施文。

S H058

壺、鉢、甕、蓋等の器種が認められる。

壺にはA 3 (D 262)、D 2 (D 263)、C 3 (D 265)がある。D 262は外湾して開く口縁部。D 263は筒状の口縁部で上端は外方に折れる。D 265は受皿状口縁を有するもの。いずれも磨滅が著しく調整等不分明。

鉢D (D 264)は内湾してのびる体部に口縁部が内折してすままるもの。口縁部外面横ナデ調整。扇形文を廻らす。端面に波状文を施文。体部外面にハケ調整。口径20cmを測る。

甕にはA 1 (D 267)、C 1 (D 268)、B 2-II (D 269、D 270)、B 3-I (D 271)がある。D 269-D 271内外面共ハケ調整。D 269、D 271口縁部外面横ナデ。

蓋B (D 272)は、ほぼ平坦な天井部より体部が外湾して広がるもの。外面にハケ調整痕。

S H059

壺、甕がある。

壺にはF (D 273)、I 2 (D 274)がある。D 273は、外湾して開く口縁部で、上端を若干拡張。D 274は直口の口縁部を早す。外面ハケ調整。

甕B 3-II (D 275)は、傾斜して開く第2口縁より第1口縁は短かく直立する。内外面共割離。

S H061

ミニチュアの壺1点(D 276)が知られる。平坦な底部を持つ球状の体部よりくびれて開く口縁部を有するもの。手づくね。

S H062

壺、台付無頸壺、甕等の器種がある。

壺E (D 277)は、外湾して広がる口縁部で、端部は肥厚する。内外面共横ナデ調整。端部外面に2条の凹線文を廻らす。

D 278は、台付無頸壺Aの体、口縁部と考えられ、内湾してすままる。外面横ナデ調整。7条の凹線文を廻らす。口縁部下に2個1組の小孔を穿つ。内面ハケ調整後ナデ。

甕B 3-II (D 279)は、傾斜して開く第2口縁に第1口縁は短く内折して立ち上がる。外面ハケ調整。口縁部上端横ナデ。内面ナデ。

S H063

壺、高杯、甕等の器種がみられる。

壺にはA 1 (D 280)、C 1 (D 281、D 282)がある。D 280は、外湾して大きく広がる口頸部で、端部を外下方に大きく拡張する。端部外面横ナデ調整。4条の凹線文を廻らす。口頸部外面ハケ調整。口縁部内面に羽状列点文、2個1組の瘤状突起を4方に貼付ける。

D 281、D 282は、外反してのびる口頸部で、上方において内折する。ハケ調整。

高杯A 2 (D 283-D 285)は、直口の口縁部を有するもので、口縁部外面横ナデ。凹線文を廻らす。内面にハケ調整。

甕にはB 3-I (D 286、D 287、D 290)、B 3-II (D 288、D 289)がある。口縁部外面は、ハケ調整後横ナデを加えるもの、又内面に列点文を廻らすものが多い。D 290頸腹部外面ハケ調整後ナデを加え列点文、直線文等を施文。内面横方向のハケ調整。

S H064

壺、高杯脚部、甕等がある。

D291は、外湾して開く頸部に口縁部は屈曲して内反気味に巾広く立ち上がる(壺G1)。外面ハケ調整後口縁部にナデ。端部にハケ圧痕文を施文。内面ハケ調整後ナデ。頸部に指頭圧痕文凸帯を貼付ける。

甕は、張りの弱い体部より緩やかに屈曲して口縁部はやや外反気味に短かく立ち上がるB2-I(D293)で、口縁部内外面横ナデ。外面頸部以下縦方向のハケ調整後胴部に列点文、直線文を施文。内面口頸部に横方向のハケ調整。体部ナデ仕上げ。

SH065

壺、高杯、甕等の器種がある。

壺にはA1(D294、D295、D296)、E(D302)、F(D297)、G1(D299)、G5(D298)、C3(D318)がある。D295、D296は、水平に広がる口縁部である。D295口縁部外面ハケ調整。D298はG5の、D299はG1の口縁部で、D318は受口壺C3とみられる。D302は、帯E体部と考えられる。球状の体部で、外面ハケ調整後頸腹部に帯橋波状文を施文。内面ハケ調整後ナデ。

高杯にはA2(D300、D304、D310)、A3(D303)、B(D305)、F(D301)がある。いずれもやや内湾気味にのびる直口の口縁部で端部は内方に肥厚するもの(D310)、外方に折り返し段状を呈するもの(D303、D304)等がある。D310口縁部上端に1条の門線文を廻らす。内外面共横ナデ調整。D300、D301は、やや内反気味に立ち上がる口縁部で、外面に3-4条の門線文を施文。D305は水平に広がる口縁部を有するもの。端部を若干拡張する。内面に1条の凸帯を貼付ける。内外面共横ナデ調整。

甕にはA3(D312-D315)、B2-I(D316)、B2-II(D317、D319、D322、D326-D330)、B3-I(D320、D321、D323、D325)、B3-II(D324、D323)等がある。D312-D315は、緩やかに外湾して開く甕A3口縁部。端部は面を成して終わり、端面横ナデ後ヘラ圧痕文。列点文等を施文。頸部外面又は口縁部内面に列点文。甕B316-D330は、内外面共ハケ調整後口縁立ち上がり部内外面に横ナデを加えるものが多い。D320、D322、D327、D329、D330端部にヘラ又はハケ圧痕文。口縁部内面に鋸歯文(D320、D322)。D329頸部外面ハケ調整後直線文、列点文を施文。

SH066

壺、甕等若干の出土が知られる。

D332は、直口の口縁部(壺I1)で、外面横ナデ調整。上端に腰凹線文1条。内面ハケ調整。D334は、水平に開く第2口縁より第1口縁が外反気味に立ち上がる甕B2-II。口縁部外面横ナデ調整。内面に列点文を施文。

SH067

口縁部が「く」字状に外反して開く甕A1(D335)と受口状に立ち上がる甕B3-I(D336)の2点が出土している。D335口縁部内外面共横ナデ。体部内外面共ハケ調整。D336器体内外面共ハケ調整。

SH068

SH068においては、住居跡内土坑SK-1、SK-2より土器の出土が認められるが、SK-1出土土器は古相を呈することからSH068との関連には疑問がある。

(SK-1)

壺C1(D337)、甕C1(D338)の2点知られる。D337は、筒状の頸部に屈曲して短かく直立する口縁部を有している。口縁部外面横ナデ後波状文1帯を廻らし、その下方に列点文を施文。頸部内面に直線文帯(複帯構成)を廻らす。内面ハケ調整後ナデ。

D338は緩やかに外湾して広がる口縁部で端部外面は面を成す。端面に横方向のハケ調整。口縁部外面に縦方向。内

面に横方向のハケ調整。口径20cmを測る。

(SK-2)

壺、細頸壺等の器種がある。

壺にはA 1 (D 339)、G 1 (D 340、D 341)、G 5 (D 342)、I 1 (D 343)がある。D 339は、大きく外湾して広がる口縁部で、端部を外下方に著しく拡張する。端面横ナデ調整。5条の凹線文を廻らし、さらに8本1組の縦線文を等間隔に施文。口縁部内面に羽状列点文。櫛描波状文を廻らし2個1組の瘤状突起を貼付ける。D 340、D 341は、屈曲して直上に巾広く立ち上がる口縁部である。D 340口縁部外面に羽状列点文。D 341は、4条の凹線文を廻らしさらにヘラ疋痕文を付加する。内面ハケ調整後ナデ。D 342は、内湾してのびる口頸部で、端部は内傾する面を成す。口縁部外面に7条の凹線文を廻らし、ハケ疋痕文を施文。頸部下方にも凹線文が認められる。頸部外面ハケ調整。内面ハケ調整後ナデ。

D 343は、やや外反気味にのびる直口の口縁部、上端は甘く屈曲する。端部は凹面を呈す。胴長の球状の体部を有す。器付内外面共ハケ調整。上端横ナデを施す。

細頸壺D (D 344)は、口頸部が内湾気味にのびるもの。外面横ナデ調整。口縁部に5条の凹線文を廻らし、その下に羽状列点文を施文。頸部には波線文、液状文を廻らす。内面ハケ調整後ナデ。

SH069

壺G 1 (D 346)、継頸壺D 2 (D 347)の口縁部片2点が出土している。D 346内外面共ハケ調整。口縁部外面上端横ナデ。太く浅い凹線文1条を廻らす。

SH070

壺、細頸壺、高杯等の器種がみられる。

壺にはG 2 (D 348)、H 1 (D 349)がある。D 348は、外湾して阔く筒状の頸部より口縁部は屈曲して直上に立ち上がる。端部は内方に肥厚し平担に収める。口縁部外面上端に凹線文。外面ハケ調整。頸部屈曲部にハケ疋痕文凸帯。内面ハケ調整後ナデ。D 349は直口気味の口縁部を有するが、上方で外反。D 349外面横ナデ。端部にヘラ疋痕文を施文。口縁部に櫛描波状文、直線文を廻らす。内面ハケ調整後ナデ。

細頸壺E (D 351)は、細く外反してのびる口頸部で上方において内折する。口縁立ち上がり部外面横ナデ後ハケ又は櫛状具による鋸歯文を廻らし、2本1組の棒状浮文を4方に貼付ける。頸部ハケ調整。内面ナデ。口径8.4cm。

高杯にはA 3 (D 353)、B (D 352)がある。D 353は、内湾してのびる杯、口縁部で、端部は外力に折れ凸状を呈す。外面にヘラミガキの痕跡をとどめる。

D 354は、緩やかに外湾して広がる高杯頸部、外面ハケ調整、内面ハケ後ナデ。裾端部横ナデ調整。D 355は鉢舞台か、椀か「ハ」字状に開き、端部は面を残す。外面ヘラミガキ。列点文を施文。内面ハケ後ナデ。

SH071

壺、細頸壺、高杯、甕等の器種が認められる。

壺にはG 2 (D 356)、C 3 (D 357、D 358)がある。D 357、D 358 口縁部外面に3条の凹線文。口頸部外面ハケ調整。D 358ナデ後櫛描直線文を施文。D 357肩部外面叩き後ハケ調整。内面ハケ調整ナデ。口径12cm。

細頸壺D 2 (D 359)は、算盤玉状の体部に内湾してのびる口頸部を有す。底部欠失、脚弁を有するか。器付内外面共ナデ。口縁部外面に8条の凹線文を廻らし、その下に羽状列点文を施文。体部には列点文、直線文を交互に施文。文様帯最下段列点文上には内形浮文を貼付ける。頸部内面にしほり口残存。

鉢E (D 360)は、内湾気味にのびる口縁部。端部は内方に肥厚し内傾する面を残す。内外面共横ナデ。外面に4条

の凹線文を廻らす。

壺にはC 1 (D 362・D 363)、B 3-II (D 364)、B 2-II (D 365・D 366) 等がある。D 362、D 363は、縦やかに外湾して広がる口縁部。端部にヘラ圧痕文。外面ハケ調整。D 363内面に列点文。D 364～D 366口縁部内外面共ハケ調整後横ナデ。D 365下端にヘラ圧痕文。内面に列点文を施文する。

SH072

壺、甕等がある。

壺G 1 (D 367) は、内湾気味の口縁部片で明らかにし難いが、外面横ナデ調整。上端に凹線文1条を廻らす。内面にハケ調整痕。

D 369は、受口状口縁壺B 2-1の完形品である。口径19.8cm、器高27cm、最大腹径20cm、底径6cmを測る。腹部が張る縦長の体部で、傾斜して開く第2口縁より第1口縁は緩く屈曲して外反する。器体外面ハケ調整。胴部に直線文を施文。内面ハケ調整後ナデ仕上げ。

SH073

壺、高杯、鉢、甕等の器種が認められる。

壺にはG 1 (D 370)、G 2 (D 371・D 375)、G 3 (D 372)、C 2 (D 374) がある。D 370～D 372、D 375は、外湾して開く頸部に屈曲して直上又は内反気味に巾広く立ち上がる口縁部。端部は内方に肥厚しほぼ平坦に取める。口縁部外面横ナデ調整。凹線文1～3条を廻らす。頸部ハケ調整。内面ハケ調整後ナデ。D 374は、外湾して広がる口頸部で上方において屈曲し短かく立ち上がる。立ち上がり部内外面共横ナデ調整。口頸部外面ナデ。直線文を施文。内面ハケ調整後ナデ。

高杯B (D 378) は、水平に広がる口縁部で、端部を下方に拡張する。内外面共横ナデ調整。内面に1条の凸帯を貼付ける。

鉢にはE (D 373、D 376、D 377) がある。直口の口縁部を有するもの。D 376口縁部外面横方向のヘラミガキ。D 377口縁部に凹線文2条を廻らす。

甕にはA 1 (D 380)、A 2 (D 381)、C 1 (D 382)、B 2-I (D 383、D 384)、B 3-I (D 385、D 386、D 387) 等がある。D 380端面にハケ圧痕文。D 383～D 387内外面共ハケ調整。D 387端面にヘラ圧痕文。D 384、D 385、D 387立ち上がり部内面ナデ。D 385に列点文。D 386頸腹部ナデ後横直線文、列点文を施文。

SH074

壺、高杯、甕等の器種がみられる。

壺にはF (D 388)、G 2 (D 389、D 390)、G 5 (D 391) がある。D 389、D 390は、外湾して開く頸部より口縁部が巾広く立ち上がる口縁部。口縁部外面横ナデ調整。凹線文を廻らす。D 391は、太く内湾してのびる口頸部。端部は内方に肥厚し浅い凹面を呈す。口縁部外面に6条の凹線文を廻らす。

鉢D (D 392) は、口縁部外面に3条の凹線文。杯部ハケ調整後ナデ。内面口縁部に横方向のハケ調整。

高杯B (D 393) は、直線文にのびる杯部に外下方に屈折して開く口縁部を有す。端部は面を成す。内面に1条の凸帯を貼付ける。口縁部内外面共横ナデ調整。杯部ハケ調整。

甕にはA 2 (D 395)、C 2 (D 396、D 397)、B 2-II (D 398～D 401、D 404)、B 3-I (D 402、D 403) 等がある。D 396、D 397は、外湾して広がる壺口縁部端面にヘラ圧痕文。口縁部内面に列点文を施文。D 398～D 404 口縁部外面ハケ調整後上端又はほぼ全面に横ナデを加える。立ち上がり部内面ナデ。D 399、D 400口縁部内面に列点文。口頸部内面横方向のハケ調整。

S H075

壺 G 1 (D405)、甕 A 2 (D406) の 2 点出土している。D405 は、外湾気味に開く筒状の頸部より口縁部は緩く屈曲してやや外反気味に立ち上がる。頸部屈曲部をハケ圧痕文凸帯。口縁部外面横ナデ調整。頸部に縦方向のハケ調整。内面ハケ調整後ナデ。D406 内外面共横ナデ調整。

S H077

甕 B 3-I (D407) は、口縁部片 1 点のみ出土。内外面共ハケ調整を施す。

S H078

壺、甕がある。

壺には G 2 (D412)、G 1 (D409) がある。D412 は、壺 G 2 口縁部又は高杯の可能性有。D409 は、外湾して開く太い口頸部で上方において屈曲して立ち上がる。立ち上がり部外面に 2 条の凹線文を廻らし、ヘラ描波線を付加する。内外面共ナデ。

甕 B 2-I (D413) は、内外面共ハケ調整。B 2-II (D410、D414) は口縁部外面上端及び内面に横ナデを施す。内面に列点文を施文。

S H055

壺 G 3 (D408) 1 点が出土している。

内反して巾広く立ち上がる口縁部で、内外面共横ナデ調整。頸部外面ハケ調整。端部は内傾する浅い凹面を呈す。

S H079

壺、台付無頸壺、高杯、甕等の器種がある。

壺には D (D415)、G 1 (D416)、G 3 (D417) がある。D415 は、短かく湾曲してのびる口縁部である。内外面共ナデ。D416、D417 は、外湾してのびる頸部に屈曲して巾広く立ち上がる壺 G 1、G 3、外面ハケ調整。内面ハケ調整後ナデ。D416 頸部に指頭圧痕文凸帯。

台付無頸壺 (D418) は直線に斜上方に開く脚台。内外面共ナデ。下方に凹線文。脚台の 4 方に楕円形の透孔を穿つ。

高杯 B (D419) は、水平縁口縁を有する高杯である。直線的にのびる杯部に口縁部は屈折して水平に開く。端部は下方に拡張。口縁部内面に 1 条の凸帯を貼付ける。口縁部外面横ナデ。杯部外面ハケ調整。内面ナデ仕上げ。

甕には A 2 (D420)、B 3-I (D421~D425) 等がある。D420 は、張りの弱い体部より鋭く外方に屈曲して開く口縁部で、端部は肥厚する。口縁部外面横ナデ調整。体部内外面共ハケ調整。D421~D425 口縁部外面斜方向のハケ調整後 D421、D425 横ナデ。D421 にはヘラ状具による斜格文を施文。D423、D424 端部にヘラ圧痕文。頸部外面ハケ調整。D425 に圧痕文。口頸部内面に横方向のハケ調整。D421~D423、D425 立ち上がり部にナデ。D421 口縁部内面に列点文。D425 には波状のハケ調整を施す。

S H080

鉢 B、甕 B 2 等がある。

D426 は、「く」字状に外反して開く口縁部を有する鉢 B 2、内外面共ナデ。

D427 は、緩く外反気味に立ち上がる第 1 口縁を有する甕 B 2-I で、端部は内傾する。内外面共ハケ調整。

S H081

壺 D、F 口縁部片 2 点の出土が知られる。D428 は、短かく外反して開く口縁部で端部は外方に拡張気味 (壺 D)。内外面共横ナデ調整。口縁部下に 2 個 1 組の小孔を穿つ。D429 (壺 F) は、筒状に外湾してのびる口縁部で水平近くに折れる。端部上、下端を拡張する。端面に 4 条の凹線文を廻らす。口縁部内外面共ナデ。外面頸部に波状文の痕跡が認め

められる。

(5) 土坑出土の土器

下流域検出の土坑は、総数110基にのぼる。説明の順序は、堅穴住居跡の場合と同じである。

SK001

壺、甕がある。

壺にはGⅠ(D431)とGⅢ(D430)があり、ともに屈曲して直上に巾広く立ち上がる口縁部である。内外面共ハケ調整後ナデを施すか。口縁部外面に凹線文を施す。

甕にはAⅠ(D432)、BⅢ-II(D433~D436、D439)、BⅢ-I(D437)、BⅢ-III(D438)等がある。D432は、「く」字状に外反して開く口縁部で、肩部にハケ直文。器体外面ハケ調整。内面ハケ調整後体部にナデを加える。D433~D438は、全て器体外面にハケ調整を施すが、口縁部上端(D434~D436)、又は余面(D438)に横ナデを施す。D438には列点文が廻る。D437、D438頸部外面ナデ。口頸部内面に横方向のハケ調整。口縁立ち上がり部にナデ。D435~D437口縁部内面に列点文を施す。D433頸部外面列点文、直線文等を施す。

SK002

甕B(BⅢ-II)口縁部、底部片等若干出土している。D439は、傾斜して開く第2口縁に第1口縁は内反して立ち上がる(BⅢ-II)。肩部は内傾する凹面を呈す。口縁部外面斜方向のハケ調整後上端横ナデ。頸部ナデ。内面横方向のハケ調整。立ち上がり部にナデ。

SK005

高杯A、壺底部等がある。D442、D443は、いずれも内湾気味に立ち上がる高杯型土器口縁部と考えられる(AⅠ)。D442内外面共横ナデ調整。外面に数条の凹線文を施す。D443口縁部上端に強い横ナデを施す。肩部は内傾する平面を呈す。内面ハケ調整。

SK006

壺、細頸壺、台付鉢、甕等の器種がみられる。

壺F(D445)は、筒状に外反してのびる口縁部で水平近くに広がる。肩部は下方に拡張、肩部外面横ナデ調整。2条の凹線文を施す。器体外面ナデ。肩部に列点文、直線文等を施す。内面ハケ調整後ナデ。

細頸壺AⅠ(D446)は、やや内湾気味に立ち上がる口頸部である。外面横ナデ調整。口縁部に4条の細い凹線文を施し、頸部に直線文、波状文等を施す。内面ナデ。

D448は、台付鉢の下半部と考えられる。球状の体部に「ハ」字状に開く脚台を有し、裾部は面を成す。器体外面へラミガキ。裾部横ナデ調整。内面体部上半ハケ調整。下半及び脚台内面ナデ仕上げ。

甕にはBⅢ-II(D449、D450)がある。内外面共ハケ調整後口縁部外面上端に横ナデ。立ち上がり部内面ナデ。

SK011

甕B(BⅢ-II)口縁部片1点(D451)が認められる。緩く傾斜して開く第2口縁より第1口縁は内反して緩かく立ち上がる。口縁部外面斜方向のハケ調整後上端に横ナデ。頸部以下ナデ。列点文の痕跡をとどめる。口頸部内面に横方向のハケ調整。立ち上がり部にナデ。

SK015

壺、高杯、鉢、甕等の器種がみられる。

D452は、2条の断面三角形凸帯を持つ頸部片で、大きく外湾して広がる口頸部を有す壺A1と考えられる。外面ハケ調整。肩部には構播波状文、直線文等を施文。D453は外湾して開く頸部に直上に巾広く立ち上がる口縁部を有す壺G5。肩部は内方に肥厚し平坦面を成す。内外面共ハケ調整後口縁部に横ナアを施す。

高杯にはB(D454)があり、水平線口縁を有する。肩部は若下肥厚気味。口縁部内面に1条の凸帯を廻らす。内外面共横ナア調整。

鉢にはC(D455)があり、内湾してすはまる口縁部で段状口縁を有す。器体外面横ナア調整。構播波状文を廻らす。内面ハケ調整。

甕にはB3-I(D456、D457)があり、傾斜して開く第2口縁より第1口縁は短かく直立する。D457口縁部外面に列点文を施文。内外面共ハケ調整後ナアを加えるか。

SK016

壺、高杯、甕等の器種がみられる。

壺にはG1(D463)、G2(D460、D464、D465)、G3(D461)、I2(D462)がある。D460は外湾して開く頸部に屈曲して巾広く立ち上がる口縁部を有す。内外面共ハケ調整を施し、口縁部に横ナア、外面上、下端に凹線文1条を廻らす。D461は、筒状の頸部に口縁部は鋭く屈曲してやや内傾気味に立ち上がるもの。肩部は凹面を呈す。口縁部外面横ナア後へラ構播斜格文を施文。頸部外面ハケ調整。屈曲部にハケ匠痕文凸帯を2条貼付ける。内面ハケ調整後ナア。D463は、壺G1体部と考えられる。外面ハケ調整後上半にナアを施し構播列点文、波状文等を施文。内面ハケ調整後ナア。D462は、外反して開き上方において屈曲するI2口縁部である。上端横ナア調整。口縁部外面ハケ調整。内面ナア。

高杯にはB(D469、D470)があり、D469は、内湾気味にのびる杯部に口縁部は屈折して水平に広がる。肩部は外下方に拡張。端面には3条の凹線文を廻らし、縦線文(14条単位)を等間隔に付加。杯部外面ヘラミガキ。内面ナア仕上げ。

甕にはA1(D471、D472、D473)、B3-I(D474-D476)、B3-II(D477-D481)等がある。

D471端面にハケ匠痕文。器体内外面ハケ調整。口縁部外面にナア。D474-D481口縁部外面斜方向のハケ調整後上端(D476-D478、D480、D481)又はほぼ全面(D475、D479)に横ナアを加える。D476、D477肩部にヘラ匠痕文。内面立ち上がり部ナア。口頸部内面横方向のハケ調整。D474、D477に列点文を施文。

SK024

壺、高杯、甕等の器種がみられる先述の住居跡SH016関連遺構と考えられる。

壺にはG1(D486)、H2(D487)がある。D487は、外湾して開く筒状の頸部に口縁部は鋭く内折するもの。肩部は内傾する。SH016出土D041と同一個体の可能性有。口縁部外面横ナア後波状文を施文。肩部にヘラ匠痕文。頸部ハケ調整後ナア。列点文を施文。内面口頸部横方向のハケ調整。鋸歯文を施文。立ち上がり部ナア。

高杯にはB(D488)がある。内湾してのびる杯部に口縁部は屈曲して水平に開く肩部は外下方に折れず。口縁部内面に1条の凸帯を貼付ける。口縁部内外面共横ナア調整。杯部外面にハケ調整痕。内面ナア仕上げ。

甕にはA1(D489)、A2(D490)、B3-I(D491、D492)等がある。D489、D490は、「く」字状に外反して開く口縁部である。D489は、面を成して終わり、端面にヘラ匠痕文を施文。D490は、若下肥厚がみられ横ナアを施す。D489体部外面ハケ調整。D491、D492は、傾斜して開く第2口縁より第1口縁は短かく直上に立ち上がるもの。D491内外面共ハケ調整。D492ハケ調整後口縁部外面に横ナア調整。頸部ナア後列点文、直線文等を施文。口頸部内面に横方向のハケ調整。

SK025

壺、鉢、甕等の器種がみられる。

壺にはG 1 (D502)、G 2 (D495、D496、D499、D501)、G 3 (D493、D497、D500)、G 6 (D494) 等があり、全て外湾して開く頸部に口縁部が屈曲して直上又は内反気味に巾広く立ち上がるものである。肩部は内傾又は凹面を早す。外面ハケ調整。D499～D502口縁部横ナデ調整。上端又は上・下端 (D497) に凹線文を廻らす。頸部屈曲部にハケ又はヘラ圧痕文凸帯を貼付ける。

鉢B 2 (D503) は半球状の体部に口縁部は短かく外反して開く。口縁部は若干拡張気味で、端面に3条の凹線文を廻らし、縦線文 (13～14条単位) を等間隔10方に施文。口縁部内外面共横ナデ調整。体部内外面共ハケ調整。

D505は、ほぼ水平に開く第2口縁に第1口縁は短かく直立する甕B 3-I。端部は平坦に取める。器体外面ハケ調整。腹部には櫛描列点文・直線文・波状文等を施文。体部内面ナデ仕上げ。

SK026

高杯、甕がある。

高杯B (D506) は内湾気味に開く杯部に口縁部は屈折して水平に広がる。口縁部は、面を成して終わる。口縁部内面に凸帯1条を貼付ける。口縁部外面横ナデ調整。杯部外面ハケ調整。内面には横方向のハケ調整が認められる。

甕B 2-II (D507) は、傾斜して開く第2口縁より第1口縁は短かく内反して立ち上がる。口縁部内外面共横ナデ。頸部以下斜方向のハケ調整。口頸部内面横方向のハケ調整。

SK027

甕、高杯、甕等の器種が認められる。

甕A 3、C 2、F、高杯A 1-Bや甕A 1、甕B (B 2-I、B 3-I) 等がある。

甕には、A 3 (D512)、C 2 (D508)、F (D509) があり、D508は、細く外湾気味にのびる口縁部で上方において内折する。立ち上がり部内外面共横ナデ調整。口頸部外面ハケ調整。頸部下方の櫛描直線文を施文。内面ハケ仕上げ。D509は、胴の張る縦長の体部に太頸で短かく筒状のびて水平に広がる口頸部を有す甕Fである。完形品で口径19.8cm、器高37.8cm、最大腹径36.6cm、底径7.3cmを測る。口縁部を上方に拡張し、端面に波状文を施文。器体外面ハケ調整。胴部には櫛描直線文、波状文を交互に施文。器体内面ハケ調整。口縁部内面ナデ。櫛描列点文を廻らす。D512は小破片であるが、A 3とみられる。

高杯にはA 1 (D510)、B (D511) があり、D510は、内湾してのびる杯、口縁部である。口縁部内外面共横ナデ調整。外面に凹線文1条を廻らす。D511は、直線的にのびる杯部に口縁部が屈折して外上方に広がるもの。肩部を外下方に拡張。口縁部内面に1条の凸帯を貼付ける。口縁部内外面共横ナデ調整。杯部外面ハケ調整。内面ナデ仕上げ。

甕にはC 2 (D513)、B 2-I (D515)、B 3-I (D516、D517) がある。D513は、緩やかに外反して開く口縁部を有す甕C 2で完形をとどめる。口径16.0cm、器高18.0cm、最大腹径16.0cm、底径5.8cmを測る。器体外面ハケ調整。胴部に直線文を施文。口頸部内面に横方向のハケ調整。体部ナデ仕上げ。D515～D517は、傾斜して開く第2口縁より第1口縁が短かく直立する。内外面共ハケ調整。D517口縁部横ナデ。D516頸部外面には列点文、直線文等を施文。

SK028

甕A 1 (D519)、C 2 (D520) がある。D519は、「く」字状に外反して開く口縁部。端部は面を成し、ヘラ圧痕文を施文。口縁部内外面共ナデ調整。D520は緩やかに外湾して開くもの。器体内外面共ハケ調整。

SK030

甕A 1 (D521) 1点出土。完形で、口径10.8cm、器高18.8cm、最大腹径14.2cm、底径5.6cmを測る。縦長の体部より

口縁部は外反して開く。底部は安定した平底を呈す。端部外面に横ナデ調整。器体内外面に細かいハケ調整痕をとどめる。

SK031

壺、無頸壺、甕等の器種が認められる。

壺にはC2 (D522、D523)、G3 (D524、D525)がある。D522、D523は、外湾気味にのびる口頸部で上方において短かく立ち上がる。端部は平坦に収める。立ち上がり部外面横ナデ調整。口頸部外面ハケ調整。口縁部内面に横方向のハケ調整。D524、D525は、頸部より屈曲して巾広く立ち上がる口縁部である。外面ハケ調整後横ナデ。D524口縁部上端に凹線文を施す。内面ハケ調整後ナデを加える。

D526は内湾してすばまる口縁部で、台付無頸壺か(A)。内外面共横ナデ調整。口縁部外面に5条の凹線文を施す。

D527は、「く」字状に外反して開く寛口縁部(A1)。端部は面を成して終わり、端面にハケ圧痕文。口縁部外面横ナデ調整。器体外面ハケ調整。器体内面ハケ調整。

SK033

壺、甕がある。

壺にはG2 (D528)があり、外湾して開く頸部に屈曲して巾広く立ち上がる口縁部。端部は凹面を呈す。口縁部外面横ナデ調整。頸部外面ハケ調整。内面ハケ調整後ナデ。

甕にはC2 (D529)、B2-II (D530)がある。D529は、緩やかに外湾して開く寛口縁部。端面にヘラ圧痕文を施す。頸部外面ハケ調整。列点文、直線文等を施す。D530は、傾斜して開く第2口縁に短かく直立する第1口縁を有するもの。内外面共ハケ調整。器体内面ナデ仕上げ。

SK035

細頸壺B1 (D531)1点のみ出土している。細く外湾気味にのびる口頸部で上方において内折する。立ち上がり部内外面共横ナデ調整。口縁部外面ハケ調整。内面ナデ仕上げ。

SK040

壺J、甕C1がある。D532は、漏斗状に外反してのびる口縁部を有する壺J、内外面共ハケ調整。外面に直線文を施す。D533は、外湾して開く口縁部である(甕C1)。端部は面を成して終わる。内外面共ハケ調整。

SK044

壺、細頸壺、高杯、甕等の器種が認められる。

壺にはD (D534)、G1 (D535)、I1 (D536)がある。D534は、短かく湾曲して開く口縁部で、端部は拡張する。球状の体部を有するか。口縁部内外面共横ナデ調整。器体内外面共ナデ、口縁部下に2個1組の小孔を穿つ。

細頸壺にはE (D537)があり、細い筒状の頸部より口縁部は内湾気味に立ち上がる。口縁部立ち上がり部外面には2本1組の棒状波文を4方に貼付、3条の沈線を通す。口頸部外面ハケ調整後ナデを加え、頸部位に竹管文、直線文等を施す。内面ハケ調整後頸部ナデ。

高杯にはB (D538)があり、内湾してのびる杯部に口縁部は屈折して水平に広がる。端部は若干拡張気味。口縁部内面に1条の凸帯を貼付ける。口縁部外面横ナデ調整。杯部内外面共ハケ調整。杯底部には、聞き弱い脚部が残存している。下半部欠失。杯部は粘土板充填法により形成される。

甕にはC2 (D529)、B3-I (D540)がある。D539は、緩やかに外湾して開く口縁部。端面横ナデ。ヘラ圧痕文。口頸部内外面共ハケ調整。外面に列点文。口縁部内面に鋸歯文(ハケ)。D540口縁部外面は、斜方向のハケ調整後上端に強い横ナデを施す。頸部内外面共ハケ調整。内面立ち上がり部にナデ。口縁部内面に鋸歯文(ハケ)を施す。

SK046

壺、甕がある。

壺にはG2 (D541)、D2 (D544)が認められる。D541は、外湾して開く頸部より緩く屈曲して立ち上がる巾広い口縁部を有す。端部は肥厚し平坦な面を成す。口縁部内外面共横ナデ調整。頸部ハケ調整。屈曲部にハケ片状文凸帯を貼付ける。D544口縁部は、鋭く屈曲して短かく外方に開き、端部を拡張する端面横ナデ調整。2条の凹線文を廻らす。

甕にはA1 (D543)、B2-II (D545)、B3-II (D542)がある。D543は「く」字状に外反して開く壺口縁部 (A1)。D542は、筒状の頸部より口縁部は屈曲して短かく直立する。口縁部外面斜方向のハケ調整後上端横ナデ。端部にヘラ片状文。頸部外面ハケ調整。櫛描列点文を施文。内面横方向のハケ調整。列点文を廻らす。D545は、傾斜して開く第2口縁より第1口縁は短かく直立する。口縁部外面斜方向のハケ調整後上端横ナデ。頸部外面ハケ調整後ナデを施こし、櫛描列点文、波状文等を施文。口縁部内面横ナデ。列点文を施文。頸部内面横方向のハケ調整。体部ナデ仕上げ。

SK048

壺C2 (D546)口縁部1点のみ出土。外湾気味にのびる口頸部で上方において内折する。外面立ち上がり部横方向。口頸部斜方向のハケ調整、内面ハケ調整後ナデ。

SK050

壺、高杯がみられる。

壺にはG1 (D547)、I1 (D548)がある。D547は、口縁部が内反気味に巾広く立ち上がる壺G1。口縁部外面F・下端に凹線文。D548は直口にのびる口縁部で、上端に強い横ナデを施こす。

高杯B (D549)は、直線的にのびる杯部に内折して外下方に広がる口縁部を有す。口縁部内面に1条の凸帯を貼付ける。口縁部内外面共横ナデ調整。杯部内外面共ハケ調整。

SK053

壺B口縁部片2点 (B2-I、B2-II)がある。D550は、「く」字状に外反して開く口縁部で上方において緩く屈曲して立ち上がる (B2-II)。内外面共ハケ調整。D551は、傾斜して開く第2口縁より第1口縁は外反気味に立ち上がる (B2-I)。内外面共ハケ調整。端部にヘラ片状文。

SK054

壺B (B2-I、B2-II、B3-I)が出土している。D552は、傾斜して開く第2口縁より第1口縁は外反して緩やかに広がる (B2-I)。口縁部外面横ナデ。内面ハケ調整。D553、D554は、傾斜して開く第2口縁に直上に短かく立ち上がる第1口縁を有す (B3-I)。端部は平坦に取める。外面ハケ調整。D554端部にヘラ片状文。頸部部に列点文、直線文、弧状文等を施文。口頸部内面ハケ調整。立ち上がり部にナデ。D555は内反して立ち上がるもの (B2-II)。内外面共ハケ調整。立ち上がり部内面ナデ。

SK064

壺C2、壺C1がある。D556は外湾してのびる口頸部で、下ぶくれの体部を有すか (壺C2)。口縁部はつまみ上げ。端面は内折する。横ナデ調整。口頸部外面ハケ調整。内面ハケ調整後ナデ。D557は、外湾して広がる口縁部で、腹部が張る縦長の体部を有すか (壺C1)。口縁部は面を成して終わり、端面横ナデ。上・下端にヘラ片状文。外面ハケ調整。腹部に直線文を施文。口頸部内面横方向のハケ調整。体部ナデ仕上げ。

SK066

壺B 2-II 口縁部 (D558) 1点が出土している。傾斜して開く第2口縁よりやや外反気味に立ち上がる第1口縁を有す。内外面共ハケ調整。

SK069

鉢B 1 (D559) 1点が出土している。

完形品で口径17.0cm、器高10.0cm、最大腹径14.8cm、底径5.6cmを測る。腰に稜を持つ半球状の体部より口縁部は外湾して開く。端面横ナデ調整。下端にヘラ圧痕文。外面ハケ調整後胴部にナデ。列点文、直線文を施文。内面ナデ。

SK070

壺B 3-I 口縁部片 (D560) 1点が出土している。口縁部外面斜方向のハケ調整後上端に横ナデ調整。頸部外面ハケ調整。口頸部内面横方向のハケ調整後ハケ状具による「X」字状の列点文 (ハケ状具) を廻らす。立ち上がり部にナデ。

SK073

直口の口縁部を有する壺1 1 (D561) がある。口縁部上端に強い横ナデを施す。口縁部外面ハケ調整。内面ナデ。

SK076

壺B (B 3-I) がある。D562は、傾斜して開く第2口縁より第1口縁は直上に立ち上がるもの。端部は凹面を呈す。口縁部外面ハケ調整後上端に横ナデ。頸腹部ハケ調整後ナデを施し樹格列点文、直線文を施文。口頸部内面に横方向のハケ調整。D563は内反して立ち上がるもの。端部にヘラ圧痕文。口縁部外面斜方向のハケ調整後上端横ナデ。口頸部内面ハケ調整。列点文を施文。

SK083

壺B 2-II (D564) 1点が出土している。傾斜して開く第2口縁より第1口縁は短かく直上に立ち上がる。口縁部外面斜方向のハケ調整。1条のヘラ描沈線を通らす。頸部以下縦方向のハケ調整。列点文 (ハケ) を施文。口頸部内面に横方向のハケ調整。

SK084

壺G 2 (D565) 1点が出土している。外湾して開く頸部に口縁部は緩く屈曲して短かく立ち上がる。口縁部外面横ナデ後上端に凹線文又1条を通らす。頸部外面ハケ調整。頸部屈曲部に低いハケ圧痕文凸帯を貼付ける。内面ハケ調整後ナデ。

SK090

細頸壺B 1 (D566)、壺B 2-II (D567) がある。D566は、細く外反気味にのびる口頸部で上方において内折する。端部は内傾する面を成す。口縁立ち上がり部横ナデ調整。口頸部外面ハケ調整。肩部に樹格直線文を施文。口頸部内面ハケ調整後ナデ。

D567は、傾斜して開く第2口縁より第1口縁が短かく直立する壺B 2-II。器体内外面共ハケ調整。肩部に直線文の痕跡をとどめる。

SK091

鉢B 3 (D568) がある。腰に稜を持つ体部より口縁部は屈曲して短かく水平に開く。口縁端部は下方に拡張し3条の凹線文を通らす。体部外面ハケ調整後ナデ。上半部に葉状文、波状文を交互に施文する。内面ハケ調整後ナデ。口頸部内面に列点文を通らす。

SK095

壺B 3-I (D569) 1点のみ出土。ほぼ水平に開く第2口縁より第1口縁は内反気味に立ち上がる。内外面共ハケ調

整。

SK096

甕B3-I (D570) が出土している。傾斜気味に開く第2口縁より第1口縁は短かく内反気味に立ち上がる。内外面共ハケ調整。口縁部外面下端にヘラ圧痕文。

SK100

壺、甕が認められる。

壺にはG1 (D571)、G6 (D572) がある。D571は、外湾して開く頸部に口縁部が屈曲してやや内反気味に立ち上がるもの。口縁部外面横ナデ調整。上・下端に凹線文を廻らす。頸部外面ハケ調整。屈曲部にハケ圧痕文を施文。内面ナデ。D572は、外湾して開く口頸部で、端部は面を成して終わる。端面横ナデ調整。口頸部内外面共ハケ調整。頸部屈曲部にハケ圧痕文凸帯。

甕にはA1 (D573)、B2-II (D574) がある。D573は、「く」字状に外反して開く口縁部。端部にヘラ圧痕文。体部外面叩き後ハケ調整。内面ハケ調整後ナデ。D574は、甕B2-II口縁部である。端部にヘラ圧痕文。内外面共ハケ調整。立ち上がり部内面ナデ。

SK101

甕B3-II (D575) の口縁部が1点出土している。外面ハケ調整後ナデ。頸部に列点文の痕跡をとどめる。口頸部内面横方向のハケ調整。立ち上がり部ナデ。

SK102

甕B2-J (D576) 1点出土。口径21.2cm、器高27cm、最大腹径21cm、底径5.7cmを測る。腹部が膨らむ縦長の体部より緩やかに傾斜して開く第2口縁より短かく外反する第1口縁を有す。端部は尖り気味。器体外面ハケ調整。胴部に直線文帯、口頸部内面横方向のハケ調整。体部ナデ仕上げ。

SK103

甕G1 (D577) が1点みられる内反して巾広く立ち上がる口縁部で、外面ハケ調整後若干横ナデを加えるか、頸部屈曲部にハケ圧痕文凸帯を貼付ける。内面ナデ仕上げ。

SK104

細頸密型土器の体部が、算盤玉状を呈す (D578)。外面ハケ調整後半ナデ。直線文・波状文を交互に施文。内面ハケ調整。

SK105

壺A1、甕A1、甕B (B2-I) 等がある。D579は、外湾して大きく広がる口縁部で端部を外下方に著しく拡張する (壺A1)。端面に5条の凹線文。口縁部外面ハケ調整後ナデを施すか。口縁部内面に羽状列点文。3個1組の瘤状突起を貼付ける。D580は、「く」字状に外反して開く口縁部を有す甕A1。端面にヘラ圧痕文。器体外面ハケ調整。内面ハケ調整後ナデを加える。D581は、外反気味に短かく立ち上がる口縁部を有す甕B2-I。内外面共ハケ調整。

SK109

壺、甕が認められる。

壺E (D582) は太頸で外湾気味にのびる口縁部で、端部は外下方に拡張する。端面に2条の凹線文を廻らす。内外面共ナデ。外面頸部に直線文。口縁部内面に列点文の痕跡をとどめる。

甕A1 (D583) は、「く」字状に外反して開く口縁部。端面にヘラ圧痕文。体部外面ハケ調整。口縁部内面横方向のハケ調整。体部ナデ仕上げ。

SK110

壺G1、甕B(B2-II)がある。

壺G1(D584)は、外湾して聞く頸部より口縁部は屈曲して直上に立ち上がるもの。口縁部外面横ナデ調整。上・下端に凹線文を廻らす。頸部外面に横方向のハケ調整。外面ナデ。

甕B2-II(D585)は、水平に聞く第2口縁より第1口縁短かく直上に立ち上がる。端部は内傾する面を成す。口縁部外面ハケ調整後横ナデ。頸部外面ハケ調整。内面ナデ。

(6) 溝跡出土の土器

SD151、SD152A、SD152Bのほかにも大小39条の溝跡が、下流域で検出されている。聚穴住居跡と同じように、各地区ごとに順次記述したい。

SD001

高杯、甕がある。

高杯B(D586)は、内湾気味にのびる杯部より水平に広がる口縁部を有す。口縁端部を外下方に拡張。端面には2条の凹線文を廻らす。器体内外面共横ナデ調整。

甕A1(D587)は、「く」字状に外反して聞く口縁部で、端部は若干拡張気味。端部外面横ナデ調整。凹線文を1条廻らしヘラ圧痕文を付加。器体内外面共ハケ調整。

SD002

壺、甕がある。

壺にはG2(D588)、G1(D589)がある。外湾して聞く頸部より口縁部は屈曲して中広く立ち上がる。端部は浅い凹面を呈す。D589口縁部外面に3条の凹線文を廻らし、上方には列点文を付加。頸部外面ハケ調整。内面ハケ調整。ナデ。

甕にはB3-II(D590、D592、D593)、B3-I(D591)等全て受口状口縁甕がある。器体内外面共ハケ調整。D592口縁部に強い横ナデを施こし、D590、D592内面立ち上がり部ナデ。D590口縁部下端にヘラ圧痕文。頸腹部外面には帯摺列点文、直線文等を施文。口縁部内面に列点文。D593は腹部の大きく影らむ体部を有すと考えられ、頸部で屈曲後口縁部はやや外反気味に立ち上がる。端部は内傾する面を成す。口縁部外面斜方向のハケ調整。上・下端にヘラ圧痕文を施文。頸腹部ハケ調整。胴部に直線文、口縁部内面には波状を交えた横方向のハケ調整を施こす。

SD003

壺、甕等の器種が認められる。

壺にはA2(D594)、C2(D595)がある。D594は、外反気味にのびる口縁部で、端部は外傾する面を成す。端面斜方向のハケ調整、下端にヘラ圧痕文。口縁部外面縦方向、内面横方向のハケ調整。D595は、外湾してのび上方で内折する口縁部である。内外面共ハケ調整。

甕B2-II(D596、D597)は、傾斜して聞く第2口縁より直立する乃至外反気味に立ち上がる第1口縁を有す。内外面共ハケ調整。胴部には直線文(D596)又は列点文(D597)が認められる。

SD004

甕口縁部2点が出土している。B2-I(D598)、B3-I(D599)で、D598器体内外面共ハケ調整。端部にヘラ圧痕文。D599内外面ハケ調整後ナデ。頸部外面及び口縁部内面に列点文を廻らす。

SD005

壺C 2 (D600) 1点のみ出土している。細く外湾気味によびる口頸部で、上方において弱く屈曲して開く。外面縦方向のハケ調整。内面横方向のハケ調整後ナデを加える。

SD007

甕A 2 (D601) 1点出土。完形。口径25.0cm、器高26.8cm、最大腹径26.4cm、底径6.4cmを測る。腹部が膨らむ縦長の体部に口縁部は「く」字状に外反して開く。端部上端を若干つまみ上げ外傾する面を成す。端面横ナデ調整。口縁部内外面共横ナデ。体部外面叩き後縦方向のハケ調整。内面ハケ調整後ナデ。

SD008

壺G 1・G 2、甕B (B 3-I) がある。

D602は、外湾して開く頸部より屈曲して巾広く立ち上がる口縁部で、端部は平坦を呈す(壺G 1)。D603は立ち上がり部が直立し、端部は浅い凹面を呈すもの(G 2)。口縁部外面ハケ調整後横ナデ。頸部外面ハケ調整。内面ハケ調整後ナデ。

D604は、傾斜気味に開く第2口縁より第1口縁は内反して立ち上がる(甕B 3-I)。口縁部外面ハケ調整後上端に横ナデを施す。内面口頸部に横方向のハケ調整。立ち上がり部横ナデ。

SD009

甕A 1が出土している。「く」字状に外反して開く口縁部を有す甕A 1で、端部が面を成して終わるもの(D605)。肥厚するもの(D606)がある。D605端面にヘラ圧痕文。器体外面ハケ調整。胴部には先行する叩き認められる。内面ハケ調整。D606端面横ナデ調整。細い凹線文1条を施す。口縁部外面横ナデ。内面ハケ調整。

SD010

甕B 3-II (D607) 1点が出土している。「く」字状に外反して開く第2口縁より第1口縁は短かく直立する。外面ハケ調整後ナデ。頸部に直線文。内面ハケ調整。

SD011

壺、甕等の器種が認められる。

壺にはE (D608)、F (D609)、I 1 (D610)がある。D608は、完形で口径21.6cm、器高31.0cm、最大腹径36.0cm、底径6.6cmを測る。太く筒状にのびる口縁部でさらに水平に大きく広がる。端部は拡張気味で外傾する面を成す。腹部の膨らむ球状の体部に突出気味の平底の底部を有す。端面横ナデ調整。2条の凹線文を施す。器体外面ハケ調整。胴部にはわずかに先行する叩きの痕跡をとどめる。内面ハケ調整後ナデ。D610は直口の口縁部(壺I 1)で、上端に凹線文1条を施す。内外面共ハケ調整。

甕にはC 1 (D611、D612)、B 2-I (D613)がある。D611、D612は外湾して広がる壺口縁部で、端面横ナデ後上・下端にヘラ圧痕文を施す。口頸部外面ハケ調整。D611に列点文。口頸部内面横方向のハケ調整。D612口縁部に列点文を施す。D613は、傾斜して開く第2口縁より第1口縁は外反気味に立ち上がるものである(B 2-I)。張りの弱い縦長の体部を有すか、器体外面ハケ調整。胴部に直線文、口頸部内面に横方向のハケ調整。体部ナデ仕上げ。

SD014

甕B (B 3-I) 1点のみ出土 (D614)。傾斜気味に開く第2口縁より第1口縁は短かく直上に立ち上がる。端部は平坦に取める。口縁部外面斜方向のハケ調整。上端横ナデ調整。口縁部上・下端にヘラ圧痕文。頸部ハケ調整。帯描列点文を施す。口頸部内面ハケ調整。凹線文を施す。立ち上がり部ナデ。

S D017

壺、甕がある。

壺D 1 (D615) は、球状の体部に「く」字状に外反して開く口縁部を有す。端部は肥厚し外傾する面を成す。口縁部内外面共横ナデ調整。体部内外面刮削。口縁部下に2個1組の小孔を穿つ。

甕B 2-II (D616、D617) 両者共内外面にハケ調整。D617内面立ち上がり部ナデ。D616端部にヘラ圧痕文。

S D018

壺、甕等の器種が認められる。

壺にはA 3 (D618)、I 1 (D619) がある。D618は、太頸で筒状にのびさらに外反して開く口縁部を有すもの。端面にハケ圧痕文を施らす。口縁部内外面共ハケ調整。D619は、直口の口縁部を有す壺I 1である。上端に強い横ナデを施らす(掘凹線文)。

甕にはA 1 (D620)、A 2 (D621)、B 2-II (D622、D623)、B 3-I (D624、D625) 等がある。D620、D621は、「く」字状に外反して開く口縁部を有す甕A。D620端面にヘラ圧痕文。D621横ナデ調整。両者共口縁部外面ナデ。体部ハケ調整。内面ハケ調整 (D620)。ナデ (D621)。D622、D623は、腹部の張る縦長の体部を有し、傾斜して開く第2口縁より第1口縁は外反気味に短かく立ち上がる。端部はほぼ平担に収める。D624口縁部上端及び立ち上がり部内面に横ナデ。器体外面ハケ調整。頸部 (D623) 又は腹部 (D624) にナデを加え櫛指直線文、列点文、波状文等を施文。口頸部内面に横方向のハケ調整。体部ナデ仕上げ。D623、D624は完形で、口径18.4cm、器高25.1cm、最大腹径18.5cm、底径5.0cmを測る。D625器体内外面共ハケ調整。胴部外面に櫛指列点文、直線文を施文。内面横方向のハケ調整、列点文を施文。立ち上がり部ナデ。

S D019

高杯、甕等がある。

高杯B (D626) は、直線的に開く杯部より口縁部は縦く屈折して水平に広がる。端部は肥厚気味。口縁部内面に1条の凸帯を貼付ける。口縁部内外面共横ナデ。端面に1条の沈線が通る。杯部内外面共ナデ。

甕にはA 1 (D627)、C 2 (D628)、B 3-I (D629) 等がある。D627は、「く」字状に外反して開く口縁部、端部は上方に肥厚する (A 1)、端面にヘラ圧痕文。器体内外面共ハケ調整。D628は、甕C 2口頸部で外反して開くもの。口縁部の器壁はふ厚い。端部上・下端にヘラ圧痕文を施文。D629は、傾斜して開く第2口縁より第1口縁は内反して立ち上がる甕B 3-Iである。器体外面ハケ調整。口縁部上端に横ナデ。胴部にはナデを加え櫛指直線文、列点文等を施文。口頸部内面ハケ調整。立ち上がり部ナデ。体部ナデ仕上げ。

S D025

甕B 3-I (D630) が1点出土している。大きく湾曲する頸部より第2口縁は傾斜して開き第1口縁は内反して立ち上がる。口縁部外面に斜方向のハケ調整。頸部以下縦方向のハケ調整を施こし列点文・直線文等を施文。口頸部内面に横方向のハケ調整。鋸歯文 (ハケ又は櫛) を施らす。立ち上がり部ナデ。

S D027

壺G 1 (D631)、甕B 2-I (D632) がある。D632は、傾斜して開く第2口縁より第1口縁は短かく直立する。腹部の大きく膨らむ体部を有すと考えられる。内外面共ハケ調整。

S D028

壺、甕等の器種がみられる。

壺にはG 1 (D633、D634)、G 2 (D635) があり、いずれも外湾して開く頸部より口縁部は屈曲して直上又は内反

気味に立ち上がるもの。D631口縁部外面には3条の凹線文が廻り、頸部以下ハケ調整。肩部に櫛指直線文、波状文が認められる。内面ハケ調整後ナデ。D635口縁立ち上がり部の屈曲は弱く、D634は内反してのびる。外面ハケ調整後口縁部に横ナデ。D635には銘南文を施文。内面ハケ調整後ナデ。D634頸部屈曲部に指頸庄痕文凸帯を貼付ける。

壺にはB 2-I (D636)、B 2-II (D637~D639)がある。D636は、緩やかに外湾して広がる口縁部で、外端面が直立する。器体内外面共ハケ調整。口縁部外面立ち上がり下端にヘラ庄痕文。頸部に列点文を廻らす。D637~D639内外面共ハケ調整。D637、D639端部にヘラ庄痕文、立ち上がり部内面ナデ。D639口縁部内面に銘南文を廻らす。

S D 030

細頸壺、高杯、鉢等の器種が認められる。

細頸壺D 2 (D640)は、内湾気味にのびる口縁部である。内外面共ナデ。口縁部外面に4条の凹線文を廻らし、その下方に羽状列点文、波状文等を施文する。内面ナデ。

高杯B (D641)は、直線的にのびる杯部に口縁部は屈折して外下方に広がる。口縁部を若干下方に拡張する。口縁部内面に1条の凸帯を貼付ける。口縁部内外面共横ナデ調整。杯部内外面ナデ。

鉢D (D642)は、内湾して開く体部に口縁部は内傾してすぼまる。外面に5条の凹線文を施文。口縁部下には2個1組の小孔を穿つ。体部外面ナデ。内面ハケ調整後ナデ。

S D 031

壺、細頸壺、高杯、寛等の器種が認められる。

壺にはF (D643)、G 1 (D645、D646、D648、D650)、G 2 (D644)、G 3 (D647)、G 6 (D649)等がある。D643は、外反してのびる口縁部でさらに水平に開くもの。端部は下方に拡張。端面横ナデ後櫛指波状文を施文。口縁部内外面共ナデ。外面頸部に櫛指文が認められる。D644~D648は、外湾気味に開く筒状の太い頸部より口縁部は屈曲して直上又は内反気味に巾広く立ち上がるもの。端部は平坦又は内傾する面を呈す。口縁部外面は、ハケ調整後横ナデを施す。D644~D646口縁部上端に凹線文。D647は上・下端に凹線文を廻らす。D645口縁部外面に棒状浮文貼付。端部にはヘラ庄痕文を施文。頸部外面ハケ調整。D644頸部屈曲部に指頸庄痕文凸帯。D649は、細く筒状にのびる頸部に口縁部が屈曲して立ち上がる。口縁部外面に3条の凹線文を廻らす。D650は、外湾して広がる口縁部で上端はやや屈曲して開く。外面上端に横、口縁部縦方向のハケ調整。頸部屈曲部にヘラ庄痕文凸帯、内面横方向のハケ調整。

細頸壺にはD 2 (D652)、E (D651)があり、D652は内湾してのびる口縁部。口縁部上端に凹線文2条を廻らし、その下方に羽状列点文を施文。口縁部外面ハケ調整。肩部に直線文、内面ナデ仕上げ。D652は、内折して立ち上がる口縁部で、外面にはヘラ指斜格文を廻らす。内面ハケ調整。立ち上がり部にナデ。

高杯B (D653)は、内湾気味に開く杯部より口縁部は屈折して水平に広がる。端部は、下方に著しく拡張し、端面横ナデ後4条の凹線文を廻らす。口縁部内面に1条の凸帯を貼付ける。口縁部内外面共横ナデ調整。杯部外面にハケ調整。

壺にはA 1 (D654、D655)、A 2 (D656)、C 2 (D657、D658)、B 2-I (D659)、B 2-II (D660)、B 3-I (D661)、B 3-II (D662)、B 3-IV (D663)等がある。D654~D656端面横ナデ調整後ヘラ庄痕文を施文。体部内外面共ハケ調整。ナデ。D654胴部には先行する叩き認められる。D657、D658は、口縁部が外湾して開く寛C 2である。D658端面上、下端にヘラ庄痕文、口縁部外面ハケ調整。列点文、沈線文等を施文。口縁部内面には櫛指列点文、銘南文を廻らす。D659~D662器体内外面共ハケ調整を施すが、口縁部外面 (D660)又は上物 (D662)に横ナデ。又立ち上がり部内面にナデを施す。D660端部にヘラ庄痕文。口縁部内面に列点文2列を廻らす。D663は、底部より屈曲して傾斜気味に開く第2口縁より第1口縁は短かく直立する。端部は若干外方へ引き出し、内傾する面を呈す。口

縁部内外面共横ナデ。外面には列点文を施文。臍腹部内外面ハケ調整。外面に直線文。

S D032

細頸蓋、甕がある。

細頸蓋 D 2 (D664) は、内湾してのびる口頸部である。内外面共ナデ。口縁部には4条の凹線文を廻らし、その下方に羽状列点文を施文。

甕には A 1 (D665)、B 3-II (D666) がある。D665は完形品で、倒錐形の体部に口縁部が緩やかに外反して開き、外端面に甘い稜を持つものである。完形品で、口径15.8cm、器高20.1cm、最大腹径16.0cm、底径5.2cmを測る。口縁部外端面に斜方向。以下縦方向のハケ調整を施す。肩部に直線文帯を施文。口頸部内面に横方向のハケ調整。体部ナデ。D666は傾斜して開く第2口縁にやや外反気味に立ち上がる第1口縁を有す(甕 B 3-II)。口縁部外面に斜方向に列点文を施文。

S D033

壺、高杯、鉢脚台等がみられる。

壺には G 1 (D667、D668)、G 3 (D669) があり、外湾して開く頸部に屈曲して直上乃至内反して巾広く立ち上がる口縁部を有す。口縁部外面ハケ調整後横ナデを加える (D667、D668)。口縁部上端 (D669) 又は上・下端 (D667) に凹線文を施文。D667には、さらに櫛形列点文を廻らす。頸部外面ハケ調整。D668頸部屈曲部にハケ直線文凸帯を貼付ける。内面ハケ調整後ナデ。

高杯 B (D670) は、直線的に開く杯部に緩く屈折して水平に広がる口縁部を有す。端部は、外下方に著しく拡張する。口縁部内面に1条の凸帯を貼付ける。口縁部内外面共横ナデ調整。杯部外面ハケ調整。内面ナデ仕上げ。

S D034

甕 B 3-I 口縁部片1点のみ出土 (D672)。傾斜して開く第2口縁より第1口縁は内反して短かく立ち上がる。外面ハケ調整。端部にヘラ庄痕文、内面横方向のハケ調整。立ち上がり部ナデ。

S D036

鉢、寛等が認められる。

鉢 B 2 (D673) は、体部より鋭く屈曲して開く短かい口縁部を有する。端部上・下端を拡張する。端面には3条の凹線文を廻らす。体部外面ナデ後羽状列点文を廻らす。口縁部内面横ナデ後列点文を施文する。体部ハケ調整後ナデ。

甕 B 3-II (D674) は、傾斜して開く第2口縁に第1口縁は短かく直立する。口縁部外面ハケ調整後上端に横ナデを施す。頸部以下ハケ調整、列点文を廻らす。口頸部内面に横方向のハケ調整。立ち上がり部ナデ。

S D037

壺、甕等が認められる。

壺には C 2 (D679)、A 3 (D680)、G 1 (D675、D677)、G 4 (D676) がある。D679は、下ぶくれの体部に細く外湾気味にのびる口頸部である(壺 C 2)。器体外面ハケ調整。D679口縁部横ナデ。D680は、細く外湾する口頸部をもち、頸腹部には櫛形直線文(4条単位)を廻らす。内面ハケ調整後ナデ。D679は完形で、口径14.0cm、器高28.0cm、最大腹径21.6cm、底径4.8cmを測る。D675-D678は、外湾して開く頸部に口縁部が屈曲して巾広く立ち上がるもの。外面ハケ調整。D676-D678口縁部に横ナデを施す。内面ハケ調整後ナデ。頸部屈曲部には指頸庄痕文凸帯(D675)、ハケ庄痕文凸帯(D677)等を貼付ける。

甕には A 1 (D681)、B 2-II (D682-D685)、B 3-I (D686) 等がある。D682-D685は、傾斜して開く第2口縁に直立乃至外反気味に立ち上がる第1口縁を有す。外面ハケ調整。D683-D685口縁部外面に横ナデを加える。頸部

下に列点文、直線文等を施文。口頸部内面ハケ調整。立ち上がり部ナデ。D686は、内反して立ち上がるB3-I、口縁部外面横ナデ調整。櫛描波状文を廻らす。端部にヘラ圧痕文。頸部外面ハケ調整。口頸部内面に横方向のハケ調整。櫛描列点文・扇形文等を施文。立ち上がり部ナデ。

S D 038

鉄製土器B1が出土している(D687)。半球状の体部より緩やかに外反して開く口縁部である。端部を拡張する。端面横ナデ調整。体部外面ハケ調整。内面ナデ仕上げ。

S D 039

高杯、甕等が認められる。

高杯B(D688)は、水平に広がる口縁部を有し、端部を外下方に拡張する。口縁部内面に1条の凸帯を貼付ける。端面に4条の凹線文を廻らす。杯部内外面共ナデ。

甕にはB3-II(D689-D691)がある。器体外面ハケ調整。口縁部に若干横ナデを加える。D691頸部に櫛描列点文、直線文を施文。口頸部内面ハケ調整。立ち上がり部ナデ。口縁部内面に列点文(D690)、波状文(D691)等を廻らす。

(7) 落ち込み出土の土器

落ち込み出土土器を一括した。記述の順序は、上記の各遺構のそれに準じた。

S X 001

甕、甕等が認められる。

甕にはG2(D692)、I1(D693)、I2(D694)等がある。D692は、外反気味に開く口縁部で、端部は、外傾する門面を呈す。外面ハケ調整。口縁部上方に横ナデを施す。内面ナデ。D694は、細く外湾気味にのびる筒状の口頸部で上方において内折して立ち上がる(甕I2)。

細頸甕E(D695)は、袋状の口縁部で、口頸はゆるやかに外湾し、内反する。口縁立ち上がり部外面に横ナデ後羽状列点文をめぐらし、2本一組の棒状浮文を四方に貼り付ける。口頸部外面ハケ調整後櫛描直線文帯(複帯構成)を施文。内面ナデ仕上げ。

甕にはA3(D697)、B2-II(D698-D700)、C1(D696)がある。D698-D700は、傾斜して開く第2口縁よりやや外反気味に立ち上がる第1口縁を持つ甕B2-II。内外面共ハケ調整。D697は、直口する頸部が口縁部で鋭く外反。D696は、C1で口頸部は大きく外湾する。

S X 007

甕、甕等が認められる。

甕にはF(D701)、G1(D702)がある。D701は、外反気味にのびる口縁部でさらに水平に広がる。端部は拡張気味。端面横ナデ調整。口縁部外面ハケ調整。内面ナデ。D702は、外湾して開く頸部に屈曲して内反気味に立ち上がる口縁部である。口縁部外面に3条の凹線文を廻らす。頸部ハケ調整。内面ハケ調整後ナデ。

甕にはB2-II(D703-D705)がある。D704は、頸部の弱い体部より第2口縁は水平に開き第1口縁は短かく直立する。口縁部外面ハケ調整後上端に横ナデ。頸部ハケ調整後ナデを施し直線文を施文。口頸部内面ハケ調整。口縁部に列点文を施文。

S X 008

細頸甕E(D706)1点のみ出土。外湾して広がる口頸部で、上方において内折して立ち上がる。立ち上がり部外面

ハケ調整後横ナデ。摺指直線文、列点文等を施文。4方に棒状浮文を貼付ける。口頸部外面ハケ調整。頸部屈曲部にヘラ圧痕文凸帯を貼付ける。内面ハケ調整後ナデ。

S X009

壺、高杯、莖等の器種が認められる。

壺にはG 2 (D708)、H 1 (D709)がある。D709は、細く外湾気味にのびる口頸部で上方において緩やかに内折する。外面立ち上がり部に斜方向、口頸部に縦方向のハケ調整を施す。内面ハケ調整後ナデ。

高杯B (D710)は、内湾気味にのびる杯部より口縁部は屈折して水平に広がる。端部を外下方に拡張する。杯部外面にハケ調整。

壺にはA 1 (D711)、C 1 (D712)、B 3-II (D713、D714)等がある。D711は、張りの弱い縦長の体部に「く」字状に外反して開く口縁部を有す。端面にヘラ圧痕文。器体内外面共ハケ調整。胴部外面に先行する叩きか認められる。D712は、ゆるやかに外湾する口縁で、D713、D714は、口縁立ち上がりか内傾し、外面上端のハケをナデ消している。

S X011

甕A 2 (D715、D716)、甕B 2-II (D717)等がある。D715、D716は、「く」字状に外反して開く口縁部で、腹部の張る縦長の体部を有すか。端部は、上方又は下方に拡張する。端面横ナデ調整。D715に右下がりのハケ圧痕文を施文。体部外面叩き後ハケ調整。口縁部内外面共横ナデ。体部内面ハケ調整後ナデを加える。D717は、傾斜して開く第2口縁より第1口縁が直立する甕B 2-II。腹部が張る縦長の体部を有すか。口縁部外面横ナデ。下端に列点文を施文。頸部以下ハケ調整後胴部にナデ。摺指列点文、直線文、波状文等を施文。口縁部内面に横方向のハケ調整。立ち上がり部ナデ。体部ナデ仕上げ。

S X013

甕B 2-I (D718) 1点のみ出土。傾斜して開く第2口縁より第1口縁は弱く屈曲して外反気味に立ち上がる。内外面共ハケ調整。

S X014

壺、甕等が認められる。

壺にはE (D719)、G 1 (D720)、G 2 (D721~D723)、G 5 (D724)がある。D719は、筒状に立ち上がり、さらに水平に広がる口縁部を有す壺Eである。体部は球状を呈すか。端面横ナデ調整。器体外面ハケ調整。胴部には先行する叩き残存。肩部及び胴部に摺指列点文各1列を廻らす。内面ハケ調整後ナデ。D721~D723は、外湾して開く頸部より屈曲して口縁部は直立又は内反気味に広く立ち上がる壺G 2。端部は内方に肥厚し浅い凹面を呈す。口縁部外面ハケ調整後横ナデ。D721上端に太く浅い凹線文を廻らす。又、D721には竹管文を施文。頸部外面ハケ調整。内面ハケ調整後ナデを施すか。D724は、内湾気味にのびる口頸部で、口径12.9cmを測る。口頸部外面横ナデ調整。口縁部に3本の凹線文を廻らし、その下方に羽状列点文を施文。内面ナデ。

甕にはB 2-II (D725)、B 3-I (D726)がある。内外面共ハケ調整。口縁部内面立ち上がり部及びD725口縁部外面に横ナデを施す。D726口縁部内面に列点文を施文。

S X015

壺、甕等が認められる。

壺にはC 1 (D729)、G 1 (D727)、J (D728)がある。D728は、直口の口縁部に胴の張る縦長の体部を有すもので完形。口径9.4cm、器高72cm、最大腹径23.2cm、底径5.5cmを測る。器体外面ハケ調整。頸腹部には、波状文、斜線文(ヘラ)等が廻る。内面ハケ調整後ナデ。

壺にはB 2-I (D730)、B 2-II (D731、D732)がある。D730は、傾斜して開く第2口縁に短かく外反して立ち上がる第1口縁を有す壺B 2-Iである。頸部は「く」字状に屈曲しており、腹部が大きく膨らむ体部を有するか、口縁部外面ハケ調整後横ナデを施すか。頸部ハケ調整。直線文を施文。内面ハケ調整。D731、D732は、直立乃至外反気味に立ち上がるB 2-IIである。D732は、腹部の張りの弱い縦長の体部を有す。器体外面ハケ調整。腹部に髷指列点文・直線文を施文。口頸部内面横方向のハケ調整。列点文(髷)を廻らす。体部ナデ仕上げ。

S X017

壺、鉢、甕等の器種が認められる。

壺F (D733)は外湾気味にのびる筒状の口縁部で水平近くに広がる。端部は上方に拡張。端面横ナデ調整。

台付無頸壺A (D734)は、口径17.9cmを測る。内湾してのびる体部口縁部は内折してすままる。口縁部内外面共横ナデ調整。体部上半には、4条の凹線文を廻らす。下半にハケ調整。内面ナデ仕上げ。

壺にはB 2-II (D735、D736)がある。両者共内外面ハケ調整。立ち上がり部内面ナデ。D736端部にヘラ圧痕文。

S X018

壺、高杯脚部、鉢、甕等が認められる。

壺にはF (D737)、G 2 (D738)がある。D737は、外湾して広がる口縁部で、端部はやや肥厚する。端面横ナデ後波状文を廻らす。口縁部外面ハケ調整。D738は、外湾してのびる頸部に屈曲して口縁部は直上に市広く立ち上がる口縁部外面横ナデ調整。上・下端に凹線文を廻らし、髷指列点文を施文。頸部屈曲部にハケ圧痕文凸帯。

鉢B 1 (D740)は、腰に稜を持つ体部で、口縁部は外湾して開く、底部は平底。完形品で、口径21.8cm、器高14.5cm、最大腹径18.2cm、底径4.8cmを測る。端面横ナデ後上・下端にヘラ圧痕文。器体外面ハケ調整。脚部に髷指列点文、直線文等を施文。内面ハケ調整後体部にナデを施す。

壺にはA 2 (D741)、C 2 (D742)、B 3-II (D743-D745)等がある。D743-D745は、傾斜して開く第2口縁より第1口縁は内反して立ち上がる壺B 3-IIである。口縁部外面ハケ調整後横ナデ。D743上・下端にヘラ圧痕文。D744、D745口縁部外面には波状文を廻らす。頸部外面ハケ調整。内面横方向のハケ調整。

(8) その他遺構の出土土器

ピット出土土器

壺G 2口縁部 (D748)、壺底部 (D746、D747)等がある。

子地区遺構面出土土器

子-I-1・2調

壺、高杯、鉢、甕等の器種が出土している。

壺にはA 1 (D749)、G 2 (D750-D753)、G 6 (D754)、G 1 (D755)等がある。D749は、外湾して開く口縁部で、端部を外下方に著しく拡張する。端面に4条の凹線文。口縁部内面に羽状列点文。2翼1組の瘤状突起を4方に貼付ける。D750-D753は、外湾して開く頸部より口縁部は屈曲して直上又は外反気味に市広く立ち上がるもの。口縁部外面ハケ調整後横ナデを施す。D750上・下端に凹線文。D753は上端に凹線文を廻らし、ヘラ圧痕文を付加。D750頸部屈曲部にハケ圧痕文凸帯。口頸部内面ハケ調整後口縁部に横ナデを施す。D754は、内湾してのびる口頸部で、口縁部には4条の凹線文を廻らす。口径14.6cm (壺G 6)。D755は、細い筒状の頸部より口縁部は屈曲して直上に立ち上がるもの (壺G 1)。口縁部外面には4条の凹線文を廻らす。内面ナデ。

水差B (D758) は、外湾してのびる口頸部で、上方において弱く屈曲して外反気味に短かく立ち上がる。立ち上がり部内外面共横ナデ調整。口頸部内外面にハケ調整痕残存。口頸部外面に直線文帯を施文。

鉢にはD (D758)、B1 (D759)、E (D757) がある。D759は、半球状の体部に緩やかに外湾して開く口縁部を有す。端面にヘラ圧痕文。器体外面磨減が著しく調整。施文等不鮮明であるが、ハケ調整痕が残る。胴部には摺摺列点文、直線文、弧状文等を施文。又、胴部には低い幅2.0cmのヘラ圧痕文凸帯を貼付る。内面ハケ調整後ナデ。D758は、内湾気味にすままる体、口縁部である(鉢D)。端部は内方に肥厚し、平坦に取める。口縁部外面に4条の凹線文、内外面共ナデ。E (D757) は内湾してのび上がる口縁部である。口縁部外面に5条の凹線文。端部は平坦に取める。内面ナデ。

壺B3-II (D761) は、傾斜気味に開く第2口縁より第1口縁が内反して立ち上がる受口状口縁甕である。口縁部外面に斜方向のハケ調整。上端横ナデを施こす。内面横方向のハケ調整。

チ-I-2

壺、高杯、甕等の器種が認められる。

壺にはC2 (D762~D764)、G1 (D765、D769~D771)、G2 (D766~D768) 等がある。D762~D764は、細く筒状にのびる口頸部で上方において内折して立ち上がる。下ぶくれの体部を持つ (D764)。D762、D763端部は内傾する。口縁立ち上がり部外面横ナデ後波状文、列点文 (D762) 又は列点文 (D763) を廻らす。口頸部外面ハケ調整。摺摺直線文 (摺摺構成) を施文。内面ナデ。D764体部外面ハケ調整。内面ナデ仕上げ。D766~D771は、いずれも外湾して開く頸部より口縁部が屈曲して直上又は内反して立ち上がる壺Gである。D765、D766 (G1) は、内反して立ち上がる口縁部で、外面に3条の凹線文を施文。内面ナデ。D767~D770は、直上乃至内反して巾広く立ち上がる口縁部を有す。端部はいずれも内方に肥厚し、平坦又は内傾する面を成す。D767口縁部外面上端に凹線文1条。D768に波状文を施文。頸部外面ハケ調整。内面ハケ調整後ナデを施こす。D771口縁部は強く内傾してすままる口縁部を有す。口縁部外面に波状文。頸部ハケ調整。内面ハケ調整後ナデ。

高杯B (D772) は、直線的に開く杯部より口縁部は緩く屈曲して水平に広がる。口縁部外面横ナデ調整。杯部外面ハケ調整。内面ナデ。

甕にはA2 (D773)、C2 (D774~D776)、B2-I (D777~D780)、B2-II (D781~D784)、B3-I (D785~D789) 等がある。D776は完形品で、口径21.7cm、器高29.6cm、最大腹径24.8cm、底径5.8cmを測る。腹部の張る縦長の体部に口縁部は外反して広がりを外端面に弱い稜を成す。口縁部外端面に横方向のハケ調整。器体外面斜方向のハケ調整。胴部に直線文帯を施文。口頸部内面横方向。体部斜方向のハケ調整。頸部にナデ。体下部焼成後穿孔。D777口縁部下に2割1組の小孔を穿つ。D779~D788口縁部外面斜方向のハケ調整。D779口縁部に列点文。又D781端部にヘラ圧痕文を廻らす。頸腹部外面ハケ調整、胴部に摺摺列点文、直線文等を施文。口頸部内面横方向のハケ調整。立ち上がり部ナデ。口縁部内面に列点文 (D782)、波状文 (D784、D787) 等を施文。D789は内反して立ち上がる口縁部を有し、端部は内傾する面を成す。口縁部外面斜方向のハケ調整。端部にハケ圧痕文。口縁部内面横方向のハケ調整。列点文を施文。立ち上がり部ナデ。

D790は、凹状の天井部より外湾して広がる体部を有す。口縁部を若干拡張気味。内外面共ナデ (蓋B)。

チ-II-1

鉢脚台1点のみ出土 (D791)。外反して開く低い脚台である。外面ハケ調整。下端横ナデ調整。内面ナデ。

試掘トレンチ

壺、高杯、甕等の器種が認められる。

壺にはA 1 (D 792)、G 1 (D 793、D 795)、G 3 (D 794) がある。D 792は、外湾して開く口頸部で、肩部を外下方に著しく拡張する。端面に凹線文、口縁部内面に羽状列点文を施文。D 793肩部にヘラ圧痕文を廻らす。D 794は壺G 3口頸部である。端面は平担乃至凹面を呈す。D 795口縁部外面に4条の凹線文を廻らしヘラ圧痕文を付加。D 794頸部屈曲部にハケ圧痕文凸帯を貼付ける。

鉢E (D 797) は、口縁部が内湾してのびるもの。口縁部に3条の凹線文、口縁部内外面共ナデ。

高杯B (D 798) は、直線的に開く杯部に口縁部は屈折して外下方に広がる高杯Bである。端部を下方に拡張。口縁部内面に1条の凸帯を貼付ける。口縁部内外面共横ナデ調整、杯部内外面共ナデ。

甕にはC 1 (D 799～D 801)、B 3-I (D 802)、B 2-II (D 804)、B 3-II (D 803、D 805) 等がある。D 799～D 801は外湾して広がる口縁部である。端部上・下端にヘラ圧痕文。口縁部外面ハケ調整。D 800口縁部内面に横方向のハケ調整。D 802～D 806内外面共ハケ調整。内面立ち上がり部にナデ。D 803口縁部に列点文を廻らす。

2. 中期末～後期初頭の土器

上流域（A・B区）に分布する遺構は、中期末に集落形成を開始したもので、中期初頭の洪水により水田跡が埋没し、中期中葉後半に一時、方形周溝墓群がつけられた後、再びその直後の洪水により埋没した、洪水堆積土を地山として構築されており、細分すると二時期に分けることができる。すなわち、環溝の可能性もある、S D 201の掘削前と掘削後に、前半と後半の境界が推定されるのである。そこでまず、S D 201の出土遺物を検討し、その後、各遺構の検討に移りたい。

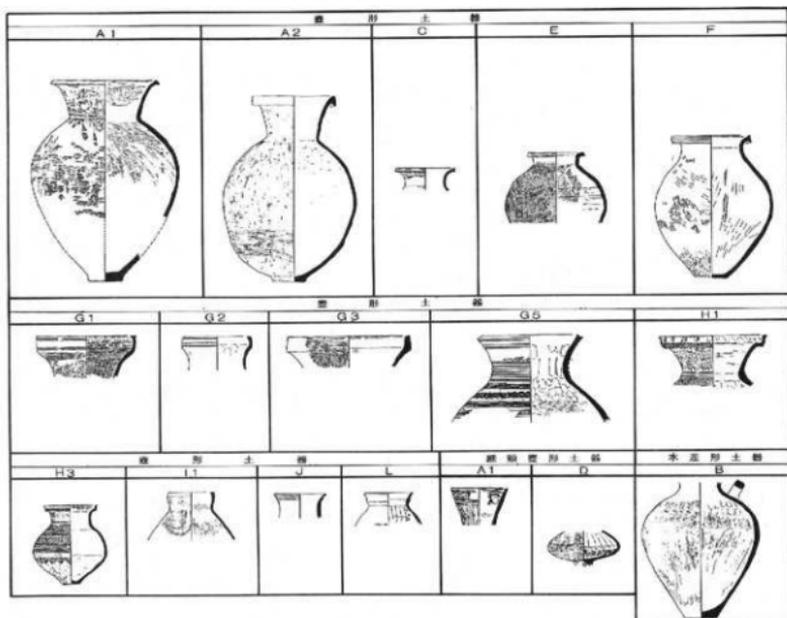
A. 形態の分類

壺型土器

- [A] 口縁部が外湾して大きく開くもの。
 - A 1 外湾して大きく広がるやや長い口縁部で、端部を下方に大きく拡張するもの。
 - A 2 直口気味に立ち上がる口頭部で端部を下方に拡張する。
- [C] 外湾して広がる口縁部で、端部は面を成して終わるもの。
- [E] 腹部が大きく張る体部に、口縁部は外湾して水平近くに広がるもの。
- [F] 外反気味にのびる口縁部で水平近くに広がるもの。口縁端部上、下端を若干拡張する。
- [G] 外湾気味に開く太い筒状の頸部に屈曲して直上及至内反気味に立ち上がる口縁部を有するもの。
 - G 1 外湾気味に開く筒状の頸部に、屈曲して直立する口縁部を付し、腹部が膨らむ体部を有する。体部外面は、櫛歯直線文、波状文等で豊かに加飾を施すもの。
 - G 2 外湾して開く筒状の頸部に鈍く屈曲して直上及至内反気味に立ち上がる口縁部を付す。頸部には、指頭圧痕又はハケ圧痕文凸帯を貼付、胴長の体部を有するもの。
 - G 3 内湾気味にのびる口縁部を有する。頸部には、断面三角形貼付凸帯を付すもの。
 - G 5 屈曲することなく、やや外湾気味に立ち上がる口縁で、口縁上端と頸部に門線をめぐらせる。
- [H] 受口状の口縁を有する壺。
 - H 1 口頭部は外傾して、口縁部が屈曲して受口を呈する。体部は大きく張るもの。
 - H 2 受口状口縁の影響の強い壺で、口頭部は直口気味で、体部は、あまり張らない。
- [I] 直口の口縁部をもつもの。
 - I 1 ゆるやかに内湾して立ち上がる。
- [J] 直口気味に立ち上がる太い筒状の頸部をもち、端部が外反する。
- [L] 短かく外反する口縁のもの。

短頸壺型土器

- [A] 外反してのびる細長い口頭部で、ラッパ状に開く。
- [D] 内湾気味にのびる口頭部で、算盤玉状の体部を有するもの。



水差型土器

- [B] 直口又は内湾気味にのびる口頸部で、弧状の袂りを入れて片口を呈するものもある。口縁部外面には、多条の凹線文を廻らす。

短頸壺形土器

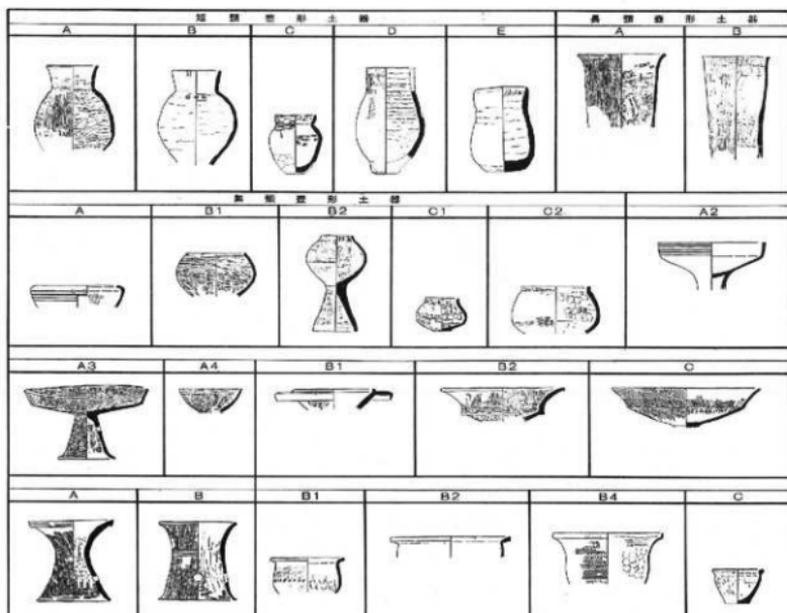
- [A] 扁球状の体部に、やや外湾して筒状に立ち上がる口頸部がつく。
 [B] 扁球状の体部に、直立する短かい筒状の口縁がつく。
 [C] 短かく内湾する口縁部をもつ。
 [D] 腹部の張らない体部に、直立する筒状の口縁部をもつもの。
 [E] 下ぶくれの、腹部の張らない体部に短かい直口する口縁がつく。

長頸壺形土器

- [A] 太い筒状に直口する口頸部で、端部は少し外湾する。
 [B] Aにくらべ、やや細くて長い筒状を呈する口頸部。

無頸壺形土器

- [A] 体部はゆるやかに内湾して、口縁部は鋭く内反する。体部上半に多条の凹線文をめぐらし、2個一組の小孔を一对あけている。

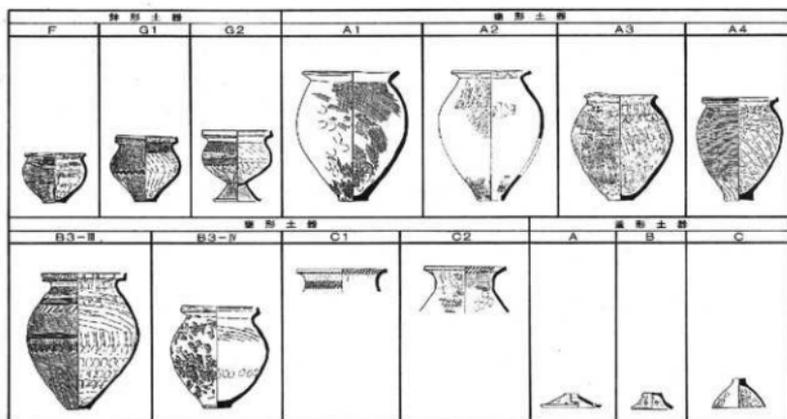


- [B] 口縁部をほとんどたないもの。
 B 1 ゆるやかに内湾する、球形の体部をもつ。
 B 2 球状の体部に高い脚台がつく。
 [C] 押しつぶした球形の体部をもつもの。
 C 1 下ぶくれの体部に、短い口頸部が直立する。
 C 2 C 1にくらべ、口縁部が大きく開くもの。

高杯型土器

直口のものAと水平縁口縁を有するBがある。

- [A] 内湾気味に開く杯部をもつもの。
 A 2 口縁が直口し、凹線文をめぐらせる。
 A 3 立ち上がった口縁部が外反するもの。
 A 4 桶状の杯部をもつもの。
 [B] 内湾、又は直線的に開く杯部に水平縁口縁を有するもの。
 B 1 内面には1条の凸帯を貼付け、口端部は、肥厚気味で面を成すもの、下方に著しく拡張するものがある。
 B 2 口縁部が大きく外湾するもの。



〔C〕 内湾気味の杯部に外反する口縁がつくもの。

鉢型土器

口縁部が外反して開くB・C・D、内折するGがある。

〔B〕 胴の張る半球椀状の体部に、口縁部は短かく外反して開くもの。

- B 1 胴に屈曲のみられるもの。
- B 2 椀状の体部をもつもの。
- B 3 口縁部が屈曲して直立するもの。

〔C〕 小形でゆるやかに内湾し、端部を短かく外に引き出す。

〔F〕 口縁部は短かく外反し、球状の体部をもつもの。

〔G〕 受口状口縁を有するもの。

- G 1 脚台のつかないもの。
- G 2 脚台のつくもの。

甕形土器

「く」字状に外反して開くAと、「受口状」口縁を有するBがある。

〔A〕

- A 1 「く」字状に外反して開く口縁部で、端部は外傾する面を成すもの。
- A 2 「く」字状に外反して開く口縁部で端部は内、外方に若干拡張、外傾する凹面を呈すもの。
- A 3 短かく「く」字状に外反する口縁部で端部は凹面を呈すもの。
- A 4 短かく「く」字状に外反する口縁部で、端部は、上方に拡張するもの。

〔B〕

- B 3-Ⅲ 第一口縁は、直立又はやや外反気味に立ち上がり、端部は尖り気味乃至平坦な面を成す。第二口縁は水

平なもの。外面に刺突列点文をめぐらす。

B 3-IV 第一口縁は、やや内傾気味に立ち上がり、端部は、平担又は浅く内傾する面を成すもの。外面は無文。

[C] ゆるやかに外湾する口縁部で、下腹部が大きくふくらむ。加飾は堯Bに類似する。

C 1 口縁部が長く弓なりに外湾するもの。

C 2 口縁部が短かく屈曲するもの。

B 各遺構出土の土器

(1) S D 201の出土土器

S D 201出土土器は、大きく上・中・下の3層に区別される。

a. 下層出土土器

甕C、高杯A (A 3)、鉢G 1、堯B等がある。

壺型土器

C (E 001) 外湾して開く口縁部である。内外面共摩滅が著しく調整等不明。内面にハケ調整及び波状文の痕跡を留める。外面端部下端にヘラ圧痕文を廻らす。

高杯型土器

A 3 (E 002-E 004)、高杯脚部 (E 005-E 007) がある。直線的に開く浅い杯部に外反乃至直口気味に立ち上がる口縁部である。口縁部外面横ナデ調整、E 002、E 004杯部外面ハケ調整、内面ハケ調整後ナデを加える。E 005、E 006は「ハ」字状に広がる脚部である。E 006裾端部は若干拡張、外面ハケ調整、内面ナデ (E 005) 又はヘラケズリ (E 006)、E 005脚体部の5方に円孔を穿つ。E 007は中実の脚状部。外面ヘラミガキ。

鉢型土器

G 1 (E 008) 腹部の強く張る球状の体部に第2口縁は水平に閉き、内反気味に立ち上がる第1口縁を有す。底部は平底、口縁部外面横ナデ調整、列点文を施文、体部外面ハケ調整、上腹部には櫛櫛列点文、直線文、弧状文を施文。腹部に低いハケ (又は櫛) 圧痕文凸帯を2帯貼付る。内面ナデ、口径15.2cm、器高14.8cm、最大腹径16.1cm、底径3.9cmを測る。

甕型土器

堯B体部 (E 009) がある。外面ハケ調整、波状文を施文、内面ナデ。

b. 中層出土土器

甕A (A 1、A 2)、C、G (G 1、G 2)、H (H 1、H 2)、L、無頸甕B (B 1)、C (C 2)、長頸甕A、短頸甕A、D、F、細頸甕D、高杯A (A 3、A 4)、B (B 1、B 2)、C、器台A、鉢B (B 1)、G (G 1、G 2)、堯A (A 1、A 4)、堯B (B 3-III、B 3-IV) 等がある。

壺型土器

A 外反又は外湾して開く口縁部である。

A 1 (E010・E011・E016・E018) 緩やかに外湾して広がる口縁部。端部上端 (E010) 又は下端 (E011) を若干拡張、E016に円形浮文貼り付け。端面横ナデ調整。E010外面ヘラミガキ。E011口縁部外面共ハケ調整。E018は、ほぼ完形を留め上腹部が膨らむ縦長の体部に突出した平底を有する。内外面共ハケ調整。口径20.6cm、器高41.2cm (面上復元)、最大腹径30.0cm、底径6.8cmを測る。

A 2 (E015・E017) 外反又は外湾気味にのびる口頸部で、端部を外下方に著しく拡張する。端面横ナデ調整。E015円形浮文を貼付る。口頸部外面ハケ調整、内面ハケ調整後、E017にナデを加える。E015口頸部内面に波状文 (ヘラ)。

C (E012、E013) 外湾して開く口頸部、端部は若干拡張気味、端面横ナデ調整後列点文 (E012)、ヘラ圧痕文 (E013) を施文。口縁部外面ハケ調整後ナデ。頸部位には、低い梯状痕文凸帯を貼付る。内面ナデ。

G 外湾して開く頸部より口縁部は屈曲して巾広く立ち上がる。

G 1 (E020) 外湾気味にのびる太い頸部より口縁部は屈曲して直上又は内反気味に巾広く立ち上がる。端部は内方に肥厚し凹面を呈す。口頸部外面横ナデ調整。上・下端に各1条の凹紙文を施す。頸部外面及び内面にハケ調整。

G 2 (E021) 立ち上がり部は内傾し、ぶ厚いつくりである。外面ハケ調整、内面ナデ仕上げ。

H (E022、E023) 外反して開く頸部より口縁部は屈曲して外反 (E022) 又は内反気味 (E023) に短かく立ち上がる。口縁部外面横ナデ調整後ハケ痕文 (E023) 又は梯状列点文、縦線文 (E022) を施文。E022頸部外面ハケ調整。屈曲部に低い貼付凸帯2段、肩部には梯状列点文、直線文等が認められる。内面ナデ、指押え。E022がH 1、E023がH 2。

C (E025・E030～E032) 小型の壺。外反して開く口縁部を有する。体部は球状を呈すか。口縁部外面ハケ調整、又はナデ仕上げ。内面ハケ調整後ナデを施す。

L (E033～E035) いずれにしても外反気味にのびる口縁部であるが、上方において屈曲し段を成すものである。内外面共ナデ仕上げ。

短頸壺型土器

A (E026・E027) 外反乃至直口気味に立ち上がる口縁部である。内外面共ハケ調整後ナデを加える。

D・F (E038・E039) 粗製の壺型土器である。球状の体部に直口してのびる口縁部を有する。E038底部は著しく突出した平底。E038外面ハケ調整後体部にナデ、[ま] 状の線刻面を描く。内面指押え及びナデ。E039は端部にヘラ圧痕文、口縁部内面に爪の痕跡が多数存在する。内外面共ナデ、両者共粘土粗接合痕が明瞭に残存する。E038をD、E039をFとした。

壺体部 (E019、E024、E026～E029)

上腹部が膨らむ縦長又は球状 (E026、E027) を呈すものである。底部は平底乃至突出したドーナツ底 (E027) を有す。E027底部焼成後穿孔、器体外面ハケ調整、E026下半ヘラケズリ、E027外面には細かくヘラミガキを施す。内面ハケ調整後ナデ。

壺底部 (E043～E052)

突出気味の底部で平底乃至上げ底のものがある。外面ハケ調整、内面ハケ調整後ナデ。E043外面ヘラミガキ、内面ハケ調整後ナデを加える。

細頸壺型土器

E042は偏球形の体部で脚台を有す。外面ヘラミガキ、内面ハケ調整後ナデ、脚台には円孔を穿つ。細頸壺D体部と考えられるものである。

無頸壺型土器 (E053~E056)

球状の体部に口縁部は短かく立ち上がる。E056は腰に稜を成す。外面ハケ調整。E053口縁部横ナデ調整。E055内面ハケ調整。E055がB1で、ほかはC2である。

長頸壺型土器 (E040・E041)

E040はやや太頂で筒状に長くのびる口頸部である。口縁部横ナデ調整。外面ハケ調整後縦方向のヘラミガキを施す。内面ハケ調整、口縁部ナデ、頸部付近には外面と同様のヘラミガキが認められる。E041は算盤玉状の体部で口頸部は筒状に長くのびるもの。外面ハケ調整後口頸部及腹部にヘラミガキを施し、肩部には竹管文を施す。内面ナデ。

高杯型土器

口縁部が外反又は外湾気味に立ち上がるA(A3、A4)、水平縁口縁を持つB1、体、口縁部が内湾気味にのび、枕状を呈するB2、口縁部の外湾するCがある。

A 直線的に開く浅い杯部より口縁部が外反又は外湾して開くもので、形態によりA3、A4に分類し得る。

A3 (E057~E063・E066) 口縁部が短かく外反して開くものである。体・口縁部の境界には甘い稜を形成する。E057、E058肩部は凹面を呈し、E059、E060は外方に肥厚する。口縁部外面ハケ調整後横ナデ、杯部外面ハケ調整。E060はヘラミガキを施す。内面ハケ調整後口縁部に横ナデを加える。E057、E058脚部は、中ぶくれで緩やかに開くもの。外面ハケ調整、内面ハケ調整後ナデ。口径16.6cm~29.2cm。E058は定形で口径16.6cm、器高11.0cm、脚部高6.0cm、底径9.2cmを測るものである。E061は定形品で口径24.6cm、器高15.0cm、脚部高9.0cm、底径11.8cmを測る。やや中ぶくれで緩やかに開く脚部を有し、2段3方に円孔を穿つ。

A4 (E058、E069) 杯・口縁部が内湾してのびる枕状を呈するもの。口縁部外面横ナデ調整、杯部外面ハケ調整。E068内面ハケ調整。E069ナデ仕上げ、片口を呈する。

C (E064・E065) やや外湾気味に開く口縁部を有するものである。肩部は平坦乃至外傾する。杯部は直線的に斜上方に広がる浅いもの(E064)と、やや深く内湾気味に開くもの(E065)がみられる。器体外面ヘラミガキ。E065口縁部外面に横ナデ調整、内面ヘラミガキ。口縁部に横ナデ。

B2 (E067) 内湾気味に開く杯部より口縁部は大きく外湾して広がるもの。体、口縁部の境界上には断面三角貼付凸帯を有す。口縁部外面横ナデ調整後杯、口縁部にヘラミガキ。内面ヘラミガキを施す。

B1 (E070) 内湾して開く杯部より口縁部は屈折して水平に広がる。肩部は肥厚する。口縁部内面に1条の凸帯を貼付する。端面に2条の円線文。

高杯脚部

a (E072~E080、E085) 比較的低い高杯脚部。中ぶくれで緩やかに開く。外面ハケ調整又はヘラミガキ、内面ナデ、裾部ハケ調整。E075、E077、E078上脚柱部に円孔を穿つ。

b (E081~E087、E096~E098) 細い脚柱状部より裾部は「ハ」字状に広がるもの。比較的高い脚部である。外面ハケ調整又はヘラミガキ。E087、E098に多条の沈線文、脚柱部には円孔を穿つ。内面ナデ。E084ヘラケズリ。

c (E088~E091) 筒状の細い柱状部より裾部は「ハ」字状に開くもの。外面ハケ調整又はヘラミガキ。E088脚部には柳描直線文を施文。内面ナデ。E090ヘラケズリ。

體台型土器

A (E092~E095) E092は、受部及び裾部が「ハ」字状に広がる鼓形を呈する。口縁端部は肥厚し、端面に2条の凹線文を廻らす。器体外面ハケ調整、口縁部、裾部に横ナデ調整。脚台部の4方に円孔を穿つ。内面ナデ、裾部ハケ調整。E093口縁端部に櫛描列点文。E094、95端部は外下方に拡張、内外面共横ナデ調整。E092は定形で、口径17.2cm、器高16.4cm、底径14.4cmを測る。

鉢型土器

受口状口縁を有す鉢Gである。口縁部の形態によりG1、G3に分類し得る。

G2 (E100、E101) 腹部の張る球状の体部より第2口縁は傾斜して開き第1口縁は短かく直立する。端部は内傾する浅い凹面を呈す。口縁部外面横ナデ調整、櫛描列点文を施す。体部外面ハケ調整、E100上半ナデ、両者共上腹部に櫛描列点文、直線文、波状文、弧状文等を廻らす。内面ハケ調整後ナデを加える。両者共脚台を有するが、E101欠失。E100は「ハ」字状に開く低い脚台を有し裾端部は、若干上方に拡張、脚台内外面共ハケ調整、裾端部横ナデ調整。

G1 (E099) 腹部の張る球状の体部より第2口縁は傾斜して開き、第1口縁は内反気味に立ち上がる。端部は内傾する凹面を呈す。底部は平底。口縁部外面横ナデ調整、櫛描列点文を施文。体部外面ハケ調整、上腹部には櫛描直線文、列点文、弧状文等を施文。内面ハケ調整後ナデ。E071、E102~E106は、鉢G体部及び脚台である。E071、E103は「ハ」字状に開く脚台で、裾端部を上方に拡張、脚台外面ハケ調整。E105裾部に櫛描列点文を廻らす。内面ナデ。E104鉢体部、外面ハケ調整後櫛描列点文、直線文、弧状文等を施文。内面ハケ調整後ナデ。

B1 (E107) 張りの弱い体部より口縁部は「く」字状に外反して短かく開く。器体外面刻離、内面にハケ調整残存。

甕型土器

口縁部が「く」字状に外反して開く甕A (A1、A3、A4)、受口状口縁の甕B (B3-II、B3-IV)がある。

A1 (E111) 外反して開く口縁部である。端部は面を成す。外面ナデ。内面ハケ調整。

A3 (E109) E109は、腹部の張る球状の体部に口縁部は「く」字状に外反して短かく開く。底部は安定した平底を呈す。口縁部外面横ナデ調整。体部外面ハケ調整。下半ハラケズリ。内面ハケ調整後若下ナデを加える。口径14.4cm、器高21.4cm、最大腹径20.8cm、底径5.0cmを測る。

A4 (E108、E110) E108は、縦長の体部に口縁部が緩く屈曲して外方に短かく開く。底部は突出した平底で厚いものである。口縁部は若干上方に肥厚し、端面ナデ調整。口縁部内外面共横ナデ調整。器体外面ハケ調整、内面ナデ仕上げ、口径11.2cm、器高17.2cm、最大腹径14.4cm、底径4.2cmを測る。E110はやや胴長の球状の体部より口縁部は屈曲して短かく開く。端部下端を拡張する。端面横ナデ後直線文を廻らす。体部外面に細かいハケ調整。頸腹部に櫛描列点文、弧状文、直線文等を施文する。内面ハケ調整後ナデ。やや突出気味の平底の底部を有する。

甕B

腹部の膨らむ縦長の体部に口縁部が受口状に立ち上がるものである。口縁部の形態によりB3-III、B3-IVに分類される。

B3-III (E113、E115~E117、E120~E123、E141) 傾斜して開く第2口縁より第1口縁は直上又は外反気味に短かく立ち上がるもの。端部はいずれも浅い内傾面を呈す。口縁立ち上がり部外面横ナデ調整。櫛描列点文を廻らす。体部外面ハケ調整。櫛描直線文、列点文等を施文。内面は頸部に若干のハケ調整を残し、他はナデ仕上げ。

B3-IV (E112、E119、E124~E128、E139、E140、E142、E138、E143) 腹部の膨らむ縦長の体部を有し、ほぼ水平に開く第2口縁より第1口縁は鋭く屈曲して直上乃至外反気味に短かく立ち上がる。端部は内傾する浅い凹面を呈す。口縁部外面は横ナデ後櫛描列点文を廻らす。体部外面ハケ調整後櫛描直線文、列点文、弧状文等を施文。頸

部内面に横方向のハケ調整、他はナデ仕上げ。口径12.6-17.9cm、器高23.6-28.0cm、最大腹径17.0-22.8cm、底径4.6-4.8cmを測る。

B 3-Ⅲ (E 114、E 118) 頸部で細かく立ち上がりはほぼ水平に開く第2口縁より第1口縁は短かく直立する。肩部は内傾する面を成す。口縁部外面横ナデ後櫛描列点文を施文、頸腹部外面ハケ調整。E 114はナデを施す。体部上半に櫛描直線文、列点文等を施す。内面ハケ調整後ナデ仕上げ。

B 3-Ⅳ (E 129-E 131、E 133、E 135) 傾斜して開く第2口縁より第1口縁が内反して立ち上がるもの。肩部は内傾する浅い凹面を呈す。口縁部外面横ナデ調整後櫛描列点文を施文。頸腹部ハケ調整。E 129、E 130ナデを施す。上腹部には、櫛描直線文、列点文、波状文等を施文。内面ナデ仕上げ。E 135頸部に2個1組の小孔を穿つ。口径11.3-17.2cm、器高18.2cm、最大腹径16.5、底径4.1cmを測る。

B 3-Ⅳ (E 132、E 134、E 144-E 147) はほぼ水平に開く第2口縁より第1口縁は鋭く内反して立ち上がる。E 144-E 147口縁立ち上がり部に強い横ナデを施す。櫛描列点文を施文。頸部外面ハケ調整後ナデを加える。E 134、E 146、E 147頸部内面にハケ調整。他、ナデ仕上げ。

B 3-Ⅳ (E 136、E 137) 腹部の膨らむは球状の体部より第2口縁は傾斜して開き内反して立ち上がる第1口縁を有す。肩部は内傾 (E 136) 又は凹面 (E 137) を呈す。口縁立ち上がり部外面横ナデ調整、E 137には波状文 (ヘラ) を施文。体部外面ハケ調整、内面ナデ仕上げ。底部は突出した平底でぶ厚い。口径14.1-15.3cm、器高17.8-20.8cm、最大腹径16.2-19.7cm、底径4.1-4.3cmを測る。

E 148-E 159は壺Bの体・底部である。いずれも器体外面にハケ調整を施し、上腹部には櫛描直線文、列点文、波状文、弧状文等を施文。内面ハケ調整後ナデ、底部は小さな平底を呈す。

壺型土器

A (E 160、E 161) 両者共、器高の高い傘型を呈す。E 160は平坦な天井部より緩やかに外湾して広がるもの。天井部径1.4cm、器高2.0cm、口径10.0cmを測る。両者共体部に2個1組の円孔を穿つ。

c. 上層出土土器

壺G 3、無頸壺C (C 1)、長頸壺A、高杯A (A 3)、C、鉢G (G 1)、甕A (A 3)、甕C (C 2)、甕B (B 3-Ⅲ) 等がある。

壺型土器

G 3 (E 162) 口縁部は屈曲して内反気味に広く立ち上がるもの。口縁部外面横ナデ調整、頸部ハケ調整、内面ナデ、肩部は内傾面を呈す。

無頸壺型土器

C 1 (E 165) 偏球状の体部に口縁部は短かく立ち上がる。肩部は丸味を有す。口縁部内外面共横ナデ調整。体部外面ハケ調整後ナデを加える。内面ナデ仕上げ。底部はやや突出気味の平底を呈す。小径で口径6.8cm、器高7.0cm、最大腹径10.3cm、底径3.7cmを測る。口縁部に2個1組の円孔を穿つ。色調、淡茶褐色。

長頸壺型土器

A (E 163、E 164) 外反して漏斗状にのびる口縁部 (E 163)。E 164は、長頸壺の口頸部と考えられる。肩曲部に低い断面三角形凸帯を貼付する。外面ハケ調整後ナデを加える。E 164内面ハケ調整、頸部にヘラケズリを加える。

高杯型土器

口縁部が直立乃至外反して立ち上がるA3、大きく外湾して広がるCがある。

A3 (E166, E167) 直線的に開く浅い杯部より口縁部は屈曲して直上 (E167)、又は外反気味 (E166) に立ち上がる。E166はやや中ぶくれに開く脚部を有す。口縁部外面横ナデ調整。E167に櫛播液状文を廻らす。E166杯部外面ハケ調整。E167ヘラミガキ。内面ハケ調整後ナデ (E166) 又はヘラミガキ (E167)。E166脚部外面ヘラミガキ、内面にしぼり目。粘土紐巻き上げ痕残存。脚部部の4方に円孔を穿つ。口径17.8cm、器高12.8cm、脚部高6.2cm、底径9.6cmを測る (E166)。

C (E168) 内湾気味に開く浅い杯部より口縁部は屈曲して大きく外湾して広がる。端部は丸く取める。内外面共ヘラミガキ。外面にはハケ調整痕が若干残存、色調は淡赤褐色を呈す。

鉢型土器

G1 (E169, E170) 球状の体部。傾斜して開く第2口縁より第1口縁がほぼ直上に短かく立ち上がる鉢G1である (E169)。口縁部外面横ナデ調整。櫛播列点文を施文。体部ハケ調整後上半ナデ、上腹部には櫛播列点文、直線文、弧状文等を廻らす。内面ナデ仕上げ。E170は、鉢Gの脚台部分と考えられる。「ハ」字状に開く脚台で、外面ハケ調整、内面ナデを行なう。

壺型土器

口縁部が「く」字状に外反して開くA (A3)、緩やかに外湾するC、及び受皿状口縁部B (B3-III)がある。

A3 (E171-E173) 小型の壺である。口縁部は「く」字状に短かく外反して開く。端部は面を成して終わる。口縁部内外面共横ナデ調整。E173は、腹部が張るほぼ球状の体部で、突出したぶ厚い平底を有す。外面ヘラミガキ。内面ハケ調整、口径10.6-13.2cm前後を測る。

C2 (E174) 緩やかに外湾して開く口頭部で端部はわずかに肥厚する。端面横ナデ調整後ヘラミガキ文を廻らす。口頭部外面ハケ調整、櫛播列点文を施文。内面ハケ調整後ナデ、斜格文 (ヘラ) を施文。

B3-III (E175, E176) ほぼ水平に開く第2口縁より第1口縁は直上乃至やや外反気味に短かく立ち上がる。腹部が膨らむ縦長の体部を有す。口縁立ち上がり部、外面横ナデ後櫛播列点文を施文。体部外面ハケ調整後上腹部に櫛播直線文、列点文、弧状文等を廻らす。内面頸部にハケ調整、他はナデ仕上げ。口径16.7cm、器高28.2cm、最大腹部径22.8、底径4.0cm (E175) を測る。

B3-III (E177, E178) 傾斜して開く第2口縁より第1口縁は内反して立ち上がる。端部は内傾。口縁部外面横ナデ後櫛播列点文を廻らす。体部外面ハケ調整。上腹部に櫛播列点文、直線文を施文。内面ナデ仕上げ。頸部にハケ調整が残る。

d. 出土層位不明土器

壺C、E、G (G2)、H (H3)、短頸壺A、B、無頸壺B (B1)、長頸壺A、高杯A (A3、A4)、B (B2)、器台A、B、鉢G (G1、G2)、壺A (A1、A2、A3、A4)、壺B (B3-III) 等がある。

壺型土器

C (E180) 外湾して広がる口縁部で、端部は面をなす。端面横ナデ後ハケ調整文を廻らす。口縁部内面ハケ調整。

E (E181) やや内湾気味にのびる口縁部、端部は内方に肥厚する。内外面共横ナデ調整。

H3 (E182-E184) 筒状乃至外反気味にのびる頸部より口縁部は屈曲して短かく立ち上がる受口状を呈す。体部は、腹部が張る球状を成し、やや突出した底部を有する。口縁端部は内傾する面を成す。口縁部外面横ナデ後櫛播列点

文を廻らす。E182、E183立ち上がり部にヘラ圧痕文。頸部以下ハケ調整。E183、E184は、上半にナデを施す。上腹部に櫛指列点文、直線文、扇形文、弧状文等を施文。内面ナデ仕上げ。E182、E183完形、口径9.9～12.1cm、器高15.8～16.2cm、最大腹部径14.3～19.9cm、底径3.5～3.6cmを測る。色調は、暗褐色（E182）又は淡褐色（E183、E184）を呈す。

短頸壺型土器

A、B（E185～E189） やや外反気味に立ち上がる直口の口縁部で、上腹部の膨らむ縦長の体部を有す。口縁部外面ハケ調整後ナデを施す。E185体部内外面共ナデ仕上げ。粘土紐接合痕が明瞭に残存する。肩部に竹管文3個。E186体部外面ヘラミガキ。E187～E189は、壺A、Bの体部と考えられるものである。球状の副長の体部に突出した平底の底部を有す。体部外面ハケ調整。E189体下部にヘラミガキを加える。内面ハケ調整後ナデ。E189はヘラケズリを施すか。E188、E189両者の頸部位には、ハケ圧痕文が廻る。E186をA、E185をBとした。

壺底部（E190～E196） 突出したふ厚い底部で、平底（E194）又はドーナツ底（E190、E193）を呈す。E192焼成前穿孔。外面ハケ調整。E192はヘラミガキを施す。内面ハケ調整後ナデを加える。E193底面に木葉痕。

無頸壺型土器

B1（E198） 内湾してのびる体、口縁部で、腰の張る球状を呈す。体部外面にハケ調整、内面ハケ調整後下半ナデ。

長頸壺型土器

A（E197） 細くやや外反気味にのびる漏斗状の口頸部である。外面ヘラミガキ。口頸部上方横ナデ調整、内面ナデ仕上げ。口径13.3cmを測る。

高杯型土器

口縁部が直上又は外湾してのびるA（A3、A4）、碗状を呈すB2がある。

A3（E199） やや内湾気味に開く浅い杯部より口縁部は屈曲してほぼ直上に立ち上がるもの。端部は浅く内傾する。内外面共ヘラミガキ。

B2（E200） 口縁部が大きく外湾して広がるもので、体、口縁部の境界には1条の断面三角形の凸帯を貼付る。口縁部内外面共ハケ調整、杯部外面ヘラミガキ。

A4（E201） 杯・口縁部が内湾してのびる碗状を呈する。口縁部内外面共横ナデ調整。杯部内外面共ヘラミガキ。

高杯脚部（E202～E206、E210～E212） E203・E204・E210は、中ぶくれで緩やかに「ハ」字状に開くものである（b）。外面ハケ調整（E210）又はヘラミガキ（E203、E204）を施す。内面粘土紐接合痕残存。ナデ肩部にハケ調整。E202、E205、E212は、細い柱状部より「ハ」字状に緩やかに開く脚部を有する。外面ハケ調整、内面ナデ又はヘラケズリ（E212）。E205柱状部に櫛指直線文を施文。いずれも脚部には1～3段の円孔を穿つ。E206は、細い筒状の柱状部である（c）。外面ハケ調整、櫛指直線文を施文。内面ヘラケズリ。

器台型土器

円筒状のものBと鼓形を呈するAがある。

B（E207、E208） 円筒状の体部より受部及び裾部が緩やかに外方へ開くものである。E207器体内面ヘラミガキ。体部に櫛指直線文（5条単位）を1帯廻らす。E208裾部は「ハ」字状に緩やかに広がるもので、裾端部を上方に拡張する。器体外面ハケ調整後櫛指直線文を施文。端面に波状文を廻らす。両者共頸部に円孔を穿つ。E207内面ハケ調整後ナデ。E208ヘラケズリ。

A（E209） 受部及び脚部が大きく外反して開く鼓形を呈するものである。器体内外面共磨減が著しく調整等不鮮

明であるが、ハケ調整痕が認められる。体部に円孔を穿つ。

鉢型土器 (E 213~E 217)

いずれも受口状口縁を有す鉢Gで、口縁部の形態によりG 1 (E 214)、G 2 (E 215)、G 1 (E 213)に分けられる。全て口縁部外面ハケ調整後拵排列点文を廻らす。E 215立ち上がり部にヘラ疋痕文、体部外面ハケ調整、上腹部には拵排列点文、直線文、波状文、弧状文等を施文。内面ナデ仕上げ、口縁部にハケ調整。E 216、E 217は「ハ」字状に広がる低い脚台である。外面ハケ調整。E 216裾部に拵排列点文を廻らす。内面ハケ調整後ナデを加える。

壺型土器

口縁部が「く」字状に外反して開くA (A 1、A 2、A 3、A 4)、受口状口縁壺B (B 3-Ⅲ)等がある。

A 3 (E 218) 短かく外反して開く口縁部で、端部は肥厚する。体部は、ほぼ球状を呈すか。口縁部外面横ナデ調整、体部ハケ調整、頸部位に拵排層形文を廻らす。内面ハケ調整。

A 1 (E 219) ほぼ球状を呈する体部より口縁部を短かく外湾気味に開く小型壺。端部は丸味を有す。口縁部内外面共横ナデ調整、体部内外面共ハケ調整。

A 2 (E 222) 「く」字状に外反して開く口縁部である。端部は強い横ナデにより凹状を呈す。口縁部内外面共横ナデ調整。体部外面叩き後ハケ調整。

A 4 (E 224) 球状の体部に短かく外反して開く口縁部を有す。端部上、下端を拡張。口縁部外面横ナデ調整。体部外面ハケ調整。内面ハケ調整後ナデ仕上げ。小型壺で、口径11.4cm、器高11.6cm、最大腹部径11.2cm、底径4.2cmを測る。

A 1 (E 220) 球状の体部に「く」字状に外反して開く短かい口縁部を有す。端部は面を成して終わる。外面ハケ調整。内面ハケ調整後ナデ、片口を呈す。

A 4 (E 223) 上腹部が張る縦長の体部に緩く屈曲して開く短かい口縁部を有す。端部上端を若干拡張、端面横ナデ後2条の凹線文を廻らす。体部外面叩き調整。底部付近にヘラケズリ、内面ヘラケズリを施す。突出した厚い平底の底部を有す。色調は暗茶褐色を呈しており、搬入品と考えられるものである。

B 3-Ⅲ (E 228、E 230、E 232、E 236) 傾斜して開く第2口縁より第1口縁は直上乃至外反気味に短かく立ち上がる。腹部の張る縦長の体部を有す。口縁部外面横ナデ後拵排列点文を施文。体部外面ハケ調整。上腹部には拵排列点文、直線文、弧状文等を施文。内面ハケ仕上げ。頸部に若干のハケ調整をとどめる (E 230、E 234、E 236)。口径14.0~18.6cm、器高21.0cm、最大腹部径18.0cm、底径4.4cmを測る。

B 3-Ⅲ (E 225~E 227、E 229、E 231、E 233、E 235、E 237) ほぼ水平に開く第2口縁より第1口縁は直上乃至外反気味に短かく立ち上がる。腹部が張る縦長の体部を有す。口縁端部は平担 (E 227、E 235)乃至内傾する凹面を呈す。口縁部外面横ナデ後拵排列点文を施文。体部外面ハケ調整。上腹部には拵排直線文、列点文、弧状文等を廻らす。内面ナデ仕上げ。頸部にハケ調整をとどめるものがある。口径14.8cm、器高25.0cm、最大腹部径24.0cm、底径3.3cm (E 227)を測る。

B 3-Ⅲ (E 235) 水平に開く第2口縁より第1口縁が内反して立ち上がるもの。端部は内傾する。口縁部外面横ナデ調整。拵排列点文を施文。内面ナデ。

B 238~B 243壺B体、底部である。腹部の張る縦長の体部で直線的にすばまり小さな平底の底部に至る。B 242底部穿孔。体部外面ハケ調整。上腹部に拵排直線文、列点文、波状文、弧状文等を施文。内面ハケ調整後ナデ仕上げ。

(2) 竪穴住居跡出土の土器

上流域（A・B区）で検出された竪穴住居跡は、総数40棟にのぼる。上述のように2時期に細分されるが、一括して記述する。

SH102

鉢型土器G1（F001）1点のみ出土。球状の体部に口縁部は屈曲して大きく水平に開き短かく直上に立ち上がるものである。完形で口径16.0cm、器高24.0cm、最大腹部径15.2cm、底径4.0cmを測る。口縁部外面ハケ調整後横ナデ。体部外面ハケ調整。上腹部に櫛描列点文、直線文、ヘラ横斜格文等を施文。胴部に低い櫛斥痕文凸帯を貼付ける。内面ハケ調整後ナデ。

SH103

壺・鉢・甕等が認められる。

壺にはC3（F003）、J（F002）ある。F002は、外反して開く口縁部で、端部を若干つまみ上げるもの。内外面共ハケ調整後ナデ。F003は、筒状の短かい頸部より口縁部は屈曲して短かく立ち上がる。口縁部外面に2条の凹線文。E004はやや突出気味の壺底部。外面ヘラミガキ、内面ハケ調整。

鉢（F006）は口縁部欠失。腰に稜を持ち直線的にすばまりながら底部に至るもので、鉢G体部と考えられる。外面ハケ調整後ナデ。上腹部に櫛描直線文、列点文、ヘラ斜格文等を施文。内面ハケ調整後ナデ。

受口状口縁壺B類（F008、F009、F007）。すべてB3-Ⅲタイプである。いずれも口縁部外面横ナデ調整、櫛描列点文（F007、F008）、棒状浮文、縦線文（F009）を施文。体部外面ハケ調整。櫛描直線文・列点文等が認められる。口頸部に若干ナデを施すか。内面ハケ調整後ナデを加える。

SH105

壺・甕底部片が各1点出土している。F010は、突出した平底の壺底部である。内外面にハケ調整痕が若干残存。F011は平底の甕底部。外面ハケ調整、内面ハケ調整後ナデ。

SH106

器台・鉢等がある。

F012は、筒状の脚柱状部に受部及び裾部が外反して開く鼓形を呈す器台Aである。口径13.0cm、底径10.2cm、器高12.0cmを測る。外面ハケ調整後口縁部及び裾部横ナデ。内面ハケ調整後ナデ。脚柱部には2段の円孔を4方に穿つ。

腹部の強く張る体部より口縁部が短かく直上に立ち上がる鉢G1である（F013）。口径14.6cm、器高11.6cm（因上復元）、最大腹部径14.6cm、を測る。口縁部外面横ナデ後ヘラ描波状文を施文。体部外面ハケ調整、肩部にヘラ描波状文を施文。内面ナデ仕上げ。指頭圧痕多数。底部は突出する。

SH107

壺、無頸壺、高杯、甕、甞等が認められる。

F015は壺H1タイプで、外反気味に立ち上がる口縁部である。上縁に凹線文1条を施す。内外面共ハケ調整後ナデ。

F019は無頸壺で、腰の張る偏球状の体部に短かく直立する口縁部を付すもの。口縁部内外面共横ナデ。体部ハケ調整後ナデを加える。

高杯A3 (F017)は直線的に開く浅い杯部より口縁部は屈曲して外反する。端部をわずかに外方へ引き出す。口縁部外面ハケ調整。杯部ナデ。内面ナデ仕上げ。F018は「ハ」字状緩やかに広がる低い脚部である。内外面共ナデ、指押え。

鉢には「く」字状に外反して開く口縁部を有すB2 (F021)、受口状口縁を呈するG1 (F020)がある。F021は、「く」字状に外反して開く鉢口縁部で、端部は肥厚する。内外面共横ナデ。F020は、傾斜して開く第2口縁より第1口縁は短かく直立する。倒鐘形の腹長の体部を有すか。器体外面ハケ調整、上腹部に摺擦列点文、直線文等を施文。内面ハケ調整後ナデ。

壺にはC2 (F022、F023)、B3-II (F024)がある。F022、F023は、筒状の太い頸部より緩やかに外反して開く口縁部を有する。端部外面上・下端にヘラ圧痕文・器体外面ハケ調整後ナデを加え摺擦列点文、直線文 (F022)、斜格文 (F023)等を施文。内面ハケ調整。F022は口縁部に列点文2列を廻らす。

壺B (F027)は、平坦な天井部より緩やかに外湾して開く体部を有す。内外面共ハケ調整。口縁端部横ナデ、体部に2個1組の小孔を穿つ。

SH109

短頸壺B、高杯脚部等がある。F028は、直口の口縁部である。外面にハケ調整、内面ナデ (短頸壺B)。E029は、縦長の壺体部で、平底の底部を付す。外面ハケ調整、内面ハケ調整後ナデ。E030は、開きの弱い脚柱状部に短かく広がる裾部を持つ高杯脚部。脚部高は比較的高い。外面ハケ調整、内面裾部ハケ調整。柱状部4方に円孔を穿つ。

SH113

高杯脚部、鉢底部等がある。E032は、やや突出した平底の鉢底部である (鉢G)。小型。外面ハケ調整、体部に波状文が認められる。内面ハケ調整。

SH115

壺A1の口縁部1点 (F033)が出土している。「く」字状に外反して開く壺口縁部で、端部は肥厚気味。口縁部内外面共横ナデ、体部外面ハケ調整。

SH116

鉢F (F034)1点が出土している。球状の体部に口縁部は「く」字状に外反して短かく開く。端部を上方向につまみ上げる。体部外面腹後上半部横方向のハケ調整。内面ハケ調整後下半ナデ。完形で口径12.4cm、器高10.4cm、最大腹径13.2cm、底径4.8cmを測る。

SH117

高杯A3 (F035)1点が出土している。外反気味に開く口縁部である。外面ハケ調整後ナデ。内面ナデ仕上げ。

SH118

壺、短頸壺、鉢、甕等が認められる。

F036は壺G1頸部である。外面ハケ調整。屈曲部に低いハケ圧痕文凸帯を貼付ける。内面ハケ調整後ナデ。

F038は、漏斗状に外反してのびる短頸壺口縁部である。外面ハケ調整。上方に横ナデを施す。内面横ナデ調整。頸部にハケ調整痕。

鉢C (E041)は安定した平底の底部を有する球状の体部に口縁部が短かく外反して開く小型の鉢である。口縁部は内方に折り返し厚く収める。端部横ナデ調整。器体外面ハケ調整。内面ナデ。

壺には受口状口縁壺B3-III (F042~F044)がある。F042は底部を欠くが遺存状態良好。腹部が膨らむ腹長の体部を有し、傾斜して開く第2口縁より第1口縁はほぼ直上に短かく立ち上がる。口縁部外面横ナデ後摺擦列点文を施文。

体部外面ハケ調整。肩部に櫛描列点文、腹部に波状文を施文。口縁部内面に横方向のハケ調整。体部ナデ仕上げ。

SH119

壺体部（F046）1点のみ出土。縦長の体部で、やや突出した上げ底の底部を有するもの。外面ハケ調整。粘土継接合痕残存。内面ハケ調整後上半ナデ。

SH120

壺、高杯脚部、鉢、蓋等が認められる。

壺にはA2（F047）、H1（F048）がある。F047は外湾して広がる口縁部で、端部は若干拡張気味。端面に2条の凹線文を廻らす。F048は、筒状の頸部より口縁部は屈曲して短かく直立する受口状を呈する。口縁立ち上がり部横ナデ後櫛描列点文を施文。口頸部外面ハケ調整。内面ナデ。

鉢には鉢G1（F053）がある。口径9.0cmを測る小型の鉢である。口縁立ち上がり部横ナデ後櫛描列点文を施文。体部外面には直線文、列点文等を廻らす。内面ナデ。

F052は、突出した平坦なつまみ部より内湾気味にのびる体部を有する蓋である。内外面共細かいヘラミガキを施す。つまみ径2.6cm、器高6.0cm、口径10.8cmを測る。

SH122

鉢、蓋がある。

鉢には鉢G2（F054）がある。腰の張る体部より口縁部は屈曲して短かく直立する。体底部には「ハ」字状に開く低い脚台を付す小型の台付鉢。完形で、口径9.4cm、器高9.6cm、脚台高3.0cm、底径6.4cmを測る。口縁部外面横ナデ後下端に列点文を施文。体部外面ハケ調整後上半にナデを加え櫛描列点文、弧状文等を廻らす。脚部外面ハケ調整後ナデ。裾部に列点文を施文。裾端部横ナデ調整。内面ナデ仕上げ。

F055は、低い傘型を呈し、つまみ径2.8cm、口径11.6cm、器高2.6cmを測る蓋Aである。口縁端部は上方に拡張。端面横ナデ調整。体部外面ヘラミガキ。内面ナデ。体部に2個1組の円孔を穿つ。

SH123

壺、高杯、鉢、甕等の器種が認められる。

壺にはA1（F056）、G6（F057）がある。F056は、外反して開く口縁部でさらに水平近くに広がり端部を外下方に拡張する。内外面共ナデ。F057は外反してのびる口縁部で、上端に強い横ナデを施す。口縁部外面ハケ調整。内面ナデ仕上げ。

高杯には高杯A4（F058）がある。杯、口縁部が内湾気味にのびる碗状を呈するものである。内外面共ハケ調整を施す。

鉢には鉢G2（F059）がある。球状の体部。ほぼ水平に開く第2口縁より第1口縁は短かく直上に立ち上がる。口縁部外面横ナデ後下端に櫛描列点文を施文。体部外面には櫛描直線文、列点文、弧状文等を廻らす。口頸部内面に横方向のハケ調整。他、ナデ。

甕にはA2（F060）、B3-Ⅲ（F062）がある。F060は、上腹部が膨らむ縦長の体部に「く」字状に外反して開く口縁部を有す。端面は凹状を呈す。口縁部内外面共横ナデ調整。体部外面ハケ調整。下半部ヘラケズリ。体部内面上半ハケ調整。F062は、ほぼ水平に開く第2口縁より第1口縁は短かく直上に立ち上がる。端部は浅く内傾する。口縁部外面横ナデ調整後櫛描列点文及びヘラ印痕文を施文。内面立ち上がり部ナデ。

SH124

短頸壺C、甕底部が出土している。F063は、球状の体部にやや内湾気味に短かく立ち上がる口縁部を有する小型の

壺。口縁部内外面共横ナデ調整。体部ナデ。口径9.0cm、器高16.1cm（図上復元）、最大腹部径10.6cm、底径3.6cmを測る。

SH125

壺F、壺底部等がある。F065は、外湾して広がる口頸部である。外面ハケ調整後ナデ。端面横ナデ調整。内面ハケ調整後ナデ。

SH128

鉢G 2、鉢脚台等が出土している。F067は、球状の体部に口縁部が受口状に短かく直立する鉢G 2である。口縁部外面横ナデ調整。ヘラ掻状線1条、列点文を廻らす。体部外面ハケ調整後上半ナデ。櫛直線文、列点文、弧状文を施文。内面ナデ仕上げ。F068は「ハ」字状に開く低い脚台である。外面ハケ調整。内面ナデ。F067の脚台部分の可能性もある。

SH129

壺E（F069）1点が出土している。腹部の大きく膨らむ体部に口縁部は短かく立ち上がり水平近くに広がるもの。口縁部内外面共横ナデ調整。体部外面ハケ調整。内面ハケ調整後ナデを加えるか。粘土接合痕残存。

SH131

壺B 3-Ⅲ 口縁部（F070）が1点出土している。傾斜して開く第2口縁より第1口縁は内反して立ち上がる。端部は内傾する浅い凹面を呈す。口縁部外面に斜方向のハケメ。下端に列点文を施文。内面頸部ハケ調整。口縁部横ナデ。

SH133

鉢脚台（F071）が1点認められる。「ハ」字状に開く低い脚台である。外面ハケ調整。内面裾部ハケ調整。

SH134

付台無頸壺（F072）の出土が知られる。球状の体部に口縁部は内傾して立ち上がる。体底部には、開きの弱い高い脚台を付す。口縁部外面横ナデ。体部ハケ調整後上半横ナデ。脚台外面ハケ調整。体部内面ハケ調整後ナデ。脚台内面ハケ調整後ナデ。口径6.4cm、器高9.8cm、最大腹部径12.4cm、脚部高9.4cm、底径9.0cmを測る。

SH135

壺G 2口頸部（F073）が1点出土している。太く外湾気味にのびる頸部より口縁部は屈曲して内反気味に立ち上がる。口縁部外面横ナデ調整。3条の凹線文を廻らす。頸部ハケ調整。内面ナデ。

SH136

壺底部片及び壺A 2が認められる。F074～F076はやや突出気味の底部で、F074体部は直線的に斜上方にのび、F075、F076は大きく外上方に開くもの。F075内外面共ハケ調整。F077は「く」字状に外反して開く壺口縁部（A 2）。端部は上方に拡張する。器体外面ハケ調整。端面横ナデ。内面ナデ。

SH137

高杯脚部（F079）1点が認められる。「ハ」字状に緩やかに広がる脚部で、端部は拡張気味。外面ハケ調整後ナデか。裾部横ナデ。内面裾部ヘラケズリ。

SH138

無頸壺型土器B 1が出土している（F080）。内湾してのびる体、口縁部で、端部は平坦に収める。内外面にハケ調整を留める。

SH139

壺3-Ⅲ、底部片等若干認められる。F081は、水平に開く第2口縁より第1口縁は内反して立ち上がる。端部をわず

かに外方へ引き出し端面は、内傾する浅い凹面を呈す。口縁部外面横ナデ後列点文を施文。体部には直線文、列点文が認められる。内面ナデ。

SH140

甕底部片1点のみ出土（F082）。平底の底部で体部は直線的に斜上方にのびる。外面ハケ調整。内面ハケ調整後ナデ。

(3) 土坑出土の土器

上流域で検出した土坑は、25基以上であるが、このうち遺物の出土していたのは、17基である。

SK203

高杯、無頸甕、甕等が出土している。

高杯B（F086）は、内湾してのびる杯部に口縁部は屈折して水平に開き、端部は下方に著しく拡張する。口縁部内面に1条の凸帯を貼付る。口縁部内外面共横ナデ調整。杯部外面ハケ調整。内面ナデ。

無頸甕A（F087）は内湾してのびる体部に口縁部は内折してすはまる。外面横ナデ調整。体部に4条の凹線文を廻らす。口縁部下に2個1組の円孔を穿つ。体部内面にハケ調整痕。

甕にはA1（F088）、B2-II（F085、F089）、B3-I（F090）がある。F085、F089、F090器体内外面共ハケ調整。口縁部外面上端横ナデ。内面立ち上がり部にナデ。F085口縁部内面に「メ」字状のハケ圧痕文を廻らす。

SK205

甕A1（F091）、甕B3-III（F092）等がある。F091器体外面ハケ調整。端面には、ヘラ圧痕文を廻らす。胴部には先行する引き目残存。内面ハケ調整。F092口縁部外面横ナデ調整。櫛描列点文を廻らす。F093は、甕Bの腹部である。外面ハケ調整後上半に櫛描直線文、列点文、波状文等を施文。内面ナデ。

SK206

水菜型土器B（F094）1点が出土している。肩の張る縦長の体部で、直線的にすはまり平底の底部に至る。口縁部欠失。肩部に半環状把手を付す。外面ハケ調整。肩部にハケ圧痕文。内面ハケ調整後ナデ。

SK207

甕・甕が出土している。

甕G6（F095）は外反して開く口頸部で、端部は外傾する凹面を呈す。外面ハケ調整。口縁部に3条、頸部に5条の凹線文を廻らす。肩部に櫛描直線文、波状文等を施文。内面口頸部ナデ。胴部ハケ調整。

甕A2（F096）は上腹部の膨らむ縦長の体部に口縁部は「く」字状に外反して開く。端部は若干肥厚する。端面横ナデ調整。体部外面引き後ハケ調整。内面にハケ調整痕を認める。

SK208

甕、甕が出土している。

甕にはA2（F097）、G3（F098）がある。F097は、無花果形の体部より口頸部は外反気味にのび上がり曲折して広がる。端部を下方に著しく拡張する。突出した上げ底の底部を有す。器体外面細かいヘラミガキ。口縁部上方横ナデ調整。内面ナデ。口径17.0cm、器高37.0cm、最大腹部径34.0cm、底径7.4cmを測る。F098は内反気味に立ち上がるもので、端部は凹面を呈す。口縁部外面ハケ調整後横ナデ。上端に凹線文1条、内面ハケ調整後ナデ。

甕にはA2（F099）、B2-II（F100、F101）、B3-I（F102）がある。F100～F102内外面共ハケ調整。立ち上

がり部内面ナデ。F101口縁部内面に列点文を施文。

S K 209

壺、高杯脚部、鉢、甕等が出土している。

壺にはF(F103)、J(F106)がある。F103は、上腹部が膨らむ縦長の体部より口縁部は短かく外湾して開く。端部上・下端を拡張する。端面に2条の凹線文。外面口縁部横ナデ調整。体部ハケ調整。底部付近にヘラナデ。内面ハケ調整後ナデ。F106は内湾気味に立ち上がる直口の口縁部である。内外面共ナデ。口縁部上方に3条の凹線文を廻らす。

鉢B1(F105) やや腰の張る体部に口縁部は外反して開く。口縁部内外面共横ナデ調整、体部外面ハケ調整。胴部に列点文(櫛)を廻らす。内面ナデ。

甕B3-Ⅲ(F107)1点がある。口縁部外面横ナデ調整。櫛描列点文を廻らす。内面ハケ調整。立ち上がり部ナデ。

S K 210

高杯脚部(F108)1点のみ認められる。細い筒状の柱状部より裾部は大きく広がるものである。外面ハケ調整。内面ナデ。裾部ハケ調整。裾部には2個1組の小孔を6方に穿つ。

S K 211

壺、甕が認められる。

壺Ⅱ1(F109) 内湾気味に立ち上がる口頸部。内外面共ナデ。端部は内傾する面を残す。口縁部に4条の凹線文を廻らす。

甕A4(F110)1点が出土。上腹部の膨らむ体部より口縁部は「く」字状に外反して開く。端部は肥厚気味。口縁部内外面共横ナデ調整。体部内外面にハケ調整痕残存。底部付近内外面に煤付着。ほぼ完形を留め、口径13.2cm、器高17.0cm、最大腹部径14.6cm、底径4.4cm(図上復元)を測る。

S K 216

鉢脚台(F111)1点が出土している。「ハ」字状に開く低い脚台部分である。外面ハケ調整後ナデ。裾下端に列点文を施文。内面ナデ。

S K 217

甕A1(F112)1点が出土している。腹部が張る縦長の体部に口縁部は「く」字状に外反して開く。口縁部内外面共横ナデ調整。体部内外面共ハケ調整。口径19.0cm、器高27.0cm、最大腹部径23.0cm、底径5.6cmを測る。

(4) 落ち込み出土の土器

S X 205

高杯壺土器1点が出土。高杯A2(F117)はやや内湾気味に開く浅い杯部より口縁部がほぼ直口に立ち上がる。器体内外面具密減が著しく調整等不分明。口縁部外面に5条の凹線文を廻らす。

S X 207

壺型土器1点が出土している。壺F(F116)は外湾して広がる口頸部で、端部は若干下方に拡張する。端面横ナデ後羽状列点文を施文。口頸部外面ハケ調整後ナデ。頸部に凹線文2条+aを廻らす。内面ハケ調整後ナデ。

S X 208

甕、甕等が出土している。

甕にはA2(F130)、壺体部Ⅱ1(F113)がある。F130は、球状の体部に口頸部はやや外湾気味ののび上がり、端

部を下方に著しく拡張する。突出した平底の底部を有す。器体外面ヘラミガキ。端面横ナデ調整。内面ナデ。完形品で、口径16.6cm、器高38.2cm、最大腹部径27.6cm、底径6.0cmを測る。F113は、腹部が大きく膨らむ体上半部である。外面ハケ調整後若干ナデを加えるか。柳指列点文、直線文、斜線文等を廻らし、最下段に弧状文、頸部に断面三角形貼付凸帯、列点文を付加。内面ナデ仕上げ。

甕にはA2 (F114)、B3-Ⅲ (F115)がある。F114は、口縁端部を上方に若干拡張し、端面に横ナデを施す。F115は口縁部外面横ナデ後羽状列点文を施文。体部ハケ調整後柳指直線文、列点文を施文。内面ハケ調整後ナデ。立ち上がり部ナデ。

(5) 包含層出土の土器

イ-I-1

高杯脚部 (F118・F119) が認められる。F118は比較的低い脚部で、緩やかに「ハ」字状に開き、端部上端を拡張。外面ハケ調整。付根部に低い貼付凸帯2条。脚部中位の4方に円孔を穿つ。内面ナデ。

イ-II-1

壺、甕がある。

甕N (F120) はやや外反気味にのびる直口の口縁部である。外面ハケ調整後ナデ。上方に4条の凹線文を廻らす。内面ナデ。

甕にはA1 (F121)、B2-II (E123)、B3-Ⅲ (E122)がある。F123内外面共ハケ調整。頸部外面にナデを施すか。F123は口縁部外面横ナデ後列点文を施文。端部にヘラ匠痕文。頸部外面ハケ調整。体部には柳指直線文、列点文が認められる。内面ハケ調整後ナデ。

イ-III-1

壺、甕等が認められる。

壺にはF (F124、F125)、I1 (F126)がある。F124、F125は外湾して開く口縁部で、端部を下方 (F124)、又は上方 (F125) に拡張する。端面には2条～3条の凹線文を廻らす。F124内面に羽状列点文を施文。F126は、やや内湾気味に立ち上がる直口の口縁部。外面ハケ調整。上端に強い横ナデ。体部に線刻があり、内面ハケ調整後ナデを加える。

甕にはA2 (F127、F128)、B3-II (F129)がある。F128は、張りの弱い体部より口縁部は鋭く屈曲して外方に開くもの。端面にヘラ匠痕文、体部外面ハケ調整。内面ハケ調整後上半にナデ。F129は、短かく内反して立ち上がるもの。内外面共磨減が著しく調整。施文等不鮮明、内面にハケ調整が認められる。

ロ-Ⅱ-1

壺、鉢、高杯等が出土している。

壺にはA1 (F131)、G1 (F133)がある。F131は外湾して広がる口縁部で、端部を外下方に大きく拡張する。端面に5条の凹線文を廻らし、3個3列の円形浮文を等間隔に貼付る。口縁部内面ハケ調整。列点文2列を廻らす。F133は、球状の体部に口縁部が外反して開く小型の壺である。外面ハケ調整。内面ナデ。

短頸壺A (F132) は小型の球状の体部をもち、口縁部は短かく外湾する。外面ハケ。

高杯にはA3 (F134)、脚部等がある。

F134は、直線的に広がる杯部に口縁部はやや外反気味に立ち上がる。内外面共磨減が著しく調整等不鮮明。F135は、

「ハ」字状に開く脚部で、比較的低いものである。F 136は、細い筒状の脚柱状部、裾部との境界に凸帯1条を貼付る。ヘラ疋痕文を付加。柱状部外面ハケ調整。内面ナデ。巻き上げ痕残存。

鉢にはG 1 (F 137)がある。胴の張る体部に口縁部は屈曲して短かく直立する。口縁部外面横ナデ後列点文を施文。体部外面ハケ調整。胴部に直線文、列点文を施文。内面ハケ調整後ナデ。

(大橋美和子)

3. 石 製 品

A. 中期後半の遺構出土の石製品

石剣 (S002, S006~S008, S011, S014, S015, S912)

002は柄部側約半分を残すもので、柄部長9.1cm、剣身3.7cm、計12.8cm、残存である。柄部最大幅3.6cmで端部にかけて狭めている。また端部は斜めにおさめている。柄部中央に積をつくり、厚みは1cmを測る。ていねいな研磨がなされ、全面に光沢をみせ、他と石材質が異なる感を受ける。また他の剣より硬質である。006は剣身部の残存で、長さ約5cmを測る。鋒の積はややあまいが、刃は少し角度をかせ研磨している。全体に縦方向の研磨で、白色系の薄い積が材質に観察される。厚さ0.8cm、幅は先端にかけて片側の傾斜が強く、基部側2.9cm先端側2.6cmである。007は剣身部の残存である。両刃は鋭く研磨され、中央の鋒はややあまい積である。残存長6.4cm、幅3.1cmである。材質は006に近い。008は、剣身の残存であるが先端部はない。推定幅で3.6cmを測り、鋒の積は甘い。片面は斜めから縦、片面は横方向に研磨される。厚み0.9cmを測る。材質は006に似るが、色調はより黒い。001は剣身の残存で鋒を中心に半欠しており、全体像は不明。剣身のはほぼ中央から先端に近い部分と考えられる。014は黒灰色の粘板岩で、剣の未製品あるいは剣の再利用の未製品と考えられる。全長13cm、幅3cmを測り、厚みも0.6cmしかない点で、石剣の未製品としての石材では小さすぎる。ただ刃にあたる部分は勿論研磨はないが、刃を意識しての刺離痕があり、注意される。色調は006に近い。015は石英と考えられる白黄色の積が材質に含まれており、全長28.4cm、最大幅5.8cmを測る。厚みは1.5cmである。研磨は未だで鋒が完成せず、未製品である。研磨は縦方向でやや粗い。912も石剣の残片であると思われる。縦～斜めに研磨されている。刃が欠損しているが剣と思われる。

工具 (S207, S235, S230, S236, S212, S225, S219, S231, S210)

207は小型の扁平片刃石斧で幅2.5cm、長さ2.6cm、厚さ0.7cm、刃の角度は68°を測る。水成岩を材質にしている。なお類似するものにS-235がある。また、形状が少し異なるものに、S230、236がある。230は台型状で縦長である。頁岩系の石材を使用し、長さ4.2cm、幅上端2.7cm、下端3.2cmである。なお厚みは1.1cmである。236は、堆積岩と思われるが詳細は不明。使用のため薄くはがれたものと考えられ、刃部は遺存している。なお刃の角度は52°である。S212は大型給刃石斧で、頭部は欠けているが、刃部は完存している。刃は円弧状に丸味があり、刃こぼれの使用痕がある。S225は給刃とは言い難く、刃部が細まり細くなっている。基部は全面に研磨されていて、石斧と言えるが、形状の点で太厚とは断定しないでおく。219も刃部が全て欠けており、詳しくは不明だが、形状からみて大型給刃石斧と思われる。231は柱状石斧の範囲に入るものと思われる。頭部幅3.6cm、刃部幅2cm、全長9.6cmを測る。刃は鋭くつくられ、52°である。210はノミ状石器と考えられ、扁平な板状の粘板岩質の石材を用い、刃を約2.5cmの長さで削り出し、端部に刃をつける。身にあたる部分も面取りの研磨がなされ、平面部も横方向に研磨痕がのこる。

砥石 (S423, S424, S425, S426, S427, S432)

423は半欠だが、断面三角形に遺存した砥石で二面が研磨に使用されたあとが残る。石材は花崗岩系と思われる。424は、もとは四角形状と思われるが、現状では円弧状に残る。二面が砥削として利用されている。花崗岩。425は四角形状の砥石であったと思われる、花崗岩類のアジノール（微結晶花崗岩）である。426は、板状の砥石で3面が砥削とし

て利用されている。427も花崗岩質の石材で2面が砥面として利用される。432も425と同質で3面が利用されている。

玉つくり関係石製品 (S923, S1101, S1102, S904, S901, S909~S911, S913, S924, S932)

923, 1101, 1102は玉つくりで使用される原石のことである。紅簾片岩で1101, 1102は、片面が丸くなっており、研磨での磨減と考えられる。1102は全長12.5cm、幅3.4cm、厚さ0.5cmである。いずれも片岩の結晶の節に添った取り方をしている。

904は砂岩を用いており、厚さ3cmの板状の材を使っている。表裏2面とも黒変しており、凹凸をつくっている。この形状と黒変の状態から、鋳型と考えられる。この溝状の削り込みから、有樋式(鋼剣)の剣の鋳型の可能性があるが、戈の可能性もある。

901は砂岩質の石材を用いており、径6cmの円形状から凸部をつくり出している。用途は判然としない。909~911, 913, 924は粘板岩(黒灰色)を材とした破片で、片面、あるいは端部の一面をていねいに研磨しており、910はその形状から石斧片と考えられる。

931は粘板岩のチップである。932は断面円形状につくり、各面をていねいに研磨しており、両端もはっきりして短かい棒状の製品である。やはり用途不明。

小 結

以上の検討の結果、石剣の石材に2種が存在することが判明したが、その1つの産地は比定不可能である。石材の化学分析や地質の特徴から今後究明されるべき問題と見えよう。一方、紅簾片岩の3点の出土は玉つくり用の遺物である。ところで近年になって近隣の玉つくり遺跡が、野州町市三宅東、草津市烏丸崎遺跡、守山市下之郷遺跡、守中遺跡と多数明らかになっている。下之郷遺跡を除くと前期から引きつづく遺跡であり、いわゆる拠点集落で、大集落には玉つくりが付属している可能性を示したことになるのではなかろうか。下之郷遺跡は中期の遺跡の中でも長径300mを越える大環濠集落であり、石剣も多く、中期の核集落として機能した可能性があり、玉つくりの存在も首肯されよう。今後玉つくりの遺物が増加することと思われるが、いずれにせよ、拠点あるいは核集落に付属する機能であったと考えたい。

B. 中期末～後期初頭の遺構出土の石製品

石剣 (S001, S004, S005, S010, S012)

001はほぼ完存する石剣で、全長22.5cm、幅3.5cm、厚さ1cmを測る。石材は粘板岩で黒灰色を呈し、鋒を中心に片側は横方向を基本に片面はやや斜めに研磨する。柄にあたる部分の長さは9.5cm、剣身は13cmを測る。柄物は丸く仕上げている。004は剣先端の残存で、3.4cmが残る。鋒の積はややまよく、先端で研磨方向のちがいのため、細かい小さな面がみられる。なお厚さは0.6cm、石材は粘板岩で他よりやや黒っぽい。005は柄と剣身の境目付近の残存である。残存長5.1cm、幅2.7cmとやや細い。厚さ1cmで剣身にかけて少し薄くなる。石材は黒灰色の粘板岩である。110は、剣先端に近い部分の残存で刃を含む小破片である。黒灰色を呈す粘板岩製である。012は淡黒灰色を呈す粘板岩製の石剣片で鋒にそって半欠した柄部分の残片である。研磨方向は斜めにみられ、ていねいに仕上げる。

石鏃 (S101, S013)

101は、磨製石鏃で全長3.7cm、幅2.8cmの三角形をなす。平基式の部類に入るもので、基端はほぼ平につくり、中

央や下に穿孔を試みているが、貫通していない。粘板岩質の石材である。013は濃黒灰色を早寸石鏃で、幅2.2cm、残存長1.9cmで先端が欠けている。全体に五角形状につくり、基部に穿孔があるが、基部に通じており、抉り状である。また中央には径6mmの穿孔があり、両面から穿孔している。また、先端にかけての側面は円弧状に段をつくり刃をつくる。両側面にも刃をつくっている。

工具 (S215、S1104)

215は、楕円棒状品で、頭部にかけての側面に打ち割き痕がある。一方、刃にあたる部分は、刃をつけた痕跡がなく、何らかの力が加わり、刃こぼれ状の打撃痕がある。石器を打ち削ぐ、楕円棒状品と替えようか。

砥石 (S412、S232)

412は小型の砥石で四角柱状砥石の半欠品である。粘板岩系の石材を用いており、四面が砥石として利用されている。232は角柱状の砥石で、板目状の材質が観察されている。硅化木ではないかと思われる。

その他 (S914、S915、S922、S925、S926)

914、915は粘板岩を用いたもので、粗い打ち割りが残るが、一部に研磨痕が残る、その大きさや、形状から磨製石鏃の未製品かと考えられる破片である。922、925、926はやはり粘板岩を用いたもので、粗い打ち割りがみられるチップである。研磨された部分はない。

小 結

以上のように、これらの石製品の中に、磨製石鏃がみられ、また、それに用いる粘板岩の未製品やチップが出土していることから、集落内での製作がうかがわれる。この現象は、守山市下之郷遺跡、吉身西遺跡でも知られており、弥生時代中期後葉、それも末期にみられる特徴である。ただし、同期の播磨田東遺跡や二ノ畦遺跡では認められず、同時期の集落間に差異が存在したことを物語る。その石材についても黒灰色の粘板岩が用いられており、石剣と共通している。石剣の一部に石英の縞がみられることから、石材産地が高島郡の阿弥陀山麓に求められる可能性が強く、もし、そうであるなら、彼地との交流において、野州川流域に交流の有無や濃淡が示されることになり、各集落の差異が反映されていることがわかる。西口陽一氏の石剣の石材にかかる報告（『人・視・石剣』、『考古学研究』128）により明らかになった西日本に広く分布する高島産の石材（粘板岩）が、近江の南半に広く分布し、中でも野州川流域に濃く分布していることは、この地域が山背や畿内地方への主要な拠点になっていた可能性を示している。

(山崎秀二)

4. 出土遺物の検討

A 中期後半の土器

下流地区では、多数の住居跡群、土坑、ピット、溝等が検出されたが、さらにそれらを取り巻くように堀削されたV字溝SD151、SD152A、Bが確認されたことから、当地区が再度の掘り替え工事を経た環溝集落を形成していたものと推測される。当地区集落群の存続期間については、弥生時代中期中葉段階の大洪水によって埋没した周溝墓上に営まれ、再び中期後葉の洪水により埋没していること、当地区出土遺物がほぼ中期後半前葉～後葉段階に限られていることなどから、当集落群の継続期間をおおよそ限定することが可能である。然しながら、住居跡群出土土器については、重複と削平等により、かなりの混乱を生じていると予想され、本節では特にSD151、SD152A、B、出土土器を取り上げ時期等に関する若干の考察を試みたい。

(1) SD151 出土土器

a. 下層出土土器

下層出土土器には、甕C(C1、C2、C3)、D(D1)、G(G1、G2、G3)、I(I1、I2)、細頸壺A(A1)、B(B1)、D(D2)、鉢B(B2)、D、甕A(A1、A2)、B(B2-I、B2-II、B3-I)等が認められた。

A001(甕C1)は、外湾気味にのびる細い筒状の口頸部で上方において内折する。外面ハケ調整、上端に横ナデを施す。体部を欠失するが、おそらくDE3区、SD037州土D679の如き下ぶくれの体部を有する物と考えられる。壺C1については、本遺跡弥生中期周溝墓中期中葉段階(畿内第Ⅲ様式古段階併行)に盛行をみる壺C1の系譜を引き継ぐものと考え得るが、C1に特徴的とも言えた直線文帯(複帯)は認められない。壺C1は、本遺跡を始め、彦根市河瀬馬場町馬場遺跡(壺B1)等で類似品の出土が知られている(文献1)。壺G1(A003-A005、A009)は、外湾して開く頸部より口頸部は屈曲して幅広く立ち上がる壺である。口縁部外面は、通常無文又は1-2条の凹線文を廻らすものが多い。A007(G3)は、立ち上がり部にハケ丘直文、頸部に斜線文、A008口縁部外面には縦位のハケ丘直文を施すなど若干の加飾を行なっている。特にA008(G2)に関しては、本遺跡周溝墓M375出土のE267に類似するものである。或いは、同じ體となる、可能性もあり、その出土状況が注目される所である。A010、A011(甕C3)は、なだらかな肩を持つ下ぶくれの体部に屈曲して立ち上がる口縁部を有する。口縁部外面に3条の凹線文を廻らし、体部外面叩き後ハケ調整を施す(A010)。

細頸壺型土器には、A、B、Dの3種がみられる。細頸壺A2(A024、A025)は漏斗状にのびる口頸部で、端部はほぼ平坦に収める。外面ハケ調整、A024上端に凹線文1条。A026(B1)は、細く外湾気味に開く口頸部で上層において内折する。口頸部外面に縦直線文(複帯構成)、立ち上がり部には波状文、列点文を廻らす。

鉢型土器には、球状の体部より屈曲して開く口縁部を有するB2(A029)と口縁部が内折(A031)するDがある。A029は外面ハケ調整後上半にナデを施しハケ丘直文、直線文等を施文、端面にはハラ丘直文を廻らす、A031は、共

にハケ、ナデにより仕上げられており、A031は横ナデ調整。SD151上層やSD152出土の鉢Dの口縁部には各々3～4条の凹線文がみられるのに対し、下層出土鉢Dは、未だ凹線文盛行時の様相に達しておらず、個体数が少ないが明確ではないが、或は時間差が介在しているか。A031の類例としては、今津町弘川遺跡土庫7(210)(文献2)守山市下之郷遺跡環濠1下層(文献3)等より出土が知られている。

壺には、A(A1、A2)、B(B2、B3)、C(C1、C2)等がある。A類は、上腹部が影らむ縦長の体部に「く」字状に外反して開く口縁部を有す甕である。A034～A037の端部は面をなして終わり(A1)、ヘラ圧痕文を施文、A033、A038、A039の端部は肥厚し列点文(A038)、波状文(A039)等を有する(A2)。A040～A042端部は、上端、又は上、下端を若干拡張し、端部に強い横ナデを施す。A1は器体内外面共ハケ調整、(A034、A036口縁部外面に横ナデ)、A2口縁部内外面横ナデ調整、体部外面は叩き後ハケ調整を施すものが多い。内面ハケ調整。

C(A044～A047)は、外湾及至外反して開く口縁部で端部は面をなして納めるものと上端又は下端を拡張するものがみられる。A044～A046、A048(C1)端部、横ナデ後1条の沈線を通らし、下端にヘラ圧痕文、A047、A049(C2)ハケ後上端に横ナデ調整、上、下端部にヘラ圧痕文を施文する。口縁部内面横方向のハケ調整、A047のみ副歯文(ハケ)を施す。

受口状口縁壺B類では、B2タイプとB3タイプがほぼ半々を占め、B2タイプでは、大きく外傾して、第1口縁と第2口縁の区別が明確でないものB2-I(A051、A054、A059～A061、A064)と、第1口縁が、やや直立気味になるものB2-II(A052、A053、A055～A058、A062、A066、A068、A069、A072)がある。B3タイプでは、内外面ハケ調整をするもの、B3-I(A063、A065、A067、A070、A071)がある。これらから、SD151下層では、B2タイプとB3-Iタイプが、その大半を占めることが明らかになった。SD151を切り込んで築造されたSD152では、B2タイプが10%、B3タイプが90%となっており、若干のちがいをみせている。なお、よく似た構成をとるものとして、下之郷遺跡環濠1の土器群がある(文献3)。

b. 中、上層出土土器

壺、細頸壺、高杯、鉢、甕等の器種がある。壺にはA(A1、A2、A3)、C(C2、C3)、D(D2)、F、G(G1～G4)、I(I1、I2)、K等がみられ、下層に比較し、量、型式共に豊富であるが、形態及び手法等には、若干新しい様相がうかがえる。

広口壺のうちA101、A102は、外反して開く口縁部を持つ壺Fである。端部上、下端を拡張し外傾する面をなす。内外面共横ナデ調整、頸部は太く短く立ち上がるものと考えられる。京都府今里遺跡SD0732出土II(文献4)に類似した形態を呈す。A097は、脚台を付す壺D2である。下腹部が限る体部を有し、外面ハケ調整後上半にナデを加え櫛形波状文を施文。A112～A114は、内湾してのびる口縁部をもつ壺G4である。口縁部外面に4～5条の明瞭な凹線文を施し、その下方に列点文を施文。県内及び畿内地方諸遺跡において認めることができる。本遺跡周溝墓M012出土のE026は完形品で、頸部屈曲部にハケ圧痕文凸帯を有し、算盤玉状の体部外面上半部には櫛形波状文を施すものである。

A115は細く外湾気味に開く筒状の頸部より屈曲して立ち上がる口縁部を有す壺G1である。口縁部外面には4条の浅い凹線文を有し、頸部外面にハケ調整を施す。壺G1は、県内では比較的多くその出土が知られるが、いずれも口頸部片のみで全容を知り得るものがない。口頸部の形状においては、壺G2に類似するが、G2に比べ頸部が非常に細いのが特徴である。口頸部の形態においては、三重県納所遺跡(文献5)、上其田遺跡(文献6)、亀井遺跡(文献7)等上、中勢地域で一般的に認められる壺(亀井遺跡、壺A(a)種)に類似した傾向をもつが、壺G1類は、口縁部の立ち

上がりがやや巾広であることや、又、頸部が若干短かいなどの差異もみられる。

細頸壺には、D類(A128)が1点のみ知られる。細く漏斗状にのびあがる口頸部で、口縁部はわずかに内湾気味を呈す。外面には、鵜橋波状文、直線文を成立に廻らすもので、下層のものに比較して、口縁部が直線的になっている。

鉢型土器には、口縁部が内折してすぼまるD(A140~A142)がある。口縁部内外共横ナデ調整、体、口縁部の境界上には2~4条の凹線文が認められる。A141杯部内外面にハケメ。口縁部下には2個1組の小孔を有す。

高杯は直口の口縁部を持つA2(A129)、水平縁口縁を有すB(A131、A132)がある。A132は、内湾気味にのびる杯部より口縁部は外方へやや湾曲気味に開くもので端部下端を拡張する。口縁部外面横ナデ、杯部内外面共ヘラミガキを施す。

壺型土器は、A(A1、A2)C(C1、C2)、B、(B2-I、B2-II、B3-I、B3-II)等がある。

壺C(A153~A160)は、緩やかに外湾して広がる口縁部を有す壺型土器で、体部が残存するものは皆無である。端面は横ナデにより、外端面は凹状を呈す。下端にヘラ庄痕文を施文、口縁部外面縦方向、内面に横方向のハケ調整、内面にナデを加え列点文を廻らすものが多い。体部の形状については詳細を欠くか、おそらく下腹部が大きく膨らむものと考えられ、例えばA161、A162の如き形態を有すか。

受口状口縁壺Bは、B2-IIタイプが40%を占めるほか、B3-I、B3-IIタイプが60%を占めている。

端部は、平坦に収めるものが多いが、B3タイプは内傾する凹面を呈す。口縁部外面はハケ調整。端部にヘラ庄痕文を廻らすものが多い。下層出土壺Bに比較し、上端に明瞭な横ナデ調整を施すものが増加しており、又内面への有紋率も高くなっている。A190~A194は後期に属するものである。

以上、SD151下層及び中層、上層出土土器について簡単にその概要を記した。下層土器については、純粋な一括の土器として扱いは得るが、上層土器については、後期初頭の遺物の混入が若干認められる。ただ他の土器についても、その型式、調整、施文状況等かつ大きな時期差を持つものではない。そして、必ずしも、層位が大きく両者を分離することはできないが、壺Gにみえる若干の変化、壺Bの構成などから、下層にやや古い様相があることは間違いない、細分については将来の検討をまちたい。

(2) SD152A出土土器

SD152Aは、下層、上層の2層から成るが、両層の出土遺物には、時期差はほとんど認められない。

a. 下層出土土器

壺A(A1、A2)、B(B1)、E、F、G(G1~G3、G6)、I(I1)、台付無頸壺A、細頸壺D(D2)、水差(A)、高杯A(A1)、B、鉢D、壺A(A1、A2)、B(B3-I、B3-II、B3-III)等が認められた。

壺型土器の大半は、口縁部外面又は端面に凹線文及至凹線文+鵜橋文を有しているが、壺A2、I等は無文で横ナデ調整を施す。壺G3(B018)は、段を成して外上方に開く口縁部で、端部は若干内方に肥厚し、浅い内傾面を示す。頸部外面にヘラミガキ、SD152A(上層)においても1点(B132)認められているが、これまで、県内においては類例が知られておらず、全容については不明。壺G6(B019)は壺G2に類似した形態、調整法を持つが、口縁部の立ち上がりは弱く極めて短い。頸部にハケ庄痕文凸帯、壺G2同様高の壺型土器と考えられる。県内では例は少ないが、上層出土のB133や下流地区SK100出土のD572が類例と認められる。

壺体部については、上腹部が膨らむ縦長を呈すものが多いと思われるが、(B022~B026)、壺E(B001)の如く肩

の強く張るものや、ほぼ球状に近いもの(壺G1、B011)等も知られる。これらはほとんど内外面共ハケ調整、ナデによって仕上げられているが、壺1の体部と考えられるB024、B026には、体部外面に先行する叩きが明瞭に残存している。又、壺A1、E、G1等の上腹部は、帯描直線文、波状文、斜線文(ヘラ)等の諸文様による加飾が施こされている。

台付無頸壺には、SD152A上、下層より各々脚台部分のみが出土しているが、SD152Bにおいて内湾気味にのびる体、口縁部が1点(C015)認められる。口縁部上、下端に各1条の凹線文を有す。口縁端部は内方に肥厚し平坦な面をなす。器体内外面共剥離。形態的には、守山市下之郷遺跡の環濠1下層出土例(文献3)に類似する。

細頸壺は、D2(B155)、D1(B033、B156、B157)がある。B155は、細く上方にのびがあるもので、外面には帯描直線文を施文、守山市下之郷遺跡の環濠1下層出土例(文献3)に類似する。

細頸壺Dは、内湾気味にのびるもので、B033は口縁部外面に3条の凹線文を廻らし、その下方に列点文、直線文等を有すが、B156は口縁部外面に羽状列点文、以下帯描直線文、波状文を交互に廻らす。D類は、本遺跡では皿様式古段階により認められているが、形態、施文等にほとんど変化はみられない。

水差型土器は、体部片(下層)、口縁部片(上層)の他、SD152Bよりほぼ完形の水差が2点(C017、C018)が出土している。算盤玉状の体部にやや内湾気味に立ち上がる片口の口縁部を有す。両者共同部に横位の半環状把手を付す。C017口縁部外面には、3条の太く浅い凹線文を施文、又、C018は上端に1条の凹線文その下方には波状文を廻らす。両者頸部より胴部上半にかけ帯描直線文、波状文、列点文等による加飾を行なう。体部調整は内外面共粗いハケ調整を施こすが、外面上腹部には若干ナデを加える。高杯には、体、口縁部が内湾してのびるA1と水平線口縁を有すBがみられる。下層出土B036、B037口縁部上端には凹線文1条を施こし、杯部内外面ハケ調整を行なう。口縁端部は浅い内傾面を呈す。形態及び手法等今津町北仰・桂遺跡出土例(文献8)に類似する。又、B159(上層)は段状口縁を有すもので、県内では、守山市下之郷遺跡、環濠1の土器群に類例が認められる(文献3)。

高杯Bは、内湾及至直線的に開く杯部より屈曲して水平に開く口縁部を有す高杯である。口縁端部は、肥厚気味のものから、下方又は外下方に著しく拡張するもの等種々みられる。端部は横ナデ調整、さらに2-4条の細い凹線文を廻らすものも若干認められる。同じく端部に凹線文を持つものとして、県内では近江町長沢遺跡(文献9)、今津町北仰・桂遺跡(文献8)、守山市下之郷遺跡(文献3)等の諸遺跡においても認められる。

鉢型土器には、A、B、D、E類がある。鉢B1(B174-B176、C031、C032、C043)は、縁やかに外反及至外湾して開く口縁部を有し、端部には、ヘラ圧痕又は列点文等を施文する。体部は、半球状、腰の張る球状を呈し、外面ハケ調整後上半ナデを施こし帯描列点文、直線文、波状文等を廻らす。又、口縁部内面には横方向のハケ調整を行ない、列点文(B174)波状文(C032)等を施文する等、壺Bと同じく加飾の著しい在地的鉢型土器である。鉢Aの内には、或いは体部の形態において、縁やかに内湾するものと、腰に明確な稜を持つもの、さらに施文状況には、単に列点文のみを配すもの、我々の帯描文様を組み合わせるものなどの違いも認められるか、これまでの所、県内での出土状況からは、地域差等に時間差に因るか否かの関連性については明らかでない。鉢D(B050-B051、B170)は、内折してすままる口縁部を有す鉢で、口縁部又は、体、口縁部境界上に多条の凹線文を施こす、口縁部内外面共横ナデ調整、杯部外面は、ナデにより平滑に仕上げもの、ハケ調整(B050)又はヘラミガキ(B170)を加えるなど種々ある。内面は、ハケ調整後ナデを施こす。B170は、口縁部が短かく内折するもので、端部は浅い内傾面を呈す。口縁部外面には帯描扇形文、端部に波状文を廻らす。大阪府八尾市亀井遺跡出土例(文献10)に類例がみとめられる。B172、B173は体、口縁部が内湾してのびる碗状を呈す小型の鉢である(A4)。口縁部上端に凹線文1条、その下方に列点文を施文(B173)を施す。その下方に羽状列点文を施文(B173)。B189は、体部で縁やかに屈曲し外下方にやや内湾気味に

なだらかに広がる台形土器である。内外面共ハケ調整、底部付近は横ナデ調整、5条の細い凹線文を廻らす。県内では、これまで未出土であるが、京都府今里遺跡SD0732出土⑤(文献4)、大阪府池上遺跡P L 85-9、台形土器(文献11)、大阪府思兼遺跡鉢型土器(文献12)等、畿内地域の諸遺跡において知られる他、愛知県朝日遺跡旧街道C以南の地区、1383鉢(文献13)においても認められる。旧来より「回転台形土器」として呼称されてきたものであるが、近年、鉢型土器として分類される報告例が多いようである。壺型土器には、口縁部が「く」字状に外反して開くA(A1, A2)、緩やかに外湾して広がるC、受口状口縁壺B(B2, B3)等がみられる。壺A1は、いずれも上腹部の膨らみ縦長の体部を有し、わずかに上げ気味の底部を付す。B057底部焼成前穿孔。A1端部は、横ナデ後ハケ圧痕文を廻らすものが多く、ヘラ圧痕文を持つものはB055、B193と少数である。又、A2には、若干凹線文、波状文、圧痕文等を付加するものも認められるが、無文に仕上げられるものが多い。体部調整は、ハケ調整が一般的で、A1を除く他のタイプでは、外面上半部には先行する叩き目を有するものが比較的多く知られる。口縁部内面は、A1横方向のハケ調整、A2斜方向のハケ後ナデ、体部内面、ハケ調整、A2タイプでは、通常上半部にナデを加えるか、A1の両タイプは、ほぼ底部付近にハケメが残存している。

受口状口縁壺BはすべてB3タイプで、B3-Iが30%とB3-IIが70%を占める。端部は、平坦、凹面、内傾する浅い凹面を呈す。口縁部外面は、ハケ調整後上端に横ナデを施すものが多く、端部を若干外方につまみ出すものもみられる(B071、B077、B084)。内面は、ハケ後ナデを加え、櫛状列点文、波状文等の加飾を有するものが多くみられる。

体部は、腹部の張る縦長で、直線的にははさまり底部に至る。外面ハケ調整後櫛状列点文、直線文、波状文、弧状文、斜格文(ヘラ)等の諸文様を様々組み合わせる上腹部を飾る。体部内面ナデ仕上げ。

壺型土器(B092)は凹状のつまみよりやや外湾気味に広がる体部で口縁部は面をなして終わるものである。内外面にハケメ調整を加える。

b. 上層出土土器

壺A(A1, A3)、C(C1-C3)、D、E、F、G(G1-G4, G6)、I(I1)、台付無頸壺A、細頸壺D(D1, D2)、水差B、高杯(A3)、B、鉢A(A4)、D、E、壺A(A1, A2)C(C1, C2)、B(B3-I, B3-II)等がある。

壺型土器は、量、型式共に豊富に認められるが、下層に共通してみられる壺型式も多く、それらの形態、技法等については差異はみられない。B108は外反して開く口縁部を持つ壺A3である。内外面共横ナデ調整、県内草津市志那中遺跡SE5出土E072(文献14)に類似する。B099は、外湾気味に広がる口頸部で、端部を若干下方へ拡張するA3タイプである。端面横ナデ、器体外面ハケ調整、体部には先行する叩き目が認められる。内面ナデ仕上げ、B101-B103、B106は、比較的小型の壺Dで口縁部が湾曲して外方に開くもの、又頸部に立ち上がりを持つものなどがある。体部は算盤玉状を呈し、口縁部下には2個1組の小孔を穿つ、体部外面ヘラミガキ(B102)。内面ハケ調整後ナデ。B108は偏球形の体部より外反気味に立ち上がりさらに水平に開く口頸部を有する壺A3である。端面横ナデ後櫛状波状文を施文。口頸部内面は羽状列点文。3個1組の櫛状突起等による加飾を施すものである。器体外面ハケ調整、上腹部には櫛状波状文、直線文(3条×2連)を交互に施文。体部下半ヘラケズリ、内面ハケ調整後上半ナデ、B132は頸部より段を成して外反する口縁部で、下層出土B018に類似するが、B018に比べ口縁部は直線的に外反し、又端部も面を成して終わるものである。内外面共刺雕。B133は、外湾気味に開く口縁部で、上方において短く立ち上がる壺G6である。内外面ハケ調整、頸部にハケ圧痕文凸帯等下層出土B019と共通するが、立ち上がり外面には明瞭な稜が認められる。

B140-B142は球状の体部に内湾気味にのびる口頸部を有する壺Bである。口縁部上方に凹線文2-4条、その下方に

羽状羽点文を廻らす。顶部屈曲部に断面三角形貼付凸帯、体部外面ハケ調整 (B140) 又はナダを加え下半部にヘラケツリを施す (B142)。内面ハケ調整、口頭部ナダ、体部外面上半部には、櫛指直線文、波状文 (3条×2道) を交互に施す。壺Bは、県内においてもこれまでの所出土例がなく、又、本遺跡においてもB140～B142以外には全く知られない稀有な壺型土器である。しかしながらその形状は別として、調整及び施文等には壺G3、網罟壺D等との共通性がみられる。

高杯にはA3 (B159)、B (B160～B168) がある。A159は内湾気味にのびる体、口縁部で、段状口縁を有するものである。内外面櫛指ナダ調整を加える。畿内に稀有な高杯であるが、県内では出土例は少なく、下之郷環濠1の資料 (文献3) に類例が認められる。

B160～B168は、水平線口縁を有すB類でいずれも内面には、断面方形又は三角形の凸帯を貼付る。端部の形状には、若干肥厚気味のものから著しく拡張するものまで様々みられる。口縁部内外面横ナダ調整、B166、B168 端面には2～3条の細い凹線文を施す。同様に端面に凹線文が認められるものとしては、県内では、近江町長沢遺跡 (文献9)、今津町北仰・杜遺跡 (文献8)、彦根市河瀬馬場町馬場遺跡 (文献1)、守山市下之郷遺跡 (文献3) 等において類例が認められる。

鉢型土器には、B1 (B174～B176)、D (B170) E (B171)、A4 (B172、B173) がある。鉢B1は、球状の体部より緩やかに外湾して広がる口縁部をもつもの (B175、B176) と、腹に横を持つ体部より口縁部が外反して開く (D174) ものがある。いずれも端面には横ナダ後ヘラ又はハケ圧痕文を廻らし、体部上半には櫛指羽点文 (B175、B176)、直線文、列点文 (B174) を有する。内面横方向のハケ調整、B174 口縁部内面に列点文を施文。草津市志那中遺跡SE5 (文献14)、守山市下之郷遺跡環濠1下層 (文献3) 等よりB175、B176、類似品の出土が知られる。B170 (鉢D) は口縁部が短かく内折してすぼまるものである。端部は浅い内傾面をなす。口縁部外面に櫛指扇状文、端面には波状文を廻らす。大阪市亀井遺跡出土資料に類例 (文献10) がある。壺Aには、A1 (B190、B191、B193、B198、B199、B200)、A2 (B192、B194～B196、B203、B202～B204) 等様々の形態がみられる。A1及びA2 端面にはハケ圧痕文、ヘラ圧痕文 (B199) 等が認められるが、B196 (波状文)、B197 (凹線文) 以外は横ナダ調整により無文に仕上げる。体部外面はハケ調整を常とするが、大半のものは、ハケ調整に先行する叩きを有している。B169 肩部外面に櫛指直線文、波状文を認める。内面は、ハケ調整後ナダを加える。

B205～B211は緩やかに外湾して開く口縁部を持つ寛Cである。端部は肥厚及至若干拡張気味で、端面には横ナダ後、下溝又は上、下端に圧痕文を有す。B205、B208は1条の沈線を廻らしている。B209、上腹部ハケ調整後櫛指列点文、直線文を施文、腹部が強く張る体部と考えられる。B210は端面及び、口縁部内面に櫛指列点文を廻らす。

受口状口縁壺BはすべてB3タイプで、そのうちB3-Iタイプが20%、B3-IIタイプが80%を占めている。第111 縁の大半は内傾しており、残りもほとんど直立するものばかりで、外傾するものはごく一部にすぎない。口縁部内面を加飾するものも、30%に達しており、下層のものに比較して、やや新しい様相が看手される。全形のうかがえるものは少ないが、腹部径が、口縁を脱離するものも、かなりあるようである。

(3) SD152B 出土土器

壺A (A3)、B (B1)、D (D1)、E、F、G (G1、G2)、H (H2)、台付無頸壺A、E、細頸壺D、高杯E、B、鉢B (B1)、C、壺A (A1、A2)、C (C1)、B (B2-II、B3-I、B3-II) 等が認められるが、器種及び型式構造、技法等SD152Aと共通性が高い。C010 (壺H2) は、腹部が強く張り出す体部より大きく湾曲して

開き、口縁部は屈曲して鋭どく内折する蓋である。口縁部は内傾する浅い凹面を呈す。I 縁部外面横ナデ後斜格子文（ハケ又は櫛）を施文。口頸部以下ハケ調整後胴部に若干ナデを加え列点文、直線文を交互に廻らす。口縁部内面及び端面に列点文を施文、口縁部下の相対位置に2個1組の小孔を穿つ。本例については、頸部の湾曲が大きくやや立ち上がりが見られること。I 縁部下に小孔を持つことなどから壺型土器として分類した。本例は、守山市下之郷遺跡、環濠3下層出土17、19に類似（文献15）する（中期後葉）。

C017、C018は、ほぼ完形を留める水差し型土器である。算盤玉状の体部やや内湾気味にのび上がる片口のI 縁部を有す。両者共肩部に横位の半環状地手を付す。C018 I 縁部外面は、上端に1条の門線文を廻らし、その下方に波状文を施文、又C017は、口縁部に3条の太く浅い凹線文を廻らすもので、両者共頸部より胴部上半にかけて櫛指直線文、波状文、列点文等により、加飾を施す。体部調整は内外面共粗いハケ調整を施すが、外面上腹部には若干ナデを加える。

高杯では、EタイプとBタイプがほぼ半数を占める。Eタイプは、外面に門線を2条ないし1条めぐらし、内外面とも横方向のハケ調整している。小破片のため、壺Gの口縁との区別がむづかしい。Bタイプは、すべて口縁端部を外下方に拡張するもので、C023のように、ふ厚く仕上げられるものもある。C022は垂下部外面に凹線文をめぐらすもので、SD152A上層にもみられたものである。

鉢には、B1タイプとCタイプが半数を占めており、形態手法とも、SD151や、SD152Aのものと大きく変わらない。ただB1タイプでは、体部形状が、算盤状になり、やや深くくなっていること。Cタイプの場合も、やや浅くなる傾向がある。若干の時期差を示すものか。

壺にはAタイプとBタイプの2種に大別でき、1:2の割合を示す。調整、形態とも、SD152Aと、ほぼ共通するが、I 縁部部に凹線ないし沈線をもつものが半数を占めている（A2）。Bタイプでは、大半をB3タイプが占め、そのうち、B3-Iタイプは20%、B2-IIタイプが80%と、SD152Aと、ほぼ同じ傾向を示している。ただ、口縁内面を加飾するものは、多くなかった。

(4) 小 結

a. SD151 出土土器

SD151は、南北に走る巾1.5m深さ1mのV字溝で、主にD地区の住居跡を取り巻く環溝であったのに対し、SD152Aは、SD152Bよりさらに南方向に広がるほぼ下流地区東部全域を取り囲む長大な環溝を成すものと考えられる。SD152A、SD152B、分離地点における断面観察によるとSD151がSD152Aによって切られており、村落の拡大に伴って再度環溝の掘り替えが行なわれたことが推測し得る。

SD151は下層、中層、上層の3層に分け得るが、上層出土土器については、D地区住居跡群土器との混入が予想されるため、一括資料としての良好性を欠くが、しかし、後期初頭のものが一部認められる（混入か）他は、ほぼ中期後葉の前半代を主体としている。下層出土土器には、壺型土器が比較的多く認められたが他器種についてはいずれも少片が若干みられる程度で、資料としては制約があるが、上、下層土器を比較すると、

①壺型土器は、下層においては少量の上層との比較は難しいが、壺G2、C3、12等形態差は全く認められない。A007、A008のI 縁部に刻目、列点文が見られる他は、無文、又は凹線文を施す。A010（C3）は完形品で、下ぶくれの体部より口縁部が屈曲して立ち上がる。口縁部に凹線文3条体部は叩き後ハケ調整を行なう。

②下層出土鉢Dには、口縁部が内折するもの（A031）が出土しているが、内外面ともハケ、横ナデで仕上げられて

いる。しかし、上層出土の鉢D (A140~A141)は、いずれも体、口縁部境界上に2~4条の凹線文を廻らすなど凹線文の多用傾向を向える。

③甕A類については、下、上層共形態調整等に差異は認められない。体部調整においては、叩き後ハケが一般的となっている。が、上方では、ハケのみのものも認められる。

④受口状口縁壺(壺B)では、下層でB2タイプが50%、B3タイプが50%であるのに対し、上層では、B2タイプが35%、B3タイプが65%と若干の差異が認められる。

以上SD151下層、上層出土土器には、資料的に不備な点もみられるが、その比較においては、大きな時期差は認められないものの明らかに下層土器に古い要素がみられた。

b. SD152A出土土器

SD152Aは、下層、上層の2層からなり各層とも多量の遺物を含有している。

①下層出土壺型土器には、A (A1、A2)、B (B1)、E、F、G (G1~G3、G6)、I (I1)があり、上層には、A (A1、A3)、C (C1~C3)、D、E、F、G (G1~G4)、I (I1)、等多型式が認められている。

ほぼ同じ傾向がうかがえるが、鉢状の体部をもつ壺Dが認められること。細頸をもつ壺Iがみられるなど異なった要素も認められる。

②高杯では、Aタイプにおいて、下層のものが、深い杯部をもつものに対し、上層のものは、やや浅く、形態的にも変化が認められ、Bタイプでは大きな変化がなく、増加の傾向が認められる。

③鉢では、Dタイプにおける変化はほとんどないが、Bタイプにおいて、上層には体部が屈曲しないタイプが出現しており、若干の変化が認められる。

④甕では、Aタイプにおける変化は、顕著ではないが、下層では部分的に残っていたタタキ痕が、上層ではすでにハケ目によって消され、ほとんど認められなくなっており、Bタイプでは、下層で、B3-Iタイプが30%、B3-IIタイプが70%、上層ではB3-Iタイプが20%、B3-IIタイプが80%と若干の変化は認められるが、ほぼ同じ傾向を示していた。

c. SD152B出土土器

SD152B出土土器は、資料的にも限定されており、特に指摘できることはないが、SD152Aの上層土器と、ほぼ同じ傾向にあることは、広口壺Dの存在や、高杯のあり方から、若干うかがうことができる。また高杯Bにおける、杯口縁における凹線文の多用はやや新しい要素を考慮することができるであろう。壺BタイプではB3-Iが20%、B3-IIが80%とSD152A上層と同じ傾向を示している。

d. 方形周溝墓出土土器との対比

SD151、SD152出土土器に併行するとみられるのは、これらの溝に隣接して所在する住居跡群と、この環溝集落の外に、新たに築造されはじめた方形周溝墓群の出土土器である。前者については、後に検討するとして、まず、方形周溝墓群のそれとの対比を試みておきたい。この時期の方形周溝墓としては、環溝集落の北西部(ヌ-Ⅲ、Ⅳ)に分布する一群と、旧河道Cをはさんで、遺跡の南端に所在する一群が認められる。「服部Ⅱ」では前者をLブロック、後者をAブロックと呼んでおり、以下、それに従って検討を加えたい。

まずAブロック出土土器では、資料の残存状況もあるが、広口壺Aは全く認められず、Cタイプが1点あるほか、D

Aブロック 方形周溝墓	
Lブロック 方形周溝墓	
SD151下層	
SD151上層	
SD152A下層	
SD152A上層	
SD152B	

第47図 服部遺跡中期後半の弥生土器

第47図 服部遺跡中期後半の弥生土器

タイプの存在は知られていない。壺Eタイプは、下流のLブロックやSD151下層には認められるが、SD151上層や、SD152でも認められ、新しい様相とできるかも知れない。ただ壺Fについては、下流のLブロックや、SD151上層、SD152A、SD152Bではみえており、ほぼ同じ傾向を示している。壺Gは、Aブロックのものは、門線文を多様しているが、下流のLブロックや、SD151、SD152下層では、門線文をもたず、ハケ目によって調整するものも多く、Aブロックのものに、若干新しい様相がうかがえる。壺H、I、Jなどは、周溝墓からの出土例は多いのに対し、集落からの出土は少なく、供献専用の土器の可能性もあるが、壺Iでは、SD152出土資料に類似したものが多く、Lブロックのものには、SD151下層出土のものときわめて似た例が認められ、Aブロックのものに、やや新しい傾向が認められる。

細頸壺では、SD151のものが、直線的な口頸部をもつものに対し、Aブロック、LブロックとSD152のものは、内湾気味で、共通性が認められる。このことは、水差型土器にも同じ傾向がうかがえる。

高杯では、周溝墓出土のものは、垂下する肩部をもつものではなく、SD151のものに近い形態、手法をもっている。なおAブロックでは、甕、鉢の供献は全く認められず、Lブロックとの違いを鮮明にしている。

以上にみたように、Aブロックの資料は、SD151の資料と共通する点は、ほとんどなくSD152の資料と共通するところが多い傾向が明らかになった。

次にLブロックの土器群であるが、形態、手法等において、SD151、SD152との共通性がきわめて高い。

まず壺では、Fタイプか、SD151上層、SD152に共通しているし、壺DはSD152のものに類例がある。GタイプはSD151、SD152に類例が多い。Iタイプでは、SD152と共通性が高いが、一部SD151下層の資料とも共通性をもっている。

細頸壺では、上述のように、SD152との共通性が高く、水差型土器や鉢においても同様の傾向がうかがえる。ただ高杯においては、SD151上層や、SD152下層の資料との共通性が高く、若干のちがいをみせている。

甕では、A1、A2では、SD151の資料と共通して、タケキ目を残すものが多いが、A3～A5タイプでは、SD151上層、SD152との共通性が明らかに高くなっている（特に口縁肩部の処理など）。Bタイプでは、良好な資料は少ないが、SD151下層に見えるような古いタイプのものは少なく、SD151上層、SD152の資料との共通性が指摘できよう。

以上のように、A、L、二つのブロックに分けて、SD151、SD152の資料との対比を試みてみた。その結果、Aブロックのものは、SD152の資料との共通性が高く、SD151と併行する部分は、ほとんどないことが明らかになり、Lブロックについては、SD152と併行することは、間違いないが、一部、SD151とも併行する可能性が指摘できた。そして、全体的な土器の様相においても、Lブロックのものが、SD151やSD152の資料にかなり親縁性のあることも、指摘できた。したがって、Lブロックについては、下流のSD151やSD152に開かれた集落の墓域として、ほぼ間違いないと考えられるが、Aブロックについては、集落の拡大過程にかかわるものが、別の集落とかわる可能性も考えられよう。

e. 下流住居跡の資料との対比

下流住居跡とそれに伴う土坑、落ち込み、小溝出土土器は上述のようにSD151、SD152に圍繞されており、明らかにその消長を同じくしたとみられるが、草草でも指摘されているように、その検出段階、掘り下げについては、問題が残されており、若干の資料操作が必要となる。ただここでは、その細部には立ち入らず、集落とそれを圍繞する環溝の関連を検討したい。

まず、甕では、器種構成、形式において、ほとんどちがいは認められない。Fタイプなどで、口縁部外面に凹線文、波状文をめぐらすものが多いこと、またGタイプでも、凹線文だけでなく、ヘラ庄線文や、斜格子文などを口縁部外面にめぐらすものがあり、Gタイプの系譜を引く、G4-G6などがみえるなど、SD152との、より近い関係が指摘できる。ただ、壺のように、古い様相をもつものもいくつかみられ、SD151やそれ以前のつながりも否定できない。これらの点は、壺IやHなどでも同じような傾向にあるが、Iの系譜とみられるJ、K、Lなど、SD152で顕著になる、新器種の出現についても、共通性が認められる。細頸甕では、一部古い様相のものも含むが、SD152のものとは共通したあり方を示している。

高杯においても、AタイプとBタイプが、ほぼ同じ割り合いで出土しており、SD152と同じ傾向を示している。

鉢では、SD151や、SD152ではみえないDタイプ、Eタイプなどもみえるが、A、B、Cタイプなどもみえる。したがって、A、B、Cタイプでは、ほぼ同じ傾向が認められ、手法や形態においても共通点が多い。

甕では、SH001やSH002出土資料にA1タイプでも、口縁部端面がなく、球状の腹部をもつものや、Bタイプでも、B3-Ⅲタイプがみえ、やや時期の降るものもあるが、これらはいずれも、CE1区のものであり、SD151、SD152とは直接結びつかない遺構群である可能性も考えられる。SH001からSH016までの遺構群については、その中に、SD151や、SD152の上器群に併行するものもあって、調査域内では、ほとんど検出されなかった、中期後葉後半の集落が、C地区の東側に所在することをうかがわせる。

なお、甕においても、CE1区のものを除けば、Aタイプ、Bタイプ、Cタイプにおいて、SD151、SD152とは併行するもので、中でも、SD151上層、SD152との共通性が高い。SD151下層に多くみえるBⅡタイプはきわめて少なく、この段階の集落の中心は、さらに東に所在するものであろう。

以上、簡単な検討によって、下流住居跡群が、SD151、SD152と深くかかわることが明らかになったと思われるが、いくつか同一個体とみられるものが、両者から出土していることが知られ、一体性を示している。

B. 中期末～後期初頭の土器

上流出土土器は、中期後葉後半の洪水により、下流東部に中心をおく集落と、これに深く関連する、遺跡南端と北端に広がる2群の方形周溝墓群が完全に壊滅し、部分的には1mに達するシルト層におおわれた後、その洪水堆積土を地山として、上流地域に出現した集落に伴うもので、下流出土土器の間には、かなり大きな断絶が認められる。そして、かかる集落そのものも、後期前半ごろに再び襲った洪水により、完全に廃没、後期後半に径150m余の環濠をもつ集落が出現するまで断絶しており、かなり限定された時期の土器群とすることができる。そして、遺構的には、SD201を掘削する際に、一部の住居跡が削平されており、上流出土土器群は、SD201が掘削される段階の前後において、小区分できるが、後述するように、若干の様相のちがいが指摘できる。

(1) SD201出土土器

SD201出土土器は、大きく、上、中、下の3層に分けて取り上げたが、下層出土土器は、わずか9点であり、中層出土が152点、上層出土が16点と、中層として取り上げたものが大半を占め、層位的に取り上げられず、層位的不明として取り扱った63点の大半も、その多くが中層出土とみられる。

a. 下層出土土器

上述のように下層出土土器としては、壺ではCタイプが1点、高杯のA3が3点、脚部が3点、鉢のG1タイプが1点、甕Bタイプの体部が1点と、きわめて少なく、特別に注目される点はない。ただ高杯の杯部口縁の立ち上がりが高杯、やや古い様相を示すかも知れない。他については、上層、中層のものと、それほど差異は認められない。

b. 中層出土土器

中層出土の土器としては、壺、短頸壺、細頸壺、無頸壺、長頸壺、高杯、器台、鉢、甕と、各種が出揃っている。

まず壺では、中期の系譜を引く、A1、A2、C、G1、H1、H2の各タイプがみられる。ただいづれも中期のものとは、かなりの様変りを示している。A1では、全体に加飾が後退し、口縁部に、わずかに列点文、ヘラ直線をめぐらしたり、頸部に低い欄干直文内帯をめぐらすものがみられる。A1、A2タイプでは、さらに無文化がすみ、E018のように、内外面ともハケ調整のみのものもみられた。E015やE106のように、口縁端面に円形浮文を貼り付けたものも、若干認められる。Cタイプでは、頸部の屈曲が短かく、体部も球形化するようである。

Gタイプは、全体で3点のみの出土であり、手法的にも、外面ハケを残すE021のように古い様相を示すものもあって、この段階まで残存したもののみみられる。

壺Hでは、E022のように、中期後半後半に盛行するタイプの一部みられるが、属位不明のE184や、E182、E183に代表されるように、後期に一般化する、甕の体部をもった受口瓶のプロトタイプを呈しており、新しい様相が確認できる。ただ中層では、全形をうかがえるものはなく、E022、E023など、口縁部のみであった。

壺I、Jも、それぞれ中期の系譜を引くものであるが、Iの場合、やや反気味になって、直口の特徴が薄くなっている。Jについては、逆に口縁が直口化している（E026、E027、E031、E186、E185）。そして、凹線をもつものもなく、無文化が進んでいる。

細頸壺は、良好な資料がなく、ほとんど衰退したとみられるが、かわって長頸壺が新しい器種として加わっている。いづれも太い筒状を呈し、丁寧なヘラミガキを施している。全形をうかがえるものはないが、E041のように、算盤玉状の体部をもつものもあり、定型化はすすんでいないようである。ただ、注意すべきは、E197にみられるように、長頸壺の形態、手法をもちながら、頸部がやや細いタイプのあることであろう。

高杯では、中期に一般的な、B1タイプについては、E070のみが知られるだけで、Aの系譜を引くA3、Bの系譜を引くB2、碗形の杯部をもつA4の3種が主流をなしている。A4、Cは、後期に一般化するものであるが、B2タイプについては、近年、後期前半に存在するとされる屈曲部を有する高杯につらなるものと考えられる。守山市二ノ畦遺跡（文献18）に、類似したものがみられるが、県内では類例が認められず、後期後半に一般化する杯部口縁の外反するCタイプの先駆例となる可能性もある。

鉢では、中期のBタイプの系譜を引くB1タイプとB2タイプ、中期にはみられなかった受口状口縁壺と、系譜的につながるGタイプがみられ、Gタイプがその中でも主流を占めている。Dタイプは、中期のものに比べ、深い碗状を呈し、凹線文の手法は完全に後退し、内外面をハケによって調整している。二ノ畦遺跡でも、いまだ凹線文を廻らすものが主流を占めており、若干の変化を示している（文献16）。中期のBタイプの系譜を引くB2タイプでも、プロローションの変化とともに、無文化が進んでおり、変化の状況がうかがえる。Gタイプでは、中期のB1タイプが受口状口縁壺の影響を受けて、新たに成立した器種であり、脚台のつくものと、つかないものがある。体部がすぼまりのを除けば、成形手法や文様構成など、甕Bのそれと、ほぼ共通したあり方を示している。ただし、第2口縁については、すべ

て、内傾している。

器台については、中期には全くみえないもので、この時期に出現したものとみられる。比較的大形で、丈も高く、円筒状を呈するものが多い。ただ、その出土例は、いまだ少なく、一般化はしていない。

壺には、畿内に一般的なAと近江に特有なCタイプ、受口口縁をもつBタイプの大きく3器種に分類できるが、その大半はBタイプである。Aタイプには、A1とA2の2タイプがあり、A2は、この段階では、突出した厚い底部をもち、スリムなプロポーションをもつが、A1では、体部上半が球形化し、平坦な、薄い底部をもっている。A2は、外面に横位のタタキを全面に記すものもあり、中期とのちがいを示している。Cタイプの出土は少なく、衰退過程にあるとみられるが、ほかに小型のものが多くなる傾向はある。Bタイプでは、一部古いものも含むが、すべてB3タイプで、その大部分が、外面を刺突列点文、直線文、波状文などによって加飾したもので、文様をもたない無文化したのも、若干みられる。そして、第2口縁が、やや水平になるものが増加していること、腹部最大径が、中位にあり、口径より、かなり大きくなっていることなど、中期のものとの大きな相異点と言える。

c. 上層出土土器

上層出土資料は、16点で、器種も限定されており、ほぼ下層、中層の資料との差は認められない。ただ、傾向としては、若干新しい様相もあり、簡単にふれておきたい。

まず壺では、資料そのものが少なく、ほとんど実態は明らかでないが、長頸壺とみられるE163は、中層のものに比べ、やや小型化しており、定型化の傾向がうかがえるようにも考えられる。高杯では、B、Cタイプがなく、E168のように、後期後半に一般化するCタイプとみられるもの出土が知られ、混入の可能性も考慮する必要があるが、新しい要素と言える。また鉢でも、Dタイプがなく、Gタイプのみになっており、壺においても、B3-Ⅲのみしかみえず、或いは、新しい要素と言えるかも知れない。

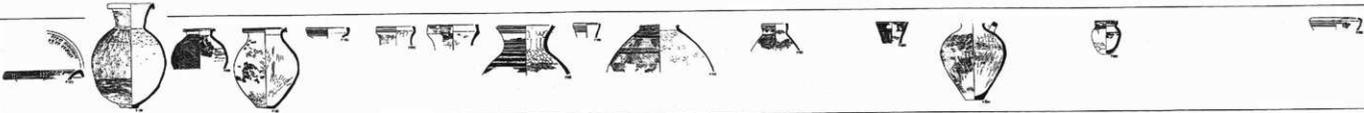
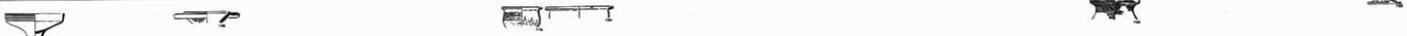
d. 小 結

以上みたように、S D201出土土器は、大きく、上、中、下の3層に分けて、取り上げたが、層位間において、ほとんど差異は見い出せず、それほど長い時間を経過せず、相ついで投棄され、埋没したとみられる。そしてその様相においても、一部中期に遡及する土器も残しているが、器種構成および各器種の形式において、中期のものとは異なるあり方を示すと同時に、典型的な後期の様相は認められず、近江では、これまで良好な資料に恵まれていない、後期初頭の比較的まとまった資料とすることができるよう考える。そこで、かかかかる推定を裏付けるため、畿内の資料との対比をしておく必要がある。

畿内においては、中期から後期にかけての様相について、東大阪市の西ノ辻諸地点(N、I、E、D)の諸資料によって、唐古編年を細分するという研究が存在することは周知のところ(文献17)であるが、近年、近畿地方の弥生土器について、包括的に論じた井藤暁子氏も、西ノ辻N式を、第Ⅲ、Ⅳ様式の第4段階の土器、西ノ辻I、E(D)式を第Ⅴ様式の第2段階に位置づけ、最近の主として河内の資料を使用して、その様相を分析されている(文献18)。

まず西ノ辻N式については、特にN地点でみられる壺Aをとり上げ、それが河内の踏跡において、漸次的に、簡られないものに変化していることを指摘し、N式がその段階を画すものと再確認し、西ノ辻N式段階を、形態は中期でありながら、無文化がすすんだ段階として位置づけられた。また、西ノ辻I式については、西ノ辻1265番地出土資料など、最近の資料や、高杯の形態などから、西ノ辻E(D)式とともに、第2段階に含めて理解すべきことを提唱されている。

一方、森岡秀人氏は、近年の調査例の増加によって生じてきた、弥生土器の編年にかかわる問題点の1つとして、横

C区住居跡 (SH012)	
B区住居跡Ⅰ期	
SD201	
B区住居跡Ⅱ期	
C区住居跡 (SH012)	
B区住居跡Ⅰ期	
SD201	
B区住居跡Ⅱ期	

第48図 服部遺跡中期末～後期初頭の弥生土器

式間にみられる中間様式土器群の存在を論じた中で、中期から後期への脈絡がたどれる資料を一部提出した上で、西ノ辻N式の段階で、すでに各器種において、後期への傾斜がみられ、西ノ辻I式も、そのパターンと解釈しうること、中間相を占める土器群には、壺の分裂、多様化の過程、高杯統合のプロセス、水差、無頸壺の消滅、器体小型化の状況などが看取されることを指摘されている(文献19)。

井藤、森岡氏の指摘には、その立脚する編年観そのものに、ちがいが露呈しているものの、中期から後期への過程を、より具体的な過程として、段階的にとらえようとする立場は共通しており、ここでは、両氏の指摘された土器群と、SD201の土器群を対比することによって、SD201の畿内における、大まかな位置をさぐっておきたい。

まず、西ノ辻N地点の土器群(文献20)は、壺、鉢、台付鉢、高杯、甕の12点からなり、甕を除き無文化がすすんでいる。ただ土器の形態そのものは、明らかに中期的な様相を強く残しており、かなり後期的様相が顕著となっているSD201の土器群とは、一線を画するものである。SD201の壺Aは、必ずしも対比できる資料はないが、罐面の垂下も短かく、完全に加飾を失っており、段階のちがいがうかがえるし、高杯や鉢においても、中期的な様相を残すもので、明らかに形態的な差異が認められる。ただ甕では近い形態をもつものも、一部認められるが、全体的には、一段階以前の土器群としてとらえることができるのではなからうか。

次に、森岡氏が、第IV様式に限りなく近い第V様式初めの土器群と評価された、亀井遺跡SD06出土土器(文献10)との対比を試みたい。まず甕では、西ノ辻N式に形態的には近いが、完全に無文したものが主流を占めており、SD201の資料にくらべ、より古い様相を示している。ただ、SD201で、壺Jとしたものに類似する例が亀井にみられるが、口頸部のみで、全形はうかがえないため、断定はできない。

高杯では、A3タイプとA4タイプが共通して存在し、形態、手法的にも近い様相を示している。SD201にB2タイプがみえる点を、新しい要素とみるかどうかについては、B2タイプの動向が明らかでなく、判断は保留しておきたい。

甕では、共通する点も多いが、SD201には外面にタキを明確に残すものがあり、やや新しい要素と言えるのかも知れない。

以上のように、亀井遺跡SD06の資料と、SD201の土器群を対比するなら、共通する点は比較的多いが、高杯や甕などにおいてSD201の土器が、やや新しい要素をもつことが指摘できた。そこで、同じく森岡氏が、SD06より一段階新しいとされた、亀井遺跡SD04のV層とIV層の土器群(文献10)と比較を試みたい。

まず壺では、AタイプのV層のものに、親縁性のあるものが含まれているし、V層の中期的要素を残す短頸壺についても、SD201と、ほぼ同じ傾向を示している。そして、直口壺のJタイプには、V層に類似したものがあつて、細頸壺、長頸壺の様相も共通点が多い。高杯では、IV層にB2タイプの類例とみられるものがあつて、注目されるが、甕においても、A1タイプの中期以来の系譜を引くものほかに、A2タイプのように、新しい要素をもつものもあり、共通性が認められるのである。

以上の簡単な検討により、亀井遺跡SD04、V、IV層の土器群は、ほぼSD201の土器群と共通する様相をもつことが、明らかになった。そこで次に、井藤氏が、西ノ辻I式にかえ、第V様式の第1段階に位置づけられた、西ノ辻1265番地の土器群(文献21)との対比を試みてみたい。

壺では、中期の様相を残す凹線文や疑凹線文をもったものほか、無文のものもみられ、SD201と、形態などでは必ずしも共通性はないが、似た状況がうかがえよう。高杯では、SD201のものに、明らかに古い様相があるが、数量的に少なく、十分に対比できない。これに対し、甕の資料では、短かく外反する口縁部をもつことや、罐面を拡張する手法など、類似点も認められる。したがって、必ずしも明確でないが、大局的にみれば、西ノ辻1265番地の土器群は、S

D201の土器群と、ほぼ併行する資料として、理解することができるように考えられる。

以上のように、西ノ辻1265番の資料についても、かなり高い共通性のあることが明らかになった。このことは、森岡氏の言われる様式間土器群の存在を、更めて裏付けるように考えられるが、ここでは、一応S D201の土器群と併行することを確認するにとどめたい。

(2) 住居跡群出土土器

上流地域（B地区）で検出した住居跡群はS D201と同じくさきに詳しく述べられているように、中期後半後葉の洪水によって、中期後葉の方形周溝群を厚くおおうことになった、青灰褐色シルト層を地山として形成され、後期前半の洪水により、再び埋没するまで、かなり短期間に営まれたものであり、住居跡相互間の切り合いも少なく、建て替えも、基本的には、1回しかなされてない。ただ、この間にS D201の築造がなされ、一部の住居跡が削平を受けており、遺構的には、S D201の掘削の前後で、2つの小期に纏められると考えられる。

事実、住居跡出土土器には、必ずしも顕著ではないが、新旧2群に分離できるようである。

a. I期の土器

必ずしも良好な資料ではないが、S D201の土器群より古い様相をもつものとして、SH117出土の壺G（F035）、S D118の壺G（F036）、壺B3-I（F044）、SH129の壺E（F069）、SH135の壺G（F073）、SK203の高杯B（F086）、台付無頸壺A（F087）、壺B2-II（F089-F090）などの一群の土器、SK208の、壺A2（F097）、壺G3（F098）、壺B2-II（F101-F102）などの一群、SK209の壺F（F103）、S X205出土の高杯A2（F117）、SK208出土の壺A2（F130）などが指摘できる。中期の様相をより強く残した土器群といえる。

壺では、包含層出土に、凹線文を多様したA1タイプ（F131）があり、S D152に類例のあるものであるが、A2タイプのF097、F130が注意される。若丁プロポーションは異なるが、口縁部は垂下する手法、球形或いは無花果形の体部、凸出した底部外面の丁寧なヘラミガキなど、共通点も多い。F130は河内の西ノ辻N式の壺Aにやや近いもので、中期末に比定されるものである。

F069も、中期の形態をよく残した壺Eである。S D251やS D152では、口縁部内外面、体部外面に、羽状列点文、直線文、波状文等による加飾の著しいものが主流であったが、F069は、無文で、内外面ともハケによる調整のみであって、球形化したプロポーションとともに、時期差がうかがえる。このことは、F103や、包含層出土のF124など、壺Fについても、同じように指摘できる。全形のうかがえるF103では、11線部の凹線文による加飾がみられるが、体部は全く無文化しており、S D152のものにくらべ、やや新しい様相を示している。

壺Gでは、F035やF098のように、凹線文の顕著でないものや、F073、F133などのように凹線文を多用するものもあり、S D152などで一般的なものである。受口壺Hについては、口縁部の良好な資料はないが、F113のように、二ノ畦の資料（文献16）などにみえる定型化したもので、S D152などのものとは、やや時期差をもつものと言えよう。

壺Iでも、包含層出土のF126のように、S D152のものに類似するものもあるが、特に、注目すべき点は認められなかった。

高杯では、BタイプのF086や、凹線文を多用したA2タイプ（F117）が、中期に遡る資料であり、F117は、下之舞環濠2（文献3）や二ノ畦の資料（文献16）に近いものであろう。

鉢でも、Aタイプ（F086）、B2タイプ（F021）、B1タイプ（F105）など、中期の土器として明確なものが認め

られるほか、F 020のように、Bタイプと受口状口縁のGタイプの中間的なものがあり（B 4）、過渡的な性格がうかがえる。

壺の場合は、Aタイプでは、F 096やF 112のように、S D 201のものにくらべ、古い様相をもつものがあり、Bタイプでは、F 044、F 088～F 090、F 100～F 102、F 123等々、B 3-IないしB 3-IIタイプのものがみられるほか、F 081やF 115のように、B 3-IIIとみられるものもあって、Cタイプの存在とともに、S D 152などの土器群との中間的な様相をもつものも認められる。

以上のように、I期とした住居跡群の土器群は、S D 152など、中期後葉前半の土器群とも、共通性のあるものも含み、必ずしも良好な資料とすることはできないが、CE 1区で認められた、やや新しい様相をもつ土器群や、二ノ畦遺跡の資料（文献16）などに対比のできるものも含んでおり、I期の住居跡群が、S D 201の土器群に先行して、中期末に成立したことをうかがわせる。

b. II期の土器

一定、S D 201の土器群に併行するとみられるものをII期としたが、上述のように、I期とみられる土器群はきわめて少なく、大半の住居跡から出土した土器は、ほぼS D 201のものと併行することが知られる。

まず壺では、Fタイプは、S D 201のものと同様、F 047やF 116のように、口縁部が短かく外反するものが主流を占めているし、受口壺Hタイプの例としては、F 048がある。S D 201で新しく加わった短頸壺AとしてはF 132、Jの例としてはF 028がある。

高杯では、A 3タイプ（F 134）、A 4タイプ（F 058）が、S D 201に類例がある。

鉢では、Bタイプのほか、受口状口縁をもつGタイプ（F 013、F 053、F 059、F 067、F 111）がみられるほか、F 034、F 041のように、Bタイプの変形化とみられるものがある。

甕では、Aタイプ（F 033、F 060、F 077、F 087、F 091、F 099、F 110、F 114、F 121、F 128）が量的にも多く、S D 201との共通性が高い。Bタイプでは、S D 201にあった無文系のものはなく、ほとんどが、B 3-IIIタイプ（F 007～F 009、F 042、F 062）で、その数も多くなかった。

以上のように、II期とした土器群は、S D 201と共通した要素をもつとみられ、S D 201の埋没過程と、住居群の廃絶が、ほぼ併行関係にあったことが判明する。

c. 小 結

以上の検討によって、上流地域の土器群については、おおよそ、新、旧の3群に細分されること、それが、遺構の切り合い関係や、S D 201との切り合い関係と、ほぼ一致することが明らかになった。したがって、弥生中期の末に集落形成をはじめた、上流の集落は、おそらく中期から後期への転換期に、S D 201という、おそらく集落の大半を環状にとりまく溝を掘削し、本格的な集落を形成したことが、土器の様相からも、裏付けられることができる。

（大橋美和子・大橋信弥）

VI. まとめ

A. 集落の構成

(1) 中期後半の集落

中期後半の集落は、下流域東端に集中し、環溝A、Bによって圍繞されているが、D地区西端にも、一部検出されているから、大きくは、2つのグループに分類される。ただ西端のものは、旧河道等の削平もあって、数棟の竪穴住居跡を検出しただけで、出土遺物もほとんどなくここでは東端のものを中心に検討せざるを得ない。上述のように、上流域と異なり、下流域は、本来的に地山面が高く、地表下1m前後で、奈良時代、平安時代をはじめ、弥生時代後期の遺構面を検出し、さらにその直下で、弥生時代中期の遺構を多数検出しており、複雑な様相を呈している。特に弥生時代中期の集落跡は厚い包含層の存在等によって、その検出がきわめて困難であった。このため竪穴住居跡で、その全様の把握できるものは、きわめて少なく、したがって、集落の構成や、竪穴住居跡の構造、或はその変遷を、適確にとらえるのは、きわめて困難であった。したがって、以下の検討も、多くの留保点のあることを、あらかじめことわっておきたい。なお、中期後半の集落の下層からは、中期中葉の方形沼溝墓が検出されており、その間に一定の断絶が想定される。

2. 集落と環溝

上述のように、この集落はSD151、SD152というV字溝により圍繞されており、いわゆる環溝集落とすることができると。これをあえて、環溝集落としなかったのは、SD151が幅2.8m-3.2m、SD152が幅2.5mと、上幅で3m前後であって、普通の大人であれば、助走をつけ飛び越すことができるからである。溝と呼ぶ以上、本来的には、人間だけでなく、動物などが容易に飛び越えられないものであるとみられ、5m以上のものに限定する必要があると考えたからである。それでは、集落を圍繞する環溝の機能はどのように理解できるであろうか。一般に集落とその他の施設、たとえば墓地や耕地を区画する傾向は、いくつかの例により確認できるが、それと同時に、服部遺跡のように、大川川の影響を強く受ける地域では、恒常的な排水施設として、村の周囲に溝を掘削する必要があったとみられる。そして、それが外敵に対する簡易な防衛施設の役割も果たしたとみられる。

今、仮りに、これらの環溝が、円弧を描くとして、SD152が、径200m、SD151が、径400mの規模を有するとみられ、それぞれの内部の広さは、30,000㎡、120,000㎡と推定され、かなりの規模を有することが知られる。

そこで次に、集落内部の状況については、上のように復元される環溝集落のうち、今回調査を実施したのは、その西端の一角にすぎず、しかも、集落を廃絶させた洪水の影響や、後世の削平により、そのうち3分の2は遺構の検出ができていない。したがって、調査上の問題点を含めて、集落の規模や構造を具体的に検討することは、断念せざるを得ない。そこで、ここでは、SD151、SD152の切り合いや、出土土器によって、集落の変遷過程に視点をすえて、若干の検討を加えるにとどめたい。

b. 集落の構造と変遷

まず、大ざかみに言って、下流域東端で検出した集落跡は、3つの段階に区分される。すなわち、第1段階は、SD151（環溝A）により圍繞された段階で、推定径200m前後の範囲が、一応推測される。第2段階は、SD152（環溝B）掘削以降で、径400mの範囲まで集落が南に大きく拡大した段階、第3段階は、洪水による、一時的な断絶の後に再び形成されたもので、具体的な状況は、ほとんど判明していない。これらは、環溝とみられる2本の溝の切り合いと層序から、一応推定したものであるが、実質的に集落を囲む溝を検出したのは、D地区周辺に限定されており、C地区では、堅穴住居跡の分布状況より、復元せざるを得なかった。ただ堅穴住居跡のうちSD151の内側に分布するものと、SD151とSD152の間に分布するものは、後述するように、大きな時期差は認められなかったが、SD152の内側に含まれるとみられるC地区の堅穴住居跡は、やや後出するとみられ、上の推定を裏付けることが出来た。

以上のように、中期後半の集落は、順調に拡大したことが推測されるが、今回明らかになったのは、集落の西端の一部にすぎず、集落の構成を具体的に明らかにすることはできないが、各段階に分けて、集落構成上の特質を簡単に指摘しておきたい。

(i) 第1段階

まず第1段階では、DE1、DE2で計30棟余の堅穴住居跡をはじめ、土坑8基、溝35条などが検出されている。このうち、堅穴住居跡9棟前後が他の住居跡と重複しており、半数前後が、第2段階以降の可能性をもつ、したがって、この段階の集落密度は、それほど大きいものではなく、平均数m間隔で散在すると言えよう。そして明確ではないが、SH036、SH046、SH043、SH048などのように、空閑地を囲むように、数棟の堅穴住居跡が散在しており、一つの単位をなしている可能性が高い。住居跡の形態や構造については、その検出状況から、必ずしも、明確に把握できないが、平面プランは円形で、その規模も、径7.0m～8.0mのものが大半を占めている。柱穴の明らかになったものも、ほとんどなく、壁溝とみられるものも皆無であった。住居跡の周囲には、大、小の土坑が散在するほか、部分的に小溝が走っており、集落内の様相を一部うかがうことができる。床面に炭化物や、焼土の広がるものも多いが、明確に火災にあった痕跡を示すものはなかった。

出土遺物は廃棄後投棄されたものではなく、量的にも少ない。土器では、壺、甕類が多く、一部ミニチュア土器の出土が目された。また、この段階の出土遺物で注目されるのは、石製品が比較的豊富な点である。鉄剣型の石剣をはじめ、各種の石斧類、砥石などのほか、玉つくりにかかわる石器の出土もあった。ただ、石錘や石包丁は、ほとんど出土しなかった。別に検討しているように、SD151下層の土器群は、中期中葉終末の様相を示しており、かかる石製品のあり方から、武器、工具の鉄器化が、しだいにすすむ状況を裏付けると言える。

住居跡の分布をみると、SH019～SH024、SH029、SH030、SH033、SH034などからなる一群、SH024～SH027、SH032、SH049など一群、SH040～SH051さらにSH052、SH053の一群など、大きく4つのブロックがみられ、それぞれの間に5m前後の空白がある。これは、必ずしも根拠はないが、集落内の通路的なものと理解されるかも知れない。そして、それぞれのブロック内に、若干の空閑地があり、屋外土坑がそこに集中している点も注意される。なお住居跡の重複は、一部3回のものもあるが、大半が2回で、隣接するものが、2分の1、ないし3分の2重複しているものが多く、同一箇所建て替え、拡張と考えることができよう。したがって、建て替え後の住居跡は、SD151の廃絶後、SD152に対応してつくられた可能性も考慮する必要がある。

(4) 第2段階

次に第2段階とみられるものは、チ-I区とリ-I区の一部で検出した、SH056-SH080の住居跡群である。これらは、SD151の外、一部はSD151を埋め立てて築造をみており、SD152によって、圍繞される住居跡群である。ただ、たびたび指摘するように、この地区における遺構検出は、包含層も厚く、後世の削平により、かなりの擾乱もあって、きわめて困難な状況にあった。特にSD151の上層で検出した住居跡については、SD151の上層と擾乱、重複しており、住居跡と断定するには、かなり問題の残るものであった。そして、これらの中で、比較的良好な状況で検出し得たのは、SH061、SH063の2棟であり、框言すれば、この地区で住居跡と断定できるのは、この2例に尽きるとも言えるのである。それはそれとして、このような状況では、これらの資料から、まともにSD152に判る集落の構造や、規模を論ずることはできないが、若干の問題点は指摘しておきたい。

まず、SD152との関連については、別に詳しく述べられているように、それぞれにおける出土土器の共通性はきわめて高く、SD152の本来の機能が、ある程度失なわれて以降、その内側に所在する集落より、投棄されたことがうかがえる。SD152の掘削については、SD152Bとした部分における、SD151との重複関係からみて、SD151により囲まれた集落が、集落規模を拡大する過程において、新たに掘削されたことをうかがわせている。この拡大が、その環溝のあり方から、南側へ大きく広がったことがうかがえるが、CE区における、いくつかの遺構が、その土器の様相からSD152の土器群より、一段階降るものと考えられることは、集落の南への拡大という推定を裏付けるものと言えよう。

まず住居跡の形態は、検出状況の良好なSH061、SH063などは、径7.5-8.5mの均正な円形の平面形を呈し、深さ20cmと残りはきわめて悪かった。いづれの場合も柱穴は、かなり認められるが、柱穴を特定することはできなかった。SH061には壁溝が認められるほか、SH061には南壁に接し、SH063の場合は北東壁に接して屋内土坑が検出された。このような壁面に接して検出される土坑は、SH062や、SH068、SH087などでも認められ、いわゆる出入口に伴う施設となる可能性が推測される。焼土、炭化物の広がりや床面で認められたのは、SH061、SH065、SH068などであるが、いづれも火災等の痕跡は示しておらず、炉の施設にかかわるとみられる。その他の住居跡については、若干の問題は残るが、SH058、SH059、SH067、SH072など、平面形が方形を呈するものがあることが注意される。CE区においても、SH017、SH018のように方形プランとするものもあり、一辺が4-5m前後と、やや小規模であって、別途の機能もつか、形態の変化を示すものか、判然としない。

住居跡の分布については、SD151に重複するものを除外した場合、およそ3つのブロックに分けることができる。第1群はSH057-SH059、SH079、SH080などのグループ。第2群は、SH061、SH062、SH056、SH067の一群。第3群は、SH063、SH068、SH070-SH072などの一群で、それぞれ、幅5m前後の空間地をはさんで群集している。これらは、第1段階としたグループとも、ほぼ同じような空間構造をとっており、空間地は通路と理解できるであろう。住居跡の重複関係は、それぞれのブロックで1-2回の重複がみられるのは、第1段階のものと同じである。

住居跡からの出土遺物は比較的多く、齧変頻が、80%強を占めているのは、第1段階としたものと同様である。石器では、瓦石の出土が多い点が注目される。SH062で1点、SH065で2点、SH067で3点と、間接的に、鉄器の普及を裏付けるかも知れない。

(4) 第3段階

次に第3段階としたのは、CE区で検出した、SH001-SH018の住居跡である。これらは、SD151の外、新しく築造をみた、SD152の内側に築造されたもので、別に指摘しているように、これらの一群の中には、SH003やSH012の出土土

器のように、SD152 出土土器より一段階新しい様相をもつ土器群を出すものがあり、一部 SD152 廃絶後に築造されたことが確認できる。

この地域においても、後の洪水や遺構の重複もあり、遺構の検出は、かなり困難で、遺構の残りも、かなり悪いものが多かった。特に SH004-SH011 までは、その一部が残存するだけで、具体相は知ることができなかった。

住居跡の形態は、必ずしも残りが良くないため、ややいびつなものもあるが、基本的には円形プランをとるものと考えられる。特に SH003 は、中央に炭化物、焼土のはいた土坑をもち、主柱穴の一部とみられる、2本の柱穴もあり、実態が判明する例である。SH017、SH018 が、方形プランをとるほか、その他のものは、本来円形プランをもつものであろう。ただし、住居跡内の施設の判明するものは、ほとんどなかった。

住居跡の分布は、検出された住居跡が少なく、特に指摘できる点はないが、一応3つのブロックに分類できる。第1群は SH001-SH003 で、第2群が SH012-SH016、第3群が、SH017、SH018 である。第1群では、住居跡の間いくつかの屋外土坑が分布、第2群でも、北西に屋外土坑群が分布、第3群の西側にも同様に屋外土坑群が分布しており、それぞれのブロックの間には5m前後の空地が推定される。

住居跡の重複は、ほとんどなく、SH001、SH002 の間に重複がみられる程度で、第1段階、第2段階にくらべ、住居跡の密集度も小さい。これが、集落構造や時期差と、どのようにかわるのかは、資料の少ない現状では、保留するほかはない。

住居跡の残りが悪いこともあり、出土遺物も多くないが、土器では、やや壺類が空をさまわっている程度で、特に問題点はない。石製品の出土は少なく、SH014 で砥石1点の出土が知られるだけである。

(b) 小結

以上、3つの段階に区別して、集落の構成と変遷を概観してみた。そこで明らかになった点をまとめてみると、

- (1) 住居跡は、各段階を通して、ほぼ円形プランをとるものが多く、一部方形プランをとるものも出現しているが、必ずしも時期的な差異は示していない。
- (2) 住居跡の内部構造については、詳細は明らかでないが、一般的に壁溝をもつものは少なく、壁面に接して屋内土坑をもつものがやや目立つ程度であった。
- (3) 住居跡の分布は、第3段階を除き、やや密度が高いが、重複するものは1-2回程度であった。
- (4) 住居跡は、数棟で一線を構成している模様で、それぞれのブロックの間には、5m以上の空地があり、通路的な機能が考えられる。
- (5) 集落の変遷についても、必ずしも明確にできなかったが、SD151 により囲繞された段階、新たに SD152 が掘削され、集落が市へ大きく拡大した段階、SD152 が廃絶して以後、新たに集落が形成される。大きく3つの段階が一応確認できた。

c. 集落と墓地

以上のように、中期後葉の集落は、ほぼ3つの段階で変遷してことが、おおよそ明らかになった。ところで、この集落に対応するとみられる墓地が、調査域の北端と南端に分布しており、次にそれとの関連が問題となる。

南端の墓地は、SD151、SD152 で囲繞された集落の南西250mに広がるもので、中期中葉まで存続した広大な墓域に含まれない、前期から中期初葉まで存続した水田跡が、中期初葉の大洪水により、厚いシルト層におおわれた地点に、独立的に群形成したものである。

検出された方形周溝墓は13墓のみであるが墓域の東西を、旧河道A、Bが、大きく削平しており、本来はさらに東西に墓域の広がっていたことは否定できない。したがって、群構成としては、東西に、4墓前後が並行して築造されたと考えられるが、その中で、M002のみが、台状部の一辺が20m余をはかり、外周で、径31mをはかる、円形の周溝をめぐらしており、群全体の盟主的な存在とみられる。これらの点より、南端の墓域は、4つの集団の墓地で、それらの中でも、M002に葬られたのは、これらの集団より、抜きん出た地位にあったことが知られ、この段階の集団内における、階層差の顕現として注目される。服部遺跡の場合、中期前葉後半から中葉前半までの墓域においても、同じように、群内において、抜きん出た規模の墓が認められるが、M002の場合には、その形態や、規模において、質的、量的な差があって、社会の大きな変化をうかがわせる。

南端の墓域では、比較的良好な供献土器の出上があり、その詳細については、V章において検討されているが、それを結論的に述べるならば、SD151の下層土器との共通性は、ほとんど認められず、ほぼSD152の上器群に併行するとみられ、SD152の割削により、集落が南へ拡大したと関連すると考えられよう。しかしながら、その形態や、文様構成を細かくみた場合、南端の墓域の供献土器にくらべ、SD152の土器群は、やや異質であって、SD152で囲まれた集落とは別個の、未知の集落に伴う可能性は、必ずしも否定できないと考えられるのである。ただ、南端の墓域のあり方から、墓地が集落から、かなり離れた、低平地に営まれていること、集落の状況からは、全くうかがえない、集落内における社会の変動が、若干看取されたのである。

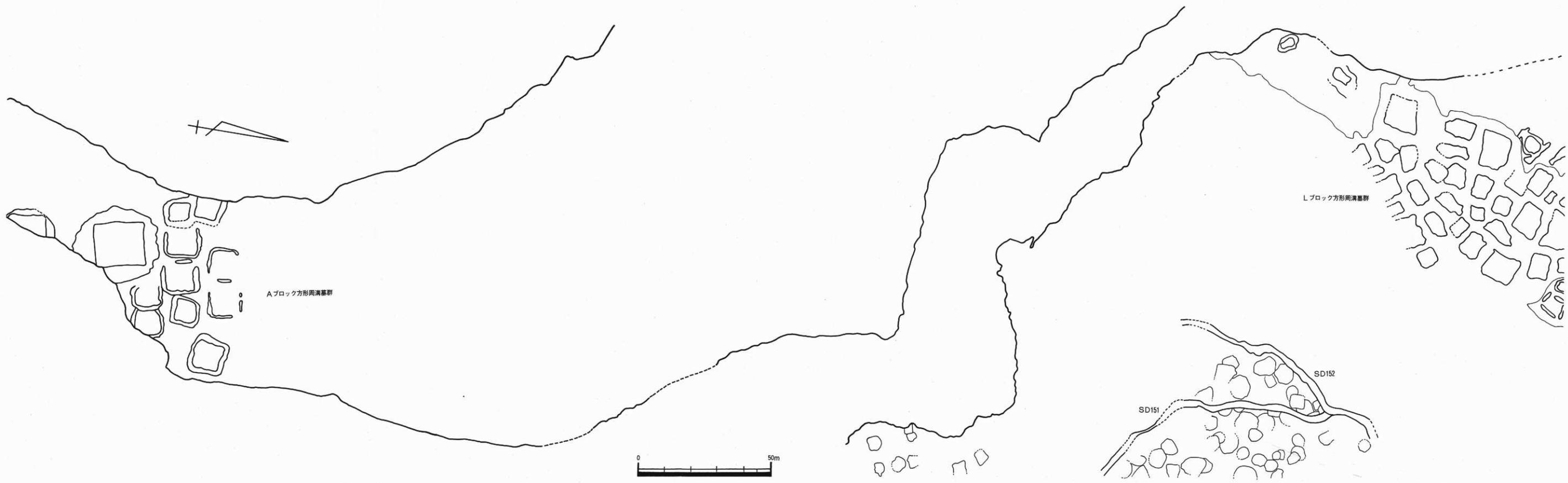
次に北端の墓域は、SD151、SD152で囲まれた集落の北西50-60m付近から北西に広がっており、総数41基を数える。西側を旧河道Cが走り、北側の調査域の外にも分布する可能性があり、さらにその数は増加するものとみられる。周溝は、すべて共有の形態をとっており、空閑地もないため、群構成は明確でないが、土壌の同一性などから判断するならば、数基単位で小ブロックを形成しており、7-8のグループに細分可能かと思われる。そして、その中には、M398、M409、M432のように台状部の一辺が、12-14m前後の規模をもつものもあって、集団内における較差の存在をうかがわせるが、南端のM002のような、抜きん出た位置を占めるものは、認められなかった。ただ、M398の周溝の形態がやや異質であること、供献土器に、少し古い様相がみられることなど、若干注目されるところである。

供献土器については、別項において述べているように、南端のものに比べ、やや幅広い時期のものを含み、SD152のみではなく、SD151と共通性をもつものも、比較的多く認められ、SD151の段階から造墓を開始し、SD152の時期に盛期を迎えていることが、検測されるのである。そして、上にも指摘したように、土器の形態や文様構成等においても、SD151の上器群と共通点が多く、これらの集落の墓地と考えると、ほぼ間違いないように考えられるのである。

上述のように、北端の墓地は、中期中葉前半の洪水により、それまで存続していた、広大な墓域が埋没した後、再び造墓活動を始めたものであるが、SD151やSD152のすぐ外側に造られなかったのは、前代の周溝墓が、完全に埋没せず、一部露見していたため、それよりさらに北側の空閑地を占地したとみられる。

なお、これは、北端の墓域だけでなく、南端の墓域についても指摘できる点であるが、服部遺跡で検出された、360基以上にはる方形周溝墓のうち、SD151やSD152に伴う集落にかかわるものは、そのうちで、わずか54基にすぎず、残り300基余については、中期前葉後半から、中期中葉前半の間に築造されたものであって、新しい段階の墓地が、かなり規模を縮小していることである。このことは、南端におけるM002の存在と関連して、集団内における被害者集団の変化などを反映する可能性は大きいものとする。

いずれにしても、かかる集落に伴う墓域は、SD151に伴う集落の段階では、北端のみ存在したが、SD152の段階においては、北端だけでなく、南端においても、新たに墓域が形成され、集落の拡大と、墓域の拡張が、ほぼ連動していることがうかがえるのである。そして、墓域のあり方から逆に、この段階における集落内の動向が、一部推定されたの



第49図 弥生中期後半の集落と墓地

である。

(2) 中期末～後期初頭の集落

中期後葉後半に、C、D地区東部にあった集落と、北端と南端に分布していた墓域が、大規模な洪水により壊滅し、調査域における遺構は一時的に中絶したとみられる。そして、中期末ごろ、かつて、中期後葉の南端の墓域が分布していた、A地区の厚い洪水堆積土を地山として、再び集落形成が開始された。この集落は、主として円形プランをとる堅穴住居跡40棟、土坑17基などからなり、調査区の西よりを、一部の住居跡を掘削して、SD201が、南北に伸びている。この集落は、上述のように、後期前葉末には再び洪水によって廃絶しており、その後、後期後半以降に、再び大規模な堅穴住居跡群が、若干の間層をもって形成されており、遺構の検出がやや困難であった。特に最終的に遺構面を確認した前段階においても、若干の遺構を検出したが、最終遺構面では残存しなかったものも、一部あって、本報告では、出土遺物のみしか、掲載できなかったものもある。ただ最終遺構面としたのは、橙褐色の粘質砂土で、遺構の埋土である暗黒灰色粘土とは明瞭に判別され、上述の不確定な遺構については、一応、当面の検討からは除外せざるを得なかった。

a. SD201と集落

調査地の西端を南北に走るV字溝SD201は、幅1.3～2.6m、深さ0.8～1.6mをはかる人工的な水路で、一部の住居跡を削平しているところから、集落が展開する、ある段階に造成されたことが判明する。この地区の調査時点では、その全様がうかがえなかったが、その後の調査で、SD201が、A、B地区の内端を大きく弓なりに湾曲し、推定径350m以上の環溝になる可能性も生じた。ただ西半分は、旧河道Aにより、大きく挟られていることもあり、その内側の様相は全く判明しないことや、検出した遺構の大半が、SD201の外側に存在すること、さらにマクロ的には環状になる溝が、ミクロ的にみれば微妙に内、外溝をくり返し蛇行していることなどを考慮するなら、必ずしも環溝としなくても、この集落の西側の排水溝としての機能をもつものとも考えられよう。

SD201の層序は、おおよそ上、中、下の3層に分かれ、上層は、中、下層と異なり、炭化物をわずかに包含し、砂土ないし砂質土を主体としており、出土遺物も、ほとんどなかった。洪水等による自然堆積と考えられよう。中層は、粘土、粘質土を主体とし、炭化物もかなり多く、大半の土器が、この層に含まれていた。これらの点より、中層の段階で、SD201が最も機能を果たし、一部埋没しつつあることがうかがえる。下層は、砂層および泥土層を主体とし、炭化物を若干含むほか、遺物の出土は、きわめて少なかった。溝掘削時の地山流入土や、掘り返し後の残存土と理解できよう。しかも、中層の遺物についても、必ずしも廃絶後に投棄されたのではなく、量的にも少ないところから、何回も掘り返されて、長期にわたって使用されたことがうかがえるのである。また、出土遺物の大半が集落の分布する、イ、ロ区に集中していることは、SD201と集落の密接な関係を示すものであろう。

b. 集落の構造と変遷

上述のように、A区、B区で検出された集落は、中期末から後期初頭の短期間に存在したものであるが、人工的に掘削され、この集落と遺構にも深いかわりをもつSD201が、一部の堅穴住居跡を掘削して築造されているところや、住居跡出土遺物とSD201の出土土器との比較により、この集落がSD201掘削の前後において、二つの段階に区別することが可能と考える。ただし、集落の構成や構造、或は住居跡の形態などで、両者を区別することは、きわめて困難で

あって、SD201との切り合い、遺構相互間の切り合い、それに出土遺物の検討により、おおよその区分をせざるを得ず、一つの試験の域を出るものではない。

(i) 第1段階

まず、第1段階と考えられるのは、SH105、SH107、SH108、SH114、SH117、SH119、SH125、SH129などの堅穴住居跡のほか、SK203、SK208、SK209、SX208などの土坑、落ち込みである。これらの遺構は、検出した集落のやや西よりに集中しており、SD201の存在を無視した分布状況を示していると言えるが、第2段階のものとはほぼ同じように、各住居跡間の間隔は、ごく一部のものを除き、5.0m前後であって、かなり散在したあり方を示している。そして、必ずしも明確ではないが、やや大型のSH118を中心に、その周りに他の住居跡がかこむごとき形態をとっており、集落内の一単位とできるかもしれない。

住居跡の形態や構造については、SH118、SH125が比較的良好な検出状況を示している。SH118は、一応SH119と重複して検出されたが、検出状況を検討するなら、これらは必ずしも2棟の住居跡とは言えず、SH118としているのが、この住居跡の当初の形態で、後にこれを北側に拡張したのが、SH119とした部分と理解できると考えられる。一応当初の形態でみるなら、ほぼ正円のプランをとり、幅48cm、深さ25cmの壁溝をめぐらし、西壁に沿って、東西3.0m、南北2.4mの浅い屋内土坑がつくられ、壁溝とつながっている。屋内の中央には、径75cm、深さ38cmの炭化物を大量に埋積した土坑があって、その周りに、ほぼ等間隔で、径60cmの支柱穴が、3ヶ所検出された。また、南側に、半階円形の張り出しがある、西壁沿いの屋内土坑については、入口に伴う施設とも考えられるが、必ずしも確認できなかった。

一方、SH125の場合は、SH119と同じく、幅35cmの壁溝をめぐらし、均正な円形プランをとり、中央に焼土、炭化物を大量に含んだ、屋内土坑をもち、その四りの4ヶ所で、径70cm前後の支柱穴を検出している。支柱穴のうち、南と北のものには、礎板が認められ、当時の地山が、いまだ十分に安定していなかったことがうかがわれる。そして、SH125で特に注目されるのは、壁溝内に、径10cm前後の小ピットが、20cm～30cmの間隔で多数検出されていることである。その性格は明らかでないが、上屋に関係するものか。

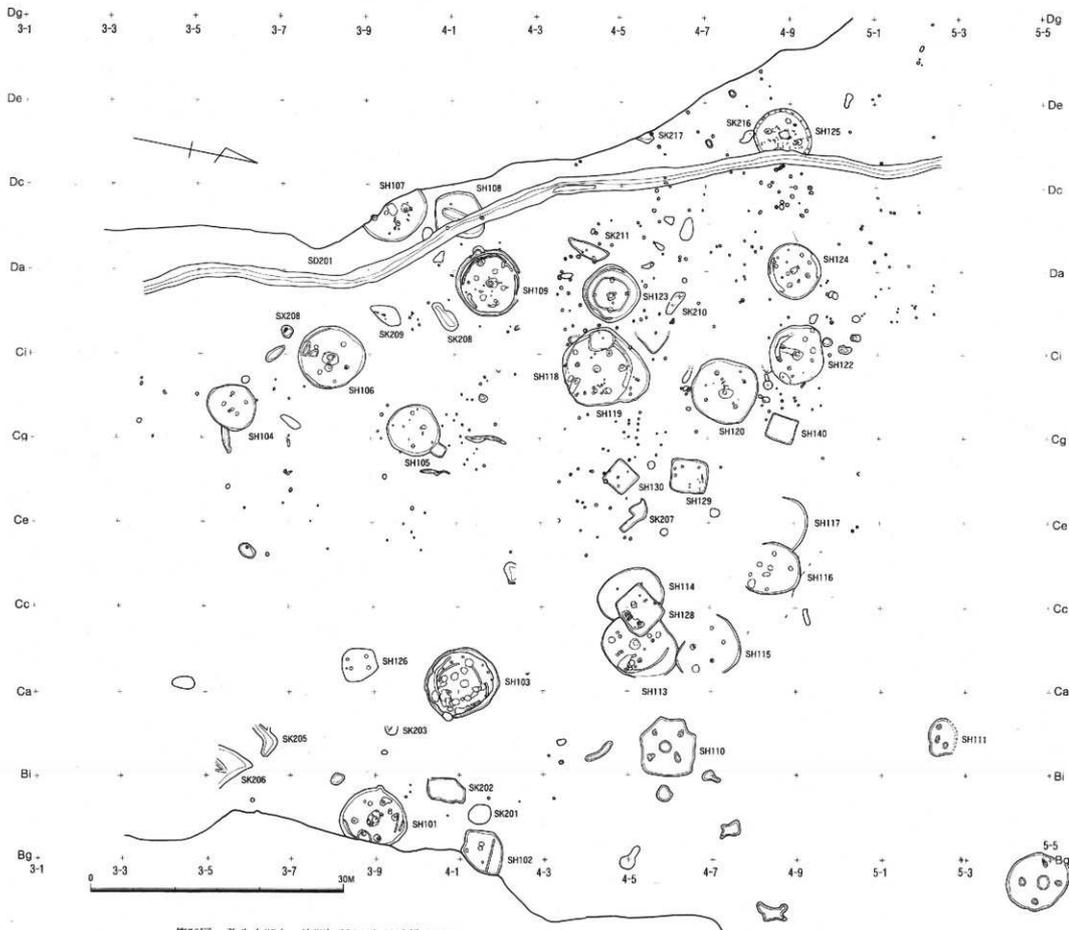
以上のように、基本的には、円形プランをとり、中央土坑、四支柱穴、壁溝をもつのが基本的とみられるが、この2棟以外では、壁溝を欠くもの、中央土坑や、柱穴を欠くものも多く、SH108や、SH129のように、やや小型の方形を呈するものもある。これらは、遺構の検出状況のちがいや、残存状況のちがひもあろうが、遺構、用途のちがひを示すものかもしれない。住居跡の間近の空間には、円形、階円、不整形の土坑や落ち込みがあり、廃棄坑の可能性が高い。なお明確に火災にあった痕跡はなかった。

出土遺物は、少なく、全く出土しない住居跡もいくつか認められた。いずれも埋土ではなく、床面より出土したものである。出土遺物において、特に著しい傾向はないが、SH125において、石製品の出土の多いことは、注目される。

上述のように、これらの住居跡群は、一単位のみを指すものとみられ、これに関連した住居跡群は、調査状況からみて、南北への広がり認められず、旧河道（古墳時代前期）によって削平された、東西方向に広がっていたとみられる。したがって、集落規模は予想以上に小さい可能性が高いと言えよう。

(ii) 第2段階

第2段階と考えられるものとしては、SH101、SH102、SH103、SH106、SH109、SH120、SH122、SH123、SH128などの堅穴住居跡である。これらのうち、SH103～SH123の7棟については、中央に空間をおき、円形にとり囲むように分布しており、広場を中心とした、一群の居住形態を示す可能性がある。西側には、上述のSD201が南北流しており、



第50图 弥生中期末~後期初頭(上流域)遺構全体図

それぞれの住居跡の間隔は、10m-15mと、ほぼ平均している。南側に住居跡がみられないのは、通路であろう。

SH101、SH102は、おそらく、旧河道により削平された東側のグループにかかわる可能性が高い。出土遺物がなく、時期不明としているSH110、SH115、SH111、SH112などを含めて、東側の一群ができるかも知れない。

住居跡の構造、形態は、第1段階のものに比較して、残存状況が良好である。平面形態では、SH102とSH128がやや小型で、方形プランをとるほか、ほぼ円形プランをとり、円形プランをとるものは、すべて中央に、径75cm、深さ90cmと、かなり深い円形の土坑をもち、土坑内には、炭化物、焼土が大量に埋置されていた。また、中央土坑を囲むように主柱穴が検出され、いずれも4ヶ所であった。柱穴は、径50cm前後のもので、SH103では、四柱穴のほか、東側と西側に、各2個の柱穴があり、建て替えか、補助的な役割が考えられる。また、SH122では、北と南の主柱穴間のやや外より、やや大きい柱穴があり、棟持柱となる可能性がある。なお、第1段階のものと同じように、柱根を残すものや、礎板を残すものも、比較的多かった。SH103では、四柱穴のほか、他の4つの柱穴にも礎板がすべて遺存していたし、SH106では、北と南の柱穴に、柱根が遺存していた。SH109では、南の柱穴に柱根が、SH122では、南と西の柱穴に柱根が、SH123では、北の柱穴にそれぞれに遺存していた。礎板は、80cm×45cmの長方形で、厚みは、3cm-10cmと、比較的大型のものが多かった。いずれもスギ材とみられる。

住居跡内では、壁溝の全周するものが大半であったが、それ以外に間仕切りにかかわるとみられる溝が、いくつか検出されている。SH103では、西側と南側の主柱穴間に幅30cm前後の溝がみられし、SH109では、東側の一部を除き、壁溝の内側10cmの部分に、幅25cm前後の溝が、同心円状にめぐらされている。また、第2段階には含まれていないが、SH110の場合は、中央土坑と、SE、SWの主柱穴の間を東西に、幅12cmの溝が壁溝までのびており、住居内の区画にかかわるものとみられる。住居内の区画かどうか明確ではないが、SH123では、四主柱穴の外側に壁溝の内側の間が、やや低くなっており、区画を示すものか。

次に屋内土坑では、SH106に、不整形の土坑が3ヶ所みられるほか、SH103、SH109、SH128には、特徴的な施設がみとめられた。まず、SH103では、壁溝の内側に径15cm前後の小ピットが多数認められるほか、東側に不整形の土坑があるが、両側に、屋内における、作業場的な遺構が検出されている。すなわち、二段堀り込みの不整形の土坑の中央に砥石があり、西側に溝が長く切られ、土坑の西端に、幅30cm、長さ60cmの板材がのせられていた。作業内容については不明をせざるを得ないが、上述の区画溝の存在とともに注意される場所であった。SH128にも、これとやや類似した遺構が認められる。上述のようにSH128は、小型の方形プランをもつ特異な住居跡であるが、この東側に、幅1.0m、長さ3.0mの落ち込みがあり、その北端に柱穴状のピットが1ヶ所にみられ、南側には、長さ1.0m、幅60cmの板材が敷くように置かれており、何らかの作業が推測される。SH128には、中央付近に、やや大形のピットが2ヶ所あるほか、主柱穴とみられるものはなく、やや異質な構造をとることも注意される場所であろう。またSH109には、四主柱穴の外側、区画溝(?)の内側に、大、小のピットがあり、屋内土坑的なものか。

屋外の土坑としては、SH101、SH102の西側の、SK201、SK206、SH123の西と北で検出されたSK211、SK212など代表的なものであるが、各住居跡の周囲には大小の土坑が、かなり認められ、関連するものであろう。

出土遺物としては、SH103、SH106、SH120、SH123などに比較的多く土器、石器の出土がみられる。この中で、SH103の砥石、SH106における4点の砥石は注目されよう。これらの遺物は、封土に含まれるものではなく、床面で検出された。

以上、第2段階と考えられる住居跡をみてきた、これらの住居跡から出土した土器は、ほぼ、SD201に併行するものであって、一体の関係にあったとみられるが、この集落がSD201の西側に広がっていたかどうかは、旧河道に削平されているため、明確にできない。しかし、これがさらに東側に広がっていた可能性は、SH101、SH102などのグループ

の存在から、ほぼ推測され、第1段階のものと同じく、南北には分布は広がらず、東西への広がりをもつものであろう。

(四) 小結

以上、2段階に区別して、集落の構成と、構造を検討してきた、そこにおいて明らかになった点を、最後にまとめておきたい。

- (1) いづれの段階においても、住居跡の平面形態は、円形プランをとるものが一般的で、一部小型の方形プランのものもあるが、やや性格を異にする可能性があった。
- (2) 住居跡の内部構造については、第1段階のものは、残存状況がやや悪く、代表的なものだけに限定せざるを得ないが、中央土坑、四柱柱穴、全周する排水溝、区画溝、屋内土坑、屋外土坑をセットとしてもっていた。そして柱穴については、礎石をもつものが多く、住居跡築造段階の地山のあり方が推測される。
- (3) 住居跡の分布は、5～6棟が、円形の広場を囲むように存在しているようで、SD201の東に2群の存在が推定される。
- (4) 集落の広がりについては、東西が旧河違により、削平されたため、明確にできないが、南北への広がり、調査区内の80m前後の範囲で、東西にのびるものと推定される。第2段階がSD201の掘削と関連して成立している意味は、必ずしも明らかにできなかった。

(大橋信弥)

竪穴住居跡一覧表

遺構番号	柱軸	平面形	規模		深さ	施設				設			山土器		出土石器			
			東西	南北		土柱穴	貯穴	味垣	礎溝	扉	焼土	壺	壺	その他	武器	祭具	丁具	砥石
SH001	-	円形	3.4	3.0	0.3	-	1	○	-	-	-	-	3	-	-	-	-	-
SH002	-	隅丸方形	2.2	3.3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
SH003	-	円形	5.3	5.4	0.1	1	-	○	-	-	○	1	-	-	-	-	-	-
SH004	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
SH005	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
SH006	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
SH007	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
SH008	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
SH009	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
SH010	-	-	-	-	-	4	-	○	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
SH011	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
SH012	-	円形	4.3	3.6	0.28	-	1	-	-	-	-	4	6	1	-	-	-	-
SH013	-	方形	1.4	2.0	0.13	-	-	-	-	-	-	2	2	-	-	-	-	-
SH014	-	円形	5.8	3.4	0.40	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
SH015	-	円形	4.6	3.8	0.105	-	-	-	-	-	-	3	-	-	-	-	-	-
SH016	-	円形	6.0	-	0.205	-	1	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-
SH017	-	方形	2.9	4.6	0.118	-	1	-	-	-	-	1	2	1	-	-	-	-
SH018	-	方形	4.2	4.9	0.324	-	-	-	-	-	○	1	6	1	-	-	-	-
SH019	-	(円形)	(5.5)	-	(0.12)	-	-	-	-	-	-	3	1	-	-	-	-	-
SH020	-	円形	4.2	4.2以上	0.10	-	-	-	-	-	-	2	1	-	-	-	-	-
SH021	-	方形	3.4以上	3.4以上	0.15	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-
SH022	-	円形(不整形)	1.8以上	2.8	0.12	2	1	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
SH023	-	円形(いびつ)	6.8	6.2	0.18	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
SH024	-	方形	4.8	6.2	0.10	-	-	-	-	-	-	4	5	6	-	-	-	-
SH025	-	円形	4.3	4.0	0.08	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-
SH026	-	円形	4.0	4.3	0.17	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
SH027	-	円形	5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
SH028	-	円形	7	-	0.38	-	-	-	-	-	-	4	5	1	-	-	-	-
SH029	-	方形	4.5以上	5.0	0.10	-	1	-	-	-	-	1	1	1	-	-	-	-
SH030	-	方形	5.4	6.0	0.10	-	-	-	-	-	-	5	7	1	-	-	-	-
SH031	-	方形	4.5	-	0.15	-	1	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
SH032	-	方形	5.0	6.4	0.17	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
SH033	-	円形	5.6	5.0	0.19	-	-	-	-	-	-	4	9	1	-	-	-	-
SH034	-	円形	6.5	3.0	0.15	-	1	-	-	-	-	3	4	-	-	-	-	-
SH035	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	○	3	-	-	-	-	-	-
SH036	-	円形	7.2	-	0.06	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
SH037	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	○	3	1	-	-	-	-	-
SH038	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	○	1	-	-	-	-	-	-
SH039	-	円形	4.7	-	0.13	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
SH040	-	円形	3.8	3.0	0.34	-	1	-	○	-	-	10	29	3	1	-	1	1
SH041	-	隅丸方形	3.2以上	4.0	0.10	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
SH042	-	円形	3.4	2.8	0.34	{3}	1	-	-	-	-	1	3	-	-	-	-	1
SH043	-	円形	3.7	2.6	0.30	2	1	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-
SH044	-	円形	4.2	4.8	0.22	1	1	-	-	-	-	2	6	2	-	-	-	-
SH045	-	円形	3.4以上	3.2	0.22	-	-	-	-	-	-	5	4	1	-	-	-	-
SH046	-	円形	4.0	5.4	-	1	-	-	○	-	-	1	2	1	1	-	-	-
SH047	-	円形	5.3	3.6	0.14	8	3	-	-	-	-	2	1	-	-	-	-	-

遺構番号	主軸	平面形	規模			施設					出土土器		出土石器					
			東西	南北	深さ	主柱穴	貯穴	土坑	竈溝	炉	礎石	土甕	その他	武甕	祭具	土貝	砥石	その他
SH048	-	円形	5.2		0.30		1	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-
SH049	-	円形	5.2	5.2	0.22	4	1	-	-	-	-	5	8	3	-	-	-	3
SH050	-	円形	4.3	4.0	0.06	-	-	-	-	-	-	3	2	-	-	-	-	1
SH051	-	円形	4.3	4.2以上	0.10	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
SH052	-	円形	4.8	3.6以上	0.16	-	1	-	-	-	-	3	4	1	-	-	-	-
SH053	-	円形	(4.6)	-	0.12	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
SH054	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
SH055	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	○	1	-	-	-	-	-
SH056	-	円形	3.2以上	2.2	0.205	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
SH057	-	円形	4.6以上	4.0	0.20	-	1	-	-	-	-	2	3	-	-	-	-	-
SH058	-	隅丸方形	5.8	5.3	0.18	1	1	-	-	-	-	5	4	1	-	-	1	1
SH059	-	方形	5.0	5.2	0.20	1	-	-	-	-	-	2	1	-	1	-	-	-
SH060	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
SH061	-	円形	5.0	7.0	-	-	2	-	○	○	1	-	-	-	-	-	-	-
SH062	-	長円形	7.0	8.0	-	4	1	-	-	-	-	2	1	-	-	-	1	-
SH063	-	円形	9.0	6.8	0.285	-	1	-	-	-	-	4	5	2	-	-	-	1
SH064	-	円形	7.2	-	0.227	-	1	-	-	-	-	1	1	1	-	-	-	-
SH065	-	隅丸方形	5.8	-	0.278	1	-	-	-	○	-	-	37	-	-	-	2	-
SH066	-	隅丸方形	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	1	-	-	-	2	-
SH067	-	隅丸方形	3.7	3.6	-	-	1	-	-	-	-	2	-	-	-	-	3	1
SH068	-	隅丸方形	6.0以上	7.0	-	-	1	-	-	○	7	1	1	1	-	-	-	-
SH069	-	隅丸方形	4.6	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-
SH070	-	隅丸方形	-	-	-	-	-	-	-	-	4	1	2	-	-	-	-	-
SH071	-	円形	6.3	-	0.131	-	-	1	-	-	-	5	5	1	-	-	-	2
SH072	-	隅丸方形	4.0	2.8	-	-	-	-	-	-	2	1	-	-	-	-	-	-
SH073	-	隅丸方形	4.2	3.5	0.122	-	-	-	-	-	-	9	7	2	-	-	-	1
SH074	-	円形(いびつ)	4.8	4.4	0.418	-	-	-	-	-	-	6	8	3	-	-	1	1
SH075	-	円形(いびつ)	4.0	4.8	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-
SH076	-	長円形	-	-	0.233	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
SH077	-	方形	4.4	8.4	0.18	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
SH078	-	円形	2.6	2.9	-	-	1	-	-	-	-	4	2	-	-	-	-	-
SH079	-	円形	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4	6	1	-	-	-	-
SH080	-	円形	3.0	4.1	-	1	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-
SH081	-	円形	5.5	-	-	(1)	1	-	○	-	-	2	-	-	-	-	1	-
SH082	-	円形(いびつ)	5.9	-	0.10	-	-	-	-	○	-	-	-	-	-	-	-	-
SH083	-	円形(いびつ)	5.8	-	0.10	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
SH084	-	円形	9.1	-	-	4	1	○	○	-	-	-	-	-	-	-	-	-
SH101	N-22°-E	円形	7.5	8.0	-	4	2	-	○	-	-	-	-	-	-	-	-	-
SH102	-	隅丸方形	5.0	5.0	-	(1)	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
SH103	N-50°-E	円形	8.2	8.6	0.31	4	3	-	○	-	-	-	7	-	-	-	1	-
SH104	N-22°-E	円形	5.1	-	0.103	4	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
SH105	N-12°-E	円形	5.1	-	0.145	3	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	1
SH106	N-23°-W	円形	7.4	7.7	0.30	4	2	-	○	-	-	1	2	-	-	-	4	1
SH107	N-21°-E	円形	8.1	-	0.22	4	1	-	-	-	-	3	5	5	-	-	-	-
SH108	N-11°-E	隅丸方形	5.6	5.7	0.20	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
SH109	N-34°-W	円形	7.8	7.5	0.38	4	1	○	○	-	-	2	-	1	-	-	1	1
SH110	N-12°-W	隅丸隅形	7.0	6.6	0.35	4	-	○	○	-	-	-	-	-	-	-	-	2

遺構番号	主軸	平面形	規 模			施 設					出土土器		出土石器					
			東西	南北	深さ	主柱穴	貯穴	土坑	竈	土	委	要	その他	武器	祭具	工具	紙石	その他
SH111	N-13°-W	隅丸楕円形	4.0	3.0	0.15	(4)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
SH112	N-42.5°-E	円形	6.9	-	0.12 - 0.20	4	-	○	○	-	-	-	-	-	-	-	-	-
SH113	N-37.5°-E	円形	6.8	9.0	0.12	3	1	○	○	-	-	-	2	-	-	-	-	-
SH114	N-22.5°-W	楕円形	6.5	8.0	-	2	-	(○)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
SH115	N-23°-E	円形	6.5	-	0.10 - 0.15	4	1	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
SH116	N-26°-E	円形	6.0	6.5以上	0.40	4	3	○	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
SH117	-	円形	6.5	-	0.26	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
SH118	N-23°-W	円形	9.0	8.2	0.15	3	(6)	○	○	-	-	5	3	2	1	-	-	1
SH119	-	円形	9.0	10.5	0.25	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
SH120	N-11°-E	隅丸方形	7.8	7.7	0.20	4	-	○	-	-	○	3	1	4	-	-	1	-
SH121	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
SH122	N-32°-W	円形	6.8	7.4	0.40	4	2	○	-	-	-	-	3	-	-	-	-	-
SH123	N-33°-E	円形	6.8	-	0.25	4	2	○	-	-	-	2	3	2	-	-	-	1
SH124	N-40°-E	円形	6.3	-	0.20	4	-	○	○	-	-	1	1	-	1	-	-	-
SH125	N-39°-W	円形	6.6	-	0.40	4	-	○	○	-	-	2	-	-	2	-	-	3
SH126	N-25°-W	隅丸方形	3.9	4.1	0.163	4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
SH127	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
SH128	N-37°-E	方形	4.6	5.2	-	多数	-	-	○	-	-	-	1	-	-	-	-	-
SH129	N-9.5°-W	方形	4.3	4.0	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
SH130	N-28°-E	方形	3.3	3.2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
SH131	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
SH132	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
SH133	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
SH134	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
SH135	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
SH136	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
SH137	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
SH138	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
SH139	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
SH140	-	方形	3.3	3.3	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	-	-	-	-

B. 出土土器の問題

(1) SD151、SD152、SD201の位置付け——近江南部における中期後半の様相——

a. はじめに

近江における弥生中期土器の研究は、近年における資料増加にもかかわらず、良好な資料に恵まれず、後期のそれと比較して、大きくおけている。その中で、湖南を中心に、中期後葉を前後する資料がここ数年増加し、SD151、SD152、SD201の位置付けについても若干の見通しが得られるように考えられる。

そこでまず、ここで検討する資料の性格について、若干の前提となる説明を加えておきたい。

まず本遺跡のうちSD151とSD152の資料は、別に詳しく述べているように、中期前葉から継起的に築造された方形周溝墓群が、中期中葉後半の大洪水によって、ほぼ埋没したあと出現した集落にかかわるもので、中期中葉前半の方形周溝墓の周溝の一部を再掘削して使用していることも明らかになっている。そしてSD151とSD152には明確な切り合いが認められ、当初集落を圍繞していたSD151を拡大する形で、SD152が造成されたと推定できる。なお、SD151の場合、大きく上、中、下層に分離され、上層は廃絶後投棄された可能性が大きい。SD152の場合も、上、下層に分けることができるが、その間に顕著なちがいはなく、廃絶後、短期間に投棄、埋没した可能性が大きいとみられる。そして、SD151、SD152はその集落とともに、中期末以前に再び洪水によって、完全に埋没しており、中期中葉末から後葉の前半に、ほぼその存続期間が推定される。なお、遺跡の南端と北端において、この時期にほぼ並行して方形周溝墓群が形成されており、その供献土器についても、ほぼ同じように扱うことができる。

SD201は、中期後葉後半後に再びおそった洪水によって、上流地域の中期後葉とみられる周溝墓群や、上述の下流地域の集落と墓地が埋没した後、上流域を中心に形成されたもので、その内外には、併行ないし、後続するとみられる集落が形成されている。したがって、SD151、SD152とSD201の間には、やや大きな断絶があったと推測される。そして、SD201とそれに伴う集落は後期中葉段階には、再び洪水によって埋没しており、大きくくれば中期末から後期前半代の幅をもつ土器群と考えることができる。

次に服部遺跡の南東3.7kmに存在する下之郷遺跡の3つの環濠の資料をとりあげる。ここでは、中期中葉以降に集落の形成がなされ、中期後葉全般にわたって、継起的に幅4m～5mの環濠が、相ついで集落の囲りに掘削されており、一番内側の環濠1が最も古く、次いで外側の環濠3、真ん中の環濠2が最も新しい様相を示すとされている。この3つの環濠の資料については、環濠3の資料の一部が公表されているだけで、環濠1、2の資料は未発表であり、担当者の好意により、一部資料の提供を受けた(文献3・7)

次に服部遺跡の東4.1kmに所在する二ノ畦遺跡では、野洲町野洲川左岸遺跡でも検出された一条の環濠と、それに伴う集落が発見されている。その土器様相は、SD201と下之郷の環濠資料の間を照めるものとみられている(文献16)。

次に服部遺跡の南東6.5kmに所在する伊勢遺跡の五角形住居跡からは、後期前半から中葉の良好な資料が出土しており、SD201の対比資料として注目されるものである(文献22)。

b. 各資料の対比

まず、SD151の資料と、下之郷環濠1の資料を対比してみたい。

壺では、Aタイプは、SD151の下層でほとんどみえず対比できないが、上層の資料ではA1タイプ、A2タイプのほか、D、E、Fタイプにおいて、ほぼ共通した、形態、手法が認められる。ところがGタイプにおいては、下之郷の資料では、口縁外面に凹線文がやや顕著になっており、大半がハケ調整によっているSD151下層の資料とは、若干の様相のちがいが認められる。ただし上層の資料には、凹線文の資料が増加しており、環濠1の資料と上層の資料の共通性がうかがえる。このことは、甕HやIにおいても、同じように考えられるが、甕Hについては、SD151の資料が少なく、明確にはしがたい。ただ甕Iについては、環濠1の資料は、上層の資料と共通性が多く、下層の資料に古い様相がみられる。なお、細頸壺、水差型土器については、SD151に資料がなく、対比できない。

高杯については、SD151では、Aタイプの出土はないが、下之郷環濠1では、畿内タイプのものが若干認められる。Bタイプについても、SD151の下層では出土はないが、上層の資料は、下之郷の資料とほぼ共通している。

鉢では、B・E・Fタイプでは、両者の資料は、ほぼ共通し、Dタイプについては、環濠1に良好な資料が認められなかった。

甕では「く」字甕がSD151ではかなり多く、近江型に近い数値を示すのに対し、下之郷では「く」字甕が2割程度で、かなり少ないことが目につくが、近江型についてみるとB2タイプとB3タイプが、ほぼ同じ数値を示し、B3タイプでも、口縁の外面をハケ調整するのが大半であって、かなり類似した様相が看取される。

ただ、下之郷の資料では、端部上端をナデたものや、内面に加飾するもの（B3-I）も若干認められ、SD152上層の資料と似た様相を示している。このことは、C1、C2タイプの甕にも言えることで、SD151の下層のものが、短かく外反する口縁をもつのに対し、下之郷の資料と上層の資料は、大きく外反しており、若干の差異と考えられる。

以上のように、SD151と下之郷環濠1の土器群については、SD151下層の資料が、やや古い様相をもつのに対し、上層の資料と下之郷との資料は、ほぼ併行する関係にあったと考えられよう。

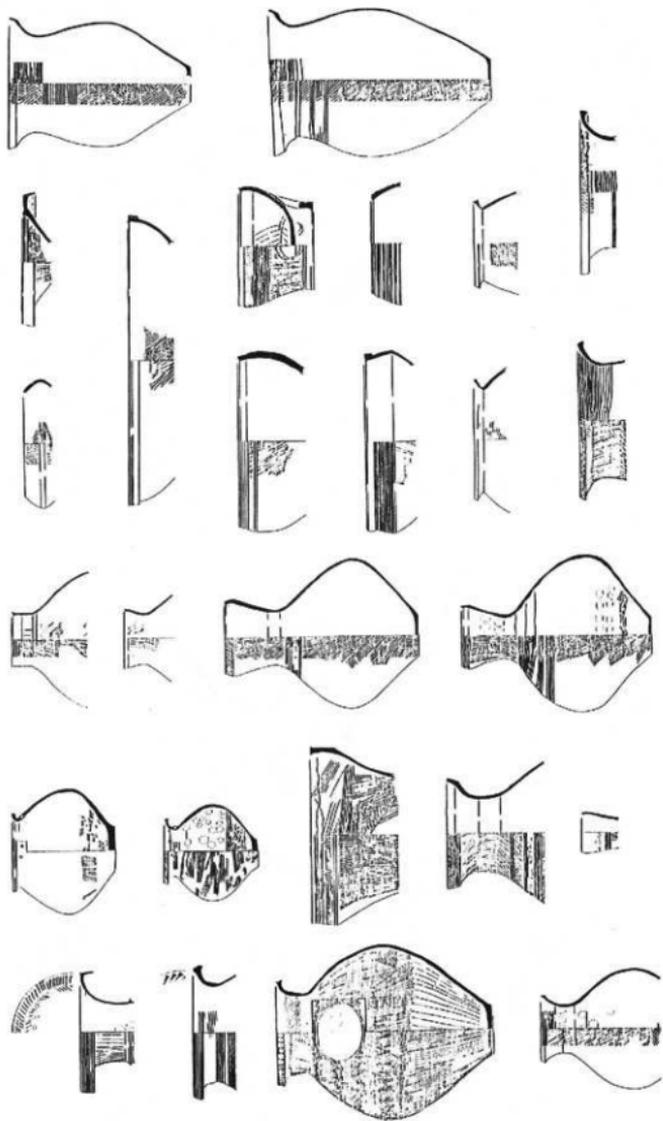
次にSD152の資料と下之郷環濠1の資料を対比してみよう。SD152の資料は、大きく上、下2層に分けられるが、上述のようにほとんど大きな相違点はなく、一括して扱うことにする。

まず、甕では、A1、D、E、Fなど、強い共通性をもっている。Gタイプについても、凹線文が必ずしも盛行していないなど、共通性が高い。甕Hについては、SD152に資料が欠けているが、Iについても、ほぼ共通している。

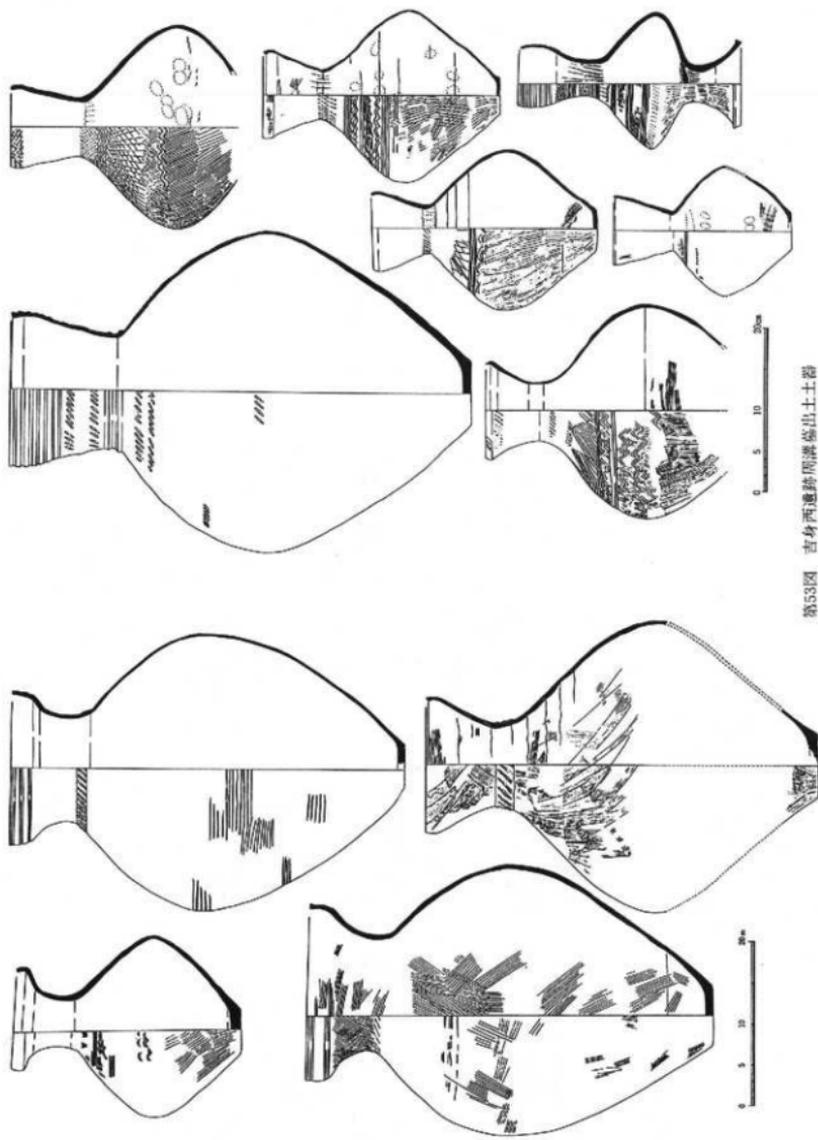
細頸壺Dについては、下之郷に資料が欠けているが、口縁部破片では、口縁部外面上半に、羽状文を配し、その下に直線文を数条めぐらすなど、SD152の資料との共通性が確認できる。水差型土器では、下之郷の資料が、文様帯をもたないもので、ハケ調整のみであって、SD152の資料とは、若干様相を異にするが、プローションなどでは、腹部にゆるやかな屈曲をもつなど、共通性も認められる。

高杯では、Bタイプで、両者に共通性が高く、ほぼ併行する資料と言えようし、鉢でも、下之郷には、B1タイプの資料は欠けるが、Eタイプでは、凹線文を多用したものが多くなど、形態、手法とも共通点が多い。

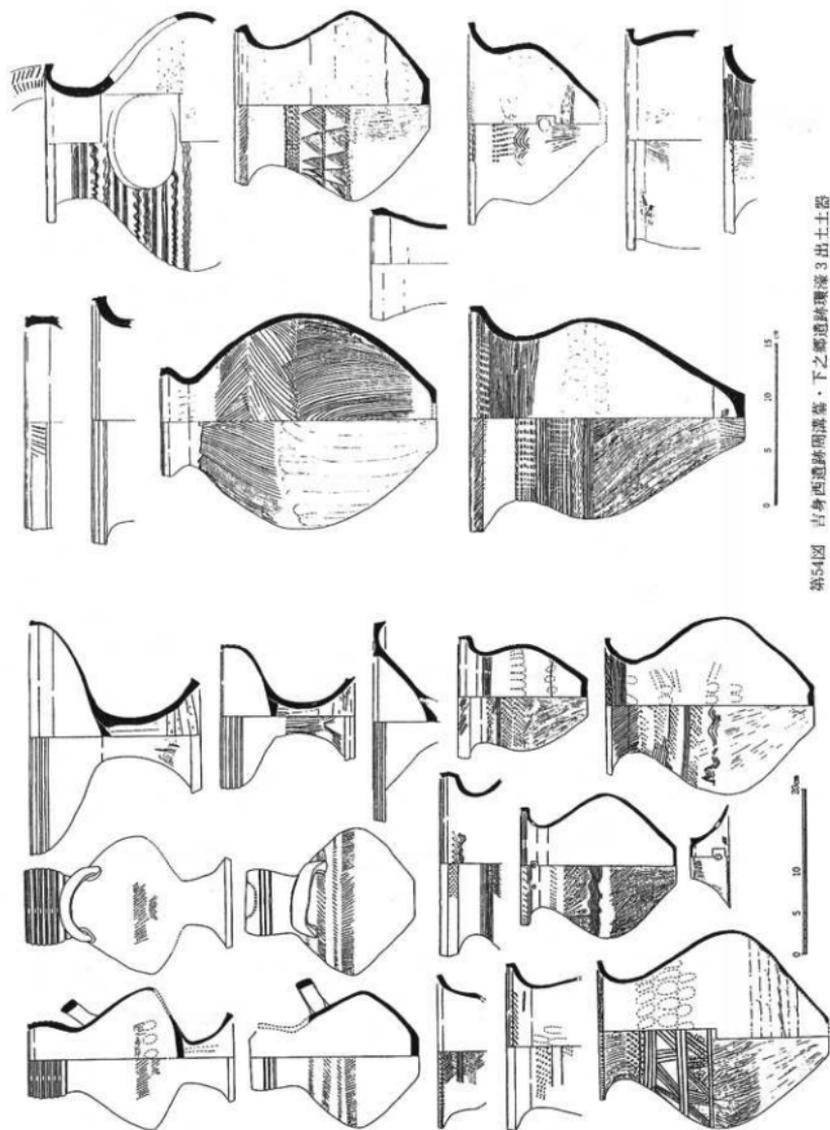
次に甕では、SD152では、「く」字甕と近江型の比率はほぼ同じであるが、環濠1では、「く」字タイプが2割を占めるにすぎず、数量的なちがいはある。しかしAタイプにおける、形態、手法上のちがいは、それほど明確でない。ところが、近江型では、かなり顕著なちがいが認められる。すなわち、SD152では、B2タイプがきわめて少なく、その大半がB3タイプになっていることであり、B3タイプの中でも、口縁外面の上半をナデるB3-IIが過半を占めるに至っているのである。



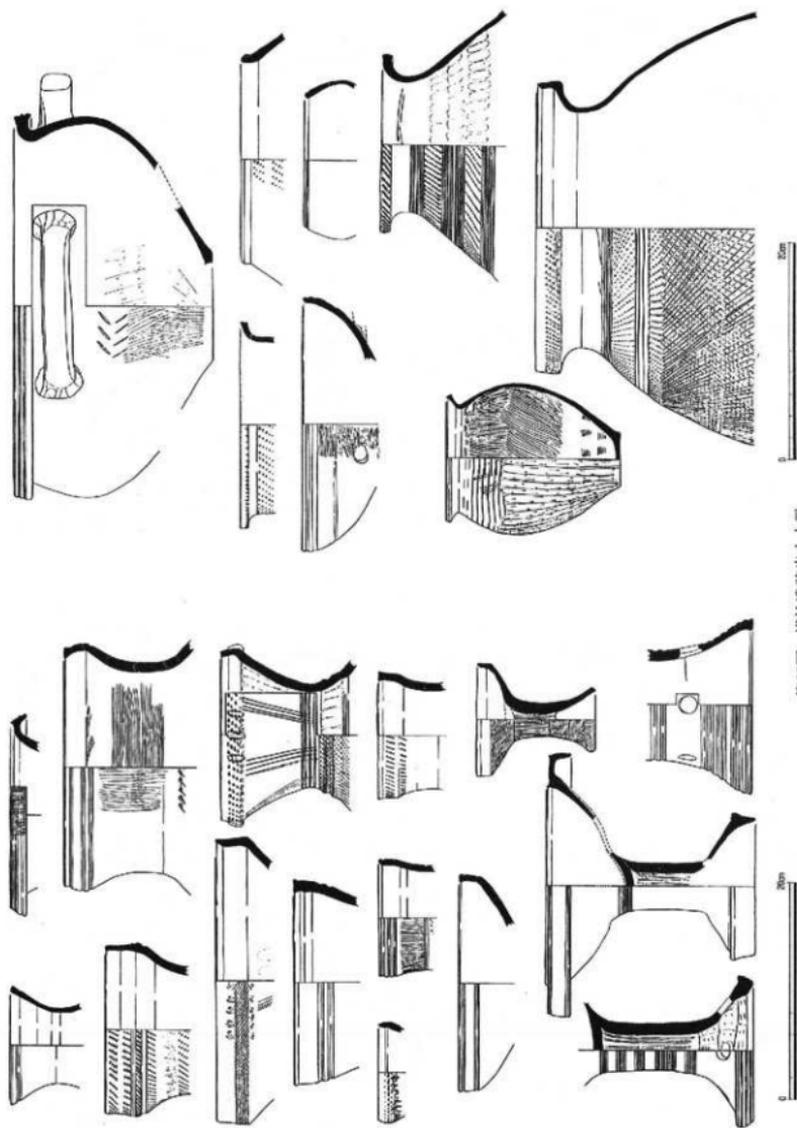
第52圖 下之繩線漆1下層出土土器



第534图 吉身西遗址陶器出土器



第54图 吉身西遗址陶器，下之彩陶钵残片 3 出土器



第55图 横枕遗址出土土器

以上の検討によって、SD152の資料は、下之郷環濠1の資料と、かなり共通性が高いが、壺Bのあり方や、一部の壺などからみて下之郷の資料に、やや古い様相がうかがえるのである。

次にSD152の資料と、下之郷環濠3の資料を検討してみたい。まず壺では、壺E、Fなど、手法、プロポーシオンとも共通性が高い。下之郷のGタイプは破片であるが、大きな片はいはなく、壺Hについては、SD152に資料はなく、これに併行するとみられる。上流地区の方形肩溝帯の供獻土器に類例があり、間接ながら、共通性がうかがえる。また受口壺についても、SD152Bの資料に類似したものがあつた(C010)、両者の共通性が確認できる。また、環濠1には欠けていた、鉢のBタイプをみると、SD152A上層の資料に、形態、手法とも類似しており(B174)、ほぼ併行することが確認できる。壺では、SD152で、B2タイプとB3タイプが、それぞれ半数を占め、B3-IIは、きわめて少数であるのに対し、下之郷環濠3では、もはやB3タイプが大半を占め、そのうちでも、B3-IIが過半を占めている。しかもB3-IIIタイプが、若干認められ、明確に差異が認められる。

以上の点より、SD152の資料は、下之郷環濠3の資料と、かなりの共通性をもち、一部並行する可能性もあるが、壺など、下之郷環濠3の資料に、若干新しい様相がみられた。

そこで次に、下之郷環濠3の資料と、二ノ畦遺跡の資料を対比し、検討してみたい。

まず壺では、下之郷でも減少していたA、Bタイプが、二ノ畦では、全く認められず、Fタイプは、二ノ畦では、凹線ではなく波状文を、口縁部に施している。壺Gでは、口頭部の屈曲が、二ノ畦の資料では、かなり甘くなっていること、頭部の凸帯がなく、直接ヘラ匠痕文による列点をうっていること、口縁部外面に波状文を施すものが認められることなど、新しい要素が加わっている。壺Hは二ノ畦では、口頭部がラッパ状に開き口縁部が受口状になるなど、定形化した受口壺化しており、下之郷の資料とは、かかなりの断絶が看取されよう。

壺Iや細頸壺、水差し型土器などは、環濠3、二ノ畦とも、ほとんどみられず、消失過程をたどっているとみられる。

高杯は、下之郷では底部しか知られていないが、二ノ畦では、Bタイプが少なくなり、A1タイプの系譜を引くA2タイプや、B1タイプの系譜を引くとみられるB2タイプがみられ、かなり異なる様相がみられる。

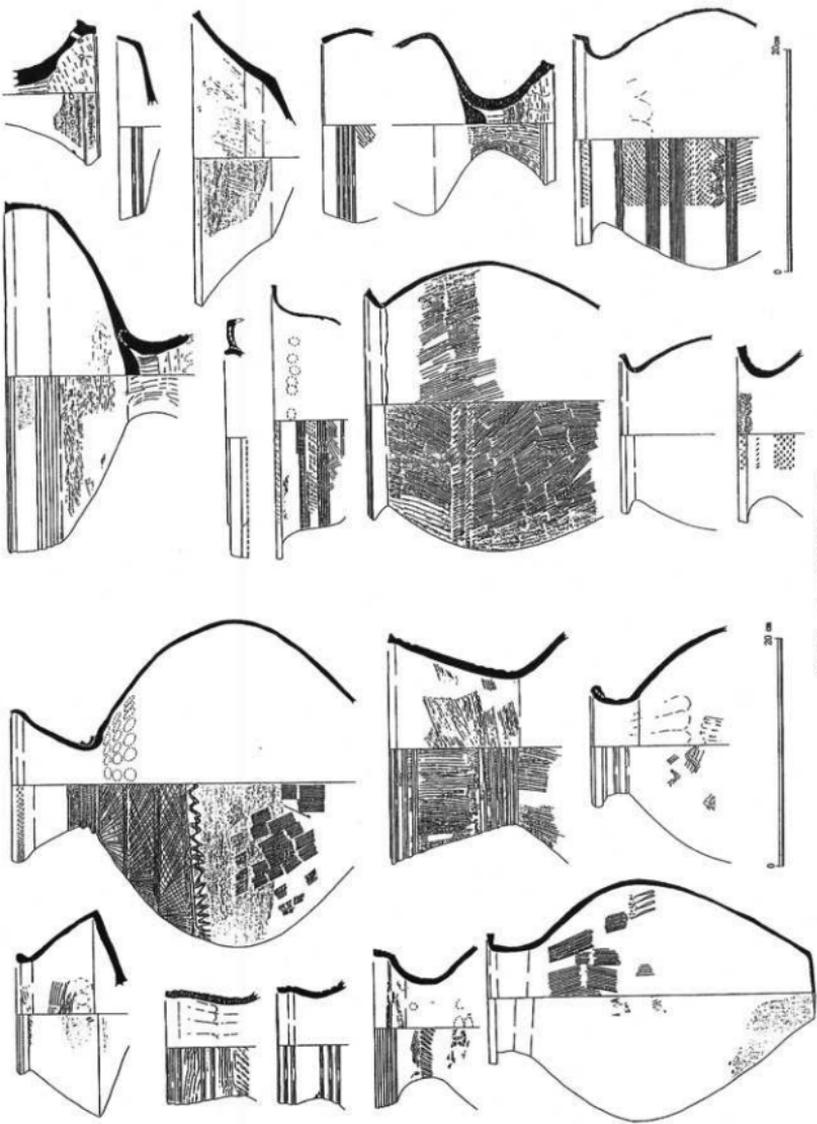
鉢では、Eタイプは、下之郷の資料にないが、二ノ畦では、かなり深いタイプのものになり、Bタイプでは、体部の屈曲はなくなり、ゆるやかにカーブを描いており、かなり差異が認められた。壺では、近江型のうち、いずれの場合も、B3タイプが大半を占めることでは共通するが、環濠3では、B3-IIタイプが大半で、B3-IIIタイプは減少であったのに対し、二ノ畦ではB3-IIIタイプがすでに大半を占めており、大きな様変りを示しているのである。これは、下之郷環濠3に後出する環濠2においても同様のことが認められ、一つの傾向としてとらえることができる。そして、それと同時に、環濠3ではいまだ顕著でなかった腹部の張りや、二ノ畦では、かなり進んでおり、口縁部径を大きく上まわる傾向が認められるのである。

以上の検討によって、環濠3の資料と二ノ畦の資料の間には、かなりの断絶のあることが明らかになった。そこで、順序は少し逆ではあるが、下之郷環濠3に後出するとされる環濠2の資料と、二ノ畦の資料を次に対比してみよう。

まず壺では、A-Eタイプが認められないことや、壺Fにおける口縁部端のあり方など共通点が多い。壺Gにおけるプロポーシオンや、口縁部の加飾における共通性も、きわめて近いことが指摘できる。壺Hについては、二ノ畦では、ほとんど定形化した受口壺となっているのに対し、下之郷では、口頭部の外傾が少なく、古い様相を残している。

次に細頸壺、水差し型土器については、明確なものは、いずれにも認められず、衰退過程がうかがわれる。このことは高杯についても同様で、A1タイプ、B1タイプがほとんどみられず、A1の系譜を引くA2タイプが共通してみられるほか、二ノ畦では、B1タイプの系譜を引くB2タイプがみえ、二ノ畦にやや新しい要素が指摘できる。

鉢については、Dタイプはいづれにおいても、ほとんどみられず、Bタイプで腹部の屈曲のないものが共通してみら



第56图 二ノ畦遺跡出土土器

れ、ほぼ同じ傾向が看取される。

壺では、下之郷環濠2で、C1タイプとC2タイプがみられるのに対し、二ノ畦では、A1、A2タイプのみで、C1、C2タイプはほとんど認められなかった。またBタイプについても、下之郷でB3-IIが20%、B3-IIIが80%であるのに対し、二ノ畦では、すべてB3-IIIタイプで、そのうち、口縁部外面に刺突列点をもつものが60%、波状文をもつもの30%、無文ないしへら圧痕文をもつもの10%であった。下之郷では、刺突列点文が50%、波状文が35%、無文が15%と、下之郷環濠2にやや古い様相がみられるが、かなり併行することが知られる。

以上のように、下之郷環濠2の資料は、二ノ畦と併行する傾向が強いが、二ノ畦にやや新しい要素の認められることが明らかになった。

次に二ノ畦の資料とSD201の資料を検討してみたい。

SD201の壺では、中期のAタイプの系譜を引くものも若干認められるが、ほとんど消滅し、A1、A2のみ見える。全く無文化しており、二ノ畦の資料とは、大きな断絶がある。壺Gについても、SD201に数点は認められるが、ほとんど消滅しており、いまだ盛行期にある二ノ畦とのちがいは明らかである。受口壺のHについても、SD201においては、典型例は1点のみで、後期に一般化する壺の体部をもつ例(H3)が増加しており、大きな変化がうかがえる。壺では、このほかSD201では、長頸壺が出現している。

高杯では、Bタイプが一部残るほか、A2タイプも若干あって、二ノ畦との共通点もあるが、A3タイプが増し、凹線文の手法は全く認められず、内外面とも、丁寧なミガキを加えており、二ノ畦との大きな断絶が認められる。そしてSD201では、椀状の杯部をもつA4タイプが出現している。

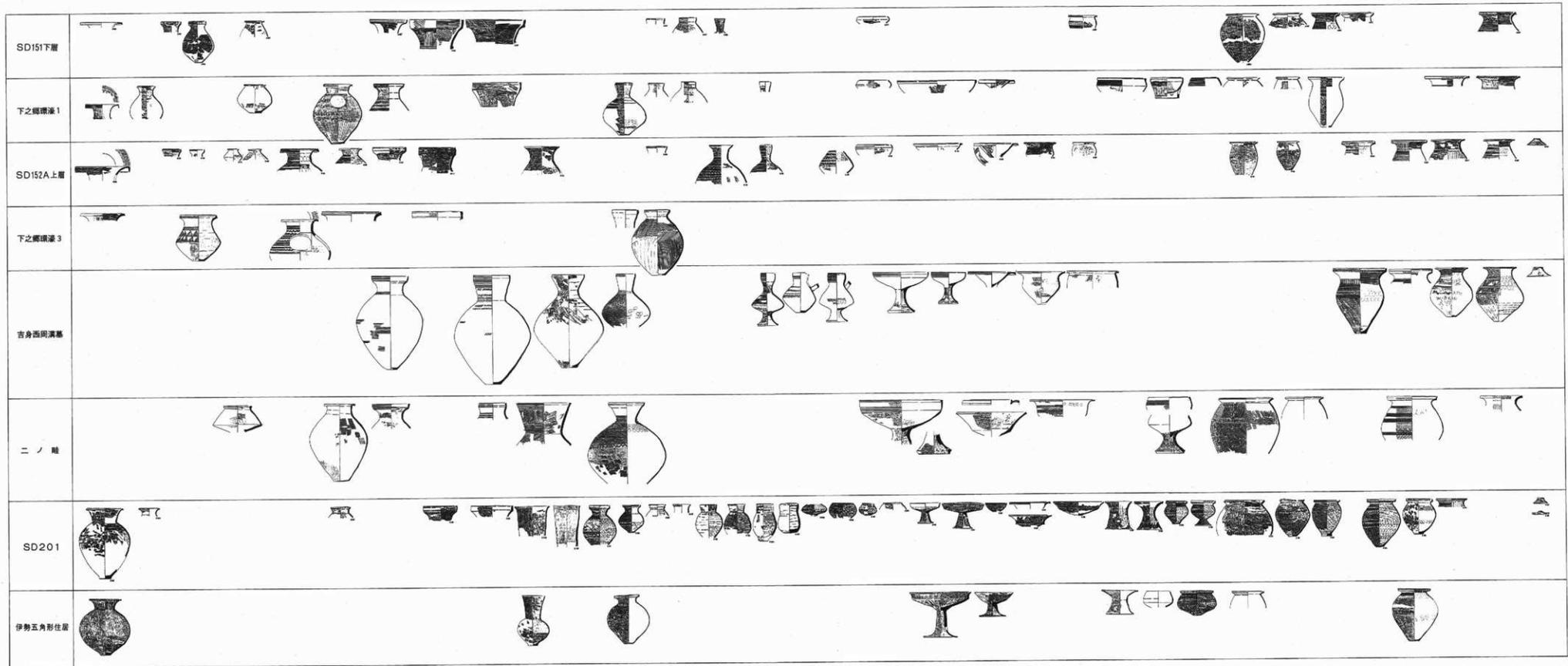
鉢では、Bタイプの系譜を引く、深い椀状のものと、Gタイプが出現しており、ここでも二ノ畦とは、大きな断絶が認められる。

そして、SD201では、まだ少数ではあるが、器台の出現がみられ、二ノ畦との断絶がさらにうかがえる。

壺では、Aタイプの中で、外面にタタキをもつものや、底部が小さく突出するものが認められるほか、小型品が目立っており、二ノ畦との差異と言えるが、Bタイプについても、ほとんどがB3-IIIタイプの口縁外面に刺突列点文をめぐらすもので、一部無文、圧痕文のものがみえる。またそのプロポーションについても、その最大径が腹部の中ほどにあり、口縁部を大きく視察して、後期に一般化するものに近い形態と文様構成をもつものが大半であった。

以上の様に、二ノ畦の資料とSD201の資料には系譜的なつながりはみとめられるものの、やや大きな断絶が認められることが明らかになった。

次に、従来より弥生後期前半の一括資料として、重要な位置を占めていた、守山市伊勢遺跡五角形住居跡の資料と、SD201の資料を対比してみよう。まず壺をみると、SD201では、体部上半に最大径をもつものが多いが、伊勢遺跡で中位ないし、ややそれより下に最大径をもち、口縁部も短く、底部もやや小さくなっており、中期に一般的な壺Gも、全く消滅している。また、受口縁の壺も、ほぼ壺の系譜を引くものにははられ、長頸壺の定形化もすすんでいる。壺では、「く」字壺には良好な資料がないが、近江型の受口状口縁壺では、第1口縁の内傾するものが少なくなり、体部最大径も、SD201にくらべ、かなり上位にある。これは鉢Gにおいても同じ傾向を示す。そして鉢で特に注意されるのは、脚台が消失する点であり、これに対応して器台の増加が目される。高杯では、杯口縁の外反するものが伊勢では目立ち、椀状の杯部をもつものも増加している。器台は浅鉢の脚台消失に対応して小型化がすすんでおり、明らかに段階の差を示している。



第58図 守山市城出土中期後半～後期前半の弥生土器

c. まとめ

以上、守山市域出土の良好な資料と、SD151、SD152、SD201の土器群との比較検討を試みてみた。中期前半の良好な資料がなく、十分な型式設定をしたうえの検討ではなく、結果的には比較的良好的土器群の羅列に終わってしまったが、これらの検討をふまえて、守山市域における中期後半から後期初頭までを、あえて段階づけるなら、次のようになるであろう。

- I期 SD151 下層
- II期 下之郷環濠1、SD152、SD151 上層
- III期 下之郷環濠3、吉身西岡溝墓
- IV期 二ノ畦、下之郷環濠2、横枕、下鈎（栗東）
- V期 SD201
- VI期 伊勢五角形住居跡

ここでは、一応、6期に区分したが、IV期とV期の間に、もう一段階が設定される可能性は残る。そして、この中で、大きな画期としては、一つにはI期とII期の間、今一つはIV期とV期の間であろう。特にIV期とV期のの間には、器種構成や形態において、大きな断絶があって、ここに、中期と後期の境界を設定することは、近年における畿内における研究動向とも、大きく矛盾するものではないだろう。I期とII期については壺G、壺B、高杯などに、他の段階とやや異なる変化があって、一応一つの画期とすることができよう。これを中期中葉と後葉との画期とするには、いまだ資料不足であるが、ここではあえてI期を畿内第III様式末葉に、II期を畿内第IV様式前葉に併行するものと考えておきたい。

以上のように考えられるなら、服部遺跡のSD151については、その下層が、畿内第III様式末に、上層とSD152（A、B）が畿内第IV様式前葉に、SD201が、畿内第V様式初頭に、それぞれ位置づけられることができ、先に考えた、中期後半の洪水の影響は、かなりの長期間にわたったことが、改めて確認できるのである。

(2) 近江型甕についての若干の整理

a. はじめに

弥生時代における近江型の甕については、これまで大きく2つの視角より検討がなされていた。一つは、弥生中期初頭における畿内地方の地域色の出現を示すものとされた「大和型」=甕Aに対する「近江型」=甕Bの抽出、第二は、弥生後期から古墳前期に盛行する、S字状口縁甕と区別された「受口状口縁甕」の認識である。これらについては、近江弥生土器研究の特殊な事情もあって、当初から余く異なる研究視角から追究されたため、その理解についてこれまで若干の誤解や混乱を生じたことは事実と言える。ただだこ数年來の調査の進展によって、多くの新しい知見が加わり、また、それに応じていくつかの問題提起がなされるところにもなった。そこで、ここでは、従来言われてきた弥生時代の近江型甕の研究動向を中期を中心に整理し、その系譜と展開について若干の検討を加えておきたい。

b. 近江型甕の研究動向

弥生中期の、近江地方の甕に、畿内で一般的にみられる甕とは異なる一群のあることを指摘されたのは佐原真氏である。佐原氏は入江百野遺跡、大原巴道跡、南滋賀遺跡などの資料を提示して、「幅広い口縁と特徴的な口縁部をもつ甕で、口縁を波状に仕上げする例もある。外面は縦方向の刷毛目を残すが、幅広い口縁部のみは常にそれが横方向になっている」(文献23)とし、その後これらの甕を「近江型の甕」と呼び、その特徴として、「口縁部によって広い面をつくりだした甕」(文献24)、或は、「口縁部外縁が直立していることと、この部分の刷毛目が常に横方向となっていること」(文献25)を上げられている。そして、その時期については、「甕Bは甕Aより後出のものであろうが、京都市深草遺跡の調査によって甕Aとならび行われたこともわかっている」(文献25)とし、その後、「山科の中臣遺跡の調査によって山城の第Ⅱ様式古段階の実態が明確となった。これには佐原のいう近江型の甕をふくんでない」(文献26)とされた。

佐原氏の一連の論及によって、弥生中期の上層に、大和型と呼ばれる畿内に一般的な甕のほかに、近江型と称すべき、異質な甕の存在が明らかになり、それが少くとも第Ⅱ様式の新段階以降に出現することが指摘されたのである。この指摘は弥生中期における地域色を土器から読み取るという斬新な内容と「集成」という影響力の大きい媒介もあって、大きなインパクトをその後には及ぼすことになった。その後、これに対し、大津市滋賀早遺跡の土器を検討した、福岡澄男氏は、さらに、佐原氏によって近江型甕とされていた甕Bについて、「口縁部は端部を押えたり、やや内傾させることにより、幅広い立ち上がり部を形成する」甕Bと、「頸肩部の境で一度屈曲外反した後、再び明確に屈曲して垂直ないし、内傾して立ち上がり、口縁部を形成する」甕Cの2種に細分できるとし、後者において、口縁内外の刷毛目手法に加えて、指ナデ仕上げの目立つ点を指摘した上で、「今回の調査におけるⅢE区灰褐色砂層出土の土器を検討した結果、甕B、C類はかなり含まれているが、甕A類(第Ⅱ様式畿内型の甕とされるもの)、及び第Ⅱ様式甕は全くみられなかった。またⅣB区Ⅱ1号方形周溝墓ではC類の甕が第Ⅳ様式の壺と共存していた。以上のことから従来第Ⅱ様式の後出的形態である甕Bとして、包摂されていた土器群の内には、第Ⅲ様式段階以降のものも含まれているのではないかと考えている」とされた(文献27)。

福岡氏によっていわゆる甕B=近江型の甕に口縁部の形状や成形手法の異なる二種のあること。それらが中期後半まで確実に存続していることが新たに指摘されたのである。

中期の近江型甕について、後期の受口状口縁甕を検討した中西常雄氏が、その祖型として、近江型の甕Bとの関係を

論及された点(文献28)を除き、この後しばらく触れたものはなかったが、10年後の1982年、近畿地方の弥生土器を論じた井藤暁子氏は、近江型の甕について論じ「甕Bは滋賀里遺跡ではむしろ第Ⅲ-Ⅳ様式に伴出することが確かめられた。三重県津市納所遺跡でも同型の甕が第Ⅲ様式に伴出していることが報告されている。滋賀県瀬田郡大ノ湖南遺跡出土の第Ⅱ様式には甕Bはみられるようである。しかし、従来、甕Bは遺跡によって出現状況に違いがあることがいわれている。今後さらに資料の増加が待たれるが、一応近江地方の第Ⅱ様式において「近江型」と呼称するものは、実は第Ⅲ様式以降にみられるものと考えたい(文献29)とされた。この井藤氏の指摘については、福岡氏の見解について、一部誤解があり、すでに批判が加えられているが(文献30)、近江型甕についての研究の停滞を反映したものと云えよう。

一方、近江における資料の増加がすずまい中で、山城においては、近江型甕の資料が相ついで発見され、若松良一氏によって、包括的な論及がなされた。若松氏は、第Ⅱ様式土器を一括出土した京都市長刀鉦町遺跡 SK1003の土器を検討して、その中に佐原氏の甕Bが含まれること。それには山形口縁をもつ甕C、そうでない甕Bの二者の存在することを指摘して、甕Cはほぼ第Ⅱ様式に限定できるものの、甕Bは以後の様式にもうけつがれていとされた。そして甕Bに先行するとみられる山形口縁をもつ甕Cの中に、外面をケズリで平滑に仕上げるC-Iと、粗いハケ目調整を加えるC-IIのあることを指摘し、C-Iが凸帯文土器の盛行に先行する、縄文晩期の滋賀里Ⅲ式に顕著な四単位の山形口縁甕と型式学的な脈路をもつことを主張された。そして、近江型甕の変遷について「第Ⅱ様式で山形口縁の甕から緩い段をもって立ちあがる非山形口縁の甕へ発展したものが、第Ⅲ様式には一般的となり、さらに第Ⅳ様式には立ち上がりの角度を強め、ついには直立もしくは内傾するに到り、第Ⅴ様式の完全な受口状口縁へと接続していく過程が完全に把握できる」とし、その受口状の独特な形態が、木製蓋の近江における盛行と関連することを指摘された(文献31)。

若松氏の指摘のうち、近江型甕の粗型を、滋賀里Ⅲ式の山形口縁甕に求めることについては、すでに疑問が высказываれているほか(文献30)、中期における展開についても、細部において問題のあることが指摘されている(文献15)が、いわゆる甕Bが山形口縁をなすものと、なさないものの二者に区別すべきことを指摘されたことは重要で、機能面から受口状口縁を検討された点とともに、さらに継承すべき点と言える。

その後、山城-近江地方の弥生中期前半の甕を包括的に検討した浜崎悟司氏は、近江型甕についての学史を検討して、深草遺跡の土器には第Ⅲ様式のものもあり、佐原氏のいう甕Bには、やや時間的幅のあること、井藤氏の近江型甕の出現を第Ⅲ様式とみる見解には、その論拠に疑問のあること、長刀鉦町遺跡のSK1003の資料には、第Ⅱ様式以降の土器も含まれ、その一括性に若干疑問はあるが、C-IがC-IIより古いとする指摘は認められるとした上で、近江型甕の口縁部の形態をⅠ-Ⅳ型式の4つの型式に分類し、口縁外面で明確な段のなさないⅠ型式を第Ⅱ様式古に、外面に稜をもち、端部のヨコナデが顕著でないⅡ型式を第Ⅲ様式新-第Ⅲ様式古に、外面に稜をもち、端部から内面にヨコナデがみえるが、内面に明確な曲折のみられないⅢ型式を第Ⅲ様式新に、内面にヨコナデによるとみられる明瞭な曲折をみるⅣ型式を第Ⅲ様式に比定した。そして、かかる近江型甕のあり方と、大和型(畿内型)甕=甕Aにみえる近江的な特徴を軸に、山城、近江の中期前半の甕を検討して、その地域色の境界が桂川にあること、「桂川以東では、近江型甕という遠賀川式土器の甕からは変化の説明のつけ難い甕が大和型甕と並び行われた地域であり、遠賀川式土器の甕からの器形変化が割合スムーズにたどれる甕のみの畿内とは甕製作の伝統を大きく異にする部分が存在したであろう」とされた(文献30)。この浜崎氏の見解によって、近江型甕の口縁部形状と成形の型式学的な研究が深化され、その地域性がさらに明らかになったと言えるが、近江における弥生土器の編年作業が十分に進展していない現状では、若干問題の残る点もあろう。

これに対し、主として湖南地域——特に守山市域における、近江型甕を、最近調査のすずんだ、寺中、小津浜、下之

郷、吉身西などなどの諸遺跡の出土土器を中心に検討された山崎秀二氏は、いわゆる近江型の甕を大きく三つのグループに分類して、その系譜関係を指摘された。まず、近江型甕の祖型になるものとして、口縁部の内外を指ハケで調整した「く」字状口縁をもつ寺中遺跡出土の甕（A）、口縁部の対応する4ヶ所を粘土を粘り出して波状（山形）にし、端部に刻目を施し、外面をタテハケの後指ハケで調整した服部遺跡出土の甕（B）を提示し、これらがⅡ様式とみられること、形態手法上いわゆる近江型と異なることを指摘して、近江型甕の祖型となる「疑近江型甕」と呼んで区別することを提唱された。次いで、近江型甕については、佐原氏の指摘を継承して「口縁部外面に稜から上を横あるいは斜め刷毛とするもの」とし、口縁部の成形の場合には粘土を粘り足す場合でも、口縁部の外面に粘り足し、横ハケ調整しており、完全に2段に口縁部を成形する、いわゆる受口状口縁甕とは区別することを論じ、寺中遺跡や小津浜遺跡の資料から、第Ⅲ様式の段階では、確実に確認できるとされた。そして最後に、いわゆる受口状口縁甕と近江型甕の差異に注目し、頸部から頸部を一段で成形し、頸から口縁までを一段で成形し、口縁部の成形を二段で成形する甕を「受口状口縁甕」と呼んで区別した上で、下部遺跡や吉身西遺跡の資料の検討から、「Ⅳ様式の古い段階には未だ半数以上を近江型甕で占め、逆にⅣ様式の新しい段階にはその大半を受口状口縁が占めるという傾向をみせる」と、漸次的な変化を指摘された。そして受口状口縁甕についても、口縁部のほぼ上半を指ナゲし、弱い稜をもつA類と、口縁部全面を指ナゲせず、斜め刷毛で調整するB類の二種があり、B類からA類へ変化することを指摘した（文獻15）。

山崎氏の見解は、近江型甕の変遷に、大きく三つの段階のあることを指摘し、特に近江型甕から受口状口縁甕への変遷を解明されたことは注目されるが、差異を強調される余り、その系譜的なつながり面については、論及が省略されており、再論を期待したい。そして、さらに詳しく段階設定がなされることを希望したい。

以上の学史的検討によつて、近江型甕の系譜については、ようやくその全貌が明らかになりつつあると言える。ただ、その具体的な変遷については、資料不足もあって、不鮮明な点も、いまだ少なくないと言える。そこで次に学史上における問題点をもう一度整理しておく必要がある。

c. 近江型甕の系譜

まず、近江型甕についての用語における混乱の整理がなされる必要がある。近江型の呼称そのものについては、佐原氏において、既にⅡ様式の段階にみえる甕Bと、Ⅴ様式以降にみえる、いわゆる受口状口縁をもつ甕の区別が明確でなく、特に「集成」に引用された資料に、Ⅲ様式以降の資料が含まれていたため、すでに早くより混乱の目は存在したが、上述のように福岡氏によって、その間の整理がなされ、いわゆる佐原氏の甕Bと、その系譜に包摂されるが、口縁端部が明確に屈曲し、垂直ないし内傾して区別される甕C（受口状口縁甕）の存在が指摘され、佐原氏がⅡ様式の新段階に出現するとされた甕Bに、Ⅲ様式以降に降るものも含まれることを指摘された。

この指摘によつて、いわゆる近江型甕が、Ⅱ様式からⅢ様式以降まで系譜的につながっていることを、形態や手法の上で、大きく二つのグループが存在することが明らかにされた。そして、中西氏によってⅤ様式以降に一般的な受口状口縁甕の祖型が、甕Bにつながる事が指摘され、Ⅱ様式以降、古墳時代前期までの、近江型甕の系譜が明らかになったのである。ところが佐原氏による、近江型甕についての指摘が、「集成」という、強い影響力をもつ論考にあったこともあり、福岡氏や中西氏の指摘が十分に摂取されず、いわゆる甕BがⅢ様式以降に出現するが如き理解が、一部でなされることになったのである。そして、そのことが明確に認識され始めたのは、昭和60年以降、山城、近江において資料が増加し、その変遷がある程度たどれるようになってからのことである。

若松氏の見解は、地元近江より早い段階で資料が増加した山城での様相をとらえ、近江型甕の変遷を全体的に検討するとともに、その祖型を、縄文晩期の滋賀里Ⅲ式の山形口縁に求める意欲的なものであるが、若松氏の見解で特に注目

されるのは、臺Bが明確にⅡ様式の段階（実際はⅢ様式）に存在することを明らかにされたこと、この段階の臺Bには、いわゆる立ち上がりが全属するものと、山形口縁をなす二者に分離することを提唱されたことであろう。

これに対し、浜崎氏は、近江型臺の口縁部の型式編年を軸に、佐原氏の見解を継承してⅡ様式臺の分布から、その地域性を具体的に分析された。浜崎氏による、口縁部の形状、成形手法による型式編年については、必ずしも良好な資料によったものではなく、一つの傾向を示すにとどまったと言える。ただその地域性の検討によって、近江型臺の伝統が、かなり根深い背景のもとになされていることが明らかになったわけで、大和型臺における近江的な特徴の存在とともに、その祖型を考える上で無視し得ないであろう。

これら、山城出土の資料に依拠した見解に対し、始めて近江、しかもその中心部の資料によって、近江型臺について検討されたのが山崎氏である。山崎氏は、これらの諸研究を整理して近江型臺の典型を、佐原氏の言う臺Bに求め、それが、Ⅲ様式以降に行なわれたことを確認した上で、これとは異質の波状口縁をもつ臺や、浜崎氏がⅠ型式とした臺を、「擬近江型」とし、口縁部の成形手法の異なるⅣ様式以降に出現する臺を、「受口状口縁臺」とすることを提唱されたのであるが、それでは近江型臺は、弥生中期のある時期にみられる近江地方の臺ということになり、限定された器種を示すことになってしまうのである。ただ上述のように、学史を検討するなら、近江型臺とは、分布の中心を近江におく、地域色の強い臺のこととして呼称されてものであり、福岡氏が先駆的に分類されているように、又中西氏や若松氏が指摘しておられるように、大きな範囲の中で使用すべきと考える。したがって、近江型の臺とは、近江地方に分布の中心のある臺の呼称として用いることとし、それを、若松氏や浜崎氏のように、その成形手法や調整手法などで分類していく視点が継承されるべきと考える。その点で、これらの学史の検討によって近江型臺は次の三つの類型に分類できるであろう。

近江型臺＝臺B

- (B 1) 口縁が波状ないし山形をなすもの
 - B 1-I 波状口縁もなすもの
 - B 1-II 山形口縁をなすもの
- (B 2) 口縁をやや屈曲させ肩部を立ち上がらせるもの
 - B 2-I 口縁部が外傾し、屈曲が明確でないもの
 - B 2-II 口縁部がやや直立気味になるもの
- (B 3) 口縁部を二段に成形するもの
 - B 3-I 口縁外面を斜めハケのみで調整するもの
 - B 3-II 口縁外面のほぼ上半を指ナゲ下半にハケを残すもの
 - B 3-III 口縁外面に刺突列点を多用するもの

B 1-Iとしたものは、従来、いわゆる波状口縁、或は山形口縁の臺とされてきたもののうち、口縁が4ヶ所の突出部分となって、完全に波状を呈すもので、4ヶ所に三角状の山形突起を貼り出すタイプとに区別した。山崎氏の擬近江型臺とされているもののうち、Aとされたものがこれに当る。なお山崎氏がBとされたものについては、近江の特徴をもつものではあるが、様をもたないものであって、浜崎氏の提言を継承して近江型臺の範疇には含まれないものとして、一応除外しておきたい。B 1-Iの例としては、寺中、服部の資料、南滋賀の資料、或は長刀鋒町の資料などにみられるだけで、いまだ資料的には明確でないものの、明らかにⅡ様式ないしそれ以前にみられるものである。B 1-IIとしたのは、いわゆる山形口縁をなすもので、口縁全体としては波状をなさず、低い三角形の粘土を、口縁部の4ヶ所に貼り付けたもので、ある意味ではB 1-Iの退化した形態ともみられる。B 1-IIの資料についても、必ずしも良好な資料

は認められないが、服部、長刀鉾町、南滋賀、深草、堤ヶ谷、鳥丸崎、小津浜、納所などの資料にみえ、Ⅱ様式からⅢ様式にみられる（なお後述）。

B 2は、佐原氏の指摘された、典型的な近江型の髷であり、佐原氏の髷Bの一部、福岡氏の髷B、浜崎氏のⅡ型式、山崎氏の近江型髷に該当する。口縁部の屈曲はゆるやかで、内外面とも、B 3にくらべれば明確でない。これらについても、資料は必ずしも豊富でないが、多くの遺跡で出土をみており、特に服部遺跡のSD151、SD152の資料や、下之郷遺跡や寺中遺跡等の資料等により、その変遷が、かなり明確になりつつある。その中心は、Ⅲ様式からⅣ様式にあるとみられる。それについては、改めて検討を加えたい。なお、その初現は、Ⅱ様式にあることは確実で、Ⅴ様式では全くみることができない。

B 3は、いわゆる受口状口縁髷である。山崎氏によって、口縁部の成形に二段で成形することが指摘されているが、福岡氏によって、口縁の立ち上がり、直立ないし、内傾し、外面にハケやナデのみられるもので、髷として髷Bと区別されたものである。山崎氏によって、これらがⅣ様式の段階で出現し、その新しい段階では、その大半を占めることが指摘され、この段階でのB 3タイプを、さらに細分し、口縁部外面を斜めハケのみに調整するもの（B 3-I）、口縁部外面のほぼ上半を指ナデし、下半のみにハケを残すもの（B 3-II）、明確な稜をもち、口縁外面に刺突列点を多用するもの（B 3-III）の3種に区別するとともに、それらが、I→II→IIIへと漸進的に変化することを指摘された。ただそれが、どのような段階を示すものか、必ずしも具体的には示されていない。B 3タイプは、弥生後期に入ってさらに多様な展開をとり、右留式段階まで強固な伝統を残し、その系譜は、いわゆる近江型長調髷にまで及ぶとみられるが、ここでは、論及は差し控えたい。

以上の整理によって、近江型髷が中期の段階では、大きく三つの形態に分類できることが明らかになった。そしてB 1-Iがほぼ、Ⅱ様式以前に限定され、B 1-IIがⅢ様式以降に残らないことも、ほぼ確定的であろう。そして、B 2はⅢ様式以降に出現し、Ⅱ様式の古い段階ではほぼ消滅し、かわってB 3がⅣ様式以降に出現し、その後半には、主流を占めることも、ほぼ間違いないところであろう。ただ、B 1、B 2タイプとB 2、B 3タイプの系譜的な関係については、必ずしも明確ではない。すなわち、B 2タイプの祖型としては、福岡氏が早く示唆した、口縁部或は外面の端部近くを横ハケする大和型髷の影響とみる見解が有力であり、浜崎氏も近江型髷Ⅰ型式とした口縁部外面で明確な稜をもたない髷が、かかる大和型髷の影響を受けてB 2タイプを出現させたともみられる。浜崎氏はそのⅠ型式に分類された中にB 1タイプを含めておられるようで、もしそうなら、B 1タイプが口縁部に横ハケ調整を加えた大和型髷の影響を受けて、B 2タイプが出現したことになり、両者の関係がスムーズにたどることができる。この点について、山崎氏も寺中遺跡出土の口縁部の内外面を横ハケした「く」字髷と、服部遺跡出土の波状口縁の髷の調整上における類似性を指摘しており、注目されよう。ただB 2タイプ出現後も、B 1-IIタイプは依然行なわれており、Ⅲ様式の段階では、ほぼ共存していたとみられる。いづれにしても、B 2タイプの祖型については、B 1タイプの祖型を滋賀県Ⅲ式の山形口縁の髷に求める見解とともに、今後の資料の増加をまって、解明される必要がある。

d. 近江型髷の展開

そこで次に、それぞれのタイプの消長を、もう少し、具体的な資料によって追ってみたい。まずB 1-Iタイプとしたものについては、前期にその例は現在のところ知られておらず、Ⅱ様式に出現することは間違いないと考えられる。服部遺跡で、Ⅱ様式の古い段階とみられる中に、砲弾状のプローションをとる口縁部は外上方にのびるが、対応する4ヶ所を波状に、粘土を粘り足して成形した髷がみえる（文獻32）。端部に割目を通し、胴部から口縁部にかけては、縦方向の粗いハケ目で調整され、波状にした口縁外面を中心に、さらに横ハケによる調整が加えられていた。

長刀鉾町でCⅠとされたものや、浜崎氏がI型式とされたものと、ほぼ一致しており、現在のところ、出土例は少ないが、ほかに草津市七条浦（文献25）、米原町入江内湖（文献23）、南滋賀遺跡（文献23）などにその例が認められ、Ⅲ様式に降るものは、現在のところ認められない。長刀鉾町の資料については、I様式に遡る可能性も指摘されているが、現在のところ確認されたものはない。BⅠ-Ⅱタイプは、BⅠ-Iタイプの後出的な形態とみとめられ、BⅠ-Iのごとく、口縁全体が波状をなすものではなく、水平な口縁の4ヶ所に低い三角状に粘土を貼り足して、山形口縁につくるもので、非山形口縁の部分は、破片の場合、非山形口縁と見誤る可能性がある。この種の甕は近江では、寺中遺跡（文献33）、小津浜遺跡（文献34）、服部遺跡（文献32）、塙ヶ谷遺跡（文献35）、鳥丸崎遺跡（文献36）、高木遺跡（文献37）、入江内湖遺跡、南滋賀遺跡などで、その例がみられ、県外では、長刀鉾町遺跡、深草遺跡（文献38）、東庄内B遺跡（文献39）、納所遺跡（文献5）などに例がみえる。三重のものは、形態的には山形というより波状のものが多くいようであるが、古い様相を残したもので、Ⅳ様式のものともみられる。これらはBⅠ-Iにくらべ、口縁部の立ち上がりは、より長くなり、粗いハケによって調整されており、頸部以下に縦文、口縁部は斜ないし横位のハケ調整がみられる。若松氏がCⅡとされたものに該当し、浜崎氏のⅡ型式の一部を含む、時期は必ずしも明確なもの多くないが、いずれもⅡ様式の古い段階に遡るものや、Ⅳ様式に降るものはほとんどなく、Ⅱ様式の新しい段階からⅢ様式の古い段階を中心とし、一部Ⅲ様式の新しい段階に降るものがある可能性が考えられる。そして、Ⅲ様式段階には、ある段階からBⅡタイプが伴出している。寺中遺跡、塙ヶ谷遺跡、深草遺跡、南滋賀遺跡などがそれである。したがって、BⅠ-Ⅱタイプは、BⅡタイプ出現後も、しばらくの間併存したとみられるが、Ⅳ様式の段階には完全に消滅すると考えられる。その変遷を明確化する資料には、めぐまれていないが若干の検討を加えておきたい。

まず寺中遺跡の資料は、必ずしも明確な一括資料ではないが、いわゆる白線文盛行以前の土器で、前期の遺物も含まないところから、Ⅲ様式の一つの傾向を示すといわれている。報告書はこのうち甕について検討を加え、近江型甕4に対し大和型甕1の比率であること、内面にハケ原体による波状文を加えるものと、加えない二者のあることを指摘し、時期差を示すものとされた。

ところで、古い様相をもつとされた4点をみると、BⅠ-Iとした波状口縁をもつのが2点（4も波状口縁とみる）、BⅡが1点、近江型とは考えられないものの1点ということになる。これに対し新しい様相を示すとされたものは、いずれもBⅡタイプということになる。報告書は、新しいタイプをⅢ様式以降と考えておられるようであるが、共伴の土器からみてⅣ様式まで降るものはないから、Ⅲ様式の古い段階から新しい段階の様相を伝えるものと、一応考えておきたい。この考えが認められるなら、内面波状文の有無や、波状文の口縁の消滅で、Ⅲの古、新の段階区分をすることが可能になるかもしれない。

長刀鉾町遺跡の資料についてはSK1003についてもⅡ様式だけでなくⅢ様式の古い段階のものも含むと指摘されるほか、多くの遺物が、Ⅱ、Ⅲ様式の資料を混在しており、必ずしも良好な資料と言えない。ただⅡ様式とされる資料中ⅡBⅠ-Ⅱの資料の大半が、内面に波状文をもっており、（一部BⅡになる可能性のものもあるが）古い様相を示すものと言えよう。したがって、寺中遺跡の資料と比較するなら、その古い部分に対応することが予想できよう。

塙ヶ谷遺跡の資料については、Ⅲ様式でも古い様相を示すと報告されていたが、近年これを、Ⅳ様式でも新しい段階にみる見解も出されている。甕の資料をみると、報告の中で甕とみられるのは7点で、このうちBⅠ-Ⅱタイプが3点、BⅡタイプが2点、大和型とみられるものが2点である。このうちBⅠ-IとBⅡの各1点を除いて、すべて内面に波状文をもっており、古い様相をもつことは否定できない。このことは他の器種についても言えるところで、Ⅲ様式の古段階とみることができよう。したがって、ここまでの検討では、一部重複しつつも、長刀鉾→塙ヶ谷→寺中という傾向がみられる。



1—1 瓦当纹样拓片(按瓦当纹样拓片)

第59图 寺中遗址出土瓦器

深草遺跡の資料は、第Ⅱ様式新から第Ⅲ様式古段階のものとみられているが、堯の資料でB1-Ⅱタイプが3点、B2タイプが2点認められる。1956年調査のB1-Ⅱタイプ1点と、B2タイプ2点には、内面に波状文はなく、1952年調査のB1-Ⅱタイプ2点には内面に波状文が認められ、若干の時期差が推定される。

南浜遺跡の資料では、B1-Ⅱタイプが3点、B2タイプが4点（小破片で区別がむづかしい）があるが、このうちB2タイプの2点が内面ハケ目で、他はすべて内面波状文であり、傾向としては古い様相を示すとみられる。

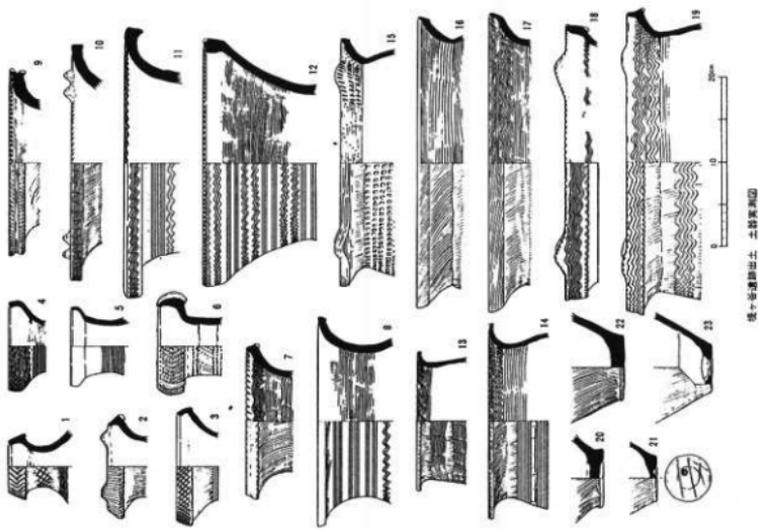
鳥丸崎の資料では、方形周溝墓の一括資料中に、波状口縁のB1-Iタイプが2点知られる。ここでは、大和型やB2タイプもみられないが、内外面とも口縁部については横ハケにより調整しており、年代的には、やや新しい様相をもつ、共伴の遺物のうち、高杯については、畿内ではⅡ様式段階に特有なものであるが、大和型の變についてはやや新しい要素があつて、Ⅲ様式の古い段階から、やや新しい様相をもつかもしれない。

高木遺跡の資料については、報告書では共伴関係が明確にされていないが、B1-Ⅱタイプは3点知られる。明確なB2タイプは、報告書中からは認められず、B3タイプの古い様相のものは、若干含まれているようである。B1-Ⅱタイプのうち1点のみ、内面に波状文がみられる。報告では、Ⅱ・Ⅲ期とされているが、Ⅲの古い段階が一定想定される。

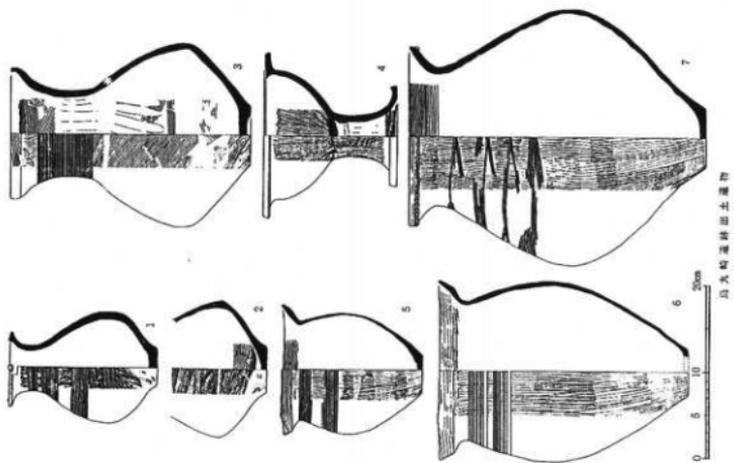
以上、B1-ⅡタイプとB2タイプを伴出する資料について、若干の傾向を検討してきたが、B1-Ⅱタイプを伴出するのが、B1タイプでも古い様相をもつものが多く、Ⅲ様式の古い段階でB1-Ⅱタイプは消滅し、以後はB2タイプが主流をなすことが判明する。次にB2タイプについては、特に取り上げるまでもなく、近江では普遍的に出土する壺であり、Ⅱ様式段階では、余り例がなく、Ⅲ様式以降に、B1-Ⅱタイプと大和型壺（近江の特徴をもつ）から創出されたことが推定されている。上述のように、B2タイプとB3タイプの区別については、早く福岡氏によって、BタイプとCタイプに区別することが提唱され、浜崎氏は、内面の稜の明瞭なⅢ型式と、内面に指ナダによる明確な曲折のあるⅣ型式に区別された。山崎氏は、これらの提言を継承して、B2タイプの場合は、粘土を新しく粘る場合は、口縁部の外面につけ、稜をつけて横ハケするのに対し、B3タイプの場合は口縁を頸部から頸部と、頸部から口縁の二段階で成形され、粘土を粘り足す場合は、端部内側に行っていることを指摘された。したがってB2タイプは、手法的には、B1-Iタイプ、B1-Ⅱタイプのそれを一定引きついでのものであることが判明する。B2タイプの成立については、さきにも少し検討したように、B1タイプと近江の特徴を備えたAタイプの影響下に形成されたと考えられるが、上にみたようにⅢ様式の古い段階に中心をもつとみられる、守山市寺中や近江八幡市場ヶ谷では、B1-ⅡタイプとB2タイプが、約半数を占めており、Ⅲ様式段階では、かなり一般化していることが知られる。したがって、B2タイプは、すでにⅡ様式の段階で出現している可能性が高い。事実、やや問題点を残しながらも、いくつかの遺跡で、Ⅱ様式に伴って、B2タイプがみられ、Ⅱ様式の新しい段階には出現していたと考えておきたい。

B2タイプの変遷については、必ずしも、明確な指摘はないが、浜崎氏が、そのⅢ型式とⅣ型式の口縁部の形態上のちがいとされた、I様式の外面に稜をもち、端部内面のヨコナダが顕著でないもの（B2-I）と、口縁部外面には稜をもつが、内面にはヨコナダが認められるもの、明確な曲折がみられないもの（B2-II）とに分類し、前者から後者への変遷を考えられた点は参考になるであろう。そして、内面に波状文を残すものとハケ目を残すもの間には、やはり、時期差が想定されるのである。このことは、さきにB1の資料を検討した際にも、一応検討したところでもあるが、山崎秀二氏は、寺中遺跡の資料を検討し、かかる傾向を指摘されている。

浜崎氏はⅡ型式を、Ⅱ様式新段階からⅢ様式古段階に、Ⅲ型式をⅢ様式の新段階に考え、山崎氏はⅢ様式の古段階と、Ⅲ様式の新段階からⅣ様式にかけて、推定されているが、上述のように、B2の初現は一部Ⅱ様式に遡及するようで、B2-Iは、Ⅱ様式の新からⅢ様式の古段階、B2-IIはⅢ様式の中段階からⅢ様式の古段階までで存続していたと考え



堤ヶ谷遺跡出土 土器実測図



鳥丸崎遺跡出土土器

第60図 堤ヶ谷遺跡・鳥丸崎遺跡出土土器

ておきたい。B 2 の下限については、服部遺跡の SD152 において、B 2-II が 50% を占め、残り 50% を B 3-I が占めているのに対し、それに後続するとみられる下之郷遺跡環濠 3 では、B 2 タイプは完全に消滅し、すべて B 3 タイプとなっていることから、首肯されることである。ただ、B 2-I、B 2-II の器種構成に占める割合などについては、特に B 2-I について良好な資料に恵まれず、一つの憶測を出るものではなく、今後の検討がさらに必要と考えられよう。

次に B 3 タイプについては、上述のように福岡氏による B タイプの細分によって、ここでいう B 2 タイプの系譜を引きつつ成立したこと、Ⅲ、Ⅳ様式にみられることが指摘されているが、その後浜崎氏によって、Ⅳ型式として設定され、内面に明確な曲折のみられないⅢ型式に対し、内面に明確な横ナデによる曲折のみとめられるものとして、第Ⅳ様式に移行することが指摘された。これに対し山崎氏は、いわゆる近江型とされる変 B が、口縁部の成形を一段階で行なうのに対し、受口状口縁部の場合は二段階の成形の過程を経て、口縁部が形成されるとして、その区別を明確化されたのである。そして、守山市下之郷遺跡の 3 本の環濠の資料を分析して、口縁外面をハケ調整するもの (B 3-I)、口縁外面の上端をナデするもの (B 3-II)、口縁部に列点文を施すもの (B 3-III) に区別して、順に変遷することを指摘された。このことは、他の遺跡においても、ほぼ検証されることであるが、服部遺跡の SD151、SD152、SD201 の諸資料と、守山市内の若干の遺跡の資料によって、次にやや詳しく検討しておきたい。これらの諸資料の全体的な序列については、前節で検討しているので、ここでは結論的に述べることにしたい。

まずこれらの諸資料で最も古く位置づけられるのは、服部 SD151 下層と下之郷環濠 1 の資料である。ここでは、B 2 タイプと B 3 タイプが、ほぼ半々を占め、B 2 タイプの大半は B 2-II が、B 3 タイプの大半も B 3-I が大半を占めている。これに対し、これらの諸資料に後続するとみられる服部 SD152 では、B 2 タイプは 10% 前後となり、90% 以上を B 3 タイプが占めており、B 3 タイプの中では、B 3-II タイプがすでに半数を占め、B 3-I タイプとはほぼ同数となっている。

SD152 に後続するとみられる下之郷環濠 3 では、B 2 タイプはきわめて少なく、大半を B 3 タイプが占め、B 3 タイプの中では、B 3-I は大きく減少し、逆に B 3-II が過半数を占めるだけでなく、B 3-III が若干出現している。そして、下之郷環濠 3 に後続する、二ノ畦遺跡や下之郷環濠 2 では、B 2 タイプは完全に姿を消し、B 3 タイプがその全体を占めている。そして、B 3 タイプのうちでも、B 3-II タイプが若干残るのみで、B 3-III タイプが大半を占めるに到っているのである。前節で検討しているように、SD151 の下層については、一応Ⅲ様式の新しい段階に、二ノ畦遺跡の資料については、Ⅳ様式の新しい段階に比定され、ほぼ中期中業末から中期後業末までの時間幅の中での変遷と考えておきたい。

ところで、B 3 タイプの出現については、山崎氏も指摘しておられるように、Ⅲ様式の新しい段階以降の、畿内系土器群の大幅な流入と深い関係がある模様であり、特にⅣ様式期の壺の主流を占める、壺 G の二段成形の口縁部の手法の影響は無視し得ないところであろう。ただそれらの検討については、さらに詳細な土器群の分析が必要となるとと思われる。

e. まとめ

以上の検討によって、近江型壺の系譜と展開について、弥生中期の動向を中心に検討してきた。そこで明らかになったことは、近江の壺が近江型と称せられるように、中期初頭以降、独自の形態と手法をもって、明確な地域性を示していることであろう。近江型壺の地域圏についていえば、中期前半の様相については浜崎信司氏に詳細な検討があり、中期末から後期については、中西常雄氏の検討がある。ただ、中期中業を前後する時期については、資料的に十分でなく、不分明な点が残されている。このうち、近江型壺の畿内への流入については、湖西高島産の粘板岩製石包丁の分布との

対応から、交流圏の存在が推定されており（文献40）、今後、さらに検討が必要であろう。

後期特にその後半以降に入ると、近江型甕は、さらに強い地域色を示し、甕と鉢のほとんどを占め、独自の展開を示すことになるが、中西氏による先駆的な指摘にもあるように（文献41）、さらに複雑な地域的動向も加味される模様である。それらの詳細な検討については、別に考察するとして、ここでは、従来、学史的に一部混乱のあった、近江型甕の系譜について、若干の整理を試み、そのうえで、若干の展開過程についての論究を行うにとどめることにした。

（大橋信弥）

文献一覧

- ① 『馬場遺跡発掘調査報告書』（滋賀県教育委員会、1984）
- ② 「高島郡今津町弘川遺跡」（『ほ場整備関係発掘調査報告書』Ⅴ-3、1980）
- ③ 「D之郷遺跡発掘調査報告書」（守山市文化財発掘調査第26冊、1986）
- ④ 吉岡博之「乙調地方中期弥生土器の様相」（『長岡京古文化論叢』、1979）
- ⑤ 『納所遺跡—遺構と遺物—』（三重県教育委員会、1980）
- ⑥ 『上笠田』（三重県立神戸高等学校郷土研究クラブ、1960）
- ⑦ 「亀井遺跡」（『昭和47年度県営園場整備事業地域 堀成文化財発掘調査報告書』、三重県教育委員会、1973）
- ⑧ 「高島郡今津町北仰・桂遺跡」（『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』XII-8、滋賀県教育委員会、1984）
- ⑨ 「長沢遺跡」（『国道8号線長浜バイパス関連遺跡調査報告書』Ⅲ、滋賀県教育委員会、1972）
- ⑩ 『亀井遺跡』（大阪文化財センター、1982）
- ⑪ 『池上遺跡』第二分冊〔土器編〕（大阪文化財センター、1979）
- ⑫ 『思地遺跡』Ⅰ〔本文編〕、Ⅲ〔資料編〕（大阪文化財センター、1980、1981）
- ⑬ 『明日遺跡』（愛知県教育委員会、1982）
- ⑭ 「草津市志那中遺跡」（『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』Ⅴ、滋賀県教育委員会、1977）
- ⑮ 「下之郷遺跡発掘調査概報」（『守山市文化財調査報告書』第20冊、守山市教育委員会、1986）
- ⑯ 「二ノ畦遺跡発掘調査報告書」（守山市文化財調査報告書第30冊、守山市教育委員会、1987）
- ⑰ 森岡秀人「西ノ辻N式併行土器群の動態—畿内第Ⅳ様式の細分作業と関連して—」（『森岡次郎博士古稀記念古文化論集』、1982）
- ⑱ 井藤暎子「入門講座 弥生土器—近畿5—」（『月刊考古学ジャーナル』219、1983）
- ⑲ 森岡秀人「大阪湾沿岸の弥生土器の編年と年代」（『高地性集落と倭国大乱』、1984）
- ⑳ 小林行雄「大阪府枚岡市額田町西之辻遺跡N地点の土器」（『弥生式土器集成。資料篇1、1958』）
- ㉑ 『鬼塚遺跡Ⅱ・若江遺跡』（東大阪市教育委員会、1979）
- ㉒ 『伊勢遺跡発掘調査報告』（『守山市文化財調査報告書』第12冊、守山市教育委員会、1982）
- ㉓ 佐原真「先史時代」（『彦根市史』上冊、1960）
- ㉔ 佐原真「畿内地方」（小林行雄、杉原莊介編『弥生式土器集成。本編2、1968』）
- ㉕ 佐原真「琵琶湖地方」（小林行雄、杉原莊介編『弥生式土器集成。本編2、1968』）
- ㉖ 佐原真「1971年の動向 弥生時代（下）」（『月刊考古学ジャーナル』74、1972）
- ㉗ 福岡澄男「中期壘型土器の一類型」（『湖西線関係遺跡調査報告書』、滋賀県教育委員会、1973）
- ㉘ 中西常雄「北天津の変貌—弥生時代から古墳時代へ—」（1979）
- ㉙ 井藤暎子「入門講座 弥生土器—近畿2—」（『月刊考古学ジャーナル』202、1982）

- ⑤ 浜崎悟司「弥生土器墓にみられる地域色—山城—近江地方弥生時代中期前半の要—」（『滋賀県埋蔵文化財センター紀要1、昭和60年度、1987』）
- ⑥ 若松良一「弥生時代の遺構、遺物」（『平安京左京4条3坊13町—長刀鉾遺跡—、古代学協会、1984』）
- ⑦ 「服部遺跡発掘調査報告書」I（滋賀県教育委員会、1987）
- ⑧ 「寺中遺跡発掘調査概報」（『守山市文化財調査報告書』第20冊、守山市教育委員会、1986）
- ⑨ 岡本武憲「小津浜遺跡S X 1出土の弥生土器」（『滋賀考古』創刊号）
- ⑩ 岩崎直也「湖東における高地性集落の調査」（『滋賀県文化財だより』68、1972）
- ⑪ 伊庭功「鳥丸崎遺跡出土の弥生中期の土器について」（『滋賀考古』創刊号）
- ⑫ 「県営干拓地等農地整備事業関係発掘調査報告書Ⅲ—浅小平（高木）遺跡—」（滋賀県教育委員会、1986）
- ⑬ 杉原莊介、大塚初重「京都府深草遺跡」（『日本農耕文化の生成』本文篇、1961）
- ⑭ 「東庄内B遺跡」（『東名阪道路埋蔵文化財調査報告書』、三重県教育委員会、1970）
- ⑮ 千喜良淳「弥生時代の畑ノ前遺跡」（『仮称』精華ニュータウン子定地内遺跡発掘調査報告書—煤谷川窟址・畑ノ前遺跡—、精華町教育委員会、古代学協会、1987）
- ⑯ 中西常雄「近江における変型土器の動向—庄内期を中心として—」（『考古学研究』125、1985）

SD151・SD152A・SD152B出土土器観察表

遺物番号	器種・型式	出土 層位	法 量 (単位cm) ■は次元値	口 縁 部	体 部	底 部 (備 考)	色 調	胎 土
A001	壺C1	下層	口径 1.62	・外底中央にのびる筒状の口縁部で、上方において内折する。 ・内面ハケ目後ナデ ・外面ハケ目			淡褐色	良好
A002	壺D2	下層	口径 1.09	・「く」字状に鋭く屈曲して開く。端部はやや上方に肥厚する。 ・頸部に2個1組の円孔を穿つ ・内外面共横ナデ	・内面ハケ目後ナデ ・外面ハケ目		淡褐色	良好
A003 + A005 A009	壺G1	下層	口径 2.10 3.24	・外寫して開く頸部より屈曲しては2段上に立ち上がる。端部は平坦面を成すもの(A003)、平坦な面(A005)内傾する面(A004、A009)を呈するものがある。 ・外面横ナデ後3条の凹線文を施す。内面横ナデ ・頸部外面ハケ目、下方に横波、内面ナデ			淡褐色	良好
A006 + A008	壺G2 G3	下層	口径 2.82 3.50	・外寫して開く筒状の頸部より屈曲して、ほぼ直上に立ち上がる。A007は下方へ拡張する。端部は平坦な面(A006~007)外傾する面(A008)を呈する。 ・外面ハケ目、(A007)は頸部にのみA008に列点文を施す ・内面ハケ目、口縁部に横ナデ、頸部外面ハケ目、屈曲部に垂列(A007)頸部内面ハケ目		・G2(A008) G3(A006、A007)	淡褐色 淡灰褐色 (A009)	良好
A010 A011	壺C3	下層	口径 9.8 13.5 器高 24.6 腹径 18.8 底径 3.2	・筒状に短かく立ち上がる。端部は内傾する面を成す。 ・外面横ナデ後3条の凹線文を施す ・内面横ナデ ・頸部外面ハケ目	・最大径を位置に求める長卵形を呈する。 ・外面叩き後ハケ、内面ハケ目	・突出せず平底を呈する。 ・外面磨削り	淡灰褐色 (A010) 淡褐色 (A011)	良好
A012	壺C2	下層	口径 1.04	・外寫して開き、上方で内底中央に短かく立ち上がる。 ・内外面共ハケ目			淡灰褐色	細砂含有
A013 A014	壺I	下層	口径 1.01 1.09	・ほぼ頸部に立ち上がる。端部は平坦な面を成す。(A014)端部に頸口縁を施す ・外面ハケ目(A014)内外面共ハケ目		・A013(12) A014(11)	淡褐色	良好

遺物番号	器種・型式	出土 層位	法 量 (単位cm) ※は復元値	口 縁 部	体 形	底 (備 考)	色 調	胎 土
A015 A016 A019 ↓ A021	壺状器A	下層	口径 4.6			<ul style="list-style-type: none"> • やや突出した平底を呈す • 内外面共ハケ目 	淡赤褐色 淡赤褐色	良好 良好
A022	壺状器B	下層	口径 5.5			<ul style="list-style-type: none"> • ドーナツ状を呈す • 内外面共ハケ目 	淡褐色	良好
A017 A018 A023	壺状器C	下層	底部 5.1 ↓ 7.0			<ul style="list-style-type: none"> • 突出気味の上の方直 • 内外面共ハケ目 	淡赤褐色	良好
A024 A025	細頸器A2	下層	口径 6.3 8.6	<ul style="list-style-type: none"> • 長く細斗状の口、端部が平坦な面を成す • 内面に縦ナデ、横ナデ • 内面ハケ後横ナデ • 外面ハケ目 • 内面しほり目 (A025) 			淡茶褐色 (A024) 淡赤褐色 (A025)	良好
A026	細頸器B1	下層	口径 8.8	<ul style="list-style-type: none"> • 外側気味にのびる筒状の口部で上方において内折する。端部は内傾する面を成す • 内面ハケ後ナデ、外面縦文、横列、横溝 • 横溝文帯 (縦溝横文) 			淡褐色	良好
A027	細頸器D2	下層	口径 7.1	<ul style="list-style-type: none"> • 内折してのびる。端部が平坦な面を成す • 内面横ナデ • 外面4条の縦線文 			淡褐色	良好
A028	高杯B	下層	口径 2.43	<ul style="list-style-type: none"> • 水平線口縁を有する増部は下方へ拡張する • 内外面共横ナデ 			淡赤褐色	良好
A029	鉢B2	下層	口径 17.1 口径 16.8	<ul style="list-style-type: none"> • 鋭どく屈曲して外方へ開き、縁部は肥厚する • 内面横ナデ • 外面横ナデ後刻み目 	<ul style="list-style-type: none"> • 最大径を7方位に求められる球状を呈する • 内面ハケ目 • 外面刷毛列点文、直線文 		淡赤褐色	良好
A030	壺G4	下層	口径 17.0	<ul style="list-style-type: none"> • ほゞ垂直に立ち上がる端部が平坦な面を呈する • 内外面共横ナデ、端部縦線文 			淡褐色	良好
A031	鉢D	下層	口径 23.5	<ul style="list-style-type: none"> • 内折してすぼまる内傾する面を呈する 			淡褐色	良好
A032	鉢器部	下層	口径 10.6			<ul style="list-style-type: none"> • 緩やかに外折して開き、端部は凹状を呈す • 内面しほり目、寛削り、ハケ目 • 外面横ナデ 	淡褐色	良好
A033 ↓ A037	壺A1	下層	口径 13.7 ↓ 17.8	<ul style="list-style-type: none"> • 「く」字状に外反し、口縁部が平坦な面を成す • 内面ハケ目、外面縦横文 (A034～037) • 内面横ナデ、外面ハケ後横ナデ 			淡褐色 淡茶褐色 (A034)	良好

遺物番号	形種・形式	出土 層位	法 量 (単位cm) ※は復元値	口 縁 部	体 部	底 部 (備 考)	色 調	胎 土
A 038 ↓ A 040	壺A2	下層	口径 1.8.9 ↓ 2.7.9 腹径 2.6.6	・「く」字状に外反して開き、端部は肥厚する ○内面横ナデ ○外面前毛柱状文(A 038)、櫛形波状文(A 039)	・最大径を口径に求める異形を示す ○内外面共ハケ目		淡褐色	良好
A 041 ↓ A 042	壺A2	下層	口径 1.6.1 ↓ 1.8.1	・「く」字状に外反して開き、端部は上下に拡張する ○内外面共横ナデ			淡褐色	良好
A 043	壺底形	下層	底径 6.2			・やや突出した上げ底 ○外面叩き	淡茶褐色 煤片着	良好
A 044 ↓ A 049	壺C	下層	口径 1.3.0 ↓ 2.1.7	・緩やかに外湾して開き、端部は面を成すもの(A 044～A 046)、下部を拡張するもの(A 047～A 049)がある ○内面ハケ目、A 047 刷毛線状文 ○外面ハケ目、端部横ナデ後縁小目	○内面ナデ、外面ハケ目後縁列・横直等を施文	・C1 (A 044、A 046、A 048)～A 061、A 069 ・C2 (A 045、A 047、A 049)	淡茶褐色 暗茶褐色	良好
A 051 ↓ A 062 ↓ A 064 ↓ A 066 ↓ 068 ↓ A 069 ↓ A 072	壺B2	下層	口径 1.3.1 ↓ 2.5.1 腹径 1.3.3 ↓ 2.4.5	・傾斜して開く第2口径より第1口径は短かく直上乃至外気味に立ち上がる。端部は平坦又は内傾する面を成す ○内面ハケ目、A 056、063、064、066、068立ち上がり部ナデ、A 068 口縁部列点文、外面ハケ後上縁に横ナデ、端部に開片状文(A 058、060～062、069)	○内面ハケ後ナデ、外面ハケ後傾直・横列	・B2-I (A 051、A 054、A 059～A 061、A 064) ・B2-II (A 052、A 053、A 055、A 056～A 058、A 062、A 066、A 068、A 069、A 072)	淡茶褐色 暗茶褐色	良好
A 063 ↓ A 065 ↓ A 067 ↓ A 070 ↓ A 071	壺B3-I	下層	口径 1.8.3 ↓ 2.5.3	・傾斜して開く第2口径より第1口径は短かく内反して立ち上がる。端部は、平坦乃至内傾する面を成す ○内面ハケ目			暗茶褐色 淡褐色	良好
A 050 ↓ A 073 ↓ A 074	壺体・底部	下層	腹径 1.8.6 ↓ 2.3.2		・腹部がゆるな縦長の状部 ○内面ハケ後ナデ、外面ハケ後縁列・横直等を施文	・平底 ○内面ナデ、外面ハケ目	茶褐色 暗褐色	良好
A 075	壺C2	中層	口径 1.1.6	・細く外反気味にのび上層で短かく内折する。端部は内傾 ○内外面共ハクリ			茶褐色	良好
A 076	壺C3	中層	口径 2.4.0	・外湾して開く頸部より口径部は屈曲して内湾に立ち上がる。端部は内傾する面を成す ○内外面共ハケ目、口径部外面に横ナデ			淡褐色	良好
A 077	壺C2	中層	口径 1.1.6	・外反してのび上層は内折する			暗茶褐色	良好

遺物番号	器種・型式	出土 層位	法 量 (単位cm) ※は復元値	口 縁 部	体 部	底 (備 考)	色 調	胎 土
				<ul style="list-style-type: none"> 内外面共ハケ目、端面直線文、外周立ち上がり部に横線・欄列 				
A 078 A 079	壺K	中層	口径 10.8 11.7	<ul style="list-style-type: none"> やや外反気味に立ち上がる。肩部は丸く収める (A 078) 浅い凹面を成す (A 079) 内面ナデ 外面ハケ目、肩部ハケ直線文 (A 078) A 079 横ナデ後横線、肩部に直線文 			淡褐色	良好
A 080 A 082	壺腹部A	中層	口径 4.2 4.9			<ul style="list-style-type: none"> やや突出した平底を呈す 内面ハケ後ナデ 外面ハケ目 	淡褐色 淡赤褐色	良好
A 083	鉢B1	中層	口径 2.03 横径 1.68 底径 4.7	<ul style="list-style-type: none"> 短かく外内して広がり、肩部はやや肥厚気味で外縁する面を成す 内外面共横ナデ、肩部にハケ直線 	<ul style="list-style-type: none"> 底に段を成し器底的に底形に至る 内面ハケ後上半ナデ 外面ハケ後上半ナデ欄列・横線等を施文 	<ul style="list-style-type: none"> 安定した平底を呈す 内外面共ハケ目 	淡褐色 外面保持層	良好
A 084	台付無頸鉢A	中層	口径 1.78	<ul style="list-style-type: none"> やや内反気味に立ち上がり、上部で鋭く内折する。肩部は丸く納める。 内面横ナデ後直線文4条、径3.5mm程の円孔2個開 			淡赤褐色	良好
A 085	壺A1	中層	口径 1.52	<ul style="list-style-type: none"> 「く」字状に外反して開き、肩部は外縁する面を成す 内面ハケ目 外面横ナデ後肩部直線 	<ul style="list-style-type: none"> 内面ハケ後ナデ 外面開き後ハケ目 		淡褐色	良好
A 086	壺A2	中層	口径 2.01	<ul style="list-style-type: none"> 外反して開き、肩部は拡張して外縁する面を成す 内外面共横ナデ 			褐色	良好
A 087 A 088 A 091	壺B2	中層	口径 1.33 2.39 横径 1.26	<ul style="list-style-type: none"> 傾斜して開く第2口径より外反気味で直立して立ち上がる第1口径を有す。肩部は平坦 (A 087) 乃至内傾する面を成す 内面ハケ目、A 091 口縁部ナデ、肩部に横線文を施文 外面ハケ後上部に横ナデ A 087 頸部に2個1組の円孔 (径0.4cm) を穿つ 	<ul style="list-style-type: none"> 長胴形を呈す 内面ハケ後ナデ 外面ハケ後直線文を施文 	<ul style="list-style-type: none"> B 2 - I (A 087, A 089) B 2 - II (A 091) 	淡赤褐色	良好
A 089 A 090	壺B3-I	中層	口径 1.96	<ul style="list-style-type: none"> 水平に開く第2口径より第1口径は短かく直立する。肩部は浅い凹面を成す 外面ハケ後上部横ナデ、ヘラ直線文 内面ハケ目 	<ul style="list-style-type: none"> 外面ハケ目、横線列点文、直線文を施文 内面ハケ後ナデ 		淡褐色	良好
A 092	壺A1	上層	口径 2.11	<ul style="list-style-type: none"> 外内して大きく開き 			淡褐色	良好

遺物番号	器種・形式	出土 層位	法 定 (単位cm) 寸法	口 縁 部	体 部	底 部 (備 考)	色 調	胎 土
Ⅰ A094			Ⅰ 2.21	端部は外下方へ若しく拡張する ○内面A092模眼、 模成、A093羽状 模列、施面横ナデ、 A092、A094 部跡文、後部波(0 92)、片厚(09 4)			淡褐色	良好
A101 A102	壺F	上層	口径 2.16 Ⅰ 2.42	・外反して開く口縁部 で屈曲してさらに広 がる。端部を拡張す る ○内外同共横ナデ			淡褐色	良好
A099	壺A3	上層	口径 1.56	・本頸で筒状にのびる 頸部より口縁部は外 反して開く。端部は 肥厚する ○内面ナデ模列 ○外面端部横ナデ後部 波			淡褐色	良好
A154 A158	壺C1	上層	口径 1.94 Ⅰ 2.22	・大きく「く」字に外 反する口縁部で、端 部上面をなす ○内面ハケ、部汗痕文、 口縁部ハケ目			淡褐色	良好
A095 A096	壺C2	上層	口径 9.0 Ⅰ 12.8	・筒状の頸部より 外反して開く、上端 で内折する ○内外面ハケ目			淡褐色	良好
A097	壺D2	上層	口径 1.33 Ⅰ 2.33	・外反して短かく開き 端部はわずかに肥厚 して曲を成す ○内面横ナデ 外面ハケ後部跡文、 頸部に2個1組で径 5mm程の円孔を穿つ	・最大径を口径に突 るソロバン形を呈 する ○内面部汗痕、ハケ目 外面ハケ後部波	・「ハ」字状に開く ○内面しほり目、ハケ 目、外面ハケ目	淡褐色	良好
A098 A100	壺F	上層	口径 1.18 Ⅰ 1.22	・筒状の頸部より外反 して水平に開く口縁 部を有す ○内面ナデ、A098 ハケ目、100模列、 施面横ナデ			淡茶褐色	良好
A106 A107 A109	壺G2	上層	口径 9.4 Ⅰ 3.68	・外内して開く大い 筒状の頸部より屈曲し て立ち上がる ・端部は平坦な面を成 す(A106) ○内面ハケ後横ナデ 外面ハケ 頸部に指圧片帯文(A 106)			淡茶褐色	良好
A110	壺G3	上層	口径 2.26	・ゆるやかな圓曲で立 ち上がり、上部いつ くり			淡茶褐色	良好
A103 A112 Ⅰ A114	壺G4	上層	口径 1.37 Ⅰ 1.76	・緩やかに内湾しての びる ○内面横ナデ 外面横ナデ後部跡文 模列(A113、1 14)			淡茶褐色	良好
A104 A105	壺G1	上層	口径 1.58 Ⅰ	・外湾して開く筒状の 頸部より屈曲してや			淡茶褐色	良好

遺物番号	器種・形式	出上 部位	法 量 (単位cm) ※は復元値	口 縁 部	体 部	症 状 (備 考)	色 調	胎 土
A108 A111 A115			2.22	やや内湾気味に立ち上がる。端部は平坦な面を成す ○内面積ナデ A104、105上下部に、A111細い印文				
A116	壺A2		口径 9.6	○外反して開く口縁部で、上方において短かく立ち上がる ○外面ハケ目			淡褐色	良好
A117 A119	壺I	上唇	口径 9.7 10.7	○ほぼ垂直に立ち上がる。端部は平坦な面(A117)、内面は肥厚(A118)内傾する面(A119)を成す ○内面積ナデ 外面叩き後ハケ目(A117)、ハケ目(A118、119)		○I1(A117、A118) ○I2(A119)	淡褐色	良好
A120 A124 A126 A127	壺底部A	上唇	口径 4.1 6.1			○平底を早する。A126、127端部が外側へ肥厚 ○内面折り返、ハケ目 外面ハケ目	淡茶褐色	良好
A125	壺底部B	上唇	口径 4.2			○ドーナツ底を早する ○内面ハケ目	淡褐色	良好
A128	罎明器A1	上唇	口径 7.4	○やや内湾気味に開く漏斗状にのびる。端部は平坦な面を成す ○内面ナデ、しばり目 外面積ナデ後縁直、横表を交互に施文			淡赤褐色	良好
A129	高杯A2	上唇	口径 2.69	○内湾気味に開く杯部に開口に立ち上がる口縁部を有す。端部は平坦な面を成す ○内外面共調整不明			淡褐色	良好
A130	鉢E	上唇	口径 2.76	○杯部はほぼ内湾気味に立ちあがり端部は内方に肥厚し内傾する凹面をなす ○内外面ともハケ				
A131 A132	高杯B	上唇	口径 1.34 1.86			○直線的に開く杯部に水半縁口縁を有する。端部はやや肥厚(A131)、下部に著しく拡張(A132) ○内外面共ハケ目(A131)、内外面共調整(A132)。端部積ナデ	淡茶褐色	良好
A133 A139	高杯器部A	上唇	口径 10.5 15.8			○なだらかに外反して開く。端部は丸く納める(A133)肥厚する ○内面ハケ目(A136、137) 外面ハケ目	淡褐色	良好
A140 A142	鉢D	上唇	口径 1.51 2.08	○内折し端部は内傾する面を成す ○内外面共積ナデ、外	○内湾気味に斜上方へのびる ○内外面共ハケ目(A		淡茶褐色	良好

遺物番号	器種・型式	出土 層位	法 量 (単位cm) ※は後元値	口 縁 部	体 部	底 部 (備 考)	色 調	胎 土
				面凹線文。2個1組で径3mm程度の穿孔を穿つ(A141、142)	141)			
A143	鉢脚部	上層	底径 8.2			・知かく「ハ」字状に緩やかに開く。 ・内面しほり目 ・外面ハケ目、柱状部に貼付凸帯文	淡茶褐色	良好
A144 ↓ A148 A151	甕A1	上層	口径 11.0 ↓ 2.44	・「く」字状に外反して開き、端部は面を成す ・内外面共ハケ目、A145、148内面横ナデ外部外面横ナデ後部凹線文	・上腹部の張る長卵形を呈する ・内外面共ハケ目		淡茶褐色 暗茶褐色 (A148)	良好
A149 A150	甕A1	上層	口径 20.7 36.7	・「く」字状に外反して開き、端部はやや肥厚して外傾する面を成す ・内外面共ハケ目、端部外面朝毛土質(A149)	・上腹部の張る長卵形を呈する ・内外面共ハケ目、A150外面叩き		淡茶褐色 暗茶褐色 (A150)	良好
A152	甕A1	上層	口径 14.6	・外反して底部を内外方へ拡張する ・内外面共横ナデ			淡褐色	良好
A153 ↓ A160	甕C	上層	口径 16.9 ↓ 21.9	・大きく内凹した頸部から外開して広がる「ハ」部を有す。頸部は外傾する面を成すものと、拡張するもの(A159、160) ・内面横ナデ後部刻(A156、159、160)	・内面ハケ目後ナデ、指圧痕 ・外面ハケ目後部刻、腹直	・C1(A154、A156、A157～A160) ・C2(A153、A155)	淡褐色	良好
A161 A162 A193 A194	甕体・底部	上層			・A161、A162は下腹部の膨らみはほぼ球形を呈す(甕C2体部か) ・A193、A194は腹部の張る縦長を呈す ・内面ハケ目後ナデ仕上げ、外面ハケ目、A161、A162胴部に横列・縦直・斜格文を施文。A193、A194腹部に横直突帯、A194上腹部に縦直、横直同心円文	・A161、A162大きな平底を呈す。 A193は小さな上げ底 ・内面ハケ目後ナデ、外面ハケ目	淡褐色	良好
A166 A169 A170	甕B2-I	上層	口径 14.8 ↓ 24.0	・傾斜して開く第2口縁より屈曲して垂直又は、外反気味(A169、170)に見かく立ち上がる。端部は内傾(A168)。平沢(A166、169、170)な面を成す ・内面ハケ目 ・外面ハケ目、上腹部縦直突文			淡茶褐色 (170) 暗茶褐色 (166、169)	良好
A164	甕B2-II	上層	口径 16.9	・ほぼ水平に開く第2			暗茶褐色	良好

遺物番号	器種・型式	出土 層位	法 容 (単位cm) 計は復元値	口 縁 部	体 部	底 (備 考)	色 調	胎 土
A165 A167 A172 A174 A179				口縁より屈曲して垂直に立ち上がる。端部は平坦な面を成す。 ○内面ハケ目。口縁部横ナデ ○外面ハケ目。端部裏口頂				
A163 A168 A173 A175 A178 A180 A189	壺B3	上層	口径 1.59 3.28	・傾斜して閉く第2口縁より内反して立ち上がる第1口縁をもつ。端部は内傾する凹面を成す。 ○内面ハケ目、大半は立ち上がり部にナデを施す。口縁部に垂列(A183)、斜格状筋列(A184、A188) 外面ハケ目、上海横ナデ、端部裏口頂文(A181、A184)	・ト腹部の幅を制長を呈する。 ○内面ハケ後ナデ 外面ハケ後、横列、横置と横紋等を施文	○B3-I (A168、A179、A180) ○B3-II (A163、A181~A184、A186~A189)	暗茶褐色	良好
A190	壺B3-III	上層	口径 1.40	・傾斜して閉く第2口縁より第1口縁は外反して立ち上がる。端部は内傾する。 ○口縁部内外面共横ナデ。立ち上がり部外面に横筋	○内外面共ナデ 外面に筋列、横点を施す		暗茶褐色	良好
A191 A192	壺B3-IV	上層	口径 1.48 1.64	・水平に閉く第2口縁より第1口縁は大きく直立する。端部は外方へ引き出す。 ○口縁部内外面共横ナデ	・腹部が大きく膨らむ体部 ○内面ハケ後ナデ、外面ハケ目、横列、横置、横紋等を施文		淡灰褐色	良好
B001	壺E	下層	口径 2.11	・外反して閉き、水平近くに大きく広がる。端部は下方に著しく肥厚する。 ○内面横ナデ垂列状列 外面横ナデ垂列状列 底文、腹面ハケ目、端部裏口頂文凸帯	○内面ハケ目 外面ハケ後ナデ、横置、横列を交互に施文		褐色	良好
B002 B003	壺A1	下層	口径 2.80 3.00	・大きく外反して広がり、端部は外下方に著しく拡張する。 ○内面横ナデ後横列、斜格状筋列 外面横ナデ後横置 腹面ハケ目、断面三角形貼付凸帯5帯			淡褐色	良好
B004 B005	壺F	下層	口径 1.82 2.24	・外反して閉らき、端部は面を成す。 ○内外面共横ナデ、頸部内外面ハケ目			淡褐色	良好
B006 B007	壺A3	下層	口径 1.30 1.42	・なだらかに外反して閉き、端部は面を成す。 ○内外面ハケ目、端部上下に筋状文(B006)、横列(B007)			淡褐色	良好
B009 B010	壺E	下層	口径 1.44 1.56	・筋状にのびる頸部より屈曲して、水平近くに大きく開く。端部はやや肥厚状に			淡灰褐色	良好

遺物番号	器種・形式	出土 層位	法 泉 (単位cm) 番号は復元値	口 縁 部	体 部	底 (備 考)	色 調	胎 土
				収める ○内面横ナデ、横列(B009) 外面横ナデ後縁波(O09)、凹線文(B010)				
B011 B012 B015 B016	壺G1	下層	口径 18.4) 2.4 腹径 24.4	・筒状の頸部より屈曲して垂直に立ち上がる。肩部は内傾する所(B011)、平坦な面(B012)を成し内側に肥厚(B015、B016) ○内面横ナデ 外面凹線文、縦線文 頸部ハケ後縁直	・球形を呈する ○内面凹口縁、ハケ目 外面ハケ後縁直、簡波		淡赤褐色	良好
B014	壺G3	下層	口径 21.9	・外内両縁にのびる頸部より屈曲して垂直に立ち上がる。肩部は平坦な面を成す ○内面ハケ目外面横ナデ後上縁に深い凹線文を施す			淡褐色	良好
B013 B017	壺G2	下層	口径 19.4) 2.8.2	・外内両縁に開く頸部より、やや内内両縁に立ち上がるもの ○内外面共ハケ目			淡褐色	良好
B018	壺G3	下層	口径 20.8	・外内両縁に開く頸部に口縁部は段を成して外反する。肩部は内方に肥厚し平坦に収める ○内外面共横ナデ、頸部外面ヘラミガキ			淡褐色	良好
B019	壺G6	下層	口径 19.1	・外内両縁に開く口頸部で上縁は緩く屈曲して立ち上がる。肩部は平坦 ○内面ハケ後ナデ 外面ハケ目、上縁横ナデ、罫毛凹線文凸帯			淡褐色	良好
B008	壺B1	下層	口径 12.1	・受口。肩部はやや外方へ引き出し、内傾する面を成す ○内外面横ナデ、縮密型凹線文、頸部内外面ハケ目			淡赤褐色	良好
B020 B021	壺I1	下層	口径 8.6) 9.8	・内内又は外内両縁に立ち上がる直口、肩部は平坦面を成す ○内面ナデ 外面ハケ目、上縁に凹線文			淡褐色	良好
B022) B031	壺体・底部	下層	腹径 21.3) 35.9) 5.4) 7.8		・腹部の張る筒筒形又は球形を呈す ○内面ハケ目、B023、025、026にナデを加える、外面ハケ目、B024、B026に先行する印きが認められる B026同様に縮密文、B0251半ナデ、横波	・平底を呈す ○内面ハケ目、ナデ、B028ヘラ削り ○外面ハケ目、B024ヘラ削り ・B031は突出した平底、中央に径0.6cmの円孔を穿つ	淡褐色	良好

遺物番号	器種・形式	出土 層位	法 量 (単位cm) ※は復元値	口 縁 部	体 部	底 部 (備 考)	色 調	胎 土
B032	合付無明蓋 A	下層	底径 1 6.5			<ul style="list-style-type: none"> ・内底穴縁に下る。端面は内側へ肥厚し、平坦な面を成す。下端部に縦明線を2条廻らす ・内外面共横ナデ ・透孔3箇所 	淡褐色	良好
B033 B034	細頸成D2	下層	口径 7.0 腹径 1 9.0 底径 5.0	<ul style="list-style-type: none"> ・内底穴縁にのびる。肩部は平坦な面を成し、3条の縦明線を廻らす ・内面ハケ目、頸部ハケ目、ナデ、外面樹列、横直 	<ul style="list-style-type: none"> ・最大径を口径に求める算盤玉形を呈する ・内面ハケ目 ・外面ハケ後横波 	<ul style="list-style-type: none"> ・やや突出した平底を呈する ・内外面共ハケ目 	淡褐色	良好
B035	水笠型土器 A	下層	腹径 2 0.6			<ul style="list-style-type: none"> ・最大径を口径に求める算盤土状を呈する。肩部に腹位の半環状把手を有す ・内面ハケ目、ナデ、外面横直、横波、斜格文 	褐色	良好
B036 B037	高环A1	下層	口径 2 9.8 3 0.3	<ul style="list-style-type: none"> ・内底穴縁に開き、短かく垂直に立ち上がる。端面はわずかに内側へ肥厚し、平坦な面を成す。上端に浅い凹線文を廻らす ・内外面ハケ目。(B036)はハケ後横ナデ 			淡褐色 (B036) 暗褐色 (B037)	良好
B038 B041	高环B	下層	口径 2 1.7 2 8.7	<ul style="list-style-type: none"> ・直線的又は内内底縁に開く杯部に水平に広がる口縁部を有する。内側に前向方形の凸帯を廻らす。杯部は厚肉のもの(B038)。下方に拡張するもの(B039)。外下方へ著しく拡張するもの(B040、041) ・内面横ナデ、杯部内面ハケ目。(B040)笠跡き ・外面横ナデ、杯部外面ハケ目 			淡茶褐色	良好
B042 B049	高环胸部	下層	底径 1 0.7 1 5.2			<ul style="list-style-type: none"> ・頸状の脚柱部より「ハ」字状になららかに開く。杯部は肥厚肉で上縁を拡張する(B042、044) ・内面しほり目、ハケ目、横ナデ ・外面ハケ目(B042~045)。笠跡き(B046~049) 	淡褐色	良好
B050 B051	鉢D	下層	口径 1 5.2 2 5.4	<ul style="list-style-type: none"> ・内底穴縁に斜上方へのび、屈曲して内方へ折れる。端面は内傾する面を成し、浅い凹線文を廻らす ・内面ハケ目、ナデ ・外面ハケ目、径0.5cmの「孔」を2箇所穿つ 			淡褐色	良好

遺物番号	器種・形式	出土 部位	法 量 (単位cm) ※は復元値	口 縁 部	体 部	底 (備 考)	色 調	胎 土
B 052	合付無彫装 A	下唇	口径 2.53	・L縁部は内湾し端部は面を成す ・外面へラクガキ			淡黄白灰色	良好
B 053 B 054	鉢形部	下唇	口径 7.8 8.9			・低く「ハ」字状に閉き、端部は内傾する面を成す (B 054) 拡張する (B 053) ・内面ハケ目、ナデ ・外面ハケ目、節彫沈線 (B 053)	淡褐色	良好
B 055 B 057 B 058 ↓ B 060	葉A1	下唇	口径 1.12 ↓ 2.14 腹径 1.40 ↓ 2.46 底径 2.42 4.0	・「く」字状に外反して閉き、端部は面を成す ・内外面共ハケ目、外面端部横ナデ後彫又は刷毛丹痕文	・上部部の傾る長筒形を呈する ・内外面共ハケ目	・突出した平盤を呈するはほぼ中央に径1.0cmの内孔を穿つ (B 057) ・内外面共ハケ目	黒褐色 (B 055) 淡褐色	良好
B 056	葉A2	下唇	口径 1.12	・「く」字状に外反して閉き、端部は面を成す ・内外面共ハケ目、外面端部横ナデ後彫毛庄痕文			淡灰褐色	良好
B 061	蓋底部	下唇	口径 8.0			・安定した平底の底部 ・内外面共ハケ目	淡褐色 底部内面に黒付露	良好
B 062 ↓ B 065 B 071 B 072 B 079 B 080 B 082 B 083 B 086 B 087	葉B3-I	下唇	口径 1.51 ↓ 3.23	・傾斜して閉く第2口縁より斜出して短かくほぼ垂直に立ち上がる。端部は尖り気味 (B 062)、平坦な面 (B 063、064、079)、内傾する凹面 (B 065、080、082) を成す ・内面ナデ (B 064) ハケ目 (B 065) ハケ後彫列 (B 062、063)、ハケ後彫線、彫列 (B 071)、横溝、指痕 (B 072) ・外面ハケ目、横ナデ (B 064)、上端部彫丹痕文 (B 065)	・外面ハケ後彫波・横列、横波 (B 064、082、083、086)		淡褐色	良好
B 064 B 066 ↓ B 068 B 069 B 070 B 073 ↓ B 076 B 078 B 081 B 084 B 085	葉B3-II	下唇	口径 1.30 ↓ 2.74	・ほぼ水平に開らく第2口縁部より傾出して短かくほぼ垂直に立ち上がる。端部は平垣気味 (B 069) に立ち上がる。端部は平坦な面 (B 069、075)、内傾する浅い凹面 (B 066、070、073、074) を成す ・内面ナデ (B 066、069)、ナデ後彫列 (B 070) 「X」字状彫列 (B 073、074) 横波 (B 075) ・外面ハケ目、節彫痕文上端部 (B 070)			淡水褐色	良好

遺物番号	器種・型式	出土 部位	法 量 (単位:cm) ※は復元径	口 縁 部	体 部	底 部 (備 考)	色 調	胎 土
				下部部 (B069) 頸部外面ハケ後彫削、 櫛列 (B070、073~075)				
B077	壺B3-Ⅲ	下唇	口径 2.0	・縁部短木に開く第2 口縁より屈曲して内 反して短かく立ち上 がる。頸部は内嵌す る面を成す ・内面ハケ目、立ち上 がりナゲ口縁部に傾 斜を帯びる ・外面ハケ目、立ち上 がり上端又はほぼ全 面横ナゲ、横波	・内面横ナゲ ・外面ハケ後彫削		淡褐色	良好
B089 ↓ B091	壺体・底部	下唇	口径 4.2 腹径 2.17		・上部部の張る長筒形 を量する ・内面ハケ目 ・外面ハケ後彫削、横 波、横直 (B089)	・平座を呈する ・内面横ナゲ ・外面ハケ目	淡褐色	良好
B092	蓋B	下唇	口径 1.77 器高 7.0		・凹状のつまみ形を有 し、なだらかに「U」 字状に広がる。底部 は下方へ膨厚する ・内外面共ハケ目		赤褐色	良好
B094 ↓ B096 B110	壺A1	上唇	口径 2.0 口径 3.11	・大きく外開して開ら ず、頸部は下方へ著 しく拡張する ・内面櫛列 ・外面凹線文 (B09 4)、櫛列彫削、凹 形浮文竹管文 (B0 95) ・断面三角形内帯文、 竹管文、横直、横波 (B096)			淡黄灰色 淡褐色 (B095)	良好
B108	壺A3	上唇	口径 1.54	・外反又は外開して開 き、頸部は若干拡張 気味 ・内面ナゲ ・外面ハケ目			淡褐色	良好
B098 B099	壺F	上唇	口径 1.30 口径 1.98	・外開して開く口縁部 で水平近く広がる ・頸部は若干拡張 ・内面ハケ後ナゲ、外 面ハケ目、端加横ナ ゲ			淡褐色	良好
B211	壺C2	上唇	口径 2.0	・太頸で筒状に高直し てのびる頸部より口 縁部は外反して開く ・端加横ナゲ、外面ハ ケ目、頸部に櫛列 ・内面ハケ目			淡褐色	良好
B100 B134	壺C1	上唇	口径 1.08 口径 2.06	・外反気味にのびる細 い筒状の頸部より屈 曲して大きく内開し て立ち上がる。底部 は平坦な面を成す ・内面ハケ後ナゲ ・外面ハケ目、頸部端 直			淡褐色	良好
B101 ↓ B103	壺D	上唇	口径 6.7 口径 12.0	・皿直して水平に開く (B101、102) 短かく外反 (B10	・最大径部位に求める 算盤玉状を呈する ・内面ハケ後ナゲ	・D1 (B101) ・D2 (B102、 103、106)	淡褐色 淡赤褐色 (B102)	良好

遺物番号	器種・型式	出土 層位	法 象 (単位cm) きは復元値	口 縁 部	体 部	底 (備 考)	色 調	胎 土
B106				3)。端部上縁を嵌す。 ○内面共線ナデ、径0.4cm程の円孔を穿つ(B102、103)	外面ハケリ、B102瓦磨き。端部横ナデ			
B093	壺A1	上層	口径 2.17	○外湾して閉き、端部は深く彫解する ○外縁部に凹線分を刻らし、縦線文を施す 内面は御毛羽列頸部内面指圧痕、ハケ目 頸部外面ハケ目。刷毛は横凸帯文等を交互に横列、横直流文			淡灰褐色	良好
B104 ↓ B105 B107	壺F	上層	口径 1.20 ↓ 1.58	○外湾気味にのびる口縁部で水平近くに短かく広がる。端部は肥厚乃至拡張 ○内面ナデ、B104横列、外面ハケ目、B107ナデ、端部横ナデ、凹線文(B104)、横流(B105)			淡茶褐色 暗茶褐色 (B105)	良好
B109	甕E	上層	口径 1.26 腹径 2.10	○外湾気味にのび、大きく水平に開く 端部は下方へ拡張する ○内面ナデ、御毛羽列輪状突起 ○外面ハケ目、端部横流	○載入性を7位に求める偏球形を早する ○内面ハケ目、外面ハケト、横流、横直(3条×2連)体部ト平ヘテ削り		淡褐色	良好
B111 ↓ B112	壺G1	上層	口径 1.50 ↓ 1.72	○外湾気味にのびる肩状の頸部より口縁部は曲して短かく直上に立ち上がる ○内面横ナデ、外面3条の凹線文、頸部ハケト	○内面ナデ 外面ハケ後横直、横流		淡褐色 淡赤褐色	良好
B113 ↓ B129	壺G	上層	口径 1.40 ↓ 2.38	○外湾気味にのびる太い肩状の頸部より屈曲して直上又は内湾気味に立ち上がる 端部は平直乃至内傾する浅い凹面を呈す ○内面ハケ目、口縁部横ナデ(B111、115、118、120、125-128) ○外面ハケ目、口縁部に横ナデを出えるものが多く、凹線文1〜2条を刻るす、B113竹管文を施す 頸部内面御毛羽列横直凸部、指圧痕直文凸帯(B129)		○G1(B113-B115、B120、B123-B128) ○G2(B117、B118、B121) ○G3(B116、B122)	淡褐色	良好
B130	壺G4	上層	口径 1.80	○内湾気味にのびる口縁部、端部内傾する浅い凹面を呈す ○内面共線ナデ、外面に多条の凹線文			淡褐色	良好
B131	壺C3	上層	口径 9.0	○短かく肩状の頸部に			淡褐色	良好

遺物番号	形態・形式	出土 層位	法 量 (単位/cm) または径	口 縁 部	体 部	底 部 (備 考)	色 調	胎 土
				口縁部は緩く屈曲して直立する ○内面ナデ ○外面斜内ハケ目、口縁立ち上がり肩線ナデ、凹線文2条				
B132	表G3	上層	口径 18.8	○外側に緩く頸部より口縁部は屈曲して外反する ○内外面共ナデ			淡褐色	良好
B133	表G6	上層	口径 13.9	○外高頸部にのみ、上方において強く屈曲して地かき立ち上がる。肩部は尖り筒状 ○内面ハケ目、ナデ ○外高頸部ハケ後斜毛圧痕片帯文	○内面ハケ目、ナデ ○外面ハケ後横波、横波		淡褐色	良好
B135	表G1	上層	口径 16.3	○筒状の頸部より屈曲して地かき筒状に立ち上がる。肩部は内傾する筒を成す ○内面ハケ目 ○外面立ち上がり肩線ナデ、凹線文、頸部ハケ後ナデ、横列、			淡灰褐色	良好
B136 B137	表B1	上層	口径 7.2 8.0	○外反してのび上方において弱かく内折する ○内外面共横波			淡褐色	良好
B138 B139	表I1	上層	口径 11.4 12.6	○外反頸部にのびる直口の口縁部。肩部は平坦乃至平坦乃至内傾を呈す ○内面ナデ ○外面上縁に凹線文B138ハケ目			淡褐色	良好
B140 B141	表B	上層	口径 8.0 9.0	○内湾してのびる口縁部、肩部は平坦面を成す ○内面ハケ後ナデ ○外面ハケ後ナデ、上方に凹線文2〜3条横列状、頸部曲部に前面三角形凸帯	○ほぼ球形を呈す ○内面ハケ目 ○外面ハケ目、B142上半ナデ、下半ヘラ削り、横波、横波(3条×2道)を交互に施文(B140、142)		淡褐色	良好
B142 B153	遺体・底部	上層			○B143、144は胸部が発る扁球土状を呈す ○内面ハケ目 ○外面ハケ後ナデ、上腹部に横波、B144肩線	○B145〜B150は安定した平底の底部である。 ○内面ハケ目 ○外面ハケ目、B145、151ヘラ削り ○B152、153は突所した平底 ○内外面共ハケ目、B152ナデ	淡褐色	良好
B154	合付加頸部	上層	底径 15.0			○直線的に下方にすぼまる ○内外面共ナデ、外面下部に太く浅い凹線文2条、胴部下方に凹孔を穿つ	淡褐色	良好
B155	細頸部D2	上層	口径 7.4	○細く漏斗状にのびる口縁部、上縁はやや内反する ○内面ハケ後ナデ			淡褐色	良好

漢物番号	器種・形式	出土 層位	法 量 (単位cm) きは復心値	口 縁 部	体 部	底 部 (備 考)	色 調	胎 土
				◦外面横直				
B156 B157	細頸鉢D1	上層	口径 7.0 腹径 11.7 底径 4.7	◦内面気味にのびる口縁部を有する ◦端部が平坦な面を成す ◦内面ナデ。しぼり目 ◦外面筋列、横直、横波	◦最大径を方位に求めるノロパン玉形を呈する ◦外面横ナデ、横直、横波を交互に施文	◦平底を呈する ◦外面横ナデ	淡褐色	良好
B158	水滸型土器B	上層	口径 9.2	◦やや内面気味にのび片口を呈す ◦内外面共横ナデ、腹直線を通らす、横直			淡褐色	良好
B159	高杯A3	上層	口径 2.60	◦内面気味に口縁口、口縁部、口縁部は外方に肥厚し段次を成す ◦外面にヘラミガキの痕跡、外面横ナデ			淡褐色	良好
B160 B168	高杯B	上層	口径 1.62 2.04	◦内面又は内面的に開く環部に口縁部は屈曲して水中に止がる内面に凸帯1条、端部肥厚乃至若干は段状気味(B160~164)、下方に若しく拡張(B165~168)する ◦端部横ナデ、B166、B168、2~3条出線文 ◦内面ハケ後ナデ ◦外面ハケ目			淡茶褐色 淡赤褐色	良好
B177 B181	高杯群部	上層	口径 1.14 1.46			◦筒状の脚柱部よりなるだけに外反して開く。端部は肥厚又は上下に若干の筋 ◦内面筋列、ハケ目 ◦外面ハケ目、貫筋き(B178)	淡茶褐色 淡赤褐色 (B178)	良好
B174 B176	鉢B1	上層	口径 1.88 2.02 腹径 1.61 1.69	◦緩やかに外反して開く ◦内面ハケ目、筋列(B174) ◦外面ハケ目、ナデ ◦端部横ナデ後部又は肩毛出線文	◦半球状、B174腰に稜をもつ ◦内面ハケ目、ナデ ◦外面ハケ後筋列、横直		淡灰褐色 淡赤褐色	良好
B169	台付細頸鉢A	上層	口径 2.00	◦内面気味にのびる体部より口縁部は内折してすままる。端部は内傾 ◦内面口縁部横ナデ、体部ハケ目 ◦外面横ナデ、口縁部に交線文		◦口縁部下に2個の小孔	淡褐色	良好
B170	鉢D	上層	口径 2.02	◦内面口縁部内反 ◦端部に横直、外面に横直			淡褐色	良好
B171	鉢E	上層	口径 3.42	◦外面ハケ目 ◦口縁部ゆるやかに内反、端部肥厚			淡褐色	良好
B172 B173	鉢A4	上層	口径 1.20 1.30	◦内面してのびる体、口縁部で端状を呈す ◦内面ハケ目、ナデ			淡褐色	良好

遺物番号	器種・型式	出土 層位	法 量 (単位cm) ※は復元値	口 縁 部	体 部	底 (備 考)	色 調	胎 土
				◦外面上側に凹線文1条、柳列列(B172)				
B182 ＼ B188	鉢舞台	上層	口径 8.4 ＼ 10.5			◦低く「ハ」字状に開き、端部は面を成す(B182、184、185)、上、下に縦線(B183、186)、垂ト(187、188)する ◦内面ハケ後ナデ、しほり目 ◦外面ハケ目、裾端部横ナデ	淡褐色	良好
B189	台形土器	上層	口径 2.10 器高 25.0 底径 29.2	◦体底より屈曲して緩やかに外反する ◦内外面ハケ目、端部横ナデ	◦内面凹線に外下方に開く ◦内外面ハケ目、底部内外面共横ナデ、外面に5条の凹線文		淡褐色	良好
B190 ＼ B191 ＼ B193 ＼ B197 ＼ B200	甕A1	上層	口径 15.6 ＼ 37.8 底径 17.2	◦「く」字状に外反して開く。端部は面を成す ◦内面ハケ目 ◦外面ハケ目、B190、197、198、200 端部横ナデ後縁又は肩毛井線文(B190、191、197～200)	◦上腹部の強なる斜削形を呈する ◦内外面共ハケ目	◦やや突出した平底を呈する ◦内外面共ハケ目	淡褐色 淡褐色	良好
B192 ＼ B194 ＼ B196 ＼ B201 ＼ B204	甕A2	上層	口径 13.0 ＼ 17.4	◦外反して開き、端部はわずかに肥厚する ◦内面ハケ目、B194～196横ナデ ◦外面ハケ目、B194～196横ナデ、端部横ナデ後肩毛井線文、B196横波	◦内面ハケ目 ◦外面開き後ハケ目 B196横直、横波		淡褐色	良好
B205 ＼ B208	甕C1	上層	口径 18.8 ＼ 19.0	◦「く」字状に外反して開き、端部は内方へ拡張する ◦内面ハケ目、ナデ ◦外面ハケ目、ナデ 端部横ナデ	◦上腹部の強なる縦長 ◦内面ハケ目、ナデ ◦外面ハケ目		淡褐色	良好
B210 ＼ B209	甕C2	上層	口径 18.4	◦なだらかに外反して広がり、端部はわずかに肥厚する ◦内面ハケ目、ナデ後柳列(B210) ◦外面ハケ目、ナデ 端部横ナデ後下縁又は上、下縁に凹線文、B210柳列			淡褐色	良好
B212 ＼ B216	甕B3-II	上層	口径 16.0 ＼ 18.0	◦傾斜して開く第2口縁より第1口縁は内凹突縁に近く立ち上がる ◦内面ハケ目、B213、216ナデ ◦立ち上がり部外面B212ナデ後横波ハケ後横ナデ(B214～216)	◦内面ナデ ◦外面ナデ後柳列、横直、斜格文(B214～216)		淡褐色	良好
B217 ＼ B218	甕B3-I	上層	口径 15.0 ＼	◦傾斜して開く第2口縁より第1口縁は短	◦内面ナデ ◦外面ハケ後柳列、横		淡褐色	良好

器物番号	器種・型式	出土 層位	法 量 (単位cm) ※は復元値	口 縁 部	体 部	底 (鑑 考)	色 調	胎 土
B221 B223 B225 B238			2 3.4		直			
B219 B220 B224 B226 ↓ B229 B233 ↓ B235 B237	甕B3-II	上層	口径 1.45 ↓ 2.5.1 腹径 8.0 ↓ 19.4	・傾斜状に開く第2口縁より屈曲して内反気味に丸く立ち上がる。端部は丸く納める。 ・内面ハケ目、立ち上がり部横ナデ ・外面ハケ目、上端横ナデ	・最大径を口径に求める筒筒形を呈する。 ・内面ナデ ・外面ハケ後筋列、横筋、横波 (B237)		淡赤褐色	良好
B230 ↓ B232 B236 B239 B240	甕B3-I	上層	口径 16.5 ↓ 29.6	・傾斜して開く第2口縁より第1口縁は内反して立ち上がる。端部は内傾する凹面を成す。 ・内面ハケ目、立ち上がり横ナデ ・外面ハケ目、立ち上がり部横ナデ	・内面ハケ後ナデ ・外面ハケ目、ナデ、筋列、横筋		淡赤褐色	良好
B241 ↓ B247	甕B3-II	上層	口径 14.2 ↓ 29.8	・口縁より開く第2口縁より第1口縁は内反して短く立ち上がる。端部は平坦乃至内傾する。 ・内面ハケ目、立ち上がり部横ナデ、横波 (B243)、筋列、横波 (B244) ・外面ハケ目、上端部横ナデ、B242-246端部に宛江痕文	・外面ハケ後ナデ、筋列、横筋		淡褐色	良好
B248	甕底部	上層	底径 4.3			・平底を呈する。 ・内面宛江痕 ・外面ハケ目	淡褐色	良好
B249 B250	蓋B	上層	口径 11.0		・「ハ」字状になだらかに開き、端部凹面を成す。 ・内面宛江痕、ハケ目 ・外面ハケ目、径0.6cm程の凹孔を穿つ		淡褐色	良好
C001	蓋E		口径 27.1	・外周して広がり、端部は著しく肥厚する。 ・内面横方向のハケ目 ・外面横ナデ、端部横ナデ後3条の凹線文 ・2個1組の凹字			淡褐色	良好
C004	蓋D		口径 10.2 器内 14.7 腹径 17.5 底径 5.8	・内面して開く、端部は起立気味。 ・内面横ナデ ・外面横ナデ、端部に1条の凹線文。口縁部下折伏位置に2個1組の穿孔	・器の強る算盤5状 ・内面ハケ調整、ナデ ・外面調整キ	・安定した平底 ・内面ハケ調整、ナデ ・外面調整キ	淡褐色	良好
C002 C003	蓋E		口径 20.0 27.4	・大きく外周して広がる口縁部で、外方に気味気味に厚く。 ・内面ハケ目、筋列、横筋列 (C002) ・外面ハケ調整、端部横ナデ後4条の凹線文、	・大きく膨らんだ端部 ・内面ハケ調整、外面ハケ調整後ナデ、横波、横筋、横筋筋文		淡褐色 (C004)	良好

遺物番号	器種・型式	出土 層位	法 泉 (単位cm) ※は復元値	口 縁 部	体 部	底 備 考 (備 考)	色 調	胎 土
				3条の絞文を帯状に曲線と併せて凸帯文				
C005	壺A3		口径 1.4.3	・外反してのびる頸部より外反して開く頸部が外傾する面を成す ・内外面共ハケ調整 ・頸部横ナデ。頸部出血部に括弧状凸帯文			淡褐色	良好
C006 C009	壺G		口径 2.0.6 2.4.8	・外反して開く頸部より、屈曲して直上(C006)又は内反斜味(C007、008)に幅広く立ち上がる。頸部が肥厚し、平底(C006)又は内傾する斜面(C007、008)を呈する ・内面横ナデ ・外面横ナデ後の絞文頸部内外面ハケ目		・G1(C006-C008) ・G2(C009)	淡褐色 茶褐色 (C007)	良好
C010	壺H2		口径 16.0 器高 20.5 腹径 18.8 底径 4.3	・受口状口縁を呈す ・底部は内傾する凹面を成し、凹絞文 ・内面ハケ調整、口縁部ナデ後縁列、外面立ち上がり部横ナデ後縁列等。口縁部下の対面位置に2個2線の小孔	・下腹部が大きく張り出すもの ・内面ハケ調整後上半ナデ、外面ハケ調整後上半ナデを加え縁列、横腹を交互に施工	・平底 ・内外面共ハケ調整	淡赤褐色	帯白粒含有
C011	壺B1		口径 9.2	・細く外反して開き、上方において丸かく内折して立ち上がる頸部は平坦な面を呈する ・内外面共横ナデ ・頸部内面横ナデ、外面ハケ			淡灰褐色	良好
C012	壺F		口径 11.0	・外反斜味にのびる筒状の口縁部 ・内外面共横ナデ			淡褐色	良好
C013	細頸壺D		腹径 1.6.4 底径 4.5		・肩の張る算盤玉状 ・内面ハケ調整、外面ハケ調整、肩部凹山形文	・突出斜味の平底 ・内外面共ハケ調整	淡褐色	良好
C014			口径 1.6.0	・内傾してのび、底部は肥厚して外傾する面を成す ・内外面共ハケリ、内面ハケリ残存			淡赤褐色	良好
C015 C016	合付無頸壺E		口径 2.1.5 腹径 1.2.5	・内傾してのびる。頸部は内方に肥厚し平坦面を呈す ・内外面共横ナデ、外面に凹線2条		・直線的に斜上方に広がり、下縁は内方に著しく肥厚する ・内外面共ハケ目 ・楕円形の透穴を4方に穿つ	淡赤褐色 淡赤褐色	良好
C017 C018	水差型土器A		口径 9.3 8.5 器高 2.1.3 2.1.1 腹径 1.9.7 1.9.6	・やや外反斜味にのびる直口の口縁部を、挟りを入れ片口を呈す ・内面ナデ、外面上方に横ナデ、3条(C	・算盤玉状を呈す ・内面ハケ調整、外面ハケ調整後ナデ、横腹、縁列、横腹 ・頸部に腹位の半環状把手を貼付ける	・平底 ・内外面共ハケ調整	灰褐色 淡褐色 体部外面に灰褐色 (C018)	良好

遺物番号	器種・形式	出土 層位	法 量 (単位cm) または復元量	口 縁 部	休 部	底 部 (備 考)	色 調	胎 土
			底径 5.2	017)、1条(C018)の印綫文 口縁部ハケ目(C017)、横波				
C019 C020	高杯E	口径 2.26 3.05	• 直口の口縁部で肩部は内方に著しく肥厚し平坦面を成す • 内面ハケ目。C019露磨き 外面C019ハケ後露磨き、C020横ナデ。1-2条印綫文				茶褐色(C019) 淡茶褐色(C020)	良好
C021 C023	高杯B	口径 2.02 2.97	• 内面中央に斜上方に開く杯部より肥厚して水平に広がる口縁部を有す。口縁部は外方に著しく拡張せられる。内側に1条の帯を廻らす • 内面横ナデ 外面横ナデC022は4条の帯の印綫文を廻らす				淡褐色	良好
C024 C030	高杯部部	底径 1.15 2.11				• 細い側状の杯状部より緩やかに外反して広がる底部を有す • 杯部は下方へ拡張する • 内外面共ハケ調整 内面に寛削り	淡茶褐色	良好
C031 C032	鉢B1	口径 1.60 1.88	• 緩やかに外反して開き、端部外面は印綫文を成す • 内面横ナデC032 • 横波 外面横ナデ後部印綫文	• 腰口縁をもつ半環状を呈する(C031、C032) • 内面ハケ後横ナデ 外面ハケ後C031横列、横波、C032横列、横波	• 安定した平面を呈する • 内面印綫直 外面ハケ目		淡褐色(C032) 黒付着	良好
C043	鉢C	口径 7.1	• 口縁部が短かく内反	• 縁状の底部で内外面共ハケ後ナデ。外面胴部に横波			淡褐色	良好
C033 C034	台付加頸壺A	口径 2.08 2.17	• 内折してすぼまり肩部は丸状を有するもの(C033)、内傾するもの(C034)がある • 内外面共横ナデ	• 内面中央に斜上方に開く • 内面ハケ目 • 外面ハケ目(C033) • 横ナデ後印綫文(C034)			淡灰褐色	良好
C035 C037	甕A1	口径 1.59 2.99	• 「く」字状に外反して開き、端部外面を成す • 内面ハケ目。外面ハケ目、C036横ナデ、端部に寛又はハケ口頂	• 内面ハケ後横ナデ • 外面ハケ目			赤茶褐色(C036) 茶褐色(C035、C037) 休部外面黒付着	良好
C038 C040	甕A2	口径 1.55 2.77	• 短く外反して開き、端部は肥厚し面を成す • 内面横ナデ • ハケ目(C040) • 端部外面横ナデ後1条の印綫文を廻らし、下縁(C039)、上下端(C040)	• 内面ハケ目、ナデ • 外面ハケ後ナデ • 横波			暗茶褐色(C039) 淡茶褐色	良好

遺物番号	器種・型式	出土 層位	法 量 (単位cm) ※は径(口径)	口 縁 部	体 部	底 部 (備 考)	色 調	胎 土
				口径10.5				
C 0 2 9	甕形部		口径 6.8			<ul style="list-style-type: none"> やや突出した平底を呈する 内面ハケ目 外面ハケ目、4条田線文 	淡褐色	良好
C 0 4 2	甕C1		口径 1.83	<ul style="list-style-type: none"> 外弯して開き、端部は外傾する凹面を成す 内外面ハケ目 端部横ナデ後部田線文 			淡赤褐色	良好
C 0 4 6	甕B2-II		口径 1.50	<ul style="list-style-type: none"> 傾斜凹面に開く第2口径より第1口径はほぼ直上に短かく立ち上がる 内面ハケ目、立ち上がり部横ナデ 外面ハケ後上部横ナデ 	内面ナデ 外面ハケ後横直、楕列、横波		淡茶褐色	良好
C 0 4 8 C 0 5 3	甕B3-I		口径 2.10	<ul style="list-style-type: none"> 水平凹面に開く第2口径より、第1口径は短かく直立する。端部は内傾する凹面を呈する 内面ハケ後部毛刺状文 外面ハケ後上部横ナデ 			暗茶褐色	良好
C 0 4 4 C 0 4 5 C 0 4 7 C 0 4 9 } C 0 5 2 C 0 5 4 } C 0 5 8	甕B3-II		口径 1.62 } 2.07	<ul style="list-style-type: none"> 傾斜凹面に開く第2口径より第1口径は内折して短かく立ち上がる。端部は平坦乃至、内傾する浅い凹面を呈する 内面ハケ目 外面ハケ後上部横ナデ、C 0 5 1、0 5 5 端部に雲字状文 C 0 5 1 横ナデ後3条田線文、C 0 5 5 片口状の沈む C 0 5 0、端部凹面田線文(10例1組) 	<ul style="list-style-type: none"> 腹部の膨らむ縦長の体部 内面横ナデ 外面ハケ後上部横ナデ、横直、楕列、横波、横弧 		暗茶褐色 淡褐色	良好

SD201 出土土器観察表

遺物番号	器種・型式	出し 側十	法 量 (単位cm) ※は測定値	口 縁 部	休 部	底 部 (備 考)	色 調	胎 土
E001	甗C	下唇	口径 1.6.9	・外反して閉き、端部は面を成す ○内面横波、外面割み目			淡褐色	良好
E002 ↓ E004	高杯A3	下唇	口径 2.0.9 ↓ 2.8.0	・ほぼ直立し、端部は丸く納める(E002)外縁する(E003)、内面を成す(E004) ○内面横波又は横ナデ、外面横ナデ			淡褐色 赤褐色	良好
E005	高杯頸部a	下唇				・中位でややふくらみ開く ○内外面ハクリ 透孔了偽所	淡褐色	良好
E006	高杯頸部b	下唇	口径 1.1.6			・ゆるやかに「ハ」字状に開き、端部は上下に厚くなる ○外面ハケ目、横ナデ 内面割削り、横ナデ	淡褐色	胎砂含有
E007	高杯頸部c	下唇				・筒状を呈する。中実 ○内面ハケ目、外面ハケ目後置跡	淡褐色	良好
E008	鉢G1	下唇	口径 1.5.2 腹径 1.6.1 器高 1.4.8 底径 3.9	・受口、第2口縁は水平に開き、第1口縁は、内反して立ち上がる。端部は内横する面を成す ○横ナデ後置列	・最大径を径(440)に求める球形を呈す ○内面横波、ナデ 外面ハケ目後置列 横直、横弧、凸帯文	・やや突出した平底を呈す ○内面横波、外面ハケ目	暗褐色	良好
E009	甗体部	下唇	腹径 1.9.4 4.2			・腹径が膨らむ縦長を呈す ○内面ナデ、外面ハケ目、横波	暗褐色	良好
E010 E011	甗A1	中唇	口径 3.0.6 2.9.2	・外反して閉き、端部はわずかに拡張する ○内面横ナデ、ハケ目 外面横波(E010)			淡赤褐色	良好
E012 E013	甗C	中唇	口径 1.2.8 1.2.0	・外反して閉く。端部はわずかに拡張する ○内面ナデ、外面ハケ目、端部横ナデ、割削り、凸帯文、横列			淡褐色	良好
E015 ↓ E018	甗A	中唇	口径 1.9.4 ↓ 2.3.5 腹径 2.7.8 ↓ 2.9.9 底径 6.6 器高 4.1.4	・外反して閉き、端部は裏下する ○内面ハケ目、横ナデ 外面ハケ目 内浮(E015、016)	・最大径を径上位に求める球形を呈する ○内外面共ハケ目	・突出する平底を呈する ○A1(E016、E018) ○A2(E019、E017)	淡褐色	良好
E020 E021	甗G	中唇	口径 2.4.8	・外反して閉き、屈曲して立ち上がる。端部は内面(E020)、内縁(E021)を成す ○内面ハケ目(E02		・G1(E020) ・G2(E021)	淡赤褐色(E020) 淡白褐色(E021)	良好

遺物番号	器種・型式	山上 標位	法 量 (単位cm) #は復元値	口 縁 部	体 部	底 (備 考)	色 調	胎 土
				0)。外面ハケ目、 縦凹線 (E 021)				
E 022 E 023	壺H	中層	口径 1.34 ↓ 2.12	・外反して開き、屈曲 して垂かく立ち上がる ・立ち上がり部外面積 ナデ、縦凹線、列 点文等施文。口縁部 外面ハケ目、凸指文 (E 022) ・内面ハケ後ナデ		・H1 (E 022) ・H3 (E 023)	暗赤褐色 (E 022) 淡褐色 (E 023)	良好
E 025 E 030 ↓ E 032	壺C	中層	口径 8.8 ↓ 11.0	・小型版、外反して開 く ・内外面ハケ目、ナデ E 031外面磨き			赤赤褐色 (E 032) 淡褐色	良好
E 026 E 027	短頸壺A		口径 9.7 ↓ 12.0	・外反内面直口して立 ち上がる ・内外面ハケ目、ナデ			淡褐色	良好
E 033 ↓ E 035	壺L	中層	口径 9.9 ↓ 10.3	・外反気味に開き、上 部で屈曲して立ち上 がる ・内外面共ナデ			淡褐色	良好
E 038 E 039	短頸壺D 短頸壺F	中層	口径 9.6 器高 10.4 器高 22.0 17.2 底径 5.6 8.0	・直口 ・内面ナデ、ハケ目 (E 038)、E 03 9内面に瓦筋多数、 端部に地圧印文	・球形 ・内面ナデ、外面ハケ 目、ナデ、横刻画 (E 038)。柱上組 接合部明確に残存	・突出する平底 (E 0 38) ・内外面共ナデ	淡褐色	良好
E 019 E 024 E 026 ↓ E 029	壺体部	中層	腹径 16.0 ↓ 28.0 底径 4.6 ↓ 6.2		・球形 (E 026、0 27) 又は上部部が 膨らみ縦長を呈す ・外面ハケ目又は磨 き (E 027) ・内面ハケ後ナデ	・突出気味の平底を呈 す。E 027ドーナ ツ底、底面に穿孔 ・外面ハケ目又は磨 き、E 026体上部 磨削り ・内面ハケ目、ナデ	淡褐色 (E 024) 煤付音	良好
E 043 E 045 E 049 E 051	壺体部a	中層	底径 3.9 ↓ 5.0			・突出した上げ版を呈 する ・内面ハケ目、ナデ 外面磨き (E 04 3)、ハケ目 (E 0 45、049、05 1)	暗赤褐色 (E 043) 暗赤褐色 (E 045、 049) 淡赤褐色 (E 051)	良好
E 044 E 046 ↓ E 048 E 050 E 052	壺体部b	中層	底径 3.1 ↓ 6.0			・突出した平底を呈す る ・内面ハケ目 (E 04 4、048、050) ナデ 外面ハケ目 (E 04 6-048) 磨き (E 052)	淡褐色 (E 044 046、0 47、05 0) 暗 褐色 (E 048、0 52)	良好
E 055	無頸壺B1	中層	口径 12.0	・体部は大きく内高、 口縁部は直口を呈す			淡褐色	良好
E 053 ↓ E 054 E 056	無頸壺C2	中層	腹径 14.8 ↓ 16.1	・内高して短かく立ち 上がる。端部は丸く 納める (E 053) ・内外面共ハケ目	・最大径を方位に求め る細球形を呈す E 056は腹に稜を 持つ ・内外面共ハケ目		淡赤褐色 淡白褐色 (E 053)	良好
E 040 E 041	長頸壺A	中層	口径 1.75 腹径 1.49 ↓ 1.84	・ほぼ筒状のびる口 頸部で、上部で短か く外反する。端部は 外傾する面を成す	・最大径を方位に求め る筒型玉状を呈す ・内面ナデ ・外面磨き (E 04		淡赤褐色	良好

遺物番号	器種・型式	出上 部位	法 量 (単位cm) ※は復元値	口 縁 部	体 部	底 部 (備 考)	色 調	貯 土
				(E 040) ○内面ハケ後遺跡き (E 040) ナデ (E 041) ○外面ハケ後遺跡き	1肩部9個所に竹管文			
E 042	高脚杯D	中脚			・楕円形の体部	・脚台を有す。4方に透孔	淡褐色	良好
E 057 ↓ E 063 E 066	高杯A3	中脚	口径 1.10 ↓ 2.86 器高 12.0 底径 9.2	・造形的に深く浅い杯部より口縁部が外反して立ち上がる ・端部は前面 (E 057、058、063) 又は外方にわずかに引張る (E 059、060) ○内面ハケ目、ナデ ○外面ハケ目、口縁部横ナデ、E 058、063杯高遺跡き		・中ぶくれで、緩やかに「ハ」字状に広がる ○外面ハケ目、E 058遺跡き、内面ナデ横部ハケ目	淡褐色	良好
E 064 E 065	高杯C	中脚	1底 2.54	・造形的又は内面装飾に照く杯部より口縁部は外高斜めに立ち上がる ○内面横ナデ、寛磨き ○外面縦磨き		・やや中ぶくれで、「ハ」字状に緩やかに開く ○内面ナデ、外面縦磨き、2段付6個所に透孔あり	淡赤褐色 淡灰色	良好
E 067	高杯B2	中脚	口径 2.49	・きわめて強く外反して磨き端部はわずかに下方へ膨厚する杯部と口縁部の接合部には明瞭な稜を成す ○内外面共縦磨き			淡褐色	良好
E 070	高杯B1	中脚	口径 2.39	・水平に広き端部は下垂する。内端に1条の低い凸帯をめぐらす ○外面面に出現文2条、内外面共ナデ			淡赤褐色	良好
E 068 E 069	高杯A4	中脚	1底 1.98 2.05	・塊状の杯、口縁部である。端部は丸く収める (E 069は1個所片口を有する) ○内外面共ハケ目			淡白褐色 (E 068) 淡赤褐色 (E 069)	良好
E 072 ↓ E 080 E 085	高杯脚部a	中脚	底径 1.08 ↓ 1.20			・比較的低い脚部である。中ぶくれで緩やかに開く ○内面しぼり目、ナデ ○外面ハケ目又は縦磨き (E 074~079) E 077輪部部に枕線1条。E 075、077~079 4個乃至6個の透孔	淡褐色 (E 072) 淡赤褐色 (E 074、078) 淡赤褐色 (E 077) 淡白褐色 (E 085)	良好
E 081 ↓ E 087 E 096 ↓ E 098	高杯脚部b	中脚	底径 9.1 ↓ 13.0			・比較的高い脚部で、細い行根部より「ハ」字状になだらかに開く ・端部は丸く収める ○内面しぼり目、ナデ ○外面ハケ目、寛磨き (E 083~086) E 087柱状部、E 098基部に多条の	淡赤褐色 (E 081) 暗青灰色	良好

遺物番号	器種・型式	出土 層位	法 量 (単位cm) 番号は図元値	口 縁 部	体 部	底 (備 考)	色 調	胎 土
E 088 ┆ E 091	高杯脚部c	中層				<ul style="list-style-type: none"> ・沈殿文。E 081~084に3個乃至4個透孔 ・円筒状の脚部を有する ◦内面ナデ ◦寛削り (E 090、091) ◦外面彫磨き (E 089、090) ハケ目 ◦後縁前沈線 (E 088)、底沈線、寛削り、ハケ目 (E 091) 	淡白褐色 (E 088) 青褐色 (E 089~091)	良好
E 092 ┆ E 095	器台A	中層	口径 1.40 底径 1.69 底径 1.43 器高 1.64	<ul style="list-style-type: none"> ・大きく外反して開き、端部は下方に拡張する ◦内面横ナデ ◦外面横ナデ、ハケ目 (E 092、094、095)、彫削 (E 093) 		<ul style="list-style-type: none"> ・「ハ」字形に外反して開く。端部は丸く納まる ◦内面ナデ、ハケ目 ◦外面ハケ目、横ナデ ◦透孔E 092は4個所 	淡茶褐色	良好
E 100 ┆ E 101	鉢G2	中層	口径 1.44 底径 1.46 底径 1.42 底径 1.56 底径 0.92 器高 1.48	<ul style="list-style-type: none"> ・受口、第2口縁は傾斜して開き、第1口縁は直立する。端部は内傾面を成す ◦内面横ナデ ◦外面彫削 	<ul style="list-style-type: none"> ・最大径を口径に求める ◦胴球形を呈する ◦内面ナデ仕上げ ◦外面ハケ後縁部、横削、横弧等を施文 	<ul style="list-style-type: none"> ・「ハ」字形に広がる低く、聯合を有す (E 100)、柄部部を若干つまみあげる ◦内外面共ハケ調整 	淡褐色	良好
E 099	鉢G1		口径 10.8 底径 12.0 器高 12.2 底径 3.2	<ul style="list-style-type: none"> ・受口、傾斜して開く ◦第2口縁より第1口縁は短かく内反して立ち上がる ◦外面横ナデ後縁部、寛削り施文 	<ul style="list-style-type: none"> ・最大径を口径に求める ◦胴球形を呈する ◦内面ハケ後ナデ ◦外面ハケ後縁部、横削、横弧を施文 	<ul style="list-style-type: none"> ・平底の底部 ◦内面ナデ、外面ハケ目 	暗褐色	良好
E 071 ┆ E 102 ┆ E 105	鉢体、脚部	中層	底径 5.6 ┆ 9.2		<ul style="list-style-type: none"> ・半球状の体部 (E 104) ◦内面ナデ、外面ハケ後縁部、横削、横弧等を施文 	<ul style="list-style-type: none"> ・「ハ」字形に広線的に開き、端部は上方へつまみ上げる ◦内外面共ハケ目 (E 105は端部に彫削あり) 	淡白褐色 (E 071) 淡赤褐色 (E 105)	良好
E 109	甕A3	中層	口径 1.40 底径 2.08 器高 2.16 底径 4.8	<ul style="list-style-type: none"> ・丸かく外反して開き、端部は外傾面を成し上方へわずかに拡張する ◦内外面共横ナデ 	<ul style="list-style-type: none"> ・最大径を口径に求める ◦長胴形を呈する ◦内面ハケ目 ◦外面ハケ目 	<ul style="list-style-type: none"> ・平底を呈す ◦内面ハケ目、外面寛削り 	淡褐色	良好
E 107	鉢B1	中層	口径 1.32	<ul style="list-style-type: none"> ・短かく外反して開く ◦端部は丸味を有す 	<ul style="list-style-type: none"> ・張りの強い体部 ◦内面にハケ目 		暗褐色	良好
E 111	甕A1	中層	口径 1.83	<ul style="list-style-type: none"> ・外反して開き、端部は内方に凹する ◦内面ハケ目 ◦外面横ナデ 			淡褐色	良好
E 108 ┆ E 110	甕A4	中層	口径 1.24 底径 1.27 底径 1.24 底径 1.45 底径 1.72 器高 5.0 底径 1.62	<ul style="list-style-type: none"> ・短かく外反して開き、端部は垂下する ◦内面横ナデ、頸部折片痕あり ◦外面横ナデ、頸部彫削 	<ul style="list-style-type: none"> ・最大径を口径に求める ◦長胴形を呈する ◦内面ナデ ◦外面ハケ後縁部、横削を施文 	<ul style="list-style-type: none"> ・突出した平底を呈す ◦内面ハケ後ナデ ◦外面ハケ目 	淡赤褐色 (E 110) 暗褐色 (E 108)	良好
E 113 ┆ E 115 ┆ E 117	甕B3-Ⅲ	中層	口径 12.0 ┆ 17.4	<ul style="list-style-type: none"> ・受口、第2口縁は傾斜して開き、ほぼ垂直乃至外反傾斜に立ち上がる第1口縁を 	<ul style="list-style-type: none"> ・最大径を口径に求める ◦長胴形を呈す ◦内面ハケ後ナデ ◦外面ハケ後縁部、横 		暗黒褐色 淡茶褐色	良好

遺物番号	図解・型式	山上 周位	法 量 (単位cm) 番号は後述	II 線 部	体 部	底 (備 考)	色 調	胎 土
E120 ↓ E123 ↓ E141				有する ○内面横ナデ 外面横ナデ後端列	列、横直、櫛列、櫛 弧等を覆らす			
E112 ↓ E119 ↓ E124 ↓ E128 ↓ E138 ↓ E140 ↓ E142 ↓ E143	寛B3-Ⅲ	中脛	口径 12.6 ↓ 17.9 腹径 17.0 ↓ 2.28 底径 4.6 ↓ 4.8 器高 23.6 ↓ 28.0	・受口。第2口縁は水 平に開き、ほぼ垂直 乃至外反方向に立ち 上がる第1口縁を有 する。端部は内傾す るが、上面を成す ○内面横ナデ、外面横 ナデ後端列	・最大径を1位に求め る長筒形を呈する ○内面ハケ目 後端列、櫛弧等を施文	・平底を呈する ○内面ハケ目 外面ハケ目	淡赤褐色 暗黒褐色	良好
E114 ↓ E118	寛B3-Ⅲ	中脛	口径 14.6 ↓ 16.8	・受口。能く立ち上 がる頸部より第2口 縁は水平に開きほぼ 直立する第1口縁を 有す ○内面横ナデ、外面横 ナデ後端列	○内面ナデ 外面ハケ後端列、櫛 列		淡赤褐色	良好
E129 ↓ E131 ↓ E133 ↓ E135	寛B3-Ⅲ	中脛	口径 11.3 ↓ 17.2 腹径 16.5 底径 4.1 器高 18.2	・受口。傾斜して開く 第2口縁と屈曲して 内傾意味に立ち上 がる第1口縁を有する 端部は内傾するが、 上面を呈する (E1 30~132、13 5) 内傾する面を呈 する (E133) ○内面横ナデ 外面横列 (E130、 132、133)。 櫛列、寛刻み目 (E 131)、ハケ目 (E 135)	・最大径を1位に求め る長筒形を呈する ○内面ナデ 外面ハケ後端列、櫛 列、櫛弧等を施文		暗褐色 (E130 131) 淡赤褐色 (E133) 淡黒灰色 (E135)	良好
E132 ↓ E134 ↓ E144 ↓ E147	寛B3-Ⅲ	中脛	口径 13.6 ↓ 18.0	・受口。水平に開く第 2口縁と屈曲して鋭 どく内反して立ち上 がる第1口縁を呈す る ○内面横ナデ 外面横ナデ後端列	○内面ナデ 外面ハケ後端列、櫛 直		淡赤褐色 (E132 E144~ 146) 暗黒褐色 (E147)	良好
E136 ↓ E137	寛B3-Ⅳ	中脛	口径 14.1 ↓ 15.3 腹径 16.2 ↓ 19.7 底径 4.1 ↓ 4.3	・受口。傾斜して開く 第2口縁と屈曲して 内傾意味に立つ第1 口縁を有する。端部 は内傾するもの (E 136)。内面を呈 するもの (E137) ○内面横ナデ 外面ハケ目 (E13 7頸部露出)	・最大径を1位に求め る長筒形を呈する ○内面ナデ仕上げ 外面ハケ目	・突出した平底を呈す る ○内面ナデ 外面ハケ目	淡赤褐色 (E136) 暗赤褐色 (E137)	良好
E148 ↓ E159	寛休・底部	中脛	腹径 14.2 ↓ 22.4 底径 3.5 ↓ 4.8		・最大径を1位に求め る長筒形を呈する ○内面ナデ仕上げ ○外面ハケ後端列、櫛 直、櫛弧等を施文	・やや突出した上げ底 (E151、152、 154) 又は突出し た平底 (E148~ 150、153、1 55~159) を呈 する ○内面ハケ後ナデ ○外面ハケ目、E15 0中央に径0.8cm程 の円孔有	淡赤褐色 (E149、 151、1 56、1 59)	良好

遺物番号	器種・型式	出土 層位	法 量 (単位cm) または枚数	口 縁 部	体 部	底 (備 考) 部	色 調	胎 土
E160 E161	蓋A	中層	口径 1.0 1.0 つまみ径 1.6 器高 2.0	・端部はつまみ上げる (E161)	・外周しつつ広がるつまみ頂部は水平面を成す。端部の凹孔を穿つ ・外面磨き		淡褐色	良好
E162	器G3	上層	口径 2.17	・外反してのC形屈曲してやや内傾味に立ち上がる。端部は内傾する面を成す ・内面横ナデ ・外面ハケ目			淡白褐色	良好
E165	無縁蓋C1	上層	口径 6.8 口径 10.3 口径 3.7 器高 7.0	・内反して短かく立ち上がる。端部は丸く納める ・内面横ナデ ・外面横ナデ透孔2ヶ所	・最大径を口径に求める球形を呈する ・内面ナデ ・外面ハケ後ナデ	・突出した平底を呈する ・内面ハケ目 ・外面ハケ目	淡茶褐色	良好
E163 E164	長頸蓋A	上層	口径 9.6	・外傾味に立ち上がり、端部は丸く納める ・内面ハケ後ナデ ・外面横ナデ、ハケ目	・頸部は「く」字形に外反し、なだらかに開く体部を呈す ・内面ハケ目、頸部に筒削り ・外面頸部曲部は粘付凸部ハケ目		淡褐色	良好
E166 E167	高杯A3	上層	口径 1.78 2.45 口径 9.6 器高 1.28	・直線的に開く杯部より屈曲してほぼ垂直に立ち上がる ・端部は丸く納める (E166)。外方へつまみ出し内傾する面を成す (E167) ・内面横ナデ (E166) ・筒削き (E167) ・外面横ナデ、ハケ目 (E166)、横ナデ後傾部、磨き (E167)		・柱状部は比較的大く「ハ」字形になだらかに開く。端部はつまみ上げる ・内面しほり目、指圧痕 ・外面磨き ・透孔E166は4ヶ所	淡褐色	良好
E168	高杯C	上層	口径 2.99	・内傾味に開く杯部より口径部は屈曲して大きく外内して広がる。端部は丸く納める ・内外面共磨き (一部外面ハケ目)			淡茶褐色	良好
E169	鉢G1	上層	口径 1.34 腹径 1.53	・受口。横削する第2口径より屈曲してはほぼ直上に立ち上がる第1口径を有す。端部は内傾する面を成す ・内面横ナデ ・外面横ナデ後傾部	・最大径を口径に求める球形を呈する ・内面ハケ後ナデ ・外面ハケ後上半部ナデ。横削、横直、横弧等を施す		暗茶褐色	良好
E170	鉢舞台	上層	口径 7.1		・内面筒削りにのびる ・内面ハケ目 ・外面ハケ目	・「ハ」字形になだらかに開く。端部は丸く納める ・内面しほり目、木調整 ・外面ハケ目、横ナデ	淡黒灰色	良好
E171 E173	蓋A3	上層	口径 10.6 15.2 口径 9.4 口径 3.6	・短かく外反して開き端部は外傾面を成す ・内外面共横ナデ	・最大径を口径に求める圓の強った三角形を呈する ・内面ハケ目 ・外面ハケ目 (E172) ・筒削き (E173)	・突出した平底を呈する ・内面筒削り ・外面磨き	淡褐色 (E171) 暗茶褐色 (E172 173)	良好

遺物番号	器種・型式	出土 層位	法 量 (単位cm) 量は復元値	口 縁 部	体 部	底 部 (備 考)	色 調	胎 土
E 174	壺C 2	上層	口径 1.7.8	・縁やかなカーブをも って外反し、端部は わずかに肥厚する 。内面ナデ後蓋。 外面横ナデ後彫刻 み目、頸部ハケ後横 列			茶褐色	良好
E 175 E 176	壺B 3-Ⅲ	上層	口径 1.3.8 1.6.7 腹径 2.2.8 頸径 2.8.2 底径 4.0	・受口、水口以て第 2口縁と屈曲しほぼ 垂直乃至外反気味に 立ち上がる第1口縁 を呈する 。内面頸部ハケ目 他はナデ仕上げ 外面横ナデ後横列	・最大径を口径に求め る長球形を呈す 。内面ハケ目後ナデ 。外面ハケ後細直、横 列、横弧を施文	・わずかに突出した平 底を成す 。内面ナデ 外面ハケ目	暗褐色	良好
E 177 E 178	壺B 3-Ⅲ	上層	口径 15.8 16.4	・受口、傾斜する第2 口縁と屈曲してやや 内傾気味に立ち上 がる第1口縁を有す 。端部は内傾する面を 成す 。内面横ナデ 外面横ナデ後横列	。内面ハケ後ナデ仕上 げ 外面ハケ後横列、横 直		淡褐色	良好
E 180	壺C	不明	口径 1.8.1	・外内して開き、端部 は面を成す 。内面ハケ目 外面横ナデ後彫刻 み目			淡褐色	良好
E 181	壺E	不明	口径 1.8.7	・内傾してのび、端部 は内面に肥厚し平坦 な面を成す 。内外面横ナデ			淡褐色	良好
E 182 E 184	壺H 3	不明	口径 9.9 9.5 腹径 1.2.1 1.4.3 底径 1.9.9 3.5 3.6 頸高 1.5.8 1.6.2	・外反気味に屈く筒状 の頸部より口縁部は 屈曲して短かく直立 する受口を呈す。端 部は内傾 。内面横ナデ 。外面横ナデ後横列、 彫刻み目 (E 182、 183) 横列 (E 184)	・最大径を口径に求め るやや扁球形を呈す 。内面ナデ仕上げ 外面ハケ後、横列、 横直、横弧、横弧等 を施す	・突出した平底 (E 1 82)、上口径 (E 183) を呈す 。内面ナデ 外面ハケ目	暗褐色 (E 182) 淡褐色 (E 183 184)	良好
E 185 E 189	壺頸部 A (E 186) B (E 185)	不明	口径 9.9 10.0 腹径 1.3.0 1.7.6 底径 5.2	・外反気味に立ち上 がり、端部は丸く納め る 。内面ハケ目 (E 18 5) ナデ仕上げ (E 18 6、187) 。外面ハケ後ナデ	・最大径を口径に求め る同の強った長球形 を呈す 。内面ハケ後ナデ 。外面ハケ後ナデ、E 186、189、彫 刻み、E 185肩部 に竹管文3ヶ	・突出した平底 。内面ナデ 。外面ハケ (E 188)、 腹径 (E 189)	淡茶褐色 暗褐色	良好
E 190 E 196	壺底部	不明	底径 4.0 8.1			・突出したふちり底部 で平底 (E 194) 又はドーナツ底 (E 190、193) E 192横溝彫刻 。内面ハケ目ナデ 外面ハケ目、E 19 2彫刻、E 193 木製	淡茶褐色 暗褐色 (E 193)	良好
E 198	無頸部B 1	不明	口径 1.2.5 腹径 1.5.2	・内傾気味にのび、端 部は丸く納める 。内面横ナデ 外面ハケ目	・腰の強る扁球形を呈 す 。内面横ナデ 外面ハケ目		褐色	良好
E 197	長頸部A	不明	口径 1.3.3	・わずかに外傾しての び、端部は外方へ肥				

遺物番号	器種・型式	出土 層位	法 量 (単位cm) #は復元値	口 縁 部	体 部	底 (備 考)	色 調	胎 土
				厚し水平な面を成す ○外面ナデ ○外面磨き、横ナデ				
E 199	高杯A3	不明	口径 2.37	・やや内寄気味に開く杯部は屈曲してほぼ垂直に立ち上がる。端部は内積する面を成す ○内外面共磨き			淡褐色	良好
E 200	高杯B2	不明	口径 2.26	・きわめて強く外湾し端部は面を成す。杯部とは縁部の接合部は明確な接を成す ○内外面ハケ目、杯部内面ナデ、外面磨き			淡褐色	良好
E 201	高杯A4	不明	口径 1.27	・内寄気味にのび、端部は丸く納める ○内外面共横ナデ、磨き			淡赤褐色	良好
E 205 E 212	高杯脚部a	不明	底径 7.2			・「ハ」字状に開く低い脚部 ○E 205柱状部は横直、E 212外面ハケ目、内面磨削り	淡褐色 淡赤褐色 (E 205)	良好
E 203 E 204 E 210 E 211	高杯脚部b	不明	底径 1.36 1.5 1.88			・柱状部は比較的太く「ハ」字形にのびやかに開く。端部はつまみ上げ面を成す ○内面磨き (E 203、204) 1-3段3方乃至4方に透孔を有す	淡褐色	良好
E 206	高杯脚部c	不明				・細い脚状を成す柱状部 ○内面ナデ、磨削り ○外面ハケ目、横直	淡褐色	良好
E 207 E 208	器台B	不明	口径 1.54 底径 1.50 器高 1.59 1.60	・なだらかに外反し、端部は面取りを成す ○内面横ナデ ○外面磨き	・ほぼ直線的にのび、円筒形を呈する ○内面磨削り (E 208) ○外面磨き後横直 (E 207)、ハケ後横直 (E 208) ○内面磨削り。ハケ目、外面磨き ○外縁面横直 (E 208)	・なだらかに外反し、端部は丸く納める (E 207)。上方へ膨張させ面を成す (E 208) ○内面磨削り。ハケ目、外面磨き ○外縁面横直 (E 208)	淡褐色	良好
E 209	器台A	不明	口径 2.04 底径 1.64 器高 1.98	・大きく外反し、端部はわずかに下方へ肥厚し面を成す ○内外面不明	・つづみ形を呈する ○内面不明 ○外面ハケ目か	・「ハ」字形に大きく外反し、端部は丸く納める ○内面ハケ目の機軸を有す 透孔4方2段	淡褐色	良好
E 214	鉢G1	不明	口径 1.06 腹径 1.16 器高 1.08 底径 3.8	・受口、傾斜して開く第2口縁より第1口縁は外寄気味に立ち上がる。端部は丸く内積する面を呈す ○内面ハケ目、立ち上がりナデ、外面横ナデ後横直	・最大径を9位に求める扁球形を呈す ○内面ナデ ○外面ハケ後横直、横直、横直を横文	・やや突出した上げ底を呈す ○内面ナデ ○外面ハケ後ナデ ○外面ハケ目	淡茶褐色 (スス付前)	良好
E 215	鉢G2	不明	口径 1.52 腹径 1.54	・受口、ほぼ水平に開く第2口縁と短かく直立する第1口縁	・扁球形を呈す ○内面ナデ ○外面ハケ後横直、横		淡茶褐色	良好

遺物番号	器種・形式	出土 層位	法 量 (単位cm) または復元値	口 縁 部	体 部	底 部 (備 考)	色 調	胎 土
				◦内面横ナデ、頸部にハケ目 ◦外面横ナデ後横列、肩片欠文	弧を廻らす			
E 213	鉢G1	不明	口径 1.20 腹径 1.32 器高 1.35 底径 4.4	◦受け、傾斜して開く第2口縁より第1口縁は内反して立ち上がる ◦内面ハケ目、ナデ ◦外面横ナデ後横列	◦最大径を7割位に求める扁球形を呈する	◦突出した平底を呈する ◦内面ナデ ◦外面ハケ目	暗褐色	良好
E 216 E 217	鉢脚台	不明	底径 8.8 9.2			◦「ハ」字状になだらかに広がる低い脚台 ◦内面ナデ、ハケ目 ◦外面ハケ目、E 216参照	暗褐色	良好
E 218	甕A3	不明	口径 2.28 腹径 3.37	◦短かく外反して開き端部は外傾する面を成す ◦内外面共ハケ目後横ナデ、頸部外面傾斜	◦ほぼ球形を呈する ◦内外面共ハケ目		淡褐色	良好
E 219 E 220	甕A1	不明	口径 1.24 1.26 腹径 1.22 8.0	◦短かく外反して開き端部はよく納める ◦内外面共横ナデ	◦最大径を7割位に求める長筒形を呈する ◦内面ハケ目 ◦外面ハケ目	◦内外面ともナデ	淡茶褐色	良好
E 222	甕A2	不明	口径 1.82	◦「く」字状に外反して開く。端部は外傾する面を成す ◦内外面共横ナデ	◦内面ナデ ◦外面叩き後ハケ目		灰色	良好
E 224	甕A4	不明	口径 1.14 腹径 1.12 器高 1.16 底径 4.2	◦短かく外反して開き端部に下端を拡張 ◦内外面共横ナデ	◦ほぼ球状を呈する ◦内面ナデ仕上げ ◦外面ハケ目	◦突出した上げ底を呈する ◦内面ナデ ◦外面ハケ目	淡褐色	良好
E 221	甕A	不明	口径 6.4	◦ゆるやかに外反し端部を上方に引き出す ◦横ナデ	◦内外面共ナデ		淡褐色	良好
E 223	甕A4	不明	口径 1.52 腹径 1.72 器高 2.12 底径 6.0	◦「く」字状に外反して開く、端部を上方につまみ上げる ◦内外面共横ナデ ◦端部に2条の凹線文	◦縦長の体部 ◦内面加削り ◦外面叩き	◦突出した上げ底を呈する ◦内外面共加削り	暗茶褐色	良好
E 228 E 230 E 232 E 234 E 236	甕B3-Ⅲ	不明	口径 1.40 腹径 1.86 腹径 1.80 底径 4.4 器高 2.10 # 1.72	◦傾斜して開く第2口縁より第1口縁は直上乃至外反傾斜に短かく立ち上がる。端部は内傾する面を成す ◦内面横ナデ、頸部にハケ目、外面横ナデ後横列	◦最大径を7割位に求める長筒形を呈する ◦内面ナデ仕上げ ◦外面ハケ後横列、横直、凹線等を施文	◦やや突出した平底を呈する (E 228) ◦内面ナデ ◦外面ハケ目	淡茶褐色 暗褐色 (E 228)	良好
E 225 E 227 E 229 E 231 E 233 E 235 E 237	甕B3-Ⅲ	不明	口径 1.42 1.72 腹径 2.02 2.04 底径 3.2 器高 2.48	◦ほぼ水平に開く第2口縁より第1口縁は直上乃至外反傾斜に立ち上がる。端部は平傾(E 227、235)乃至内傾する面を成す ◦外面横ナデ後横列	◦最大径を7割位に求める長筒形を呈する ◦内面ナデ仕上げ ◦外面ハケ後横直、横直、凹線等を施文	◦突出した上げ底を呈する ◦内面ナデ ◦外面ハケ目	淡茶褐色 淡赤褐色 (E 231)	良好
E 235	甕B3-Ⅲ	不明	口径 1.30	◦水平に開く第2口縁と肩面は内反傾斜に立ち上がる第1口縁を呈する。端部は内傾する面を成す			茶褐色	良好

遺物番号	器種・形式	出土 層位	注 意 (単位cm) ※は径元値	口 縁 部	体 部	底 部 (備 考)	色 調	胎 土
				◦内面横ナデ 外面横ナデ後傾列				
E 2 4 1	甕体部	不明	口径 2 0.3		<ul style="list-style-type: none"> ・最大径を1/2位に求める球形を呈する ◦内面ナデ ◦外面ハケ後傾列、横波 		淡褐色	良好
E 2 3 8 } E 2 4 3	甕体・底部	不明	口径 1 6.0 } 2 3.1 底径 4.6 } 3.6		<ul style="list-style-type: none"> ・最大径を1/2位に求めるやや扁球形を呈する ◦内面ナデ ◦外面ハケ後傾列、横波、横弧 	<ul style="list-style-type: none"> ・やや突出した平底を呈する ◦内面ナデ (E 2 3 8、2 4 3) ハケ目 (E 2 4 2) ◦外面ハケ目 (ほぼ中央に0.6cm径の円孔を穿つE 2 4 2) 	赤褐色 (E 2 3 9 2 4 3) 暗茶褐色 (E 2 4 0 2 4 2)	良好

(井浦 由美・大橋英和子)

昭和62年 3 月

服部遺跡発掘調査報告書Ⅲ

—滋賀県守山市服部町所在—

編集・発行

滋 賀 県 教 育 委 員 会

守 山 市 教 育 委 員 会

(財)滋賀県文化財保護協会

印 刷

富士出版印刷株式会社

大津市礼の辻 4 -20

TEL (0775) 23-2580